ま。

詩經の召南に「未見君子、憂心忡々。」

こゝにいふ憂心忡々疾を成したものとは、壬生忠見のことである。

天徳四年三月三十日、内裏で歌合が行はれた。所謂「天徳歌合」である。その時の戀の歌に

左　壬生忠見

戀すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか

右　平　兼盛

しのぶれど色に出でにけり我が戀はものや思ふと人の問ふまで

が合はされた。雙方とも當代の名家、歌は苦心の傑作。判者も優劣を決しかねて、ひそかに主上の御意を伺つた。御簾の中にも御躊躇の御氣色。やゝあつてたゞかすかに「しのぶれど」の詠を口ずさみ給ふ。よつて判者は右を勝とした。兼盛は我勝てりとして、未だ會の終らぬに拜舞して出たが、忠見はこれより病を得て、遂に逝去したといふ。

【秋風ぞ吹く白河の關】　白河の關は、昔岩代國（福島縣）西白河にあつた關所である。

これは能因法師の、「都をば霞と共にたちしかど秋風ぞ吹く白河の關」といふ歌の下の句である。

【兒戲】　ジギ。子供の戲れ。十訓抄、第十、「可レ庶幾才能藝業ノ事」の條に能因入道について次の如く記してゐる。

「能因はいたれるすきものなり。

みやこをば霞とともに立ちしかど秋風ぞふく白河の關

とよめりけるを、都にありながら、この歌を出ださん、無念と思ひて、人にも知られず、ひさしくこもりゐて、色をくろく日にあぶりなして後、みちのくの方へ、修行のついでによみたりとぞ披露しける。」

この話は、又袋草子に、「能因實ニハ不レ下向奥州一、爲レ詠二此詠一、籠居シテ、下向奥州一之由ヲ風聞……二度下向之由アリ於二一度一者實歟、書二八十島記一。」

と見え。古今著聞集（五）、女郎花物語にも見え、體源抄・東齋隨筆等にも載せられてゐる。

【妻子珍寶】　サイシチンパウ。妻子や珍らしいたから。大集經、十六に「妻子珍寶及王位、臨二命終時一不レ隨者。」

【西行法師】　西行物語（靜嘉堂文庫所藏、傳阿佛尼筆、鎌倉時代）の一節に、

「ぼんなふのきづなを切はじめなどとおもひて、この姫をなさけなくもえんより下へおとしたりければ、ちいさき手をかほにおほひて、なほちゝをしたひてなきければ、これにつけても、こころくるしくはおもへども、きゝいれぬさまにて内へいりぬ、かた原の女房下邊にいたるまで、世にあえなきことにおもひ、こはいかなる事やらんと、さはぎあへり。しかれどもかのねうぼうは、かねてよりちちしゆつけのこゝろあることを、しりたりければ、むすめのなきかなしむ事を、おどろくいろなし。これにつけてもあはれにおぼえて、つゆのたまきゆれば又もある物をたのみもなきは我身なりけり。」

とある。參考までに記す。

【鳴立つ澤】　シギタつサハ。これは西行法師の「心なき身にもあはれは知られけりしぎたつさはの秋の夕暮」をさす。西行が關東よりわざ〳〵上洛の途中、この歌が俊成の撰んだ千載集に入らなかつた由を、聞いて引返したといふ說話は、井蛙抄（頓阿著、續羣書類從和歌、四六二）に出てゐる。

【千載集】　センザイシフ。壽永二年二月後白河院の院宣によつて、藤原俊成が撰した勅撰集。二十卷二冊。一條天皇の正曆年中から文治に至る二百年間の歌を集めた。

【藤原俊成】　フヂハラトシナリ。音讀してシュンゼイともいふ。後鳥羽帝に仕へ、和歌を以て聞えた。世に五條の三位といふ。後白河帝の勅を奉じて千載集を撰進した。その詠の勅撰集に入つたものは、千載・新古今・新勅撰集等をはじめて、合計凡そ四百首の多きに及んでゐる。又歌學史上にも注意すべき人である。桐火桶を抱いた云々といふ說話は、徹書記物語（續羣書類從和歌二九七）に出てゐる。

【古淨衣】　コジャウエ。「淨衣」は白色の衣服。古昔、神事・祭事に著用したもの。「古淨衣」はその祭服の古くなつたもの。

【桐火桶】　キリヒヲケ。桐の木で作つた火桶。

【凝然】　ギョウゼン。心をこらすこと。

【惰容】　ダヨウ。なまけたかたち。ふしだらなかたち。

【雅淡深遠】　ガタンシンスヰ。上品でしかも奥深く感ぜら

れるさま。典雅幽玄。

【定家】　サダイヘ。音讀してテイカともいふ。俊成の子。和歌の名手。元久の始め、源通具・藤原家隆・藤原雅經等と共に後鳥羽天皇の勅を奉じて新古今和歌集を撰進した。後堀河帝の朝、又新勅撰和歌集を撰進した。仁治二年(一二四一)薨。年八十。世に京極中納言と稱せられた。土佐日記・伊勢物語・古今和歌集・更級日記・源氏物語等を書寫し定本を作る等、ひとり和歌の方面のみならず、國文學の研究にも多大の貢獻をなした。

【洞開】　トウカイ。あけ開くこと。あけひろげること。

宋史の太祖紀に「汴京新宮成、御二正殿一坐、令二洞開諸門一、謂二左右一曰、此如二我心一少有二邪曲一人皆見之。」

【錦心繡腸】　キンシンシウチャウ。美しい詞藻を言ひ出だす天才のあるものなどにたとへていふ語。

唐書の李白傳に「錦心繡腸。」

【平民文學】　ヘイミンブンガク。貴族文學・武士文學等に對していふ語で、平民の生活を主たる題材として、平民の手によつて、平民の教養に相應した趣向表現になる文學をいふ。徳川時代の文學は著しく平民文學の特色を帶びてゐた。草雙紙・淨瑠璃・俳諧等、みなこれである。

【横流】　ワウリウ。ほしいまゝに流れること。流れ溢れること。

【洗煉】　センレン。物を洗ひ又は煉るやうに、思想又は詩文の字句などを推敲すること。

【俳人者流】　ハイジンシャリウ。俳人のなかま。

「者流」は、その種類の人。その仲間のもの。巾幗者流・長袖者流・操觚者流等の如く用ひる。

漢書の藝文志に「儒家者流、蓋出二司徒官一出。」

【芭蕉】　バセヲ。松尾芭蕉。

幼名を甚七郎といひ、長じて忠右衛門宗房といつた。幼時から穎悟で、藤堂良精の臣となり、その長子良忠に仕へて御氣に入りであつた。その良忠は蟬吟と號し、北村季吟に歌俳を學んだので、芭蕉も自然これに倣ふやうになつた。廿四歳の時に蟬吟が死んだので、かねてから遁世の志があつた芭蕉は俄かに致仕した。(しかし、これは一説で、芭蕉の遁世については、諸説紛々として定らない)俳諧の外に詩を伊藤坦庵に、漢學を田中桐江に、書を北向雲竹に學び、又禪を佛頂和尚に學んだともいはれる。寛文十二年(一六七二)九月江戸に下つたが、天和元年(一六八一)深川に庵を結ぶまでは諸處を流浪した。天和二年に火事で庵が燒けると、また甲駿地方を遊歴した。後再び江戸に歸つて來て、深川に一室を作つて居り、芭蕉一株を植ゑて、その蕃殖を見て樂しみ、以て號とするに至つた。貞享元年(一六八四)京に上つて歸つた。その四年秋、鹿島に遊び、翌年大和を巡り、元祿元年(一六八八)信濃に遊び、同じく二年奥州・北陸・濃・勢に旅した。七年秋伊賀に在つたが、大阪から南都へ赴かうとして、十月十二日大阪御堂前南久太郎町花屋仁左衛門の裏座敷に病んで死んだ。年五十一。甲子吟行(又野曝紀行)・鹿島紀行・芳野紀行・更科紀行・嵯峨日記・冬の日・猿蓑・炭俵など、紀行・俳諧・俳文の著述が多い。

【去來】　キョライ。向井氏。落柿舍とも號した。肥前國長崎の生れ。元祿の初、芭蕉の門に入り、蕉門十哲の一に數へられた。武術にも通じ、また儒學にも精しかつた。寶永元年(一七〇四)歿、年五十四、

【曩に】　サキに。前以て。

【野明】　ヤメイ。芭蕉の門人。その傳記は詳細に知れないが、芭蕉の病床に柿を送つたことなどが「芭蕉翁反古文」の中に見えてゐる。

【大堰川波に塵なし夏の月】　大堰川(オホヰガハ)は桂川の上流の嵐山の裾をめぐつてゐるあたりの名である。下流は淀川に注ぐ。

嵐山の麓を流れてゐる大堰川は清明そのもので、塵一つのよどれもない。そしてその川波に夏の月は清く映じてゐるとの意。

【清瀧や波にちりこむ青松葉】　清瀧(キョタキ)は大堰川の上流。

清瀧の流水の水は青く清く澄んでゐる。それへ岸の青い松葉が散りこむが、その青松葉は水の青と全く相融和して些の汚れともならず、益〻清きを覺えるとの意。

芭蕉翁發句評林に、西行法師の「降りつみし高根の深雪とけにけり清瀧川の水のしら波」を引き、「大堰川波にちりなし夏の月。清瀧や波にちりなし夏の月。この二句は、笈日記に、翁病床の時、支考に、この句は園女が菊の塵に似たればとて、散り込むとはいたし直されしよしなり、猶可レ尋。」とある。

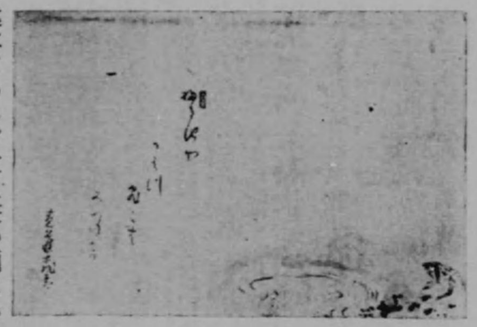
【園女】　ソノヂョ。姓は度會。女流俳人。備前の人岡西惟中

に嫁し、大阪に住んだ。元祿二年（三三四九）芭蕉の門に入り、夫の死後は江戸に移つて深川に住んだ。享保十一年（二三八六）歿。年七十四。（或はいふ六十三）。

【白菊の目にたてて見る塵もなし】　芭蕉翁發句評林集、秋の部に「これは園女が風雅を譽め給ひての句なるよし。園女亭にての吟なり。園女が集、菊の塵にあり。西行のうたに、曇りなき鏡のうへにいふ塵を目にたてて見る世とおもはばや」とある。

【古池や】　芭蕉の句「古池や蛙飛び込む水の音」

蕉翁發句茜堀卷一、春の部に「里紅曰く、この句は蕉門建立の句にして、先姿後情は明らかなり。姿は、古池へどぶり〳〵と蛙の飛びこむさまは爺も婆も童も知るべし。されど句情の後なるは、水の音といへる音の一字に、春の夕暮の朦朧として淋しき風情を云殘したるなり……」とある。



【枯枝に】「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」

七部集大鏡、曠野に「夫木集、嵩からすねぐらとやせむかねてより我が身のえだのおそろしき哉。花紅葉の榮枯をいうて、人間無常の歎想もあるべし。」と述べてゐる。文人畫の題にある「寒鴉枯木」の如き景を詠じたものであるが、その句に含まれてゐる所謂「閑寂」の趣は芭蕉獨得のものとして、古池の句と共に蕉風開眼の傑作と稱せられる。

【夏草や】「夏草やつはものどもが夢の跡」

奥の細道の中に「三代の榮耀一炊の夢にして、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡が壕は田野になりて、金鶏山のみ形を遺す。まづ高館にのぼれば北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てて南部口を差固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつてこの城に籠り、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠打敷きて時の移るまで涙を流しぬ。

夏草やつはものどもが夢のあと」

【塚も動け】「塚も動け我が泣く聲は秋の風」

奥の細道に「卯の花山、くりからが谷を越えて、金澤は七月中の五日なり。こゝに大阪よりかよふ商人、何處といふものあり。それが旅宿を倶にす。一笑といふ者は、この道にすける名のほの〳〵と聞えて、世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、その兄追善をもよほすに、

塚も動け我が泣く聲は秋の風」

とある。

蕉翁發句茜堀卷三、秋の部に、この句を稱して「眞の句なり。一笑が俳諧に信厚きよりこの吟あり。其角が雜談集を讀まば、この句の字々に魂のゆきわたれるを知らん。古今集に、秋なれば山とよむまでなく鹿に我おとらめや獨りゐる夜は……」といつてゐる。

【小出粲】　コイデツバラ。歌人。號は梔園。石見國（島根縣）濱田藩士。十六七歳の頃より歌道に志し、瀨戸久敬の門に學んだ。明治十年宮内省御歌所に出仕し、文學御用係より累進して御歌所主事となつたが、晩年主事を辭して單に寄人となつた。明治四十一年（二五六八）卒、年七十八。

【歌口】　ウタグチ。歌のよみぶり。

乳母草子に「寛平の后宮は常に歌合に御すき候うて……その御歌口、いかゞぞなど申し傳へ候なり。」

【なほざりにかきけちたりと思ひしは光かくして飛ぶほたるなり】

深く注意しなかつたために書きおとしたと思つたのは、よく〳〵見れば、實は光をかくして飛んでゐる螢であつたので、螢の字は現に見えなくても今光を消してゐるだけの事で、實は螢は居るのである。

「かきけつ」は普通は「書いて消す」の意に用ひられること

とが多いが、こゝは「書かうとして書きおとした」意である。

【山縣含雪】　ヤマガタガンセツ。山縣有朋。長門國（山口縣）萩の城下に生れた。吉田松陰の門に學んで、明治維新の志士となり、以來軍人として又政治家として、元帥。總理大臣の顯職を經、樞密院議長となり、明治の元勳として元老の待遇を蒙つた。大正十一年二月薨。年八十五。國葬の禮をもつて、東京小石川區音羽の護國寺に葬られた。

【雅號】　ガガウ。文墨等の風雅の事に用ひる別號。

【常磐會】　トキハクヮイ。明治の御歌所寄人文學博士井上通泰を中心とし、山縣公をはじめ若干の上流の同好者が集つて設けた歌の集りである。

【たまさかに朝ぎよめするをとめどが持てる箒の重げなるかな】

たま〳〵稀に朝の掃除をする女の子の持つてゐる箒が、いかにも重さうに見えることよ。

「たまさか」は、たま〳〵。稀なことをいふ。

【越後口の戰陣】　明治元年、德川慶喜のために起つた戰。會津藩主松平容保は若松城に據つて盛に守備を修め、仙臺・米澤以下これを助け、東北諸藩の盟主となつて官軍に抗し、頗る優勢であつた。

こゝに於て東海・東山・北陸三道の官軍は、奥州及び越後口から進み、奥州口の軍は白河を取り、越後口の軍は長岡を從へ、並び進んで若松城下に集つた。

この時、山縣公は一隊長として越後口の軍中に在つた。

【仇まもるとりでのかゞり影ふけて夏も身にしむ越の山風】

「とりで」は、砦と書く。本城又は本營より近い所に柵などをかまへて、兵士を駐屯せしめるところ。又、假に設ける小城。

「かゞり」は、篝火。

一首の意は、敵軍に備へて守つてゐるとりでの篝火も夜と共に火影が薄れて來て、越路の山を吹く風は、夏尚身にしむやうに寒く感ぜられることよ。

【尾崎紅葉】　ヲザキコウエフ。名は德太郎。俳號を十千萬堂といふ。東京の人。初め帝國大學文科大學に入つた

が、業を卒へずして廢學し、小說作者として立つた。明治二十年代、形式美を重んずる硯友社の興つた當時は、紅葉が中心であつた。

その華麗絢爛の筆致は、新作が出る毎に江湖の喝采を博した。明治三十六年（二五六三）歿、年三十七。

【先鞭をつける】　他人よりも先に着手すること。さきがけをすること。

晉書の劉琨傳に「吾枕戈待旦、志梟逆虜、常恐祖生先吾著鞭。」

【金色夜叉】　コンジキヤシャ。明治三十年一月より讀賣新聞に連載した小說。繼續六年に亙つて未完成のまゝ、紅葉が病歿した。

間貫一と鴫澤宮との戀愛が、富山唯繼といふ銀行頭取の息子のために破綻して、貫一が憤怒と絕望とに復讐を思ひたち、自分の感情を荒ませてその失戀の苦を紛らさうとする。爾來冷酷なる高利貸となり、波瀾の多い人生を送る。宮もまた不幸を重ねてゆくといふ筋を辿る。明治大正を通じて、この作ほどその發表當時天下の視聽を集め、讀者を心醉せしめたものはないと謂はれる。彼が文章洗煉の苦心もまた有名なものであつた。明治三十年十二月には、早くも東京の市村座に於て上演された。

【釀す】　カモす。元來酒を造ることにいふが、本文の場合の如きは、出來す、生ぜしめる、などの意である。

【病魔の深く膏肓に入る】　本文頭註の如く、膏（カウ）とは心臟の下にある微脂をいひ、肓（クヮウ）とは横膈の上の薄い膜をいふ。この兩所は至虛のところで、針藥の及ばぬところである。故に病がこの點に起ると、それは不治の難症であるとされる。

左傳の成公十年に「晉侯疾病。求醫于秦。秦伯使醫緩爲之、未至。侯夢、疾爲二竪子一、曰彼良醫也、惧傷我焉逃之、其一曰、居二肓之上、膏之下一若我何。醫至曰、疾不可爲也、在二肓之上膏之下一攻之不可、達之不及、藥不至焉、不可爲也。侯曰、良醫也、厚爲之禮而歸之。」

【名文句】

「一月の十七日、宮さん、善く覺えてお置き。來年の今月今夜は貫一は何處で此の月を見るのだか。再來年の今月今夜……十年後の今月今夜……一生を通じて僕は今月今夜を忘れん。忘れるものか。死んでも僕は忘れんよ。可いか。宮さん。一月の十七日だ。來年の今月今夜になつたらば、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから……」

【滿喫】　マンキツ。思ひ存分に食ふ。十分に味はふ。

【豐饒】　ホウネウ。ホウゼウ。穀物が豐かに多いこと。豐年で穀物のみのりのよいこと。

蔡邕の文に「儲廩豐饒、室罄不レ懸。」

9　挿圖

藤原定家　下村觀山筆。

小倉山莊に於ける定家卿を描いたもの。

作者下村觀山は現代知名の畫家。和歌山縣の人。東京美術學校出身。橋本雅邦・狩野芳崖に學び、又岡倉覺三の指導をも受けた。後横山大觀と共に日本美術院の創立にあづかり、その新理想主義・新古典主義の作品は世に重んぜられた。後。帝室技藝員に推薦せられた。昭和五年歿。年五十八。

藤原俊成

本文に見えた「俊成が古淨衣を着、桐火桶を抱き凝然靜坐して」歌の想を練つてゐる姿で集古十種から轉載した。

集古十種は八十五卷。松平定信著。古代の器物・書畫等の當時現存したものを谷文晁等に命じて摸寫せしめ、尺寸出所等を詳記したもの。我が國美術史の一資料である。

小出粲筆

春もまだ淺い頃なので、雨の降つてゐる朝はうすらさむい。その雨に濡れて、色鮮かな花の色は、一段さむ〳〵と見えるとの意。

一三　鹽原

1　解題

尾崎紅葉が晩年の大作「金色夜叉」から採錄した。

「金色夜叉」(コンジキヤシャ)は尾崎紅葉の傑作「紅葉全集」の中に收められ、又單行本としても可なり出てゐる。彼は「多情多恨」にその創作の廻轉期を示し、「金色夜叉」にその大成を得たと稱せられてゐる。明治三十年の一月から「讀賣新聞」に連載して、世人の驚愕と歎美と、更に日々の期待とをこの一作に蒐め、明治中葉の社會相と、當代の男女とを描寫してその妙を極めてゐる。主人公間貫一にも生きたモデルがあつたし、その他の人物・事實も一々紅葉の周圍から求めて來た。事件が戲曲的であるのと、表面ながらも一個の問題―戀愛と富貴との葛藤―を中心にしたのと、雅俗折衷を基として、和漢洋の三體を調和せんとした文章の苦心とは尤も本篇の注意する點であらう。が、餘りに人生を舞臺化した結果、作そのものが餘りに戲曲化され、又作中の人物が餘りに俳優化してしまつたから、事件の進化と心理とが合理的になり、文章の力で讀まさうとするのが煩ひしてゐることは確かだ。

起筆以來六年、遂に完成しないで、紅葉は明治三十六年に死去した。越えて四十二年、小栗風葉が紅葉の豫定した筋書によつて「総篇金色夜叉」を草し、貫一がお宮を許すといふ喜劇的結末としてこの大作の大團圓を作つた。近く長田幹彦が「續金色夜叉」「金色夜叉総篇」を出してゐる。

2　作者

尾崎紅葉

尾崎紅葉　ヲザキ　コウエフ。

名は德太郎。紅葉山人と號した。慶應三年(一八六七)十二月廿六日、江戸芝中門前町に生れた。はじめ愛宕仙臺屋敷の幕府の儒者岡鹿門について專ら漢籍を學び、三田英學校を經て大學豫備門の試業に登第し、研鑽四年、この間作意押へ難く、終に同志と文友會を起して「我樂多文庫」といふ雜誌に手を染め、西鶴・近松の作を愛誦

し、三馬・瑪馬の戯文などを耽讀して力を練つてゐた。二十一年の夏大學に入つた。初め法科に籍を置いたが、やがて國文科に轉じ、二年にして退學した。三十年の一月から讀賣新聞に「金色夜叉」を連載し始めた。當時言文一致の流行につれて、文章を輕んずる風があつた。紅葉は雅俗折衷の一種獨特の文體を創めて、續稿前後六ヶ年に亙つたが、一臥遂に起たず、明治三十六年十月三十日、未完の大作に彫心鏤腸の迹を留めて、宿痾胃癌腫のために倒れた。年三十七。その著作には「二人比丘尼」「色懺悔」「巴波川」「伽羅枕」『心の闇』『不言不語』『隣の女』『冷熱』『多情多恨』『金色夜叉』等がある。

紅葉の創作時期は明らかに三大別される。第一期は二十七年頃まで、即ち彼が第一寫實派小説の中堅として文壇に中心勢力となつてゐた時代で、「伽羅枕」「心の闇」などがその頃の傑作である。第二期は彼が更に修養期に入つて「不言不語」「冷熱」のやうな饒案物、もしくは飜譯・共作の類を出した時代、第三期は「多情多恨」「金色夜叉」を出してその文業を大成した時代である。

彼の文體は明治の文體を左右したと言つても過言でない。よく傳へられた彼の逸話に「七度生れて文章のために盡くさん」といひ、「文章報國」の四字を座右の銘としたと言はれてゐる。彼のこの抱負はめでたく達せられ、言文一致・雅俗折衷の普通文・隨筆文に亙つて鮮かな功績を殘してゐる。

又、文字の少ないのを憂へ、漢語の熟語を用ひて、これに傍訓を施したものも、紅葉の手で殆んど完成したといつても好い。かの「那樣」「甚麽」「豈夫」「這麽」等の文字は支那小説から取り來つたものである。彼は餘技としては俳句をよくし、秋聲會を起して、根岸派に對抗し、大いに紅葉一流の俳句を鼓吹した。

3　編纂の用意

前課「作文趣味」の中に見えてゐる尾崎紅葉の話に關聯せしめて、彼の作品中最も傑作と稱せらるゝこの文を讀ましめ、その彫心鏤骨の妙技に感ぜしむると同時に、この文豪の錦心繡腸に織り成された鹽原の秋の自然美に心ゆくばかりの感興を催さしめ、以て高雅幽玄なる我が國民的性情を陶冶せしめたい。

3　要　旨

本課は鹽原の景を、西那須野の驛から順次道行に敍して、畑下戸の里に到り、清琴樓のあたり、丘壑の富を擅にし、林泉の奢を窮めた別乾坤に逢つて、今さらに大自然の麗しさに驚嘆し、胸に祕めた憂鬱の何時しか消え失せて、「何ぞ來るの甚だ遲かりし」の一語に、生來山水の美に親しまなかつた身の却つてその愚であつた過去を追懷して、心の往く所を知らぬばかりにめで悅んだ、といふ紀行文である。紅葉の文章はいづれも意匠慘澹の下に生れた美文である。わけてもこの文は特に立派である。心してその味はひを感得させたいものである。

4　概　説

第一節（八一頁――八二頁一行）　作の主人公が、胸に憂鬱を抱き、遣る瀨ない身を車窓に横たへて、やつと西那須野の驛に着き、更に西那須野驛から入勝橋に入るといふ一篇の起筆である。

第二節（八二頁二行――八三頁八行）　それから順次、白羽坂・回顧橋を過ぎると、景は愈〻奇に、眺は愈〻興深い。そこで、橋を數へ、瀑を數へ、湯を數へ、なほ名勝の數々の探り盡くせないことを記した。

第三節（八三頁九行――八七頁三行）　更に鹽原の地形より敍し始めて、大網の湯・白雲洞その他各名勝を眺め行き、福渡戸に入り、次いで天狗岩の巖頭に立ち、奔馬の亂れ競ふ景に接して、神魂を失ひ、畑下戸の里に到つて、眺望絶佳なるところに達し、清琴樓の邊、富士・喜十六の翠巒と對し、清風座に滿ち、清福自在の別境に恍惚とした趣を敍した。

第三節（八七頁四行――八八頁）　「まことによくこそ我は來つれ」と自然の美に合致して、遙かに第一段の悒鬱に呼應し、全篇の結末とした。

5　取扱上の注意

◆元來、紅葉の作品は、何時も自己の趣味に囚はれ、江戸つ兒としての小主觀のうちに彷徨して、廣大な理想や深刻な人生觀などを持合せなかつたと一般に評せられてゐるが、その半面に人を尤も敬服せしめるものは、藝術的な肌合をよく保存して、一生を文章のために捧げたといふ點である。藝術のための藝術を飽くまで信じて、一筋に文章道を歩み、一日も鍛錬と工夫とを怠らなかつた。この點から、「金色夜叉」を見、更に本篇を見る時、紅葉が如何に「文章」のために努力を惜しまなかつたか、如何に洗煉に洗煉を重ねたかの筆跡が十分に窺はれる。この文あるがために「鹽原」は生き、現に生きてゐるといつても過言ではない。

◆故に本課に於ても、華麗な文章の妙を味得せしむるに止

らず、更に作者紅葉が一身を詩神に獻じた藝術的精神の尊さを知り、その死せんとするに當つて、弟子を顧みて、「七度生れて文章の爲に盡くさん」といつた眞摯な態度を窺はしめ、特にその創作に當つて、主題の研究周到を極め、文字の推敲慘澹を極めた足跡を辿らしめ、紀行文として敍景の妙を盡くした筆致を學ばしめたい。

◆本文の第一人稱「我」は、直に作者紅葉を意味してゐると解され易い。これは言ふまでもなく「金色夜叉」の主人公「間貫一」のことである。しかし、この一文を扱ふ爲にあまり立入つて小說の筋など語る必要はあるまい。寧ろ、それは戒むべきことであらう。故に唯、この「我」は直に作者のことではないが、主人公を假りて、作者の鹽原の景勝に對する感じがよく表現されてゐるといふことを納得させればよいと思ふ。

6　設　問

1　この文章の語句の中で、苦心の結果得たと思はれるものをあげよ。

2　技巧に過ぎたと思はれるところはないか。

3　いはゆる「對句」になつてゐるところをあげよ。

4　この一篇の文章から、作者は大體どういふ性格の人であつたと想像されるか。

5　次の語句の意味を言へ。

イ、平蕪迷ひ、斷雲飛ぶ。

ロ、嶺上の松の調も定めてこの緒よりやと、見すてがたし。

ハ、丘壑の富を擅にし、林泉のおごりを窮む。

6　次の熟語を應用して見よ。

淙々。茫々。綿々。宛然。すはや。名にし負ふ。

7　釋　義

【鹽原】　栃木縣下野國の東端、鹽谷郡鹽原町。下鹽原・中鹽原・上鹽原・湯本鹽原の四大字から成り、戸數約二百。箒川の流に沿うて、部落を成し、家々戸々、皆山に據り、水に臨んでゐる。溫泉は、大網・福渡戸・鹽釜・鹽の湯・畑下戸・門前・須卷・古町・古湯本・新湯等から涌沸する。承和年間、弘法大師が湯本鹽原の地に錫を留めて、この溫泉の奇效を世に示したと傳へられてゐるが、確かではない。安德天皇の御代、鹽原家忠が、この地を領してから、漸く世に知られた。明治十七年(一二五四四)、栃木縣令三島通庸が大いに土工を起し、岩を截り、谷を埋め、隧道を穿つて、平坦砥の如き大道を、那須より岩代の會津に通ぜしめた。これより益〻繁華に赴いた。

【車は馳せ】　金色夜叉の主人公間貫一は、東京上野驛から汽車で鹽原に赴いた。それゆゑ、こゝの「車」は、今の東北本線の汽車を意味する。

【景は移り】　汽車の進むにつれて、沿道の景色のそれからそれとうつりかはることをいふ。

【境は轉じ】　汽車の進むにつれて、その場所が、甲から乙、乙から丙と轉じてゆくことをいふ。

【客は改れど】　停車場につく毎に、乘客の出つ入つして、かはりゆくことをいふ。

【我】　本篇の主人公たる間貫一。

【悒欝】　イフウツ。心がいぶせくて、快からぬこと。

「悒」は、說文に「不安也。」玉篇に「憂也。」とある。

「欝」は、心のむすぼれ、とゞこほつて、はれやらぬこと。

【やるかたなき五時間の獨り旅】　思ひをはらすすべのない、上野驛から西那須の驛まで五時間の獨り旅。

「やるかたなし」とは、思ひをはらしやるべきすべのないこと。施すべき方法のないこと。せんかたなきこと。

源氏物語、紅葉賀の卷に「胸のやるかたなきを」

【西那須の驛】　東北本線の一驛。栃木縣那須郡大田原の西にある。東野鐵道の分岐點。鹽原溫泉を距る南東十六粁乃至三十二粁。

【茫々】　バウ〳〵。廣くして見はてのつかぬさま。

左傳の哀公四年に「茫々禹跡、畫爲九州。」

源平盛衰記、二十四、都返僉議の條に「巨海茫々として、眺望煙波に眼遮れり。」

【古の那須野が原】　栃木縣の北東部、那須火山の南東麓にある廣い平原。那珂川上流の流域を占めてゐる。東は八溝山脈、西は那須嶽・佐飛岳・高原山等によつて限られ、南は關東平野、北は阿武隈川流域の低地帶に連なる。もと陷沒によつて生じた地域で、海拔二三百メートル。火山岩屑及び砂礫に被はれた丘陵性平原をなし、灌漑の

便悪しく、長く廣漠とした荒原として殘つてゐたが、明治年間、時の栃木縣令三島通庸によつて大いに開拓せられた。現在東北本線が通じ、西那須野・黒磯等の町村も發達してゐるが、なほ處々に未開の地が連なつてゐる。薪炭・干瓢等を多く産する。

【天は潤く地は遐かに】「潤く」はヒロく、「遐かに」は「ハルカに」とよむ。天地の遠くおつぴらいてゐるさまをいふ。

【平蕪迷ひ】荒れたる草原の遙かに連なつてゐるさまをいふ。

「平蕪」(ヘイブ)は、雜草の繁茂してゐる平野。

杜甫の詩に「懐古視平蕪」

高適の詩に「出門何所見。春色滿平蕪」

【斷雲飛ぶ】ちぎれ〳〵になつてゐる雲が、空を飛びかけること。

「斷雲」は、ちぎれた雲。

朱超の詩に「孤生如斷雲」

【坦途】タント。平らかな途。平坦な途。坦路。坦道。

韓愈の詩に「近來自說尋坦途、猶士虛空跨駑駘」

【一帶】イッタイ。ひとすぢ。一脈。

元稹の詩に「門臨溪一帶、橋映竹千重」

【重巒】チョウラン。かさなつてゐる山々。重嶺。重峯。

「巒」は說文に「山小而銳曰巒」六書故に「巒圜峯也」、字典に「山行回綿連曰巒」とある。

【千本松】鹽原の一名所。教科書の挿圖參照。

【關谷村】セキヤムラ。那須郡の一寒村。(教科書の挿圖參照)この村は、その昔領主鹽原家忠が關守を置いた處だといふ。

【淙々の響】水のさら〳〵と流れる音。

「淙々」は、水の聲。又、水の流れる貌。

高適の詩に「石泉淙々若風雨」

【入勝橋】ニフショウバシ。峽谷泉石の奇勝、この地からはじまる。故にかく名づけたのである。教科書の挿圖參照。

【輒ち】スナハち。(一)さうして。そこで。(二)たゞちに。すぐに。

【山厚く疊み】山のかさなりあつてゐること。山岳の重疊連亙すること。

【嵐氣】ランキ。山氣の蒸しうるほうてゐるもの。もや。

夏侯湛の山路の詩に「冒晨朝兮入大谷、道逶迤兮嵐氣清」

【壑深く陷りて】壑の極めて深いこと。

「壑」は音ガク。通常タニとよむ。底の深くしてけはしい谷をいふ。

梁の元帝の文に「深壑危峭、組織煙霞」

【九折】ツヾラヲリ。「葛折」とも、「九十九折」とも、「盤折」とも書く。

葛の蔓の幾重にも折れ曲つたやうなといふ義。甚だしく折れ曲つてゐる坂路。羊腸。

枕草子、八、近くて遠きものの條に「鞍馬のつゞらをりといふみち。」

【密樹】ミツジュ。すきまなく、びつしりと生えてゐる樹。密生してゐる樹木。

【幽草】イウサウ。人に知られぬ山中に、ものしづかに生えてゐる草。

【歩々の花を開き】花が一歩一歩の距離をおいて咲いてゐるといふ意。花のぽつ〳〵と、あちこちに散らばつて咲いてゐることをいふ。

【木がくれの音】木の蔭にかくれて流れてゐる谷水の音。

「木がくる」とは、木の蔭にかくれること。物に隱れること。

古今集の雜體に「君が代にあふさか山の岩清水こがくれたりと思ひけるかな」

後撰集、夏に「木がくれてさつき待つともほととぎすはねならはしに枝うつりせよ」

【水上】ミナカミ。川の流の上の方。かはかみ。上流。

古今集、雜上に「落ちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老いにけらしな黒きすぢなし」

【すはや】 突然の出來事に驚いて發することゝ。すは。白樂天の長恨歌には「驚破」の字をあてゝある。

源平盛衰記、四十八、法皇大原入御の條に「荒き風、波をたゝふる時は、又、すはや船を覆すと心を迷はす。」

太平記、七、吉野城軍の條に「すはや大塔宮の御自害あるは。われ先に御首をたまはらん。」

【空山】 クウザン。人氣のない深山。

杜甫の詩に「澗水空山道、柴門老樹村。」

朗詠に「猿叫二空山一、斜月瑩二千巖之路一。」

太平記、二十一、先帝崩御の條に「寂寞たる空山の裏、鳥啼き、日已に暮れぬ。」

【すさまじかり】 「すさまじくあり」の約。ものすごくあること。凄慘の氣がみなぎつてゐること。

「すさまじ」とは、物すごいこと。ものさびしいこと。

源氏物語、初音の卷に「影すさまじき曉づくよに、雪はやうやう降りつむ。」

新古今集、冬に「山里の風すさまじき夕ぐれに木の葉みだれてものゞ悲しき」

【石幽に蘚碧うして】 石がしづかにそばたち、蘚(コケ)がみどりに映えてゐるさまをいふ。

【珊々】 サン〳〵。玉の鳴る聲の形容。こゝは水聲に轉用されてゐる。

宋玉の神女賦に「拂二塤聲之珊々一。」

【灑ぐ】 ソヽぐ。音サイ。水の流れ注ぐことにいふ。

【嶺上の松の調も云々】 拾遺集、雜上、齋宮女御の歌「琴の音に峯の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけむ」より思ひついて、かやうに書いたものであらう。

「松の調」(マツのシラベ)は、松風の音を琴のしらべ(琴の音律をあはせること)になぞらへていつた語。

六帖、六に「ときはなる松のしらべにひく琴はをごとに君はちとせとぞなる」

【白羽坂】 シラハザカ。鹽原の名所の一。教科書の挿圖參照。

【回顧橋】 ミカヘリバシ。見返り橋の意。鹽原名所の一。教科書の挿圖參照。

鹽溪紀勝に「回顧橋(舊曰二梵天橋一)長二十間、忽聞二小聲滿沛一、而回顧不レ見レ瀑、洗疑二晴而雨一、不レ雨而雷一、下レ橋回顧、則瀑布瀉二於橋底一、直下三十餘尺、恰如レ拖二百疋練一、橋名取二義于此一。」

【飛瀑】ヒバク。高いところから落下する瀑布。

錢起の詩に「千峯挂二飛瀑一、百尺搖二衆微一。」

【全景にして七十瀑】 そのおもなものは、龍化瀑・霹靂瀑(雄瀧)・咆哮瀑(雌瀧)・雷霆瀑(二番瀧)・洗心瀑・雄飛瀑(萬五郎瀧)・瀉霓瀑(大旗瀧)の七つである。

【七不思議】 ナヽフシギ。その中、白羽坂の連理の木、甘湯澤の冬の桃は枯れ失せ、古町の八幡社内の逆杉、一夜竹、冬の蓼、同所進神川の游魚なき、新湯の夫婦鳥は今もあるといふ。

【群峯】 グンポウ。むらがるみね。群山。

【綿々】 メン〳〵。「緜々」に同じ。長くして絶えないさま。連綿。連緜。

詩經の王風、葛藟篇に「緜々葛藟在二河之滸一。」

延慶本平家物語、五、重衡卿千手の前と酒盛の條に「蒼海渺渺として恨の心綿々たり。」

【箒川】 ハウキガハ。栃木縣鹽谷郡を流れる川。那珂川の一支流。上流を赤川といふ。尾頭峠に發し、北流して上鹽原に至つて善知鳥川を併せ、東に轉じ、鹽釜で鹿股川を容れ、終に那珂川に合する。この川は舊鹽原湖の湖底平野なる上中鹽原の開けた谷を流れ、下鹽原に至つて溪谷鹽原として名高い峽谷をなし、那須野の平野に出る。その流域は謂はゆる鹽原溫泉鄉として世に知られてゐる。流程六十粁。

【泝る】 サカノボる。流れにさからつてのぼること。上流の方へ向ひ進むこと。「溯る」とも「遡る」とも書く。

【片岨】 カタソハ。山のかたかはの岨となつてゐるもの。

「岨」とは、山のけはしいところ。がけ。きりざし。

竹取物語に「山のそはづらをめぐれば。」

日向雜記に「谷深きそはのいはほのさる橋は人もこずゑをわたるとぞ見る」

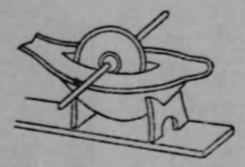
【巉巖】 ザンガン。きつたてたやうなけはしいいはほ。鋭くそばだつた巖石。

宋玉の高唐賦に「登二巉巖一而下望兮。」

【宛然】　エンゼン。さながら。あたかも。まるで。

【青銅】　セイドウ。カラカネ。銅八乃至一〇に錫一の割合でこしらへた合金。鑄物として裝飾金具に用ひられる。ブロンズ。(Bronze)

【藥研】　ヤゲン。主として漢方の製藥などに用ひる金屬製の器具。細長く、中が窪んで、船形をしてゐるものに藥種を入れ、別に扁圓狀で車輪の如きものの軸を持ち、廻轉せしめて、藥種をおしくだく。くすりおろし。



【瑠璃末】　ルリマツ。瑠璃の粉末。「瑠璃」は玉の類。專ら紺碧色のものをいふが、もとは各色を通じていつた。佛經の中に見えてゐる七寶の一。

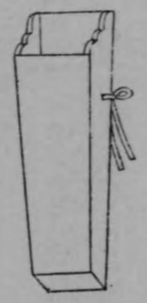
【大網の湯】　回顧橋を進むと、左方に湧いてゐる溫泉。教科書の挿圖參照。

【根本山】　ネモトヤマ。教科書の挿圖參照。

【魚止瀧】　ウヲドメノタキ。同上。魚もこゝからは上り得ないといふ傳說から名づけたものであらう。

【左馭の嶮】　ヒダリウツボのケン　左馭のけはしいみち。治承の頃、那須資隆が鹽原家忠を攻めたとき、その軍兵が皆馭を左にしてわづかにこの嶮路を通行したから名づけたといふ。

「馭」とは、矢の雨にぬれ、物に觸れて損ずるのを防ぐため、盛つて背に負ふ具。中空で、外に毛皮をつける。後には木又は竹で造り、毛皮をつけないものも出來た。



【古りて】　ふるくなつて。多くの年月を經て。ふるびて。萬葉集、卷十七に「青によし奈良の都は古りぬれどもと時鳥鳴かずあらなくに」

【白雲洞】　ハクウンドウ。鹽原名所の一。懸崖の端をほりぬいて、路を通じてある。教科書の挿圖參照。

【鳥居戸】　トリヰド。山名。鹽原名所の一。教科書の挿圖參照。

【前山】　マヘヤマ。山の名。鹽原名所の一。教科書の挿圖參照。

【翠】　ミドリ。音スヰ。こゝは、樹々の翠色をいふ。

【福渡戸の里】　フクワタのサト。鹽原溫泉中、最も繁華なところ。教科書の挿圖參照。

【途すがら】　道をゆきながら。歩み過ぎながら。みち〳〵。途中。途上。

源氏物語、蜻蛉の卷に「みちすがら疾く迎へとり給はずなりにけること悔しう」

【崖】　ガケ。けづりとつたやうに直にそばだつてゐる岸。きりぎし。懸崖。斷崖。磯。

源平盛衰記、義經、鵯越を落す條に「さすがいぶせきがけ(磯)なれば、手綱をひかへてやすらへば」

【躑躅】　ツヽジ。石南(シャクナゲ)科石南屬の灌木。高さは四五尺に達する。葉は尖つた卵形或は長卵形で、毛を有する。花は花梗を具へて數箇づつ集まり、五裂せる紅白色等の合瓣花冠を有する。我が國到るところの山野に自生し、又觀賞用として栽培される。

【山藤】　ヤマフヂ。藤に同じ。「藤」は莖科紫藤屬の纏繞木本。莖は他物に卷絡する。葉は奇數羽狀複葉で、小葉は長卵形をなす。花は青紫色の蝶形花冠を有し、總狀花序に排列する。果實は長形の莢をなす。樹皮よりは纖維を取り、種子及び嫩葉は食用に供せられる。我が國到る處の山野に自生し、又觀賞用として栽培される。

【陰々】　イン〳〵。薄暗くてものさびしいさまにいふ語。

杜甫の詩に「披垣竹蜱梧十尋、洞門對レ習常陰々。」

【車夫】　シャフ。こゝは、人力車の車夫。

「人力車」とは、車夫が人をのせて挽き行く二輪車。一人乘と二人乘とある。自動車のまだ普及しなかつた頃は盛に用ひられた。腕車。人車。

【咄々】　トットツ。(一)舌うちする聲。(二)驚歎する聲。(三)驚きいぶかるときに發する聲。(四)叱る聲。こゝは二又は(三)の意。

【屛風巖】　ビャウブイハ。その形が屛風に似てゐるから起つた名であらう。

「屛風」は風を屛ぐ義より出た語。室內に立てて物を隔て遮り、又は裝飾とする具。襖(フスマ)のやうなもの六枚・四枚・二枚等を番ひあはせて折りたゝむやうに作つたも

の。

史記の孟嘗君傳に「屏風後、常有二侍史一。」

貫之集に「月次の御屏風八帖料歌四十五首。」

【絶頂】　ゼッチャウ。いたゞき。てつぺん。絶巔。頂上。

舊唐書の李德裕傳に「維州據二高山絶頂一、三面臨レ江。」

太平記、二、天下怪異の條に「地震あつて、富士の絶頂崩ること數百丈なり。」

【立ちすくみ】　立つたまゝ、かゞみちゞまつて。立つたまますくんで。

「すくむ」とは、ちゞまりかゞむこと。

太平記、二十八、漢楚合戰の條に「自ら劍をぬいて、おのれが首をかきおとし、左の手にさしあげて、立ちすくみにこそ死にたまひけれ。」

【幹竹割】　カラタケワリ。幹竹を割るやうに、まつすぐに割ること。破竹。

「幹竹」は、「まだけ」の一名。竹の一種。高さ六七丈、周圍一尺五六寸に達するものもある。節は他の竹に比すれば間が長い。五月頃に筍を出す。葦及び籜(カハ)は種々の用に供せられ、筍は食用に供せられる。

大藏流狂言、太刀奪に「取り直いておこさずば、から竹割にしてやらう。」

平家女護島、三に「てつぺいより太腹まで、ふしぶしこめてから竹割。」

【斷面】　ダンメン。きりくちの面。截斷面。

【半空】　ハンクウ。なかぞら。中空。中天。半天。

陸游の詩に「錦繡笙簫在二半空一。」

【一文字に垂下して】　一といふ文字の形のやうに、まつすぐに垂れさがつて。

【岌々】　キフ〳〵。高いさま。又、危いさま。

離騷に「高余冠之岌々兮。」

孟子の萬章上に「天下殆哉。岌々乎。」

【名にし負ふ】　「名に負ふ」に同じ。名高いこと。評判が高いこと。かねて聞き及んでゐたにたがはぬこと。

古今集、旅に「名にしおはばいさこととはむみやこどりわがおもふ人はありやなしやと」

【天狗巖】　テングイハ。鹽原名所の一。教科書の挿圖參照。

【激折】　ゲキセツ。急に折れまがること。

【鼓怒】　コド。水が岩石などに激して鳴り響く形容。

梁の簡文帝の詩に「洪濤猶鼓怒、靈廟尚凄清。」

【咆哮】　ハウカウ。獸などのさけびたけること。こゝは、轉じて、水音のはげしいさまにいふ。

抱朴子に「咆哮者不二必勇一。」

【噴薄】　フンパク。水のふき出ること。水の湧きあがること。水のさかまくこと。

岑參の詩に「氣流爭二迅湍一、噴薄如二雷風一。」

【激盪】　ゲキタウ。はげしくゆれうごくこと。

【裕に】　ユタカに。原文に「寛かに」とあるのを改めた。

【大磐石】　ダイバンジャク。大きないは。

「磐石」は、大きないは。いはほ。大石。

穆天子傳に「觸二天子一於磐石之上一。」

源平盛衰記、二十四、南都燒失の條に「雷神磐石を碎きて、船筏を下しき。」

【膚】　ハダヘ。外皮。こゝは天狗巖の表面を動物の膚にたとへていふ。

【死灰】　シクヮイ。火の氣のない、つめたい灰。生氣のないものにたとへてもいふ。

莊子の齊物に「形固可レ使如二槁木一、而心固可レ使如二死灰一乎。」

【狀恐しげにうづくまりて】　いかにもおそろしさうなやうすをしてうづくまつて。

「狀」(サマ)は、かたち。ありさま。形狀。

「うづくまる」は、「踞」の字をあてる。膝を折り立ててゐること。又、獸が前足を立ててすわることにもいふ。

古今著聞集、十六に「うづくまりて居たりけるを見れば、股の程に黑き布を引きまとひたりけり。」

【老木の陰を負ひ】　大磐石(野立石)の背面に老木の陰がうつつてゐることをいふ。

【急湍の浪にひたりて】　大磐石(野立石)がはやせの浪にぬれひたつてゐることをいふ。

「急湍」(キフタン)は、流れの早い瀨。早瀨。

杜甫の詩に「片々輕鴨下二急湍一。」

【夜な〳〵】　毎夜。夜ごと。よる〳〵。

仁德紀に「毎夜(ヨナ)自二免餓野一有レ聞二鹿鳴一。」

後撰集、戀三に「思ひねの夜な〳〵夢にあふことをたゞ片時のうつゝともがな」

【魔風】　マカゼ。魔緣を誘ふ風。物おそろしげな風。

【蒲生氏郷】　ガマフウヂサト。織田・豐臣時代の武將。賢秀の子。幼時から信長に仕へて、その女を配せられ、戰功を立てた。本能寺の變後、豐臣秀吉に屬し、九州征伐・小田原征伐に從軍した。平定後征奥の先鋒となり、功を以て會津四十二萬石を領し、陸奥・出羽の鎭護に補せられた。その後更に田村・二本松・伊達・信夫等の地を受け、百萬石を領した。朝鮮役のとき、秀吉に名護屋に從つたが、文祿四年(一二五四)大阪で薨じた。年四十。

【野立】　ノダチ。貴人が旅行中、野原などに、駕籠などをおろして小休みせられること。

【例のが】　「例の車夫が」の「車夫」を省いたのである。

【甘湯澤・小太郎が淵・鹽釜の湯】　共に鹽原名所の一。教科書の挿圖參照。

「小太郎が淵」の名は、その昔、小太郎といふ武士が戰に敗れてここに投死した故事から名づけたといふ。

【畑下戸の里】　ハタオリのサト。教科書の挿圖參照。

【一村十二戸】　この一村は「畑下戸の里」を指す。

【溫泉】　ヲンセン。地下水が地熱のためにあたゝめられて地上にわき出るもの。火山活動の餘勢であるから、火山地方に多い。いでゆ。

【清琴樓】　セイキンロウ。鹽原に於ける名高い溫泉宿。

【磧】　カハラ。川原の義。音セキ。水が涸れて砂礫などの多い河のほとり。

萬葉集、卷十七に「いづみ川　清きかはらに　馬とゞめ」

【粼々】　リン〳〵。水が清く石に激するさま。

詩經の唐風に「揚之水、白石粼々。」

【富士】　フジ。謂はゆる鹽原富士。箒川の右岸に聳えてゐる。教科書の挿圖參照。

【喜十六】　キジフロク。鹽原富士の西に連つてゐる山。教科書の挿圖參照。

【翠巒】　スキラン。みどり色の連山。樹木の青々としてゐる連山。

江淹の思北歸賦に「跨金峯與翠雲、涉桂水與碧淵。」

【清風】　セイフウ。きよき風。

詩經の大雅に「吉甫作誦。穆如清風。」

朗詠に「燻閉翠扇清風曉。水泛紅衣白露秋。」

【袖の澤】　ソデのサハ。澤水の名。富士・喜十六兩山の間を流れ、裾野の方につゞき、畑下戸の里の前で、箒川に合してゐる。教科書の挿圖參照。

【絶壁】　ゼッペキ。きりたつたがけ。きりぎし。懸崖。

謝靈運の登石門頂詩に「晨策尋絶壁、夕息在山棲。」

【素練】　ソレン。白いねりぎぬ。練り白げた絹。

杜甫の詩に「素練風霜起、蒼鷹畫作殊。」

楊萬里の詩に「風鬟照玉鏡、素練縈青屏。」

【吉井瀑】　ヨシヰダキ。袖の澤の水が落下して瀑を成すもの。芳袖瀑とも稱せられてゐる。教科書の挿圖參照。

【琅玕の玉簾】　ラウカンのギ・クレン。琅玕でこしらへた美しい玉すだれ。瀑水の美しさを形容していふ。

「琅玕」は玉の一種。說文に「琅玕、似珠者。」玉篇に「琅玕、石似玉。」

書經の禹貢に「厥貢惟球琳琅玕。」

淮南子に「曾城九重有珠樹、在其西。珠樹卽琅玕。在山爲琅玕、在水爲珊瑚。」

「玉簾」は玉でかざつたすだれ。たますだれ。たまだれ。

又、簾の美稱。

保元物語、法皇崩御の條に「玉簾のうちに龍顏にむかひたてまつり」

【一望】　イチバウ。一目に見わたすこと。

【丘壑の富を擅にし】　山水の美しいけしきをおもふまゝにめでゝはやすこと。

「丘壑」(キウガク)は、をかとたに。山谷。

洛陽伽藍記に「楊元慎父甜、自得丘壑、不事王侯。」

【林泉のおごりを窮めらる】　ぜいたくな林泉の美をおもふまゝに味はひ得られること。

「林泉」とは、木立と泉水とのあるところ。

北史の韋夏傳に「所居之宅、枕帶林泉、蕭然自逸。」

【別境】　ベッキャウ。人界をはなれたところ。別天地。別世界。

【清穩の風景】　セイヲンのフウケイ。きよくして、おだやかなけしき。

【藹然】　アイゼン。心のやはらぐさま。氣のやはらいでおだやかなさま。藹如・藹々など、皆同意の語である。

【頓に】　トミに。にはかに。急に。

「とみ」は「疾み」の義。にはかなること。急に。早速。

古今集、雜上に「母のみこのもとより、とみの事とて、文をも

てまうで來たり。」
枕草子、十に「とみに物求むるに見いでたる。」

【恍然】　クヮウゼン。うつとりとして自失するさま。
呉船錄に「發二常州平江一。親戚故舊來相迓者、陸二續於道一。恍然。如二隔世一焉。」

【壞の堆きのみ】　たゞ土地がうづたかくもりあがつてゐるだけである。

【牢】　ラウ。かたいこと。牢固・牢乎などと熟する。

【半生】　ハンセイ。一生の半部。一生の前半部を前半生、後半部を後半生といふ。こゝは、前半生である。
牟融の詩に「爲レ客糞無二季子金一、半生踪跡任二浮沈一。」

【痼疾】　コシツ。「固疾」とも、「錮疾」とも書く。久しく病みこじれて容易に癒えない疾。宿痾。持病。
禮記の月令に「國多二固疾一。」
漢書の賈誼傳に「失レ今不レ治、必爲二錮疾一。」
唐書の田遊岩傳に「泉石膏肓、煙霞痼疾。」

【腎す】　イす。病をいやすこと。病氣をなほすこと。

【齒牙にも懸けず】　口頭にものぼさないこと。言ふに足らぬものとして侮ること。

「齒牙」は(一)齒ときば。(二)口さき。口頭。口の端。言說。
類書纂要に「稱レ不レ足レ道而曰レ不レ足レ掛レ牙。」

【そばだつ巖】　高くそびえたつ巖石。
「そばだつ」は「峙つ」の字をあてる。特におこりたつこと。そびえたつこと。高くそびえること。
爲忠百首に「松島の松の木陰にそばだてる巖根の苔も年ふりにけり」

【浮世】　ウキヨ。浮いて定めなき世の中。人の世の中。
風雅集、雜下に「身こそあらめ心を塵の外になして浮世の色にそまじとぞおもふ」

【勞を忘れて】　ツカレをワスれて。一身の煩勞・苦勞・疲勞などをわすれはてて。

【身はかの雲と輕く云々】　身はかの雲のやうに輕く、心はこの水のやうに淡い。「と」は「の如く」「のやうに」などの意。
古今集、別に「白雲のこなたかなたにたちわかれ心をぬさとくだく旅かな」

【希はくは】　希ふところは。希ふことには。ねがはくは。なにとぞ。どうぞ。「希はく」は「希ふ」の延音。「乞ひ願ふ」の意。「冀ふ」とも書き、又「庶幾ふ」とも書く。
宇鏡に「庶幾、己比願加波久波。」

【今より……わが生を終へんかな】　今から後、かやうにして、たのしくおもしろく、わが一生を終へたいものであるはい。(貫一の述懷)

8　挿　圖

鹽原附近　釋義の「鹽原」參照
鹽原白雲洞附近　釋義の「白雲洞」參照。
辰巳紅葉筆
雨來らむとして頻にあかるはなび哉
兩國の川開きの際、今にも降つて來ようとしてゐる雨を前にして、頻に花火をうちあげてゐる實景をよみ出でたもの。
「川開き」とは、毎年八月一日又はその前後に、東京隅田川兩國橋の上下で花火をうちあげ、納涼の客を呼んだ催し。「兩國の川開き」ともいふ。延寶の頃から行はれたが、享保十八年(一七三九)始めて大花火・仕掛花火をあげた。爾來次第に盛になつて、文化・文政の頃最も隆盛を極めた。有名な玉屋・鍵屋の花火師が互にその技を競つたことは普く人口に膾炙してゐる。今は大抵七月二十日前後に行はれる。

一四　水　莖

1　解題

現代短歌壇の中から、正岡子規を宗とする根岸派及びその系統をひくアララギ派に屬する數人の作家のものを選んで一課を成した。既に掲げた佐佐木信綱を中心とする竹柏園派のもの、及び落合直文を宗とし、與謝野寛の系統を引く一派のものと相俟つて、現代歌壇の主流をなすものである。

2　作者

便宜上、釋義欄に於て、その歌と併せて作者の小傳を記すこととする。

3　編纂の用意

讀本教材に採つた短歌について、作家の立場から蒙る批評は、その歌が該作家の代表作でないといふことである。讀本教材の選定に當つては勿論秀作を採るといふことは決して忘れてゐないが、同時に教科書に盛る教材といふこと、それを讀解せしめる生徒の程度といふことに無關心であり得ないのである。これら種々の點より考慮して最も適當なものを選出することになるのであつて、純粹に藝術上の和歌といふ立場から見た最優秀作と必ずしも一致しないことはあり得ることであつて、それは又已むを得ないところである。故に讀本所載のものが同時に代表作であるといひ得ない。併し教材といふ立場を偏重して和歌として極めて低調無價値なものに墮するといふやうな手落ちは十分に避けたつもりである。

4　要旨

明治以後今日に至るまでの、新しい歌人たちの歌ひぶりの一端を紹介して、その清新なる味はひどころを鑑賞せしめるにある。

5　取扱上の注意

◪こゝに掲げられた六歌人の中、殊に子規は、從來の堂上歌人の遺風を傳へてゐる歌人に對して、夙く明治時代に新旗幟を飜した先驅者である。子規といへば、直に明治の新俳句の開拓者であるとのみ考へられがちであるが、實は新歌道の提唱者でもあつた。本課に於ては、先づその事實を承知せしめたい。その歌に就いて言へば、「いにしへ人はよく書かれけり」といひ、「わらとりすつる芍藥の芽の紅に」といふが如き、一は率直であり、一は清新を極めてゐる。この歌ひぶりは、やがて後のアラヽギー派の歌風を起したもので、左千夫以下の歌人も、直接に間接にこの子規の歌風の息のかゝつてゐる人々である。

◪「水莖」の歌は別として、その他の歌は、何れも自然を題材としてゐる。そして、それらに共通してゐるものは、やはり清新の趣である。しかも、その清新の趣は、何れも作者が自然を凝視し、觀照の世界に眼と心とを遊ばせて、いみじくも捉へ得た景趣であり、情趣である。平たくいへば、じつと自然の姿を見つめる心の落着きがないものには、この種の歌の趣はよくわからないであらう。

それ故に、この課を扱ふに當つては、生徒をして、自然に對して、すなほに、しづかに、心を落着けるやうな態度を取らしむべきである。

6 設問

1 このうちで、最も好きな歌をあげよ。

2 最も新しみを感ずる歌はどれか。

3 季節から考へて、何の季節にあたつてゐる歌が最も多いか。

4 昔の歌に比して、この課の歌全體に通じては、どんな感じを受けるか。

7 釋義

〔正岡子規〕マサヲカ　シキ。

名は常規。子規はその號。別號獺祭書屋主人、竹の里人。伊豫松山藩の馬廻り加番隼太の子である。慶應三年(一八六七)九月生。十九歳にして東京に出て大學豫備門に入り、明治二十三年(一八九〇)東京帝國大學に學び、國文學を修めたが、中途退學して(一說には試驗を嫌つたためといふ)日本新聞社に入り、明治廿五年より盛んに新派の俳句を鼓吹し、芭蕉・蕪村を宗とした。翌明治二十六年「芭蕉雜談」「はてしらずの記」などを發表した。廿八年四月、日清戰爭の半ばに從軍記者として遼東に渡つたが、既に肺患に罹つてゐたので、喀血甚しく、間もなく引返して須磨で療養した。その秋東京に歸つたが、翌年には全く歩行の自由さへ失つた。爾來根岸に閑居して病を養つた。三十一年以後は脊髓腐蝕症で寢返りさへ出來ぬ程の病苦と戰ひつゝ、雜誌「ほとゝぎす」及び新聞「日本」によつて俳句の革新に努力した。

彼はまた短歌革新に手をつけた。即ち明治三十一年同じく新聞「日本」に歌よみに與ふる書(歌よみに與ふる書——十たび歌よみに與ふる書——子規全集第五卷に收む)を掲げて獅子吼した。即ち彼は萬葉調の短歌を唱へて、桂園派に屬する歌よみの歌や、與謝野夫婦の唱へた新派など外道の歌を一切折伏しようとしたのである。そのために彼は寫生道を唱へ、語の迂遠な又典型的な媒介を捨て、ほんたうに目に見うるところをすなほに、正直に表現するといふ白道の上に立つた。寫生といふことは單に無味淡泊のみに終るものでなく、どこまでも奥深く進展する性質のものであつて、やがては齋藤茂吉の「實相觀入」といふところまで深められたものである。

當時にあつては寫生といふことは香ばしくないことであり、下らぬものであると考へられたのであつて、最も直接的に壯大なものとか意味深遠なものとかを歌はうといふ考へや、もつと愉快で面白くて快感のあるものを歌はうといふ考への方が優越してゐたのである。それ故子規の萬葉調や寫生道には耳を傾けるものも少く、たまにあれば傑士であつたのである。それが後に述べるところの左千夫・巍・節・茂吉・赤彦などであつて、現歌壇が萬葉全盛を極める根元をなしたのである。

俳句に於ても僅か十七文字を寫生に終へてしまふことはあまりにあつけなく、もつと情味の多いものをよみたいといふのが宗匠流の行き方であり、又、一般凡人にも理解の早いことでもあつたのである。それ故こゝにも極めて少い同志として虛子・碧梧桐・漱石・鳴雪が集つた。碧梧桐は脇に外れ、漱石はあの通りになり、鳴雪は力が足らず、子規を正統に傳へたのは虛子一人のやうに考へられる。而して虛子門に原石鼎があるが、虛子よりも一層の寫生主義から形相文學としての俳句を生かしてゐるやうに考へられる。概していへば、俳句の方は短歌の方面ほどの隆盛を致さなかつたが、これは、僅か十七文字を以てする寫生が三十一文字を以てする寫生よりも一層の難事であつて、今日何千何萬の俳人は十七文字の寫生を解し兼ねてゐるのではあるまいか。

以上の如く、子規の明治文壇に於ける功績は日本詩歌の革新であつて、長く日本文學史を飾るものである。明治三十五年九月十五日は記念すべき日である。病弱の子規はこの日三十六歳の壯歳を以て歿した。著書は甚だ多く、今は全集十五卷に收められてゐる。

【水莖のふりにし筆のあと見ればいにしへ人はよく書かれけり】

「水莖」(ミヅグキ)は、(一)筆。

源氏物語、幻の巻に「ふりおつる御涙の水ぐきに流れそふを」

(二)手跡。筆蹟。

宇津保物語、祭使の巻に「涙だに川となる身の年を經てかく水茎やいづちゆくらむ」

(三)消息文。手紙。

源平盛衰記三十八、小宰相局の條に「水茎の數積もれども」

「ふりにし」は、古くなつたの意。「ふる」は古くなるといふ意味の動詞である。

「よく書かれけり」の「けり」は、詠歎の助動詞である。

一首の意は、

古くなつた筆蹟を見て感ずることは、「昔の人は實に立派に書かれたものだなあ。」といふことである。

【霜おほひのわらとりすつる芍藥の芽の紅に春のあめふる】

「霜おほひのわら」芍藥の芽ぐみ出る頃は早春の節で、まだ氣溫の急下降によつて思ひがけなくも降霜を見ることがある。その霜が折角萌した新芽を傷けるのをふせぐために藁をもつて覆うておくのである。

「芍藥」(シャクヤク)は毛茛科牡丹屬の多年生草本。莖の高さは三四尺、葉は複葉で、各小葉は往々三裂し、卵形又は披針形。初夏大形で紅色・白色又はその他の色の美しい花を開く。

一首の意は、

氣溫も隨分と和らいで來て、もう霜の心配もあるまいと思はれるので、今迄霜を防ぐためにと覆うておいた霜除けの藁を取り除いて捨てると、その下からは鮮かな嫩紅の芍藥の芽があらはれて來る。それが折からそぼ降つてゐる溫い春雨に濡れて、一層新鮮な、暖かさうな、懐かしい色に見える。

「紅の芽にふる春の雨」その色を主とした描寫の中に、その時の氣溫も、風のあるなしも、日和模樣も、またそれらが合して醸し出す氣分も悉く表現されてゐるのを感じる。

【伊藤左千夫】　イトウ　サチヲ。

通稱幸次郎。初め春園と稱した。四壁居・四壁道人はその別號である。下總成東の人。良作の四男。漢籍を佐瀬春圃に學び、東京に出て、明治法律學校に學んだが、眼疾(强度の近視)のために退學して歸國した。

明治十八年再び上京し、ある牛乳店に勞役し、同じく二十二年本所茅場町に牛乳搾取業を開いて大いに勤勉した。一方趣味としては伊藤並根に就いて茶と歌とを學んでゐた。明治三十一年子規が新聞「日本」に「歌よみに與ふる書」を發表したときは、大いにこれを反駁したが、明治三十三年、子規が同じく新聞「日本」に短歌を募集したとき、左千夫のものが三首(新年の詠)載つてゐた。これから子規との關係ができたのであらう。爾來根岸門下にあつて長塚節と共に兩雄であつた。(節が子規を訪れたのは明治三十三年でれる)子規は三十五年に歿し、その遺業を大成するために機關雜誌「馬酔木」が發刊された。その中心人物は、左千夫・節の二人であり、今なほ存命の岡麓も參加した。彼はまた歌論を「心の花」に投じ、晩年には小說を「ホトトギス」「東京日日新聞」に寄せた。彼は體格が偉大で、體重二十貫、しかも强度の近視で、厚い眼鏡を二枚合はせて掛けてゐたといふから、その風丰を思ふことができる。彼はかく偉丈夫の風格を具へ、その議論は侃々諤々であつた。それ故、彼の歌は節のやうに小ぢんまりとしてはゐず、茂吉のやうに人の意表に出づる觀察はなく、赤彦のやうに流動的なリズムに優れてはゐないが、眞劍である點にかけては子規の系統中で第一人者である。

由來子規の作物は芭蕉に近いといふよりも蕪村に近い。(漱石は明らかに蕪村流である)芭蕉はいつも生命といふことを念頭としてゐたのに對し、蕪村は形相と世界とにあこがれてゐた。子規の作物は寫生といふことを手段に立てた點に一大改新を遂げたわけであるが、その基調となつてゐるものは、左千夫の論じてゐるやうに自然・人生の傍觀といふ傾向である。即ち左千夫の希ふものは全生命を捧げて、自然・人生に肉薄するといふのであるが、子規にはそれが乏しいやうである。即ち子規に見る感激性は必ず形式論を經た後に論じられてゐるやうである。然るに左千夫は萬葉歌人に例をとるならば赤人よりも憶良に近いものがあつて、個性内の惱をうたつたものが多いやうに考へられる。しかもその惱みが啄木のやうに露骨でなく、外象の表現を借りて象徵化してゐるところに子規の寫生主義の影響があるやうである。(代表作は九十九里濱の歌)そこで左千夫の境遇を考へて見るに、茅場町にあつて、明治三十三年・四十一年・四十三年と前後三回の大洪水に見舞はれ、その他種々の事情が彼の身邊を襲うた。彼が人生問題や信仰問題にはいつて行つたことは、一面はこの境遇により、一面はもとより彼の個性によつたものであらう。而して彼はこの心の動搖を見つめることに徹して、彼の歌境の完成の一面があつた。彼の體格とこの動搖とを合はせ考へて見ると、如何にも偉丈夫の苦悶のやるせなさが見える。

彼はまた明治三十八年の頃庭の隅に茶室を建て、唯眞閑と命名し、茶と香と玉とを樂んだ。この方丈又は懸居ともいふべき唯眞閑に於て彼の力の靜的發露があり、靜と動との調和がまた彼の歌をなさしめたのである。彼が一生の作歌數は

長　歌　一三三
旋頭歌　一〇
長　詩　一六
短　歌　二四五一

で、左千夫全集の内の歌集に收められた短歌は一八七九首である。その内精選歌二八八首は赤彦によつて撰輯されてゐる。

（伊藤左千夫選集　島木赤彦選　大正十年一月　アルス）大正二年七月三十日、腦溢血で歿した。年五十。

【鶺鴒の來鳴くこのごろ藪柑子はやいろづきぬ冬のかまへに】

「鶺鴒」（セキレイ）は燕雀類の一種。形は燕に似て小さく、尾は長く、上下に動かす。嘴は細くて尖る。常に水邊に棲息する。種類が多く、本邦に普通なものは六種である。又の名は、かはらすゞめ。いしたゝき。

「藪柑子」（ヤブカウジ）は紫金牛科の常綠小灌木。高さは七八寸に達する。葉は長倒卵形、鋸齒を有し、互生する。果實は球形の小粒で、秋冬の交に紅熟する。山野に自生する。

「かまへ」は、用意。準備。支度。

一首の意は、

秋も終りになつて、鶺鴒が里近く來て鳴くやうになつたこの頃、藪柑子もすでに色づいて來た、やがて訪れてくる冬の準備なのである。

この歌にもたゞ詞句の表面にあらはれた描寫のみがこの歌の世界でなく、描寫されたところはむしろ象徴で、その底に廣がつてゐる晩秋が言外に十分味ははれるのである。以下の歌も、みなかうした態度をもつて讀んでゆきたいと思ふ。

【裏戸出でて見るものもなしさむ〳〵と曇る日傾く枯葦のうへに】

この歌は、

左千夫の存命當時の東京東郊の景觀であらう。低地・濕地のことであるから、家の裏一面葦が生えてゐる。冬の頃、家の裏戸をあけて出ると、外には何も見るものがない、低地・濕地に立枯れとなつてゐる枯葦のうへに、日はどんよりと、薄曇りにこめた雲の中に西空に傾いてゐる。空氣はさむく冷えてゐる。あたりの景色はすべて寒々とした荒凉たるものである。

【長塚節】　ナガツカ　タカシ。

明治十二年（一八七九）四月三日、茨城縣下總國結城郡岡田村字國生（こうしやう）に生れた。その家は土地の豪農であつた。病身のため水戸中學校を中途退學した。

明治三十一年正岡子規が新聞「日本」に掲載した「歌よみに與ふる書」の所論に勵まされて、和歌に興味を持つに至つた。

明治三十三年三月二十八日根岸に子規を訪うた。爾後その作を時々「日本」紙上に載せ、のち雜誌「馬酔木（あせび）」「ホトトギス」に和歌や寫生文を發表した。

明治三十八年以後全國遍歷の途に上り、北は陸奥より南は九州に及んでゐる。

明治四十四年喉頭結核にかゝり、爾來一進一退の病狀であつたが、大正四年二月八日、遂に九州醫科大學の病室で逝去した。年三十七。

【春風の杉村ゆすりさわたればしづくするごと杉の花落つ】

「杉村」（スギムラ）は、杉のむらがつて生えてゐるところ。杉の林。

「さわたる」の「さ」は接頭語。渡ること。

一首の意は、

春風が杉の林をゆすつて渡つて行くと、恰も雫が落ちるやうに杉の花がぱら〳〵と落ちてゆく。

【おしなべて白膠木の木の實鹽ふけば土は凍りて霜ふりにけり】

「白膠木」（ヌルデ）は「ふしの木」の異名。漆樹（うるし）科の落葉喬木。高さ三十尺に達する。葉は羽狀複葉、長卵形の小葉から成る。果實は短毛を密生し、熟すると外部に白粉を生ずる。樹皮は染料となり、葉に生ずる暗色瘤狀の五倍子（ふし）も染料又は藥用となる。

「鹽ふく」の「ふく」は、湧き出ること。「鹽」とは「ぬるで」の實が熟した時外部に生ずる白粉。酸味を帶びてゐる。その白色なところが、鹽に似てゐる。

一首の意は、

ぬるでの實のどれにも一面に白粉がついてくる頃になつたので、土は凍つて霜がふつて來た。

【島木赤彦】　シマキ　アカヒコ。

本名は久保田俊彦。舊姓は塚原。島木赤彦といふ名のよりどころは別にない。たゞ土屋文明の歌「みむなみの島、つばきさきたらば、おもふ子が、髪を枕に、そこにしぬべし」に感心した折につけた名であるから、或は何等かの暗示があつたかもしれないとのこと。又、赤彦の赤と赤人の赤とも別に關係はないとのこと。

生國は長野縣上諏訪町大字角間町。生れたのは明治九年(一八七六)十二月十六日。生後間もなく、八ヶ嶽の麓、豐平村に移つた。そこは廣漠たる、まづしい裾野であつた。その村に、十九の年まで居つた。十九の年には、長野縣尋常師範學校に入學した。入學して始めて萬葉を讀んだ。當時は書物が自由に手に入らなかつたので、萬葉を書寫したとのこと。始めは、新體詩をやつてゐたが、子規の歌を讀んで大いに感激した。廿四歳のとき、新聞「日本」に十四首の歌を送つたが、僅かに一首採られたのみであつた。そこで、もつと勉强せねばならぬと考へた。師範學校を卒業したのは、二十三のときである。爾後十六年間、教育のことに從事した。最後の二年は郡視學を務めた。大正三年四月、東京に出て、「アララギ」に關係し、斯道のために盡くしたが、大正十五年三月歿した。年五十一。

歌風は子規以來の寫生道に立ち、萬葉調を唱へた。實に「アララギ」派の中心人物であつた。

一見すると、田舍の村長といつたやうな風丰があつた。尤もなことで、日常は信州の高木で百姓をし、蠶を飼つてゐた。自由な田園生活のうちにこそ、萬葉調の歌はよまれるのである。晩年は毎月一回、東京に出てきて、「アララギ」の會員に面會し、歌の添削をした。アグラをかき、左脚を右膝の上に深くのせ、「これは大かびだ」「うはづりだ」(概念的といふ意味)などと評した。純粹の歌人であるから、歌境を說明することはできない。しかし、心持と詞との關係、詞のもつ感じに對しては誠に鋭敏であつた。それが赤彦の生命であつて、尊い體驗である。彼はその體驗を快適な詞を以て表現した。

著作に、馬鈴薯の花、切火、氷魚、大虛集、十年、柿蔭集、歌道小見、萬葉集の鑑賞及びその批評等がある。

【さゝやかなる湖をめぐりて日あたれる芝山の道いく筋も見ゆ】

小さな湖をとりまいて芝山がある。その山肌に日が照つて明るく見えるが、その山に草刈りの往復するために出來たものであらう、いく筋もの道がうね〳〵と上下してゐるのが見える。

【このまひる炭にまじれる古き葉のけぶる匂をさびしみにけり】

火鉢に炭をついだ。つゞ時には氣がつかなかつたが、炭の中に古い木の葉が交つてゐて、火鉢の中でいぶつて煙を立てはじめた。靜かな眞晝間に火鉢から立つその白紫色の煙の色が、いかにもさびしいものに思はれた。

こゝの「匂」は煙の香でなくて、色と見るべきであらう。

【齋藤茂吉】　サイトウ　モキチ。

本名は茂吉。明治十五年七月二十七日、山形縣南村山郡堀田村金瓶に生れた。明治四十四年東京帝國大學醫科卒業。長崎醫學專門學校の教授であつたこともあるが、大正十年頃獨逸に留學して精神病理學を研究し、歸朝の後、腦皮質の實驗で醫學博士となつた。現在は東京市青山に腦病院を經營してゐる。

彼は明治三十一年の夏休みに佐佐木信綱の「歌の栞」をよんで歌に就いての興味を覺え、次いで「日本歌學全書」の第八編によつて「山家集」と「金槐集」とを讀んだ。それから五六年はそんな方面の書物から遠ざかつてゐたが、明治三十八年「竹の里歌」を見てから作歌に興味をもち、左千夫に師事するやうになつた。學校を卒業してから「アラヽギ」の編輯に從事してゐた。その後「アラヽギ」は赤彦が(大正六年——十五年)やつてゐたが、赤彦の歿後再び「アラヽギ」の編輯を擔當してゐる。

彼の歌はきび〳〵した觀察を有つてゐることによつて現歌壇の第一人者である。目下の大勞が、單なる語調は勿論、生なごつ〳〵した散文的な歌を退けて、專ら藝術的な見方と歌ひ方とを中心とするやうになつてゐる際に當つて、彼の特殊な見方は衆望をあつめてゐる。然のみならず、彼は實に頭腦明晰であり、勉强家であるので、歌學に關しては專門家を凌ぐほどである。アララギ一派がともすれば非萬葉歌を排するに對し、彼は西行にも古今にもよいものを見出してゐるのは注目すべきことである。赤彦歿後のアラヽギ派は彼を以て唯一の中心人物としてゐる。

歌集に「朝の螢」「あらたま」「赤光」、研究に「童馬漫語」「短歌私鈔」「金槐集私鈔」等がある。

【稚くてありし日のごと吊柿に陽はあは〳〵とさしゐたるかも】

「吊柿」(ツルシガキ)は、澁柿の皮をむいて、珠數の如く多く繩につけ、吊して日にあて、干柿にこしらへるもの。

「あは〳〵と」は、淡く。うつすらと。

この歌は、途上の偶見か、或は又久しぶりで故郷へ歸つた時の所見であらう。

一首の意は、
自分の幼少の時代に見たと同じやうに、吊柿に晩秋の太陽の光は淡く射してゐた。

【うら〳〵と天に雲雀は啼きのぼり雪斑なるやまに雲ゐす】

「うら〳〵」は、のどやか。のどか。
萬葉集、卷十九に「うら〳〵に照れる春日にひばりあがり心かなしもひとりし思へば」
一首の意は、
のどかに鳴きながら雲雀は空高く上つてゆく。見はるかすと、はるか彼方に残雪のまだらに残つた連山がある。今日はその山に雲もなく、まことによく晴れあがつた春の日である。

【土屋文明】　ツチヤ　ブンメイ。

明治二十四年、群馬縣に生れた。伊藤左千夫に師事して萬葉集の歌を學び、左千夫門下の俊秀に伍して次第に作歌に於ける境地を體得した。後アララギに關係し、左千夫・赤彦等の歿後は、齋藤茂吉・岡麓等と共にアララギ派の中心となり、主として雜誌「アララギ」の編纂にあたり、また一二の專門學校に萬葉集を講じてゐる。その苦心編纂に成る「萬葉集年表」は學界並に作歌者を益することが多い。歌集「往還集」には、彼の作風を知るに足る多くの歌を收めてある。

【白砂にきよき水ひき植ゑならぶわさびしげりて春ふけにけり】

「わさび」は、十字花科の多年生草本。高さ一尺餘に達し、特殊の香味をもつ。葉は圓形に近い心臟形である。花は總狀花序に排列し、白色で四瓣より成る。山間の濕地、殊に清流の溪間に自生する。
一首の意は、
一面白砂のところへ清い水をひいて並べて植ゑてあるわさびは、一面に葉をのばして茂つてゐる。もう春も更けていつた山溪の眺である。

【山藤はくさはらにして咲きにけり人や行きけむ葉のこかれたる】

「山藤」は「藤」の異名。
一首の意は、
この野生の藤は、草原の中に匂ひ延びて咲いた。この原の中を人が通つたと見えて、この藤の若葉がこき取られてゐるよ。

8　挿　圖

正岡子規筆

日清戰役の從軍記者として出發する時の歌。
「あづさ弓」は、こゝでは「矢」にかゝる枕詞。
「矢立」とは、墨壺と筆入の部分とより成る銅製の携帶用硯。
一首の意は、武具にあらで、矢立を腰にはさみ、從事記者として出發する自分は、おめ〳〵と何等なすことなくしては決して歸つて來ないと、心にかたく誓ふことである。

長塚節筆譜

「白はに」は、白埴で、白色の陶土。
「霧ながら」は、霧と共に。霧をこめて。霧ぐるみ。
一首の意は、
白陶の花瓶のこのましさよ。朝は早く、まだ霧のたつてゐる溪流に出て、霧ぐるみにつめたい水を汲んできた。水の色、清冽な水、それは白い肌をした瓶とよくも調和してこのましいことである。

島木赤彦筆

「野分」(ノワキ)は、秋の初頃吹く疾風。その吹いた跡は人が分けて通つたかと思はれるほどに野の草がたふれ伏すといふ義から出た語。
二百十日頃の野分の風が一過して、急に涼しくなつたなと思はれる夜なかにひとり起きてゐて、しみ〴〵と初秋の夜を感じたことである。

9　參　考

正岡子規の「歌よみに與ふる書」十篇のうち、總論と見られる二篇をこゝにあげることにする。以て子規の歌論の骨子を知り得るし、その後のアララギ派の歌人たちの底に流れてゐる作歌の意識の一端も窺ひ得るわけである。

歌よみに與ふる書

仰の如く近來和歌は一向に振ひ不申候。正直に申し候へば萬葉以來實朝以來一向に振ひ不申候。實朝といふ人は三十にも足らで、これからといふ處にてあへなき最期を遂げられ、誠に殘念致候。あの人をして今十年も活かして置いたならどんなに名歌を澤山殘したかも知れ不申候。とにかくに第一流の歌人と存候。强ち人丸・赤人の餘唾を舐るでもなく、固より貫之・定家の糟粕をしやぶるでもなく、自己の本領屹然として山嶽と高きを爭ひ、日月と光を競ふ處、實に畏るべく、尊むべく、覺えず膝を屈す

るの思ひ有之候。古來凡庸の人と評し來りしは必ず誤なるべく、北條氏を憚りて韜晦せし人か、さらずば大器晩成の人なりしかと覺え候。人の上に立つ人にて文學技藝に達したらん者は、人間としては下等の地に居るが通例なれども、實朝は全く例外の人に相違無之候。何故と申すに、實朝の歌は只器用といふのではなく、力量あり見識あり威勢あり、時流に染まず世間に媚びざる處、例の物ずき連中や死に歌よみの公卿等ととても同日には論じ難く、人間として立派な見識のある人間ならでは實朝の歌の如き力ある歌は詠みいでらるまじく候。眞淵は力を極めて實朝をほめた人なれども、眞淵のほめ方はまだ足らぬやうに存候。眞淵は實朝の歌の妙味の半面を知つて他の半面を知らざりし故に可有之候。

眞淵は歌に就きては近世の達見家にて、萬葉崇拜のところなど當時に在りて實にえらいものに有之候へども、某等の眼より見れば、なほ萬葉を褒め足らぬ心地致候。眞淵が萬葉にもよき調あり惡しき調ありといふことをいたく氣にして繰返し候は、世人が萬葉中の佶屈なる歌を取りて「これだから萬葉はだめだ。」などと攻擊するを恐れたるかと相見え候。固より眞淵自身もそれらをよき歌とは思はざりし故に、弱みもいで候ひけん。併しながら世人が佶屈と申す萬葉の歌や眞淵がわるき調と申す萬葉の歌の中には、生の最も好む歌も有之と存ぜられ候。そを如何にといふに、他の人は言ふまでもなく、眞淵の歌にもそが好む所の萬葉調といふ者は一向に見當り不申候。(尤もこの邊の論は短歌に就きての論と御承知可被下候)眞淵の家集を見て、眞淵は存外に萬葉の分らぬ人と呆れ申候。かく申し候とて、全く眞淵をけなす譯にては無之候。楫取魚彦は萬葉を摸したる歌を多く詠みいでたれど、なほこれと思ふ者は極めて少く候。さほどに古調は擬し難きにやと疑ひ居候も、近來其等の相知れる人の中に、歌よみにはあらで却つて古調を巧に摸する人少からぬことを知り申候。これによりて觀れば、昔の歌よみの歌は今の歌よみならぬ人の歌よりも遙に劣り候やらんと心細く相成申候。さて今の歌よみの歌は昔の歌よみの歌よりも更に劣り候はんには如何申すべき。(下略)(明治三十一年二月十二日)

再び歌よみに與ふる書

貫之は下手な歌よみにて、古今集はくだらぬ集に有之候。その貫之や古今集を崇拜するは誠に氣の知れぬことなどと申すものの、實はかく申す生も數年前までは古今集崇拜の一人にて候ひしかば、今日世人が古今集を崇拜する氣味合はよく存申候。崇拜して居る間は、誠に歌といふものは優美にて古今集は殊にその粹を拔きたる者とのみ存候ひしも、三年の戀一朝にさめて見れば、あんな意氣地のない女に今までばかされて居つた事かとくやしくも腹立たしく相成候。先づ古今集といふ書を取りて第一枚を開くと、直に「去年とやいはむ今年とやいはむ」といふ歌が出て來る。實に呆れ返つた無趣味の歌に有之候。日本人と外國人との合の子を日本人とや申さむ外國人とや申さむとしやれたると同じ事にて、しやれにもならぬつまらぬ歌に候。この外の歌とても大同小異にて、駄洒落や理窟つぽいもののみに有之候。それでも强ひて古今集をほめて言はば、つまらぬ歌ながら、萬葉集以外に一風を成したる所は取得にて、如何なる者にても始めての者は珍しく覺え申候。只これを眞似るをのみ藝とする後世の奴こそ氣の知れぬ奴には候なれ。それも十年か二十年の事ならともかくも、二百年たつても三百年たつてもその糟粕を嘗めて居る不思議に驚き入候。何代集の彼代集のと申しても、皆古今集の糟粕ばかりに御座候。

貫之とても同じ事に候。歌らしき歌は一首も相見え不申候。嘗て或人にかく申候ところ、その人が「川風寒み千鳥鳴くなり」の歌は如何にやと申され、閉口致候。この歌ばかりは趣味ある面白き歌に候。併し外にはこれ位のもの一首もあるまじく候。「空に知られぬ雪」とは駄洒落にて候。「人はいさ心もしらず」とは淺はかなる言ひざまと存候。但し貫之は始めてかやうな事を申候者にて、古人の糟粕にては無之候。詩にて申候へば、古今集時代は宋時代にもたとへ申すべく、俗氣紛々と致し居候ところはとても唐詩とくらぶべくも無之候へども、さりとてそれを宋の特色として見れば、全體の上より變化あるも面白く、宋はそれにてよろしく候ひなん。それを本尊にして人の短所を眞似る寛政以後の詩人はよき笑ひ者に御座候。

古今集以後にては新古今稍〻すぐれたりと相見え候。古今よりもよき歌を見かけ申候。併しそのよき歌と申すも、指折りて數へる程の事に有之候。定家といふ人は上手か下手か譯のわからぬ人にて、新古今の撰定を見れば少しは譯の分つて居るかと思へば、自分の歌にはろくなもの無之、「駒とめて袖うちはらふ」「見わたせば花も紅葉も」などが人にもてはやさるゝ位のものに有之候。定家を狩野派の畫師に比すれば探幽とよく相似たるかと存候。定家に傑作なく、探幽にも傑作なし。併し定家も探幽も相當に練磨の力はありて、如何なる場合にも可なりにやりこなし申候。兩人の名譽は相如く程の位置に居りて、定家以後歌の門間を生じ、探幽以後畫の門間を生じ、兩家とも門間を生じたる後は歌も畫も全く腐敗致候。いつの代如何なる技藝にても、歌の格、畫の格などといふやうな格がきまつたら、最早進歩致すまじく候。

香川景樹は古今崇拜にて、見識の低きことは今更申す迄も無之候。俗な歌の多き事も無論に候。併し景樹によき歌も有之候。自己が崇拜する貫之よりもよき歌多く候。それは景樹が貫之よりえらかつたのかどうかは分らぬ。只景樹時代は貫之時代よりも進歩して居る點があるといふ事は相違なければ、從つて景樹は貫之よりもよき歌が出來るといふも自然の事と存候。景樹の歌がひどく玉石混淆であるところは、俳人でいふと蓼太に比するが適當と被思候。蓼太は雅俗巧拙の兩極端を具へた男で、その句に兩極端が現れ居候。且つ滿身の覇氣でもつて世人を籠絡し、全國に夥しき門派の末流をもつて居た所なども、よく似て居るかと存候。景樹を學ぶならよきところを學ばねば甚だしき邪路に陷り申すべく、今の景樹派などと申すは、景樹の俗なと

ころを學びて景樹よりも下手につらね申候。ちゞれ毛の人が東髪に結びしをよき事と思ひて、東髪にゆふ人はわざ〳〵毛をちぢらしたらんが如き趣有之候。こゝのところよく〳〵活眼を開いて御判斷可有之候。古今上下東西の文學などよく比較して御覽可被成、くだらぬ歌書ばかり見て居つては容易に自己の迷を醒まし難く、見る所狹ければ、自分の汽車の動くのを知らで隣の汽車が動くやうに覺ゆる者に御座候。不盡。

（明治三十一年二月十四日）

一五　競の瀧口

1　解題

平家物語卷四、「競が事」の一章を「競の瀧口」と改題して、ここに採錄した。

内海月杖氏はその著「平家物語評釋」中にこの文を評して、次のやうに述べてゐる。

競の剛膽なふるまひが主題になつて、その宗盛をたばかるさまから、三井寺へ馳せ參ずる意氣ごみまで、よくその要を得て描き出されてゐる。但し、こゝでは、全般のその敍事法よりも、部分のちよつとした敍事の上に、例のこの作者一流の得意な筆の冴えが見られる。

宗盛が無理に馬をせがむ所の、「さては惜しむごさんなれ、にくし、乞へ」（八〇頁十行）といふ一節、宗盛が仲綱の馬に金燒をして、客人に見せ誇るところの「その仲綱めに鞍置け、引出せ、乘れ、打て、張れ」（八十一頁十一行）といふ一節、宗盛が競を寵愛するところの「朝より夕に及ぶまで、「競はあるか」、「候」、「あるか」、「候」とて伺候す（八三頁十一行）といふ一節、競に逃げられて、宗盛の怒りあわてる所の、「競はあるか」、「候はず」と申す。すは彼奴めを手延びにして誑られぬるは。あれ追つかけて討て」（八五頁九行）といふ一節、それらはいづれも皆、この作者の得意な、いかにも無雜作で、しかもよくその趣をあらはしつくす一種巧妙なる敍事法である。

重盛のやさしい話を敍した一節もいゝ。よく讀者に、重盛の重厚にして、しかも優雅な態度を想見せしめるものがある。

（この一節、教科書には略いた。次の「釋義」「後には聞えし」の條參照。）

平家物語　ヘイケモノガタリ。

(1)　**題材**　事件としては源平の盛衰であるが、作者のねらひどころは平家一門の悲壯なる滅亡を人世の運命と眺めるところにある。

(2)　**作者**　在來の研究では特定の一人を擬してゐるが（信濃前司行長・時長・資經・光行・爲長など）これは平家物語そのものの成立から考へて不可能なことである。卽ち平家物語は最初から一定の組織をもつて全篇ができ上つたものではなく、平家琵琶の曲目として一章毎に成立したものであり、各章についても後人の增補、書入れが加つたものである。それ故今日傳はる多くの

異本はその發達の途中を示したものであり、今まで作者と擬せられてゐる人々はすべて作者であり得るといふ結論になるのである。

(3) **時代**　作者を決めることができないやうに、成立の時代も特定することはできないのである。しかし原作ができ上つた時代は實朝の薨後であらうと推定されてゐる。

(4) **諸本**

- 灌頂卷
  - を立てるもの（一方流）
    - (一) 流布本（十二卷）
    - (二) 嵯峨本（十二卷）
    - (三) 語り本（諸がついてゐる）
    - (四) 覺一本（一方流中興覺一：南北朝時代の人）
    - (五) 長門本（長門赤間宮にある。）國寶二十卷
    - (六) 源平盛衰記（四十八卷）
  - を立てないもの（八坂流）
    - (一) 八坂本（十二卷）
    - (二) 延慶本（松井本）（延慶二年（一九六九））の寫本（六卷）
    - (三) 源平闘諍錄
    - (四) ローマ字平家物語（ロンドン博物館）

灌頂卷（灌頂とは眞言にて受戒のとき、香水を頂（かしら）に灌ぐこと）は文學として見て、佛教的な意味があるのだといひ、或は又琵琶の傳授に於て、祕曲として傳へる意であるといふ、以上二つの說があるが、兩者とも首肯するに足る。

(5) **他の軍記物**

保元・平治物語は平家物語より後であるといふ說が今日では優勢である。

源平盛衰記は平家物語より前であるとされてゐる。藤岡作太郎博士はそのために精密な論證をあげ、讀む文學としての源平盛衰記の繁から語り物としての平家物語の簡が生れたのであると考へ、野村八郎博士もこの說をとつてゐる。

(6) **參考書**

- 平家物語抄 …… 考證 ……（國文註釋全書）
- …… 評釋 ……（內海弘藏）
- …… 考 ……（山田孝雄）
- ○
- 鎌倉室町時代文學史（藤岡作太郎）
- 鎌倉時代文學新論（野村八良）（書史的研究として上乘）

2 編纂の用意

前課「水莖」の條に於て、現代和歌の解釋・鑑賞に頭腦を疲らせたから、こゝには、「平家物語」の中から競の瀧口の目のさめるやうな行動を掲げて、心力の轉換を試みさせ、戰記物語文の讀解力を養ふと同時に、宗盛卿のはしたない言動が、終に由々しき一大事を釀し出し、家を害ひ國を害ふに至つた顚末を知らしめて、深く自ら警むるところあらしめたい。

3 要旨

競の瀧口の忠勇の活動を思はしめるのが主なる目的であるが、一方に於ては、「人の世にあればとて、すゞろに言ふまじき事を言ひ、すまじき事をするは、よく〳〵思慮あるべき事」なるを思はしめるのも大切な仕事でなければならぬ。卽ち、私情にまつはる一瑣事から、一家一門、果ては國家の大事をも惹起するといふ好例を、この課が示してゐることを考へしめたい。文章も、各人物の言動が實に善く描かれてゐる。殊に競のけなげな決心、宗盛との應對、その復讐の擧に出る前後の、六波羅・三井寺の情景を寫したところも、十分鑑賞に値する。

4 概說

第一節（九一頁）　源三位頼政が高倉宮を奉じて平家に反旗を飜したのは、宗盛の輕率なる言動に原因する旨を述べた。

第二節（九二頁――九四頁七行）　右にいはゆる宗盛の言動、卽ち、彼が源頼政父子を怒らしめ、遂に謀叛を起すに到らしめた事由を精しく敍べた。

第三節（九四頁八行――九六頁一〇行）　旣にして、頼政等は三井寺に參る。その後に留つた競の瀧口は、僞つて宗盛方の召に應じ、その名馬を賜はつて、三井寺に馳せ參ずる。

第四節（九六頁一一行――九八頁二行）　その時の競の扮裝、及び、競失踪後の宗盛方の周章の狀を記した。

第五節（九八頁三行――九七頁）　三井寺に於ける競の噂最中に、競は宗盛から貰つた馬で乘りつける。その馬は金燒されて六波羅に返される。宗盛は怒り狂つたけれども、如何ともしがたい。

5 取扱上の注意

▲高倉の宮と源三位頼政との事は、國史と聯絡をつけて、最初に問答を試みるもよからう。ともかく、かの國史上の事實の眞原因が本課に語られてゐる通りであるとすると、宗盛の言動は眞に心なきわざで、殊に平家に取つては、容易ならぬ種を蒔いたのであつた。大乘的に言へばすでに衰亡すべき機運が到來して衰亡した平家ではあつ

たらうが、その直接の近因は、案外にも、かやうなところに伏在したのであらうことも、考へさせて見る必要はある。

▲この課の主人公ともいふべき競は、確かに、立派な一役をやつてのけてくれたといふ感じがする。その「熱涙をはら〳〵と流いて」宗盛に應答する競は、よくも僞りおほせたことと思はれる。しかし、既に南鐐を得て、日暮に三井寺に馳せ參る競は、その妻子とも訣別してゐる。實に、その「心の中こそ無慚なれ」である。武士の道は常に悲壯である。この「無慚」の語の眞義をよく味ははせたいものである。

▲文章は、およそ平家物語を通じての敍事の中でも、この一篇は最も優れてゐる一例であらう。各人物の會話といひ、行動といひ、簡潔であり、又、遒勁であり、隨つて、十分に餘韻を保つてゐる。殊に「競はあるか。」「候。」「あるか。」「候」のあたり、又、三井寺に競が到着する前後の光景、さては、南鐐に施した金燒の文句を、宗盛をして初めて讀ましめるやうな趣に仕立てたこと、最後に、宗盛の怒に對する記者の冷靜な結びの言葉を「南鐐が尾髮も生ひず、金燒もまた失せざりけり」とした如き、實に機微の妙を得てゐると思ふ。

6 設問

1 この一篇の文章の仕組（組立・構造）について說明せよ。

2 「年頃日頃もあればこそありけめ」とは如何なる意味か。

3 「たとへば」（九二頁一行）の用法は、他の普通の用法と如何に異なつてゐるか。

4 この文章に於ける「賜ぶ」「賜はる」の用例について、その兩者の意味の異同を考へよ。

5 賴政の言葉は、前後二箇處に出てゐるが、その兩者を比較すると、彼の心境は如何に變化してゐるか。

6 「心にくうも候はず」（九六頁一一行）の意義は如何。

7 「心の中こそ無慚なれ」（九六頁一〇行）の「無慚」はどういふ意味か。

8 賴政對競の主從關係の美しさを證する語をあげよ。

9 文章として、巧妙に書けてゐると思ふ點をあげよ。

7 釋義

【競の瀧口】 キホフのタキグチ。瀧口渡邊競。「瀧口」は王朝時代の職名。藏人所の被官。勤番宿直して禁中の警備を掌つた。禁中溝水の瀧の口にその陣屋があつたので、かやうに名づけられたといふ。宇多天皇の朝始めて十人を置き、後增して二十人とした。「渡邊競」は白河院の北面の士。源三と稱した。その事蹟は本文に詳かである。治承四年（一八四〇）源賴政に從つて平氏に抗し、終に宇治の戰に討死した。

【あくる十六日】 高倉天皇の治承四年（一八四〇）五月十六日。

【高倉の宮】 タカクラのミヤ。以仁（モチヒト）王。後白河天皇の第四皇子。御母は宮人藤原成子。穎敏聰明、音樂を好み、笛をよくしたまうた。御母の身分の故を以て親王となることを得ず、不平を抱いておはした。治承四年源賴政は平氏を滅さうと圖り、王にお勸め申した。そこで王は自ら景勝親王と稱し、平氏討伐の檄文を令旨と稱へ、藏人源行家をして諸國に發布せしめられた。事發覺するや、脫れて園城寺に入り、更に平等院に入つて防ぎ戰はれたが、事終に成らず、流矢に中つて薨じた。御年三十。

【御謀叛】 ゴムホン。平氏討伐の御企を申す。

【三井寺】 ミヰデラ。園城寺（ヲンジャウジ）の別名。天台宗寺門派の總本山。滋賀縣大津市別所にある。山號は長等（ナガラ）山。我が國四個大寺の一。延曆寺を山門といふに對して寺門といふ。白鳳年中弘文天皇の皇子大友與多王の創建。天安二年（一五一八）、圓珍（智證大師）がこの寺に入つて、これを中興した。貞觀六年（一五二四）延曆寺の別院となつた。そのとき圓珍はその別當に推された。後別當を長吏と改めた。現今では貫主が長吏

を兼任することになつてゐる。延暦寺の第三世圓仁の門弟と圓珍の門弟とが相爭つてから、山門・寺門の徒は事毎に確執し、寺門は山門のために度々燒却せられた。又兵火にかゝつて灰燼となつたことも前後十數回に及んだ。慶長三年（一二二五八）、北政所（豐臣太閤の夫人、高臺院と申す）は太閤の遺命によつて寺領を寄附し、伽藍を修築した。尋いで德川家康及び秀忠がこれを再營した。今、聖護院・實相院・圓滿院を當寺の三門跡といふ。現存のおもな建物は殆ど特別保護建造物として指定されてゐる。

【市中の騷動なのめならず】　京都市中のさわぎは、なみ一通りでない。

「騷動」（サウドウ）は、多人數のものがさわぎたつこと。さわぎみだれること。

孫子の用間篇に「凡興師十萬、出征千里、日費千金、內外騷動。」

源平盛衰記、二十二、俵藤太將門仲違の條に「京中六波羅の騷動斜ならず。」

「なのめならず」（斜ならず）は「なゝめならず」の轉。一通りならず、一方ならず、おほかたならず、甚だし、などの意。

源氏物語、夕顏の卷に「げになのめならぬかたはなめる。」

十訓抄、上に「かをりのなのめならずかをりて。」

【源三位入道頼政】　ゲンザンミニフダウヨリマサ。源頼政。源氏の武將。頼光の玄孫。仲政の子。最も射をよくし、和歌に長じてゐた。保元の亂には後白河天皇の御味方に參じ、平治の亂には平清盛に與して禁裏を衞つた。高倉天皇の御時、鵺といふ怪物が夜宮殿の上で鳴いた。頼政は勅を奉じてこれを射、一矢よくこれをしとめたといふ。後清盛の奏請によつて從三位に敍せられ、剃髮して源三位入道といつた。已にして清盛の兇暴を惡み、治承四年（一八四〇）以仁王を奉じて平氏討伐の師を擧げたが、事敗れて、終に宇治の平等院に自殺した。時に年七十七。

【年頃日頃もあればこそありけれ】　つね日頃（今まで長い間）別に不平不滿もなく、隨つて謀叛心もなかつた、ればこそ、あゝして無事に世を過してゐたのに。」といふほどの意。

【平家の次男宗盛の卿】　平宗盛。源平時代の平家の武將。清盛の第二子。重盛の弟。累進して正二位權大納言に至り、尋いで內大臣に拜せられ、從一位に敍せられた。時に賴朝や義仲の兵勢が熾んであつたが、宗盛はすこしもこれを意とせず、華奢自ら誇つた。やがて諸源が京師に入らうとするや、知盛の議を抑へ、安德天皇を奉じて一族と共に西海に奔つた。爾來一ノ谷・屋島に敗れ、尋いで壇ノ浦に大敗し、天皇は海に入つて崩じたまひ、一族は多く戰死又は自刄した。然るに、宗盛はその子清宗と共に自決する能はず、遂に東兵に捕へられた。尋いで鎌倉に送られ、賴朝から自裁を諷せられたが、これを覺らず、偏に死を宥されたいと請うた。尋いで京都に送還せられ、途すがら近江の篠原で斬られた。時は壽永四年（一八四五）。年三十五。

「卿」（キャウ）は公卿。古、朝廷に奉仕する高位・高官の人の稱。くはしくいへば、「公」は攝政・關白・大臣、卿は大中納言・參議及び散一位並に三位以上の稱。

【不思議の事】　こゝは奇怪至極の事、けしからぬ事、などの意。

靈異記に「誠知三寶之非色非心、雖レ不レ見レ目、而非レ无レ威力、此不思議第一也。」

宇治拾遺物語、二に「不思議の事なれば、末の世物語りにかくしるせるなり。」

【人の世にあればとて云々】　「わが身が、いかに世の中で榮え、時めいてゐるからといつて、言ふまじきことを口から出まかせにいつたり、すまじきことをしたりすることは、よく〳〵考へて、つゝしむべきことである。」といふほどの意。

「世にある」は、世の人に認められること。世の人に用ひられること。世に時めき榮えること。

後拾遺集、秋上に「こよひこそ世にある人はゆかしけれいづこもかくや月を見るらむ」

「すゞろに」は、(一)何のわけもなく心のすゝむさまにいふ語。そゞろに、(二)さやうにはすまじき事をなすさまにい

ふ語。はしたなく。不覺に。(三)わけもなく。理由もなく。無造作に。こゝは(二)の意。

【嫡子】 チャクシ。よつぎ。嗣子。

謡曲、攝待に「嫡子繼信は八島に討たれ」

【伊豆守仲綱】 イヅノカミナカツナ。頼政の長子。伊豆守に任ぜられ、正五位下に敍せられた。治承四年（一八四〇）父に從つて平氏の軍と宇治橋に戰ひ、敗れて父と共に平等院に自殺した。

【九重に聞えたる名馬あり】 宮中にまで評判のきこえてゐた名馬があつた。

「九重」（クヂュウ）は宮中。普通には漢音で「キウチ・ウ」とよみ、「こゝのへ」ともいふが、こゝは呉音で（クヂュウ）とよむことになつてゐる。

菱辭に「君之門兮九重。」

韓愈の詩に「一封朝奏九重天。」

【鹿毛】 カゲ。馬の毛色の名。體毛は褐色で、鬣尾及び膝以下の毛の黑いもの。黑鹿毛・白鹿毛等の種類がある。

顯季集に「筑紫へ下らんとせしに、永縁僧都鹿毛なる馬をおこせて」

【ならびなき逸物】 他にならぶべきもののないほどすぐれてゐる名馬。

「逸物」（イチモツ）は、すぐれて群をぬけ出てゐるもの。いちもち。いちぶつ。

宇治拾遺物語、卷一に「乘りたる馬……いみじき逸物にてありければ」

【乘走り心むけ】 馬の人を乘せて走るそのぐあひ、又よろづにつけての馬の心もち、卽ち馬の性質をさしていふ。

【聞え候名馬を賜はつて見候はばや】 あの評判の高い木の下といふ名馬を申しうけて、その立派な樣子を見たいものでござる。

【さる馬】 「しかある馬」の約。さういふ馬。世に評判の高い木の下といふ馬。

【この程】 このごろ。ちかごろ。

源氏物語、帚木の卷に「この程は、大殿にのみおはします。」

【しばらくいたはらせんがために】 しばらく休養せしめようがために。當分休養させるために。

「いたはらす」とは、いたはしくおもつて、やさしくとりあつかふこと。あはれみをかけること。いたづくこと。

宇津保物語、俊蔭に「そのほどは、いたはりてさぶらはせむ」

【田舍】 キナカ。都會ならぬ地。ひな。在鄕。

垂仁紀に「將レ住二田舍一（キナカ）」

萬葉集、卷三に「昔こそ難波ゐなかといはれけめ今は都とそなはりにけり」

【さらんには力及ばず】 そんなら、いたしかたはない。それならやむを得ないから、あきらめよう。

「さらんには」は、「しかあらんには」の約。さうであるならば。さういふわけならば。

「力及ばず」は、是非もない。せん方ない。已むを得ない。

平治物語、信西子息闕官の條に「內裏よりしきなみに召されければ、力及ばで出だされけり。」

【沙汰】 サタ。こゝでは、指令、指圖、などの意。

「木の下」をさし出せとの宗盛卿よりの命令をさしていふ。

【あつぱれ】 天晴・適などの字を充てる。少し驚きの趣をこめた「あゝ」と略ゞ同じつかひざまの感動詞。

【庭乘りし候ひつる】 庭で乘り馴らしてゐました。「庭乘り」とは、庭前で馬を乘り馴らすこと。

古今著聞集、卷十に「汝ほどの者が、貞弘を呼びて庭乘せさせて見るべき事かは。」

源平盛衰記、十四、木下馬の條に「一昨日は湯洗ひ、昨日は庭乘、今朝も坪の內に引きいだしてありつるなり。」

【さては惜しむごさんなれ】 「さては惜しむにこそあるなれ」の約。それでは、「木の下」を惜しんで、こちらによこさないのに相違ない。

【一時】 ヒトトキ。現今は一晝夜の二十四分の一の時間の稱。たゞし、源平時代には、一晝夜の十二分の一の時間の稱。

昔は一晝夜を十二分して、眞夜中を九つとし、それより八つ・七つ・六つ・五つ・四つと數へ、又眞晝までを九つとし、前と同じく數へて眞夜中前に終る。この法は日出・日沒を基として明け六つ、暮れ六つと定めるから、晝夜の伸縮によつて、一時に長短を生ずる。

【黃金】 コガネ。「きがね」の轉。金（キン）。わうごん。「銀」

を「白金」(シロガネ)といふに對する語。黄色の光輝ある金屬。質が重く、軟らかにして、延性及び展性に富み、酸に遇うても鏽を生ぜず。硫黄に觸れても變化せず、又單一の酸に溶解しない。その光輝が美しいから、古來種種の裝飾品に供せられ、又、本位貨幣として文明諸國の間に廣く使用されてゐる。

【六波羅】　ロクハラ。平宗盛の六波羅の邸。

「六波羅」は京都、清水山の西麓、賀茂川の東に瀕し、五條松原通の末から南七條の末に至る地の總稱。始め平安朝の末、僧空也がその北邊に寺宇を創めて西光寺と名づけたが、後これを六波羅密寺と稱したので、六波羅の地名を生ずるに至つた。その後平忠盛がこゝに方一町の邸宅を構へたが、子清盛に至り、一門眷屬概ねこゝに住居を營み、その數五千二百餘宇の多きに上つたといふ。壽永二年(一八四三)の西竄に、一炬灰燼に歸したが、建久元年(一八五〇)源頼朝は平頼盛の館であつた池殿の跡に新亭を起して京畿の政所と定めた。承久の變後、北條氏はこゝに南北探題の兩府を置いて京畿を鎮すること百餘年、元弘の亂に至つて終に廢址となつた。

【こひしくば來ても見よかし云々】　「身に添つてゐる影のやうにわが身をはなさない鹿毛の馬(木の下)が、それほど戀しうござるなら、來てごらんなさい。何とて、これを手放すことが出來ませうぞ。」との意。

「影」を「鹿毛」にいひかけておもしろくよみなしたのである。仲綱は已むを得ず馬を手放しながらも、なほこれを手放すにたへぬ意を和歌に託して宗盛に通じたのである。

【あつぱれ馬や】　「さて〳〵よい馬だなあ」といふほどの意。

こゝの「あつぱれ」は、驚嘆のおもむきをいひあらはした感歎詞である。

【よい馬でありけり】　平家物語獨特の語法の一。

【主が名乘を金燒にせよ】　飼主なる仲綱の名を烙印(ヤキハン)にせよ。

「名乘」(ナノリ)は、(一)名をいふこと。又、その名。(二)中古以後、男子の元服のとき、通稱の外に新につける實名の稱。

源平盛衰記、三十六、鷲尾、一ノ谷案内の條に「名乘はいかにと問ひ給へば、名はいまだつけず、親には三郎に相あたり候と申す…さらば汝をば鷲尾三郎といふべし。名乘は我が片名に父が片名を取りて經春とつくべし。」

「金燒」(カナヤキ)とは、金屬を熱して、燒印をおすこと。烙印。

砂石集、二の上に「金燒にしつる錢の形、このめくらが頰のほどにあたりて見えけり。」

【厩】　ウマヤ。「馬屋」の義。馬を飼ひおく小屋。

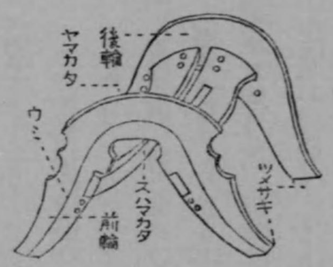
【客人】　マラウド。「マレヒト」(稀人)卽ち稀に來る人の義。他より訪ひ來た人。まらびと。まれうど。まれと。客(キャク)。客人(キャクジン)。

土佐日記に「やまと歌、主もまらうどもいひあへりけり。」

宇津保物語、初秋に「まらうどの御さかな、おほみきまゐらせたまふ。」

【その仲綱め】　仲綱と金燒をした「木の下」をさしていつたのである。

【鞍】　クラ。馬具の一種。馬の背において、人が乘り、又は荷物を駄するためのもの。その骨幹をなす部分をくらぼねといひ、その前後の高まつた部分のうち、前なるを前輪、後なるを後輪(シヅワ)といひ、その中間の横木を居木(キギ)といふ。中古公家の飾馬には唐鞍・移(ウツシ)鞍・倭(ヤマト)鞍・水干鞍などがあり、武家用の鞍には、その意匠によつて鏡鞍・金覆輪(キンプクリン)鞍・銀覆輪鞍・沃懸地(イカケヂ)鞍・貝鞍・金貝鞍・螺鈿(ラテン)鞍・梨子地鞍・黒漆鞍等の種類がある。



【乘れ、打て、張れ】　乘れ、鞭うて、張りまはせ。

「張りまはす」とは、思ふ存分打擲することをいふ。

【身にかへて思ふ馬】　わが身にかへても惜しいとおもはぬほど寵愛してゐる馬。

【權威について取らるゝさへあるに】　權柄づくで奪ひ取られるだけでさへ、殘念であるのに。

「權威」(ケンヰ)とは、下位のものを強制して服從せしめる威力。權力。權柄。

平家物語、信頼信西不快の條に「信西が權威もいよ〳〵威を振ひて、飛ぶ鳥も落ち、草木も靡くばかりなり。」

【剩へ】 アマッサへ。「アマリサへ」の促音便。略して、アマサへ。あるが上に添ひ加はつて。その上に。おまけに。

謠曲、加茂に「新しく壇を築き、白木綿に白羽の矢をたて、あまつさへ、渴仰の氣色見えたり。」

【笑はれぐさ】 物笑ひのたね。わらひぐさ。笑柄。

【やすからね】 心の安からぬこと。心の平らかならぬこと。不滿にたへぬこと。前に「こそ」の係詞があるから、「安からず」を連體形の「ね」で結んで、「安からね」としたのである。

【なんでふ事のあるべきと云々】 「こんな馬鹿なことをしむけても何事があらうぞ、何事もありはしまいとわれわれを侮つて、平家の人どもが、がやうなしむけをするのである。」との意。

「なんでふ」は、「なでふ」の音便。何といふ、いかなる、何ほどの、などの意。

竹取物語に「なでふ心地すれば、かく物を思ひたるさまに月を見給ふぞ。」

枕草子、巻二に「なんでふ事なき人の、すゞろに、えがちに、物いたく言ひたる。」

「しれごと」は痴事の字をあてる。ばかげた事。おろかな事。

古今著聞集、巻十七に「かゝるしれごとするものども、かやうにためすぞ。」

「あんなれ」は、「あるなれ」の撥音便。

【この儀ならば】 かういふ次第であれば。

【便宜を窺ふでこそあらめ】 たよりのよいついでを窺ふにこしたことはない。よい折を見て平家を討つことにしよう。

「便宜」(ビンギ)は、たよりのよいこと。よい折。好機會。

平治物語、信頼謀反の條に「便宜候はば、當家の浮沈をも試むべし。」

【さる程に】 前を受けて更に說きおこすときに用ひる語。然るところに。然るあひだに。

【後には聞えし】 原文にはこの次に左の二節がある。

これにつきても、天下の人、小松の大臣の事をぞしのび申しける。或時、大臣參内のついでに、中宮の御方へ參らさせ給ふに、八尺ばかりありける蛇(くちなは)の、大臣の指貫の左の輪をはひまはりけるを、「重盛さわがば女房たちもさわぎ、中宮も驚かせ給ひなんず。」とおぼしめし、左の手にて尾をおさへ、右の手にて頭を取つて、直衣の袖の中へ引きいれ、ちつとも騷がず、つい立つて、「六位や候、六位や候。」と召されければ、伊豆の守伸綱、その時は未だ衞府の藏人にて候はれけるが、「伸綱」と名のりて參られたるに、この蛇をたぶ。たばつて、弓場殿(ゆばどの)を經て、殿上の小庭に出でつゝ、御倉(みくら)の小舍人を招いて、「これ賜はれ。」といはれければ、大きに頭を振つて逃げ去りぬ。伊豆の守力及ばず、わが郎等の競を召してこれをたぶ。たばつて捨ててけり。

そのあした、小松殿より、よい馬に鞍おいて、伊豆の守のもとへ遣はすとて、「さても昨日のふるまひこそ、優にやさしう候ひつれ。これは乘一(のりいち)の馬で候ぞ。夕に及んで陣外(ぢんげ)より傾城(けいせい)のもとへ通はれん時用ひらるべし。」とて遣はさる。伊豆の守、大臣の御返事なれば、御馬畏つて賜はり候ひぬ。さても昨日の御ふるまひは還城樂(げんじやうらく)にこそ似て候ひしか。」とぞ申されける。いかなれば、小松殿はかやうに優なるためしもおはせしぞかし。この宗盛の卿はさこそなからめ、人の惜しむ馬乞ひ取つて、あまつさへ天下の大事に及びぬるこそうたてけれ。

【源大夫の判官兼綱】 ゲンタイフのハウグヮンカネツナ。源兼綱。本文には頼政の次男とあるが、實は頼行の子で、頼政の甥にあたり、その養子となつたもの。治承四年(一八四〇)宇治の戰に討死した。

「大夫の判官」は、又、タイフのジヨウともいふ。檢非違使尉で、五位に敍せられた人の稱。

【六條藏人仲家】 ロクデフクランドナカイヘ。源氏。帶刀義賢の長子。義賢が義平と戰つて敗死したので、頼政はこれを養つて子とした。八條院宮の藏人となり、六條藏人と稱した。治承四年(一八四〇)宇治の戰、子仲光と共に頼政に從つて戰死した。

「藏人」は、禁中近習の職。機密の文書及び訴訟を掌り、又天皇の御衣・御膳より總べての御起居に供奉し、傳宣・進奏、及び除國・諸節會の儀式、その他殿上に於ける一切の事を掌るもの。その長官を頭(カミ)といひ、その下に五位藏人と六位藏人とがある。但し、こゝは八條院宮のおそばにつかへて、宮の事務にたづさはる役の稱。

【藏人太郎仲光】 仲家の長男。藏人に補せられ、長男の身であつたから、「藏人太郎」といつたのである。

【泥甲】 ヒタカブト。一同うちそろつて甲冑にその身をかためること。又その人々。

保元物語、官軍諸所手分の條に「ひたかぶとのつはもの三十

騎。」

【館】ヤカタ。高倉宮以仁王の御所なる三條高倉宮。京都の三條高倉にあつたから、かやうにいふ。

「館」は屋形の義。身分ある人の宿所又は邸宅の稱。みたち。との。

慕京集に「さかしらにて、横見氏やかたを襲ふなど聞えければ」

【年頃の侍】トシゴロのサムラヒ。年來めしつかつてゐる侍。つね日ごろ部下としてつかつてゐる武士。

【渡邊源三競の瀧口】渡邊は姓。源三は通稱。競は名。

「瀧口」は役の名。前の「競の瀧口」參照。

【など】何とて。何として。などて。なにゆゑ。いかなれば。どうして。なぜ。

萬葉集、卷三に「一日には千重浪しきに思へどもなどその玉の手に卷きかたき」

【相傳の主】サウデンのシュウ。先祖このかた代々仕へ來つた主君。

平家物語、一、殿上闇討の條に「家貞畏まつて申しけるに、相傳の主備前守殿の今夜闇討にせられ給ふべき由承つて」

譚子に「鏡々相照、影々相傳。」

【日頃は】つねは。ふだんは。平生は。

玉葉集、戀四に「よもさらば恨み果てなむと思ふまに日頃覺えぬあはれさぞ添ふ」

【自然の事も候はば】シゼンのコトもサフラはば。もしもの事がございましたら。萬一、何か一大事でもおこりましたら。

「自然の事」は、もしもの事。萬一の事。

保元物語、新院爲義を召さるゝ條に「自然の事出で來たるときも、冠者ばらを差しつかはして」

平治物語、光頼卿參内の條に「自然の事もあらば、人手に懸くな。」

【眞先かけて】まつさきにかけつけて。さきがけをして。いくさの先陣を承つて。

【今度は如何候ひつるやらん云々】「今度は、どういふ子細がおありになつたやら、入道殿から、かやう〳〵のわけだともお知らせがありませんでしたから、御覽のとほり、入道殿の御味方に馳せ參じもしないで、こゝに留つてゐます。」といふほどの意。

【これにも亦兼參の者ぞかし】「おまへ（競）は、勿論三位入道の家人であるけれども、こちら（平家）へも兼ねて參つてゐたものだから、あながち、こちらに緣の無いものでもない。」といふほどの意。

「兼參」（ケンサン）は、兼ねて見參せしこと。

源平盛衰記、三十九、友時重衡の許に參ずる條に「本三位中將の侍に、木工馬允友時といふものは、入條院に兼參しけるものなり。」

【先途後榮を存じて】ゆくすゑ〳〵の榮華を考へて。將來の立身出世を心にかけて。

「先途」（センド）は、結局のところ。なりゆき。ゆくさき。

太平記、七、吉野城軍の條に「姑く生きて宮の御先途を見はてまゐらせよと庭訓をのこしければ」

「後榮」（コウエイ）は、後日の榮華。のちのさかえ。

保元物語、爲義降參の條に「齡すでに致仕に餘れば、身の幾ばくの後榮をか期せん。」

【當家】タウケ。この家。我が家。こゝは平家をさしていふ。

【奉公】ホウコウ。(一)おほやけに仕へ奉ること。(二)君國のために力をつくすこと。(三)主君につかへること。こゝは(三)の意。

狂言、三本柱に「頼うだ御方は、何事もわつさりとして、御奉公がいたしよいの。」

【朝敵】テウテキ。朝廷に敵對する賊。天子に叛く賊。反賊。

太平記、十六、日本朝敵の條に「朝敵となつて叡慮を惱ましし」

【頼政法師】ヨリマサホフシ。頼政は剃髮し、入道して眞蓮と號した。よつてかやうにいつたのである。

「法師」は、(一)佛法に精通して教法の師となるもの。(二)僧の通稱。ほつし。のりのし。出家。

法華經の序品に「常修二梵行一、皆爲二法師一。」

宇津保物語、貴宮に「いふばかりなく泣きまどひて、歸りてすなはち法師になりにけり。」

【同心】ドウシン。心を同じくすること。共に事をはかること。

書經の秦誓に「予有二亂臣十人一、皆同レ心、同レ德。」

平治物語、頼朝遠流の條に「侍士ども同心に申しけるは」

【はら〳〵】雨や涙などの落ちるさまにいふ語。ぽろ〳〵。ぽつり〳〵。

經信母集に「俄かに雨はら〳〵と降りて。」

山家集、下に「はら〳〵と落つる涙ぞあはれなるたまらず物の悲しかるべし」

【好】ヨシミ。親しい交り。したしみ。交誼。

椿葉紀に「昔のよしみを忘れざる人々を、大かたしるしはんべるに。」

【いかんか】如何にしてか。いかでか。どうしてか。いかで。

保元物語、新院御謀叛露顯の條に「冥の照覽をも、いかんか御憚りなかるべき」

【たゞ殿中に奉公致さうずる候】たゞ〳〵、忠誠をつくして、六波羅の御殿の中に御奉公いたしませう。

「致さうずる候」は「致さんとするにて候」などいふ語の略。平家獨特の用法。

【大將】右近衛大將平宗盛卿。

【伺候】シコウ。(一)參つて御機嫌うかゞひをすること。(二)傍にさむらひ居ること。こゝは(一)の意。

韓愈の文に「伺二候於公卿之門一。」

傾城反魂香に「櫻の間に伺候し」

【三井寺にと聞え候】うはさによれば、三井寺に籠られたといふことでございます。

【定めて夜討などもや云々】きつと、夜襲の兵をこちらへおさしむけになるでございませう。

「夜討」(ヨウチ)とは、夜不意に敵を襲ひ討つこと。夜にまぎれて敵陣を襲擊すること。夜襲。

保元物語、新院御所各門々固の條に「利を得ること夜討に若くこと侍らず。」

「候はんずらん」は「候はんとすらん」の約。

【一類】イチルヰ。同族。一族。

榮華物語、疑に「この御一類の外の殿ばら」

東鑑、一、治承四年十二月二十二日の條に「平家頻圍二計議一、於二源氏一類一者、悉以可二誅亡一之由、內々有二用意一。」

【渡邊黨】ワタナベノタウ。渡邊姓を名のる地方の豪族の一類。

「黨」とは、昔、地方の豪族で、族類が廣く、一隊の兵力をそなへてゐたものの稱。當時、關東地方には、渡邊黨・三浦黨などいふ豪族がゐた。

【さては】又。および。そして。

源氏物語、玉葛の卷に「このたのもし人なるすけ、弓矢もちたる人二人、さては、しもなるものわらはなど三四人」

【三井寺法師】三井寺の僧兵。略して「寺法師」ともいふ。

比叡山延曆寺の僧兵を「山法師」といふに對する語。

古今著聞集、卷二に「すべからく台嶺の法師にてぞあるべかりけれども、流にひかれて寺法師になり給ひにけり。」

基佐集に「寺法師のまかりあひて、ひねもす人々歌を吟じてありけるに」

【心にくうも候はず】あつぱれよい、奥ゆかしい敵とおもはれるやうな敵は居りません。

「心にくう」は、「心にくく」のウ音便。心おきのされるさま。轉じて、奥ゆかしいさま。こゝは、その意。

宇津保物語、樓上、下に「いとあてに、けはひなども式部卿の宮よりも心にくく、はづかしげにものし給へり。」

【罷り向つて】出かけていつて、應戰して。

【選討】エリウチ。敵を選んで、然るべきものを討ち取ること。よりうち。

【さる馬】さる體なる馬。然るべき馬。相當の良馬。「さる」は「しかる」の約。

平治物語、信頼謀反の條に「白く黑く、さる體なる馬一匹。」

【下し預り候はずや】「下し」は宗盛卿が競に下すのであり、「預り」は競が宗盛卿から預るのである。

【尤もさるべし】それは、いかにも尤もなことである。いかにもさうあるべきことである。

【白葦毛】シロアシゲ。葦毛の白みがちなもの。

「葦毛」とは、馬の毛色の名。白に黑のさし毛のあるものをいふ。

保元物語、白河殿義朝夜討の條に「白葦毛なる馬」

【南鐐】ナンレウ。「南鐐」はもと精煉した上質の美しい銀の稱。こゝは馬の名。白葦毛の毛なみが南鐐のやうに美しいところから、かやうに名づけたものであらう。

【祕藏】ヒザウ。又、ヒサウ。大切にしてしまひおくこと。

劉歆の文に「陳發二祕藏一校二理舊文一。」

保元物語、鵜丸の條に「鵜の丸と名づけられて御祕藏ありけり。」

【賜ぶ】 タぶ。「賜ふ」に同じ。ば行四段活用。
竹取物語に「娘をわれにたべと伏し拜み」
【賜ばつて】 タバつて「賜ばりて」の音便。賜はつて。貰ひうけて。頂戴して。
「賜ばる」は、ら行四段活用。
【はや日の暮れよかし】 早く日が暮れてほしいものだ。
【立ち忍ばせて】 かくれさせて。
「立ち忍ぶ」とは、しのぶこと。かくれること。
今鏡、六に「破られて立ち忍ぶべき方ぞなき君をぞたのむかくれ蓑貸せ」
【無慚】 ムザン。いたましいさま。ふびんなさま。
保元物語、謀反人各〻召捕の條に「かゝる罪に行はるゝこそ無慚なれ。」
【狂紋の狩衣】 キャウモンのカリギヌ。いろ〳〵の模様を亂し織つた織物でこしらへた狩衣。
「狂紋」は狂文とも書く。いろ〳〵の模様のまじつたもの。又その織物。
川中島合戦、三に「狂文の綾の吳服一重ね、肩にかけて立ち出で」

「狩衣」とは、もと狩などの時に着用した服。古の服の一。闕腋(ケッテキ)の袍のやうで短く、袖つけは後を少し縫つたばかりで、前は縫はず、袖に括(ク、リ)がある。地質は古くは布を用ひたが、後世は浮織物・固織物・綾・平絹・紗などを用ひることとなつた。模様は一定せぬ。江戸時代には、模様のあるものを狩衣、模様のないものを布衣(ホイ)として區別し、狩衣をば禮服とした。

伊勢物語に「かりぎぬのすそを切りて、歌をかきてやる。」
【菊綴】 キクトヂ。直垂・水干・素袍などの縫目にとぢつけた裝飾。總(フサ)をひらめて、圓く菊花の狀としたもの、又は紐・革などを結んだもの。教科書鼈頭の挿圖參照。
源平盛衰記、十一、靜憲、入道と問答の條に「滋目結の直垂に菊綴して」
【大きらかにしたるに】 こゝは大きな菊綴をつけたことにいふ。一本には「大らかにしたるに」とある。それによると、たくさんに菊綴をつけたことになる。
【重代】 チュウダイ。(一)幾代をもかさねること。(二)祖先以來代々傳はること。こゝは(二)の意。
謝莊の文に「重代列聖、咸由厥道。」
保元物語、新院爲義を召さるゝ條に「重代相傳仕つて候。」
【着背長】 キセナガ。鎧の異稱。又常の鎧を大將の着るについて稱するともいふ。

古事談、四に「御着背長を取り出されて、つらぬき牽り」
【緋縅の鎧着て】 前を受け、「重代の着背長なる緋縅の鎧を着て」といふ意であらう。
「緋縅の鎧」とは、緋色に染めた革で小札(コザネ)を綴つた鎧。おもに大將の着用するもの。
平家物語、四、宮御最期の條に「伊勢武者は皆緋縅の鎧着て宇治のあじろにかゝりけるかな」
【星白の兜】 ホシジロのカブト。星(兜の鉢板にうちつけた釘や鋲の類)を銀でつくつた兜。教科書鼈頭の挿圖參照。
【嚴物作の太刀を佩き】 イカモノヅクリのタチをハき。いかめしくつくつた太刀を腰にはいて。
「嚴物作の太刀」とは、太刀のこしらへをいかめしいさまにしたもの。その制、銀で包み、足には銀の細長い輪を、一足に七つづつ着けて帶取を通す。故にこの制の足を七足(ナ、ツアシ)といふ。鞘には尻鞘をかける。(貞丈雜記)
一說、一足に鏈(クサリ)七筋づつ着け、甲金(カブトガネ)が太く長く、尻鞘をかける。(刀劍問答)
又一說、「いか」は「ゆか」の轉音、延喜式の神祇の神供の、由加物(ユカモノ)のうちに太刀があるから、由加物作といふ一定の拵へがあつて、これに擬したものをいふのであらう。(貞丈雜記、光大註)
平家物語、九、木曾最期の條に「木曾殿その日の裝束には：…からあや縅の鎧きて、いかもの作の太刀をはき」
【二十四さいたる大中黑の矢負ひ】 大中黑の矢二十四本を

さした箙（エビラ）を背に負ひもつこと。

「大中黒の矢」とは、上下が白くて中に黒い斑（フ）のある鷹などの羽で造つた矢をいふ。教科書鏃頭の挿圖參照。

保元物語、白河殿夜討の條に「二十四さしたる大中黒の矢頭高に負ひなし」

【瀧口の骨法忘れじとや】瀧口の武士の作法を忘れまいといふつもりであらうか。

「骨法」（コッパフ）は、禮儀作法。

平家物語、一、殿下乘合の條に「二十より內の若者どもなれば、禮儀骨法わきまへたる者一人もなし。」

【矧いだりける】「矧ぎたりける」の音便。

「矧ぐ」（ハぐ）とは、羽を矢竹につけて矢を作ること。

【的矢一手ぞ卷添へたる】二十四本の大中黒の矢の外に、的矢を一手（二本）さしそへてゐた。瀧口は宮中で的を射て叡覽に供へ奉ることがある。それゆゑ、瀧口としての骨法を忘れないで、二本の的矢を、二十四本の大中黒の矢以外にさしそへてゐたといふのである。

「的矢」とは、的を射るに用ひる矢。その製は一樣ではない。矢柄はさはし篦（ノ）、節數は三節、筈は節筈（フシハズ）、羽は鷲の羽を本とし、鏃は平題（イタツキ）を用ひる。

太平記、十二聖廟に「的矢に弓を取り添へて」

「一手」（ヒトテ）は、射藝の語。內向（ウチムキ）の矢と外向（トムキ）の矢との二本の稱。

道照愚草に「矢一手といふは、內むき外むき一手あるをいふ。然らずば一二といふ。」

【滋籐の弓】シゲドウのユミ。「重籐」とも、「繁籐」とも書く。弓の幹を籐でしげく卷いたもの。雨露に逢うて鰾膠（ニベ）の離れるのを防ぎ、兼ねて裝飾の爲にする。籐の卷きやう、位置・幅・間隔等によつて、本（モト）滋籐・末（ウラ）滋籐・矢摺（ヤズリ）滋籐・鏑（カブラ）滋籐・中（ナカ）滋籐・吹寄（フキヨセ）滋籐・匂（ニホヒ）滋籐・段（ダン）滋籐・節籠（フシゴメ）滋籐・千段（センダン）滋籐・引兩（ヒキリヤウ）滋籐・追（オヒ）滋籐・白（シラ）滋籐・村（ムラ）滋籐等の種類がある。

【乘替】ノリカヘ。こゝは、乘替の馬をあづかつてゐる侍。

源平盛衰記、二十七、信濃横田川原の軍の條に「乘替を使にて、木曾殿に申しける」

曾我物語、一、河津三郎討たるゝ條に「折節乘替一騎もつかざれば」

【打具し】ウチグし。うちつれ。めしつれ。

「打」は接頭語。「具す」は、ともなふこと。つれだつこと。

夫木抄、八に「澤水にほたるのかげの數そふは我がたましひや行きて具すらむ」

【舍人男】トネリヲトコ。牛車の牛飼、乘馬の口取りなどの稱。とねり。

職原抄、後附に「院司、御厩、別當、舍人、居飼、牛飼、車副」

枕草子、一に「とねりの弓どもを取りて驚かし笑ふを」

【持楯】モチダテ。各人の手に持つ楯。「置楯」の對。

（教科書鏃頭の挿圖參照）。

一　太平記、三、笠置軍の條に「持楯をつきよせ〳〵、木戸口の邊まで攻めたりける。」

【脇挾ませ】ワイバサませ。「ワキバサませ」のい音便。

脇の下にはさみ持たせること。

【屋形】ヤカタ。こゝは競の宿所。前の「館」參照。

【犇きけり】おしあひ、へしあひしてさわぎたつた。

「犇く」（ヒシメク）とは、おしあひへしあひして、さわぐこと。ごた〳〵すること。混雜してさわがしいこと。

宇治拾遺物語、五に「三町ばかりよりひしめきて、田樂・猿樂などひしめき、隨身・衞府のをのこどもなど出で入り、ひしめく。」

【彼奴め】カヤツめ。あいつめ。

「彼奴」は人をいやしめていふ語。かのやつ。きやつ。あやつ。あいつ。

大鏡、中に「彼奴が方のものいと多く死にける。」

【手延び】手段をほどこすべき機會をのべ過すこと。手おくれ。

【誑られぬるは】「だまされたことよ。」といふほどの意。

誑らる（タバカらる）とは、はかりあざむかれること。たぶらかされること。だまされること。

【宣へども】 おほせられるけれども。
「宣ふ」「ノタマふ」は、「ノリクマふ」の略。「言ふ」の敬語。おほせられる。
【勝れたる大力の剛の者】 スグれたるダイチカラのガウのモノ。なみにすぐれた大力のあるつよいもの。
「大力」は「ダイリキ」とよんでもよいが、戰記物語では、多く「ダイチカラ」とよませてゐる。非常に強い力。又、その力あるもの。怪力。強力。
「剛の者」は、すぐれて剛(ツヨ)いもの。勇猛な武士。
保元物語、白河殿夜討の條に「又なき剛の者」
【矢纒早の手利】 ヤツギバヤのテキヽ。矢つぎの早い名人。
「矢纒」とは、矢を弓の弦につぎかへること。前の矢を放つた後に、次の矢をつがふこと。
「手利」(テキヽ)とは、うでまへのすぐれてゐること。わざのたくみなこと。又、その人。
保元物語、新院御所各門々固の條に「大力の強弓、矢纒早の手利なり。」
【射殺されなんず】「射殺されなんとす」の約。
【音なせそ】 音をさせるな、音を立てるな、の義で、「返答するな」といふほどの意。
【競が沙汰】 キホフがサタ。競についてのさま〳〵のうはさ。
「沙汰」は、こゝでは、うはさ、評判、などの意。
萬葉集、卷十一に「人まもりあしがきごしにわぎもこをあひ見しからに事ぞさた多き」
【いかにもして云々】「どうにかして、この競の瀧口をお召しになつたらおよろしかつたのに、とんだ手ぬかりでございましたね。」といふほどの意。
【無下に】 ムゲに。一向に、一概に、さうむやみには、などの意。
【その者捕へ搦められはせじ】 その競の瀧口は、つかまへられて、しばられはしまい。
「搦む」とは、捕へてしばること。からめとること。捕縛すること。
伊勢物語に「盜人なりければ、國の守に搦められけり。」

【言ひも果てぬに】 言ひも終りたまはぬうちに。
【つと】 急に。何よりも先に。突然。つつと。
枕草子、六に「扇をつとさしかくしたまへり。」
宇津保物語、國讓、下に「宮きこしめして、女君をつとかきよせてのたまふやう」
【「さればこそ」とぞ言ひける】「それ、競が來たらう。それだからこそ、わしは、競がきつと今こゝへやつて來ると言つたのだ。」と仰せられた。
【參らせ候はん】 六波羅の南鐐をお手もとへさしあげませう。
【斜ならず悅び給ひて】 たいそうお悅びなされて。
「斜(ナヽメ、ナノメ)ならず」は、一方ならず、大方ならず、甚だしく、たいそう。
平治物語、惡源太誅せらるゝ條に「勢のつくこと斜ならず。」
【尾髮】 ヲガミ。馬の尻尾。
源平盛衰記、三十四、東國兵馬汰の條に「馬…太く逞しきが、尾髮飽くまで足つたり。」
【生捕】 イケドリ。生けながらとらへること。又、そのもの。生擒。生虜。捕虜。
萬葉集、卷十六に「から國の　虎とふ神を　いけどりに　八つ取り持ちき」
古今著聞集、二十に「三疋を殺し、三疋をいけどりにしてけり。」
【鋸】 ノコギリ。略して「ノコ」ともいふ。木材などをひき切る具。鍊鐵を薄く扁く長方形に作り、緣に細い齒をたがひちがひに刻み作つて木の柄をつけたもの。のぼきり。のこずり。のふぎり。
徒然草に「鋸のくずを車につみて」

8 挿圖

競の瀧口

瀧口渡邊競が平宗盛から贈られた名馬「南鐐に打乘つて、折柄源三位入道頼政が滯留中である三井寺の玄關先へ駈けつけたところ。」
その服裝は、本文に見えてゐるとほり。(教科書本文、第九十六頁十一行より九十七頁六行まで參照。)

一六　長柄堤の訣別

1　解題

坪内逍遙が曾て主張した性格劇の脚本として、自ら提供した「桐一葉」の大詰の一場面である。片桐市正且元が大阪城から退身して、居城茨木に歸らうと長柄堤にさしかゝり、そこで木村長門守重成を待ちながら太閤の盛時を忍んでゐたが、やがて馬を走らして來る重成と會し、大阪籠城の計を議し、豐臣家の衰運を嘆きつゝ訣別するといふ筋である。

「桐一葉」は大阪落城前の正史上の事實に基き、片桐且元の苦衷、淀君の嫉妬、大野父子の偏執を經とし、蜻蛉といふ可憐な乙女の病死、銀之丞といふ痴少年の失戀等を緯として、七幕十五場に脚色して織出した劇。人物の性格をあらはさうとつとめた點で、我が國脚本界に一新紀元を作つたものである。明治二十九年二月、春陽堂發行。今「現代戯曲全集第一卷」(逍遙氏作戯曲を集めた卷)に收めてあるものを見ると、最初の作の詞章に多少の修正が加へてある。

2　作者

坪内逍遙

坪内逍遙　ツボウチ　セウエウ。名は雄藏。文學博士。英文學者。早稲田大學名譽教授。安政六年、美濃國加茂郡太田村の尾張侯代官町に生れた。明治十六年、東京大學政治科卒業。夙に東京專門學校(今の早稲田大學の前身)に教鞭を執り、同校文科の柱石として多くの秀才をその門から出した。又一方、明治時代の小說壇・劇壇の指導者として、評論に、創作に、實際運動に、その寄與した功績は顯著であつて、洵に文藝界の一大恩人であるといはれてゐる。殊に劇の改革運動に於ては、或は純正な科白劇と相並んで振事を主とする舞踊劇の成立すべきを主張し、或は新に役者の教育や脚本の試演に從事する計畫を立て、或は劇をして更に民衆的なものたらしむる必要を唱へ、或は見物人の玩弄からも役者の虛榮からも遠ざかつた純一な藝術の創作を樂しむといふ境地に劇を置かうとすることを試みたりした。最近に於ける劇の民衆化運動ともいふべきページェントの

企畫及び劇の家庭引入れを企てた兒童劇の草案は、逍遙が常に劇運動の最前線に奮鬪してゐることを窺ふべき有力な材料である。特に兒童劇に關する事業は、ページェントと比べて一層有意義の結果を見せることになると思ふ。(岩城準太郎の說による)

著作は、小說神髓・當世書生氣質・桐一葉・牧の方・新曲浦島・沙翁傑作全集等數多ある。

昭和十年二月二十八日萬人痛惜のうちに熱海の雙柿舍で白玉樓中の人となつた。年七十七。

3　編纂の用意

前課「競の瀧口」は、競の忠勇なる行動を敍事體にものしたものであり、本課「長柄堤の訣別」は、片桐市正且元の苦衷を脚本體にものしたものである。わけても本課は劇壇の大家坪內逍遙が快心の作なる「桐一葉」中の最後の一幕で、その取材といひ、措辭といひ、間然するところなき佳篇として定評のあるものである。よろしくこれを心讀せしめて劇文學の一臠を心ゆくばかり玩味せしめ、かねて且元の苦衷に一掬の涙をそゝがしめると共に、重成の武者振に心からなる讃美の情を寄せしむべきである。

4　要旨

「複雜な、不可抗の因緣によつて、漸々に招致された豐臣家の衰運及び滅亡といふ事」それがそも〳〵「桐一葉」劇の主題であるとは作者自らの言である。その衰運の一犧牲となり、「死ぬことも生きることも出來ぬ境遇上の悲劇」の主人公となつてしまつたのが片桐且元である。その且元の性格と苦衷とがよく表現されてゐるところが、この課の中心の興味である。そして「その且元を取り卷いてゐる周圍、その背景、もしくは大阪城の全體の空氣とか、氣分とか、調子とかいふもの」を描かうとした作意を、この場面に於ける兩人物の對話によつて察し得ることもおもしろい。最初の地の文、卽ち淨瑠璃の文句の抒情的敍景の敍事と、且元の獨白、並にその長門守との對話を進めるところには、又特に脚本としての妙味がある。要するに、歷史上の旣得知識と聯關を取つて、以上のやうな見方によつて本課を味讀させたいものである。

5　取扱上の注意

▲旣に淀君始め大野その他の一派の人々から、德川方に內應するものと誤解されてゐる且元は、自己の辯疏も、木村重成の取りなしも功を奏せず、遂に居城茨木に身を退くことになる。そこで大野方では家來たちをしてその途中をこの長柄堤に要擊して、且元を討取らしめようと手筈を定める。

▲この課に入るには先づ右の話をする必要があらう。原文に、この場面をば、

本舞臺一面道具幕、長良堤の一部の心にて、深霧を透して、おぼろに大阪城の天守見ゆる體。夜明方。幕があくと大野の家來白倉某、鐵砲を携へたる雜兵大勢をつれ、立ちかゝり居る。トばた〳〵にて同じく大野の家來神崎某、向ふ揚幕より駈け出で來る。白倉すかして見る。

ととがきしてゐる。それから白に入つて、

神崎「覘の的は且元一人。三十餘挺一時に、彼を目あてに切つて放さば、討洩らすことはよもやあるまい。」

白倉「者共必ずぬかるまいぞ。」

など言交はしてゐるうちに、却つて、片桐の家來本村某その他のために神崎は射殺される。

本村「かくあらんと兼ねての手配り、主君を守護する吾々が……。」

皆々「遺恨の太刀先うけて見よ。」

かういつて、片桐方が大野方を追拂つてしまふと、淨瑠璃になつて、卽ち本課の

晨鷄再び鳴いて……

となるのである。そこで前記の揚幕は切り落され、長良堤の體。敎科書八八頁の（中略）處は、すでにこゝに來てゐる且元と、その弟とが、互に身の上を案じての會話になつてゐる。が、且元は、やがて重成が來るといふ注進を得て、弟を先へ歸し、

後には何か一思案……

となる。

▲尙、成るべくなら、原文について、以上のやうな舞臺面の空氣を十分に呑み込ませて取扱つて戴きたいものであ

る。

▲最初の淨瑠璃文句を、逐語譯的に註釋するのは、可なり骨が折れることである。この處は、兩人物の訣別の場面の氣分を醸し出させることを主としてものされてゐると思はれるので、その目的に副ふやうに扱ふべきである。即ち、その洗煉された律語から來る調子に興味を持たせ、全體を繰返し讀ませて、その間に兩人物の出現の背景を髣髴せしめるやうにしたい。

▲「東西不和の導火となり云々」（一〇二頁二行）この千姫を疏んじたとて、家康がその理由を且元に詰問した由が、前の幕にある。「不和の導火」とはこれをいふのであらう。

▲「長門守には如何せし」（一〇三頁四行）お家の後事を長門守に託しおきたく、先刻ひそかに使を木村が邸へ走らせ」ておいたので、かくは待つてゐるのだ。

▲「御母公の御嫌疑」（一〇四頁三行）いつも且元を辯護する側に立つてゐるので、淀君の嫌疑を蒙つたのであらう。

6 設問

1　最初の地の文は、どういふ目的で書かれたであらうか。又、これは普通の散文と、どういふ點が違つてゐると思ふか。

2　會話に現れた且元の心中は、何と批評すべきか。

3　劇として、この一篇全體からは、どういふ感じを受けるか。

4　「ときんば」「まつた」などいふ言ふいひ方を、なぜ、したのであらうか。

5　地の文、會話を通じてうまい言ひ方をしたと思はれる語句をあげよ。

7 釋義

【晨雞再び鳴いて】二番雞が時を告げることをいふ。「晨雞」（シンケイ）は、晨を告げる雞。雞はよく時を知り、日出前二時間の頃より晨を告げる。最初の聲を一番雞といひ、やゝ時を隔てて鳴くを二番雞といふ。「再び鳴いて」は、即ち二番雞である。二番雞の聲を聞く頃は、最早夜明に近い。

陶淵明の詩に「晨雞不二肯鳴一。」

【殘月淡く】有明の月がうすくその影を空に印すること。

「殘月」（ザンゲツ）は、曉の頃までなほ空に殘つてゐる月。ありあけの月。のこんの月。

朗詠に「遊子猶行二於殘月一、函谷雞鳴。」

陳子昂の詩に「飛霜遙度レ海、殘月廻臨レ邊。」

【征馬】セイバ。旅に行く馬。

爾雅の釋言に「征行也。」

和漢朗詠集、源順の句に「南望、則有二關路之長一、行人征馬絡二繹於翠簾之下一。東顧、亦有二林塘之妙一、紫鴛白鷗遥二遙於朱檻之前一。」

【嘶いて】イナヽいて。「嘶く」とは、馬の聲高く鳴くこと。「いばゆ」といふに同じ。

和名抄卷十一に「嘶、訓二以波由一。俗云二伊奈奈久一。」

宇津保物語、俊蔭に「鞍置きたるあをき馬いできて、をどりあがきていなゝく。」

【行人】カウジン。道行く人。旅行する人。旅人。

朗詠に「巴猿三叫、曉霜二行人之裘一。」

謠曲、龍虎に「佛神の御加護やありけん、行人安穩に、布帆恙なく、渡唐仕りて候。」

【はや分れゆく横雲や】東方にたなびいてゐる横雲が、はや左右にわかれて、朝日の今しも出ようとするさまをいふ。

「横雲」（ヨコグモ）は、横にたなびく雲。棚雲。

新後撰集卷八、羈旅、源清兼の歌に「横雲は峯にわかれて逢坂の關路のとりの聲ぞあけぬる。」

【殘んの星】「殘りの星」の撥音便。曉の空に消え殘つてゐる星。ありあけの星。殘星。

趙嘏の詩に「殘星幾點雁横レ塞。」

太平記、一、後醍醐天皇御治世の條に「朝陽犯さざれども、殘星光を奪はるゝ習なれば」

【鐘が消しゆく】曉の空に淡くその影を印してゐる星が、曉の鐘の音につれて、一つ〳〵消えゆくのを、鐘そのものが、星の光を消しゆくものと見て、かやうにいつたのである。

【いなのめ】「寢寐の目」の意で、「明く」の枕詞に用ひられる語。轉じて、直に天明の意に用ひられる、あけがた。しののめ。こゝはその意。

萬葉集、卷十に「あひ見らくあきたらねども、いなのめのあけゆきにけり船出せむ妹」

一説に「稲の目の明け……」とは、稲の實の熟するにて、赤らむと續けたのだともいふ。

【長柄堤】　ナガラヅツミ。長柄は大阪市東淀川區の地名。今の豐崎町の中に北長柄・南長柄の地名がある。「長柄堤」は卽ちこの地を流れる長柄川の堤である。

「長柄川」は、一名中津川。淀川の一支流。

蕪村の春風馬堤曲に、

やぶ入や浪花を出でて長柄川
春風や堤長うして家遠し

【秋闌けて】　アキタケて。秋がふけて。

「闌く」とは、たけなはになること。さかりを過ぎること。末になること。ふけること。

夫木抄、四に「春たけてきの川白く流るめり吉野の奥に花や散るらむ」

【一村蘆に風黑く】　ひとかたまりの蘆を、風のはげしく吹きまくること。

「一村蘆」（ヒトムラアシ）は「一叢蘆」と同義。蘆のむらがつて生えてゐる一區劃をいふ。

萬葉集、卷八に「我が宿の一村萩を思ふ子に見せずほとゝ散らしつるかも」

後撰集、戀二に「我が門の一むら薄刈り飼はむ君が手なれの駒もこぬかな」

「風黑く」は、漢語の「黑風」の意を取つていひ出でたものであらう。

「黑風」とは、塵灰などを捲きあげて薄暗い空とする旋風。

李賀の詩に「黑風吹レ山作二平地一。」

源平盛衰記、十八に「折節黑風俄かに吹きおこり、波濤粟を上げければ」

【有明凄き大川水】　大川の水が有明の頃物すごい音を立てつゝ流れゆくことをいふ。

「有明」（アリアケ）とは、陰曆十六日以後に、殘月が天に在つて夜の明けようとする頃をいふ。

萬葉集、卷十に「白露を玉になしたるなが月のありあけのつく夜見れどあかぬかも」

「大川」は、淀川、但しこゝは、その支流たる長柄川をいふ。

「淀川」は近畿地方を流れる大河。源を琵琶湖に發して瀨田川といふ。笠置山脈を横斷して峽谷をなし、宇治川となつて京都盆地の南に出で、巨椋池の北を迂回し、淀の南を過ぎ、南から木津川を、北から桂川を容れ、隘路を切つて大阪平野に出で、略。一直線に南西に流れる。かくて大阪市に入り、安治川・木津川に分流して大阪灣に注ぐ。古來屢。水害を被つたが、毛馬に閘門を設けて新淀川を分つてから、それを免るゝに至つた。淀以下は水運の便があつて、古來大いに京阪の往來を助け、河岸に都邑の發達を見たが、これらの都邑は今は殆ど廢れた。流程七十九粁。

【狹霧に咽び白けゆく云々】　霧にむせて白けてゆく千草の陰でかまびすしく鳴いてゐる蟲の音。

「狹霧」（サギリ）は、霧に同じ。「狹」は接頭語。

「咽ぶ」（ムセブ）とは、つかへとゞこほること。

續千載集、卷下に「吹きおろす嵐の山に春くれて井ぜきにむせぶ春の白浪」

「千草」（チグサ）は、いろ〳〵の草。多くの草。

後撰集、秋中に「ぬきとむる秋しなければ白露の千草における玉もかひなし」

【片桐市正且元】　カタギリイチノカミカツモト。近江の人。通稱助作、幼名は直盛、後、且元と改めた。

弱冠より豐臣秀吉に仕へ、天正十一年（一二四三）近江賤ヶ嶽の戰に功があつた。謂はゆる七本槍の一人である。十三年東市正（ヒガシノイチノカミ）となつた。市正は、市司（イチノツカサ）の長官。市司とは、古へ京都の市のことを掌る役所の名。東西に分れ、東を東市司、西を西市司といふ。同十八年小田原役に功を立て、攝津の茨木二萬五千石を領した。秀吉の薨後、秀頼の傅となつた。慶長十八年（一二七四）方廣寺の鐘銘の事によつて秀頼が家康と隙を生ずるや、全力をつくして斡旋救解に力めたが、家康は斷乎としてこれを納れなかつた。加之秀頼の生母淀君も亦暗愚で、事理を解しなかつたので、事は遂に成功しなかつた。元和元年（一二七五）大阪城が陷り、秀頼が自滅するに及んで、自ら劍に伏して死んだ。一說には、憂憤病を發して死んだともいふ。年六十二。

【居城】　キョジャウ。大名の居住してゐる城。

【茨木】　イバラギ。今の茨木町。大阪府（攝津國）三島郡の首都。大阪の北約四里。東海道線の鐵道車驛。城は福島氏の始めて築くところ。永祿中、中川清秀がこゝにゐた。後、慶長十八年（一二七三）片桐且元がこゝに封ぜられたが、元和元年（一二七五）大和國龍田に移封せらるゝに及んで、遂に廢城となつた。

【郎黨】　ラウダウ。又「郎等」とも書く。家の子。家來。

朝野群載、二十二に「郎等之中、撰二定清廉勇士一。」

十訓抄に「その間に近江にかくしおきたる郎等四五十人ばか

り出で來りて、件の犯人を相具して、ゐて去りぬ。」

【丑の刻】 ウシのコク。昔時の時刻の名。今の午前二時頃。昔時は晝夜の長短に關せず、晝夜を各〻六時とし、今の午後十二時卽ち夜半を子とし、丑、寅を經、卯に至つて夜が明け、辰、巳を經て午を日中とし、未、申を經て酉を日沒とし、戌、亥を經て再び子に還るのである。

【邸】 テイ。やしき。第宅。邸宅。

【大阪城】 オホサカジャウ。攝津國大阪に在つた城。我が國無雙の名城であつたといふ。

この地はもと石山といつた。蓮如は別院をこゝに建て、孫の證如は山科の本願寺をこゝに移したが、織田信長と事を構へ、遂に陷落せしめられた。尋いで天正十一年（一二四三）豐臣秀吉はこの地を收めて城を築き、十三年に竣功した。慶長四年（一二五九）秀頼はこの城に移り、大いに增築の功を起した。豐臣氏滅亡の後、家康はこれを松平忠明に與へたが、尋いで內藤信正を城代として關西のおさへとした。家光の時、又工を起して大成したが、後火災にかゝつた。尋いで天保年間大修理を加へたが、明治元年火を發して、殿館共に殆ど灰燼に歸した。後、城中に大阪鎭臺を置いた。現に第四師團の司令部が置かれてゐる。昭和六年、その天守閣を再興した。

【中略】 左にこれを補つておく。

と、よき頃に道具幕を切つて落すと、長柄堤の體。本舞臺、道具、背景よろしく。こゝに平舞臺上手よき處に市正床几に腰をかけ、そのうしろに乘馬に馬丁二人附添ひ控へ居り、下手よき所に主膳正（且元の弟）つくばひ、その下手うしろに家來大勢ひかへてゐる。

市「討手來らざれば自裁も叶はず、人々の諫に從ひ、茨木へ落去とは決せしものの、お家の後事を長門守に託しおきたく、先刻ひそかに三右衞門を木村が邸へ走らせたり。われはこれにて返事を待たん。御身はわれに代り、手勢を差配し、一足先へまゐるべし。」主「仰せではござりますれど、油斷ならざる折柄、只御一人この處に御座あらんは心もとなし。」市「いや、それはいらぬ遠慮。われらが警護は、かねて清藏らに申し含めおいたれば、氣づかひなし……」（と向ふを見て）「おゝあの人影は」

淨「詞のうちにはるかに足音

と、この時今村三右衞門、揚幕より急ぎ足にて出で來り、すぐ本舞臺へ來て

今「はつ、申し上げまする。長門さまには、おつつけこれへ」

市「大儀々々。然らば弟、御身は先、參られよ。そちも共に」

と今村へこなし。これにて「主膳正は一同へこなしあつて、市正に會釋し、皆々を引連れ、二重に上りて上手へ入る。」

淨「顏見合はせて是非なくも、主膳を先きに一同は、心殘して行き過ぐる。

【一思案】 ヒトシアン。一度思案すること。且元が、豐臣氏の行く末、この場合に於けるわが態度、おつつけこゝへ來る木村長門守との打合などについて、とつおいつ考へたことをいふ。

「思案」は「思按」とも書く。考をめぐらすこと。思考。思慮。考慮。

陸子衡の文に「思二按之一愈深。」

保元物語、爲朝鬼が島へ渡る條に「最期の矢を手淺く射たらんも無念なりと思案し給ふ。」

【寂然】 セキゼン。又、ジャクゼン。ジャクネン。しづかなさま。さびしいさま。

易經の繫辭に「寂然不レ動、感而遂通二天下之故一。」

【塒】 ネグラ。「寐座」の義。鳥の寢るところ。とや。

拾遺集、雜春に「花の色はあかず見るとも鶯のねぐらの枝に手をな觸れそも」

【囀る】 サヘヅる。鳥が聲をつゞけて鳴くこと。聲なめらかに鳴くこと。

古今集、春上に「もゝちどり囀る春はものごとにあらたまれどもわれぞふりゆく」

【川霧】 カハギリ。川にたつ霧。

拾遺集、冬に「夕されば佐保の川原の川霧に友まどはせる千鳥鳴くなり」

【遠樹模糊として幹を分ち】 遠くにある樹木がうすぼんやりと見えだして、幹と幹とのけぢめがわかるやうになつたこと。

「模糊」（モコ）は分明ならぬさま。ぼんやりとしてゐるさま。

白樂天の詩に「平明山雪白模糊。」

【ほの見え渡る賤が屋】 ほのかに見わたされる貧しい民のすみか。

「ほの」は、ほのかに。かすかに。ちらと。うす〳〵。

源氏物語、夕顏の卷に「ほの鳴く女房など」

「賤が屋」（シヅがヤ）は、いやしいものの住む家。貧家。

堀河百首、夏に「いなしきのとこぞとはげに言ひながら蚊遣

火たてぬ賤が屋そなき」

【雞】　クタカケ。「にはとり」の古名。

和訓栞に「くたかけ、東國には家をくたといへり。かけは雞をいふなり。一說に雞を梵に矩々吒駄設羅といふを略してくたといひ、梵倭兼稱するにやといへり。一說に百濟雞の義、今の唐丸なるべしといへり。或は聲を稱して管掛けといふなり。」

伊勢物語に「夜も明けばきつにはめなむくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」

夫木抄、二十七に「くたかけはいづれの里をうかれ來てまだ夜深きに八聲鳴くらむ」

【入る方の月すさまじき柳陰】　今しも西山に落ちようとする月が、柳の陰に隱見して、あたりの光景のいと荒凉たるさまをいふ。

「入る方」は、こゝでは、月のはひる方向。

源氏物語、末摘花の卷に「もろともに大内山は出でつれど入る方見せぬいさよひの月」

【枯葉枝疎らにして風颯々】　枯葉といひ、枝疎らといふは、皆上句の柳についていふ。

「颯々」は、風の吹くさま。こゝは風が枝疎らなる柳の枯葉を吹くさまをいふ。

陶淵明の歸去來辭に「風颯々而吹レ衣。」

【見る目も昏し】　あたりのけしきの、うすぼんやりとして、定かに見わけがたいことをいふ。

【遠方】　ヲチカタ。「彼方」とも書く。をちの方向。あちらの方。又、そのところ。をち。をんぱう。

皇極紀に「をちかたのあはぬのきゞしとよもさずわれはねしかど人ぞとよもす」

【朧々と】　オボロ〳〵と。うすぼんやりと。おほろげに。

朦朧と。

言纜集に「見渡せば朧々とたちくるも消ゆるもわかぬ薄霧の空」

【名におほ阪】　「名におふ」の「おふ」を大阪にいひかけたのである。「名におふ」とは、

(一)名と實と相應してあること。さすがにその名があるほどあるといふ意。(二)名高いこと。こゝは(二)の意。

【四衢八街】　シクハチガイ。大阪市街の四通八達してゐることを大阪城なる豐臣方の四苦八苦してゐることにかけていふ。

「衢」は四達の道。「街」も亦同じ。

沈約の詩に「四衢道難レ闢、八正扇猶掩。」

三輔舊事に「長安城中八街九陌。」

【悄然】　セウゼン。しよんぼりとして、さびしさうなさま。しを〳〵。悄乎・悄々・悄切、皆同じ。

朗詠に「夕殿螢飛思悄然。」

太平記、三十七、畠山入道道誓謀叛の條に「瓊戸重ねて閉ぢて、悄然として聲無し。」

詩經の邶風に「憂心悄々。」

【お天守】　大阪城の天守閣を敬つていふ。

「天守」は天守閣の略。城の本丸に殊に高く設け構へた物見櫓。二層乃至五層・七層より成る。大抵本丸の中央に造る。「天守」は「天主」の借字で、帝釋天の義。帝釋天は須彌三十三天の主で、その絶頂に居る。天守閣は蓋しこれに象つたものである。一說に天主はデウスの音轉だともいひ、又は閣を創始したものの名だともいふ。その起因については、永祿（一二一八―一二三〇）の初年尾張の樂田城說、天正三年（一二三五）松永久秀の信貴城說、同四年織田信長の安土城說など諸說があるが、天文十九年（一二一〇）に成つた三川分類記に既に天守の字が見えてゐるから、前諸說は皆誤つてゐると見ねばならぬ。

【南山不落と祝はせられ】　「この大阪城は南山のかけも崩れもせぬやうに、いつ〳〵までも榮えて、敵に陷落せしめられるやうなことは絕對にない堅城であると祝はせられて」といふほどの意。

「南山」は、支那陝西（センセイ）省の南部にある山脈。もとの關中・漢中兩道の間（周の故都であつた豐鎬の南）に横たはり、延長約二〇〇粁、西は甘肅省、東は河南省に及び、謂はゆる秦嶺山脈を形成し、渭水と漢水との分水嶺をなしてゐる。この山は書經の禹貢にも已にその名が見え、爾後歷代の史書に現はれ、山名も周南山・終南山・秦山・太乙山など種々の稱呼がある。唐の道宣律師はこの山で律宗を弘布した。

詩經の小雅天保篇に「如二南山之壽一、不レ騫不レ崩。」

【故殿下】　コデンカ。豐臣秀吉をさしていふ。

「殿下」は、

(一)昔時國王又は太子・親王・諸王等皇族の御名の下につける敬語。中世よりは攝政・關白・將軍などにもいふ。

酉陽雜俎に「秦漢以來、於天子言陛下、皇太子言殿下、將軍言麾下、使者言節下、嚴下二千石長吏言閣下、父母言膝下、通類相呼言足下。」

(二)皇太子・皇太子妃・皇太孫・皇太孫妃・親王・親王妃・王・王妃・女王の方々を呼び奉るに用ひる稱呼。

【薨(カク)れさせ給ひて後】 薨去された後。

「薨」は三位以上の高官の死去にいふ語。

天皇・皇后　には　崩。
三位以上　には　薨。
五位以上　には　卒。
その他　は　歿。

【礎ゆらぎ】 大阪城のどだいがゆれうごくこと。豐臣方の勢力の振はぬことにかけていふ。

「礎」(イシズエ)は「石据ゑ」の義。柱などの下に据ゑる土臺石。つめいし。つみいし。柱石。

「ゆらぐ」とは、ゆら〳〵と動くこと。ゆらめくこと。

萬葉集、卷二十に「はつ春の初ねの今日の玉はゝき手に執るからにゆらぐ玉の緒」

【諸大名】 ショダイミャウ。もろ〳〵の大名。

「大名」とは、(一)平安朝の末、多くの名田を有してゐたものの稱。(二)鎌倉時代に、將軍の家臣で、領地の大きな守護・地頭等に與へた稱號。(三)江戸時代に知行一萬石以上の武家の稱。

【加藤肥州】 カトウヒシウ。肥後守加藤清正。豐臣・德川兩時代の武將。尾張の人。小字は夜叉若。後、虎之助。清忠の子。秀吉に仕へて屢〻戰功を樹て、賤が嶽の役、七本槍中の隨一に推された。文祿征韓の役、小西行長と共に先鋒となり、二王子を擒にして鬼上官の勇名を馳せた。慶長征韓の役、再び先鋒となつて出征し、蔚山(ウルサン)を死守して武名を輝かした。秀吉の薨後、石田三成と相和せず、肥後に在つて暗に家康を援けた。關ヶ原の役後、肥後全國に封ぜられた。人となり忠亮、よく幼主秀頼を庇護して臣節を全うしたが、慶長十六年(一二一七

一)六月二日病んで薨じた。年五十。

熊本にある縣社加藤神社は清正を祀つた社である。明治四十二年三月、從三位を追贈せられた。

【逝去】 セイキ。身分ある人の死去にいふ語。

「逝」は正韻に「亡也」とあり。故に死亡することを長逝とも、遠逝ともいふ。

俚言集覽に「逝去。(古今著聞集十一)繪師大輔法眼賢慶が引子に某とかやいふ法師ありけり。賢慶逝去の後云々とあり。今は貴人ならでは逝去といはず、この頃は平人にも稱す。」

明月記、寛喜三年三月三日の條に「今日聞貞曉法師(鎌倉右大將息年四十六)逝去。」

【思慮ある者】 かんがへのある者。物事にふかく考慮をめぐらす人。

「思慮」(シリ)は、種々に考へ思ふこと。おもんぱかり。思考。

史記の公孫弘傳に「君其省思慮、一二精神、輔以醫藥。」

【堅節】 ケンセツ。堅固な節操。堅いみさを。

【義勇を存する者】 義勇の何たるかを心得てゐるもの。

「義勇」(ギユウ)とは、正義にもとづいた勇氣。君國のために一身を捧げ、進んで事をすること。

漢書の陳湯傳に「策慮幅儁、義勇奮發。」

【才略乏しく】 才略の少ないこと。才略の足らぬこと。

「才略」(サイリャク)とは、才智があつて、巧に計略を立てること。又、才智と謀略。

後漢書の鄭太傳に「太少有才略、陰交結豪傑、名聞山東。」

晉書の明帝紀に「性至孝、有文武才略。」

【阿附】 アフ。おもねりつくこと。事の善惡理非に關せず、他のいふところに同意して、その歡心を買ふこと。

後漢書の李膺傳に「南陽樊陵求爲門徒、膺謝不受。陵後以阿附官官、爲節志者所羞。」

【黨同】 タウドウ。己と心の同じきものに味方すること。わが黨類と組合つて、反對者を排斥すること。偏黨。

後漢書の黨錮傳に「自武帝以後、有石渠分爭之論、黨同伐異之說。守文之徒、盛於時矣。」

【相鬩げば】 互に相爭ふので。

「鬩ぐ」(セメぐ)は、音ゲキ。恨み爭ふこと。怒り爭ふこと。

詩經の小雅に「兄弟鬩于牆、外禦其務(アナドリ)。」

【大政所の御方】　オホマンドコロのオンカタ。秀頼の嫡母たる北政所卽ち高臺院夫人をさしたのであらう。高臺院夫人、名は於禰々（オネ、）。尾張國津島の杉原助左衞門の女。淺野長政とは從兄弟。秀吉に嫁して內助の功が多かつた。秀吉が關白となるに及んで、准三宮從一位に敍せられた。秀吉が淀君を妾とするも妬意を挾まず、終始秀吉の好內助者であつた。秀吉の薨後、薙髮して高臺院湖月尼と稱した。德川家康はこれを優遇し、爲に高臺寺を建て、養老料を與へた。寬政元年（一二八四）薨。年七十六。夫人は大阪役の當時別に何等の相談にも與らず、又自ら進んで事をなさず、豐臣家の滅亡を見ること對岸の火を視るが如くであつたといふ。

「大政所」は攝政又は關白などの母の稱。始めは大北政所といつたが、後には略して大政所といふやうになつた。攝政・關白の妻室を北政所といふに對し、その母を尊んでかく稱する。後には他家でも宣旨を蒙つて大政所と稱した。

增鏡に「近衞大北政所（關白近衞家基の北政所）などやむごとなきかざり」

康富記に「應永八年六月七日、今日祇園祭也。大政所（足利義滿妻室）參詣、拜二神樂一云々。」

【當家】　タウケ。この家。こゝは、豐臣家。

【餘所（ヨソ）に見そなはし】　よそごとのやうに見なされて。豐臣家の休戚に些の關心をも有せられなかつたことをいふ。

「見そなはす」は「見る」の敬語。見たまふ。御覽ずる。

紀貫之の古今集の序に「今も見そなはし、後の世にも傳はれとて」

【浮世離れし御有樣】　うき世の事をうちすてて、豐臣家の興亡休戚を一向にかへりみたまはぬ御有樣。

「浮世」は、浮きて定めなき世。世の中。

風雅集、雜下に「身こそあらめ心を塵の外になして浮世の色に染まじとぞおもふ」

【脣齒已に亡ぶ】　脣亡びて齒寒しといふ意の語。賴むべき所を失つたたとへにいふ。

左傳の僖公五年に「晉復假二道於楚一、以伐レ虢。宮之奇諫曰、虢處之表也、虢亡、虞必從レ之。諺所レ謂輔車相依、脣亡齒寒者、其處虢謂也。」

戰國策に「趙於二齊楚一也、隱蔽也。猶二齒之有一レ脣也。脣亡則齒寒。今日亡レ趙、則明日及二齊楚一。」

【金城湯池】　キンジャウタウチ。堅固な城池。城は堅きこと金の如くにして、破り得ず、池の水は熱すること湯の如くにして、近づき得ずとの義。

史記の始皇本紀贊に「關中之固金城千里、子孫帝王萬世之業也。」

漢書の蒯通傳に「固守、皆爲二金城湯池一、不レ可レ攻也。」

【須彌より重き御遺命】　須彌山よりも重いほどの故殿下（豐太閤）の御遺命。

「須彌」（シュミ）は須彌山。梵語 Sumeru. 妙高山の義。世界の中心に聳えてゐる最高の山だといふ。大海の中に在つて金輪の上に據り、日月はこれによつて回り、諸天はこれによつて居る。高さは八萬四千由旬。縱橫も亦同じ。中央に須彌海があつて、その幅は四萬由旬、長さは十六萬由旬あるといふ。

もと古代印度の天文說にいひ、後、佛典中に引用して佛說とした。

華嚴經に「譬如日出二閻浮提一、充二照一切須彌山等一。」

謠曲、楊貴妃に「天上の五衰より、須彌の四州のさまざまに」

國姓爺合戰、卷四に「その響、須彌も崩るゝばかりなり。」

「御遺命」は（ゴユヰメイ）とよむ。豐太閤は今はのとき、且元に對して幼君（秀頼）を輔佐すべき旨遺言した。こゝはその遺言をいふ。

皇室典範第二十七條に「先帝遺命ヲ以テ大傅ヲ任セサリシトキ」

【ゆめ聊かも忘れざれど】　決してゆめにも忘れはしないけれど。

「ゆめいさゝかも」は、ゆめにも。つゆほども。ちつとも。

日本武尊吾妻鑑、卷四に「君をかくまひ奉るとは、ゆめ聊か知らせ申さず。」

【御運の末か云々】　豐臣の御運が最早傾いて、末となつたのであらうか、さて〳〵なさけないことかな。

【いすかの嘴とくひちがひ】　物事のくひちがつて意の如くならぬこと。鶍の嘴のくひちがつてよく合はぬことに喩へたのである。

吾吟我集に「わが中は離れもやらず合ひもせずいすかのはしの音をのみぞなく」

冥途の飛脚に「とやせんかくやしやうげ鳥、いすかの嘴とく

ひちがふ、心を知らぬぞ是非もなき。」

「いすか」（鶍）は燕雀類中すゞめ科に屬する雀大の鳥。體色は雄は紅、雌は黄綠、嘴は交叉して、巧に松實を剝いで食する。故に又交啄とも書く。歐羅巴又は亞細亞の北方などに產する。

【兩家を繫ぐ絆】　豐臣・德川兩家の關係を深くするための方便。

【絆】はキヅナとよむ。(一)馬・犬・鷹などをつなぎ止めるに用ひる綱。(二)轉じて、離れがたきほだし。絶ち難き恩愛。こゝは(一)の意。

增韻に「繫レ足曰レ絆、絡レ首曰レ羈。」

【千姬君】　センヒメギミ。德川秀忠の長女。母は崇源夫人。慶長二年（一二五七）四月生。豐臣秀頼に嫁した。大阪陷落の後元和三年（一二七七）九月姬路城主本多忠政の長子忠刻に再嫁したが、寛永三年（一二八六）忠刻の卒去後寡婦生活をなすこと四十年、寛文六年（一三二六）卒した。年七十。世に竹橋御殿といふ。小石川の傳通院に葬り、天壽院殿と號した。

【東西不和の導火となり】　こゝは、豐臣・德川兩家のよしみをつながんためにと思つて、千姬君を德川家から迎へて秀頼の夫人としたことが、却つて、東（關東の德川）西（關西の豐臣）の間柄をわるくする動機となつたことをいふ。

「導火」（ミチビ）は導火線の略。繩狀の線に火藥をこめたもの。銃砲に火を通ずる料とする。くちび。ひなは。

【毘盧舍那佛】　ビルシャナブツ。梵語 Vairochana.「舍」の字は一に「遮」に作る。光明遍照の義。眞如法身又は大日如來の稱。偏一切處と意譯する。卽ち煩惱の體淨く、衆德悉く備り、身土相稱ひ、一切處に偏きこと日光の照らさざる處なきが如き意。こゝは方廣寺の大佛を指す。

「方廣寺」は天台宗の名刹。京都市東山區大和大路七條にある。天正十四年（一二四六）、奈良東大寺の大佛殿に擬して豐臣秀吉の創建したもの。京都の大佛殿として知られてゐる。大佛の像は始めは木像で、規模宏大、奈良の大佛にまさつてゐたといはれるが、慶長元年（一二五六）地震のために破壞した。秀頼は家康の勸めによつてこれを再建したが、火災に罹つて殿堂が燒失した。よつて更に工事を興し、同十七年に至つて、殿堂も佛像も共に完成した。この時梵鐘を鑄たが、その銘中にある「國家安康」の語が大阪冬の陣の口實となつたことは有名な話である。寛政十年（一二四五八）の火災以後、舊規に復するに至らない。今僅かにその遺址が存してゐるだけである。

寺門の傍に秀吉征韓役の土產たる耳塚がある。南隣は豐國神社。「方廣寺の大佛」は釋迦如來の像。はじめ天正十四年（一二四六）豐臣秀吉の經營したものは木造佛で、金銀五采を以て飾つたが、慶長の地震に崩壞した。ついで秀頼は家康の勸によつて高さ六丈三尺の銅佛を鑄造した。德川家光の時破壞。後銅像は鑄潰して鑄貨の料とした。現在の木像は天保十四年（一五〇三）尾張の人が寄附した半身の木像である。

【大慈大悲】　ダイジダイヒ。佛敎の語。廣大無邊なる慈悲。よく他に樂を與へるを「慈」といひ、他の苦を拔くを「悲」といふ。

法華經に「大慈大悲常无懈倦。」

觀無量壽經に「佛心者大慈悲是。」

【御家とこしへに康かれと祝ひし文字が云々】　はじめ秀吉は京都の東山に丈六の盧舍那佛を造つたが、慶長元年の地震に崩壞したことは前にのべたとほりである。秀頼は秀吉の遺志をついで、同十五年（一二七〇）二月工を起し、片桐且元を奉行とし、家康の指圖に任せ、京都所司代板倉勝重をしてその工事を督せしめ、十七年に至つて竣工した。十九年三月又梵鐘を鑄造し、南禪寺の僧清韓に命じてその銘を撰せしめた。清韓はその銘文に「君臣豐樂、國家安康」の句を入れた。そのことをいふ。

【降つて湧いたる難題】　天より降り、地より湧いたやうに突如として起つた難題。

秀頼は慶長十九年（一二七四）八月三日を期して大佛開眼及び大佛殿供養の儀を修しようとし、家康の同意を得て、準備が既に出來上つた。然るに期に先だつこと十日、家康はその鐘銘に「君臣豐樂、國家安康」の句があるのを難じて、おのれを呪詛するのだといひ、上梁榜も舊例

に違ふからといつてこれを排し、七月二十六日駿府より急使を京都に派遣し、勝重をして兩供養の停止を且元に傳へしめた。二十九日命令が大阪に達し、上下周章紛擾を極めた。且元はこれを以て自己の不文に因るものとし、責を負うて辯明したが、家康は敢て聽かず、更に五山の僧徒に命じて審議させた。然るに妙心寺の海山を除く外の僧徒は皆清韓を妬むの餘り、家康に阿附してその解釋に雷同した。そこで且元は清韓を伴なひ、駿府に到つて辯疏しようとした折柄、清韓は獄に投ぜられた。且元は詰責に逢つて辯疏大いに力め、遂に一策を案じ、淀君を東下せしめて、東西の平和を圖らしめることを約束して、西に歸つた。時に淀君も亦侍女を遣はして家康に謝せしめた。家康はその使を優遇したから、使は喜びかへつて、家康の他意なきを淀君に報ずると共に、且元の祕計を悟らず、これを以て君を賣るものだと認ひた。且元はこの使に後れてかへつたが、大阪の城中みな且元を疑ひ、關東のために計るものとなし、遂にこれを殺さうとするに至つた。因つて且元はその邑茨木に走つた。

「難題」とは、(一)作るに困難な詩文の題。(二)難解の問題。(三)困難の事件。容易に處理し難き事がら。(四)成し難き物事を提出して强ひてこれを成さんことを望むこと。難きを强ひること。こゝは(三)の意。

源平盛衰記三十二に「この事誠に難題にて、公卿僉議あり。」

【前門の虎】 纔に一禍をのがれて、又一禍に逢ふをいふ。故事瓊林に「禍去禍又至、曰二前門拒レ虎、後門進レ狼一」註に「漢和帝年方十四、乃能收二竇氏一、足レ繼二孝昭之烈一。惜其與二宦官鄭衆一謀レ之、以啓二中常侍亡レ漢之階一。胡致堂曰、竇氏雖レ除、而寺人之權、從レ茲盛矣。諺云、前門拒レ虎、後門進レ狼、此之謂與。」

【後に不慮の豺狼あり】 後の方に、おもひがけずも、豺狼がおしかけて來てゐる。思ひがけない禍が、あとからおしよせて來てゐる。前の「前門の虎」參照。

「不慮」(フリヨ)は、思ひがけぬこと。心外。不意。

源平盛衰記、十四、南都山門牒狀の條に「忽爲レ免二不慮之難一、俄所レ令二入寺一給上也。」

「豺狼」(サイラウ)は、やまいぬとおほかみ。共に猛獸で、害惡を逞しうするから、禍害にたとへたのである。

戰國策の秦に「辟如レ使二豺狼一追二群羊一也。」

【かゝる仕儀】 このやうな次第。かやうなありゆき。

「仕儀」(シギ)は、「仕義」とも書く。事のありさま。次第がら。なりゆき。

謠曲、自然居士に「その時の仕義によつて參らせ候へ。」

膝栗毛、五の下に「思ひがけなくこのしぎに及び、さすがの彌次郎しよげかへりてゐる。」

【怺へず】 コラヘず。こらへかねて。がまんしきれないで。

【彼方】 アナタ。あちらの方。こゝは大阪城の方を指す。

【平伏】 ヘイフク。兩手をつき、頭を地につけて禮拜すること。

太平記、四、吳越の軍の條に「膝行頓首して太宰嚭が前に平伏す。」

【不肖】 フセウ。自己の謙稱。その語義に凡そ左の三說がある。

(一)善に似ざる義。(二)父に似ざる義。(三)天に肖ざる義。いづれも不才庸愚の意。

中庸に「賢者過レ之、不肖者不レ及也。」

史記の五帝記に「堯知二子丹朱之不肖一、不足レ授二天下一。」

【愚昧】 グマイ。おろかにして事理にくらいこと。暗愚。

源平盛衰記、四十、三位入道熊野詣の條に「われは愚昧凡人の臣」

【先見】 センケン。事のあらはれないさきにその眞相を見ぬくこと。さきを見とほすこと。又、その見識。

長編に「溫公後曰、獻可之先見、范純仁之勇決、予所レ不レ及也。」

【姑息】 コソク。目前の安きをぬすむこと。一時のがれ。一寸のがれ。

禮記の檀弓に「君子之愛レ人也以レ德、細人之愛レ人也以二姑息一。」

註に「姑且也、息休也。」

【因循】 インジュン。(一)古き習慣によりしたがつて行ふこと。(二)進んで事を成す氣力のないこと。ぐづ〳〵すること。こゝは(二)の意。

漢書の百官表に「漢因循而不レ革。」

韓愈の詩に「多才自勞苦、無用秖因循。」

【空しく關東の邑に罹り】 空しく關東なる德川氏の詭計に

陷つたことをいふ。

「罠」（ワナ）は、もと繩を輪狀にし、禽獸の脚にかけて縛してこれを捕へるもの。轉じて、詭計を用ひて他をあやなすことを「わなにかけろ」といふ。

古事記、中に「蒐田のたかきに、しぎわなはる、わがまつや、しぎはさやらず

【今日の仕合】今日のなりゆき。今日の仕儀。

「仕合」は、しあはせた時の運不運にいふ語。工合。機會。成りゆき。

【言ふ甲斐なし】(一)言ひてもかひなきこと。(二)役にたゝぬこと。いくぢなし。ふがひなし。(三)いやしく見すぼらし。とりどころなし。こゝは(二)の意。

伊勢物語に「もろともに言ふ甲斐なくてあらんやはとて。」

【この腸はちぎるゝばかり】悲しみの甚だしいこと。悲哀の切なこと。斷腸。

魏の文帝の詩に「念二君客遊一思レ斷レ腸。」

菅原道眞の詩に「秋思詩篇獨斷レ腸。」

【償ひ難き不臣の罪】何ものをもつてしても償ふことの出來ぬほどの不臣の罪。

「不臣の罪」（フシンのツミ）とは、(一)故らに君を不利の地位に陷れた罪。(二)君のためにはかり、その結果却つて君を不利に陷れた罪。本文は(二)の方で、むしろ謙辭に近い。

【あの世で御詫仕らん】未來の世で、おわびをいたしませう。

「あの世」は、人の死後、生れかはる世。未來の世。來世。後世。

「御詫」は、「詫」の敬語。「詫」とは、過失・罪などを謝すること。あやまること。謝罪。陳謝。

川中島合戰、三に「おわびおわびと心を揉む。」

【在（イマ）すが如く】豐太閤がわが眼前にいらつしやるやうに。

【人目】ヒトメ。人の見て知ること。人の目につくこと。

萬葉集、卷十二に「うつせみの人目をしげみ逢はずして年の經ぬれば生けるともなし」

【不覺の涙に暮れけるが】われ知らずわき出る涙に目をくもらせてゐたが。

「不覺」（フカク）は、思はず知らずなること。われ知らずなること。そゞろなること。

謠曲、大原御幸に「再び龍顏にあひ奉り、不覺の涙に袖をしぼる。」

【やゝあつて】やゝしばらくして。やゝ時を經て。

【不覺の至】この上もなく不覺なること。不心得千萬。

こゝの「不覺」は、油斷して失策すること。不注意なること。そゞろに過を犯すこと。前の「不覺の涙」の「不覺」とは意味が少しちがふ。

十訓抄、上に「たゞ不覺ならむものの咎を宥して、能なき輩をも憐みはぐくむべし。」

延慶本、平家物語、二末、文學道念由緒の條に「あなかしこ見たがへて不覺すな。」

【差懸る御家の安危】豐臣家の危機が眼前に迫つてゐることをいふ。

「安危」は、やすきとあやふきと。但し、こゝでは、「安」の方の意味は失せて、「危機」といふほどの意に用ひられてゐる。

孫子に「故知レ兵之將、民之司命、而國家安危之主也。」

太平記、六、天王寺未來記に「上宮太子の當初、百王治天の安危を勘へて、日本一州の未來記を書き置かせ給ひて候なる。」

【長門守】ナガトノカミ。木村長門守重成。常陸介重茲の子。文祿四年（一二五五）重茲が罪を得て自殺した時はまだ生れたばかりであつたが、母に從つて近江國馬淵邑に匿れ、僅かに難を免れた。長じて豐臣秀頼に仕へ、長門守と稱した。慶長十九年（一二七四）大阪冬の陣起るや、一方の將として片原町に出て進み戰ひ、佐竹義宣の先陣澁江内膳を獲、大いに佐竹氏を破り、退いて柵を保つた。東軍は皆その遠謀勇略に驚いた。和議成るに及んで、使となつて家康の營に赴き、盟を乞うた。その動作がいかにも整つてゐたので、秀忠はいたくこれを感歎したといふ。翌元和元年（一二七五）夏の陣、先鋒となつて河内の若江に陣し、藤堂高虎の軍を破り、ついで若江の東玉串川で井伊直孝の陣を衝き、奮戰して死んだ。時に年二十一。

重成は容姿がすぐれ、沈勇に富んでゐた。又、深く軍事に長じてゐた。若江の戰、固より戰死を期し、豫め伽羅を焚いて頭髪に薫じたといふ。その首が家康の實檢に入つた時も、なほ香氣が馥郁としてゐたので、家康は深くその用意を感賞したといふ。

大正十三年二月、正四位を追贈せられた。

【心許なき事どもぢやなあ】 さて〳〵氣づかはしい事だはい。

「心許なし」とは、(一)心のいらだつこと。待ち遠におもふこと。じれつたいこと。(二)おぼつかないこと。氣づかはしいこと。不安心なこと。

土佐日記に「こゝろもとなきに、あけぬから舟をひきつゝのぼれば」(一)

榮華物語、本雫に「いみじうおぼつかなく、心もとなくおぼしめされつゝ」(二)

【すかしながむる折こそあれ】 物のすきまから遙かに眺めやつてゐると、折も折、ちやうどその折に。

【蹄の音】 馬の蹄の地を踏む音。馬の足音。

「蹄」(ヒヅメ)は爪の一種。牛馬その他の有蹄類に見るもの。形は靴の狀をなして大きく、趾端を包んでこれを保護する用をなす。

藤葉集、冬に「うち渡す駒のひづめに碎くるはひのくま川の氷なりけり」

【程もあらせず】 程もなく。間もなく。

【殘霧つんざき】 立ちこめてゐる殘霧をつんざきながら。

「殘霧」(ザンム)は、曙の空に消えのこつてゐる霧。

「つんざく」は「劈く」の字をあてる。突き裂いて破ること。

太平記、七、新田義貞に綸旨を賜はる條に「龍伯公が力を得ずば、山をもつんざき難し。」

松風村雨東帶鑑、一に「岩もつんざく怒れる魚。」

【一散に】 イッサンに。「一三に」「逸散に」ともかく。わきめもふらずに。ひたすらいそいで。馬を疾く走らせて。

俚言集覽に「一三、馬の走る詞。逸散、馬の奔りの疾きをいふ。」

槍權三、上に「一散にかけ出す。」

廣名家記に「一足も退かず、一散に敵陣へ驅けいつて」

【汗馬に中を走り來る】 汗ばんだ馬に乘つて、疾走して、

宙を飛んで來たことをいふ。

「汗馬」(カンバ)は(一)疾走する馬。馬は疾走すれば汗を出す。故にいふ。

徐悱の詩に「汗馬躍銀鞍。」

戰國策、楚に「里數雖レ多、不レ費汗馬之勞。」

(二)馬に乘つて戰場に奔走すること。

史記の蕭相國世家に「蕭何未嘗有汗馬之勞。」

「中」(チュウ)は多く「宙」と書く。「宙を走る」とは、馬の足が地に接せず、空中を走り來るが如きさまをいふ。

曾我會稽山、三に「これより宙をかけるとも、富士野へ着かば夜半も過ぎ」

【くつわづら】 「くつわ」に同じ。又、手綱の古言ともいふ。

倭訓栞に「くつわづら、倭名抄に轡をよみ、俗にくつわといふと見えたり。新撰字鏡に勒又靶をもよめり。口輪連の義成べし。今いふ手綱也といへり。」

伊勢貞丈の説に「くつわづらといふは、口脇繩なり。」

【右手】 メテ。「馬手」の義。馬の手綱を持つ方の手即ち(一)右の手。又、(二)右の方。右の方面。左の手又は左の方を弓手(弓を持つ方の手の義)といふに對する語。こゝは(二)の意。

保元物語、新院御所各門々固の條に「ゆんでのひぢ、めてに四寸延びて」

同物語、親治等生捕の條に「伊藤、齋藤、ゆんでめてより馳せ寄つて」

【そゞろにも先づ袖濡るゝ朝露や】 長門守が且元の乘馬の右方におりたち、相對して一語なく、感慨無量のおもものちで、そゞろにおちくる涙に袖をぬらすことを朝露に濡れそぼつことにかけていふ。

【枯柳】コリウ。霜に枯れて葉の落ち拂つた柳。

【入り方の月ゆらめきて】 將に西山に入らうとする頃の月影が、ゆら〳〵と動くさまに見えることをいふ。

「入り方」は、日又は月の入らうとする頃。こゝは、月にいふ。

源氏物語、紅葉賀の巻に「入りかたの日影さやかにさしたるに」

同蓬生の巻に「月入りかたになりて」

「ゆらめく」は「搖めく」の字をあてる。ゆら〳〵と動くこと。ゆらつく。ゆらぐ。

大藏流狂言、朝比奈に「大地震の如くゆらめいてありしよな。」

【老いゆく秋】　ふけゆく秋。闌(タ)けゆく秋。

【豐臣の御社稷】　トヨトミのオンシャショク。こゝは「豐臣の御家」といふほどの意。

「社」は土地の神、「稷」は穀の神。國は土穀に資つて以て人を養ふ。故に古へ列國の諸侯は皆社壇を立ててこれを祀つた。轉じて國家の義に用ひる。こゝは豐臣家を敬つていふ。

易經の下經に「出可以守宗廟社稷、以爲祭主也。」

禮記に「建國之神位、右社稷而左宗廟。」

榮華物語、疑に「始祖内大臣宗廟を扶持し、社稷を保安す。」

【棟梁】　トウリャウ。屋の背柱を棟といひ、棟を負ふを梁といふ。共に家屋に重要な材といふ意より、一國又は一家の重任にあたる人、又は、かしら、おもだちたるものの意にいふ。

魏書の高柔傳に「公輔之臣皆國之棟梁、民所二具瞻一。」

源平盛衰記、二十八、經正竹生島詣の條に「弓箭の棟梁としては、威を東南に振ひたまへり。」

【佞人讒者の毒舌に逆臣の汚名を受け云々】　且元が佞臣大野治長に讒言せられて、豐臣家に反逆を企てるものであるとの惡名を受けたことをいふ。治長の外、淀君の命を以て駿府に赴き、家康に謁した大藏尼・正榮尼の二媼も、歸つて來てから「且元は貳心を抱いて君を賣り、おのれひとりその功を私しようとしてゐる。」と淀君に復命してゐる。これらの人の言も、毒舌といつてよからうか。二媼が歸つた後、淀君が大いに怒り、大野治長と謀つて且元を殺さうとしたことを思ひあはせる必要がある。

「佞臣」(ネイシン)は、へつらひをする臣。佞奸な臣。

「讒者」(ザンシャ)は、事實を虛構附會して人をあしざまにいふ人。讒言する人。讒人。

太平記、十二、聖廟の條に「帝闕に近づき、われにつらかりし佞臣讒者を一々に蹴殺さんと存ずるなり。」

「毒舌」(ドクゼツ)は、毒言を吐く口まへ。巧に人を讒言する口まへ。

「逆臣」(ギャクシン)は、反逆の心を挾む臣。

謠曲、藤榮に「こゝにま蚩尤といへる逆臣あり。」

「汚名」(ヲメイ)は、けがれた名。恥づべきうはさ。惡名。

管子に「入者不レ悅、出者不レ譽、汚名滿二天下一。」

【退身】　タイシン。官途より身を退くこと。致仕。退職。

【某】　ソレガシ。こゝは自稱の代名詞。木村長門守重成の自稱。

【圖らぬ事】　ふとした事。思ひもよらぬ事。思ひがけもない事。

【端なくも】　ハシなくも。はからずも。ふと。ゆくりなく。

【御母公】　ゴボコウ。秀頼の生母淀君を敬つていふ。

淀君(ヨドギミ)は豐臣秀吉の側室。名は茶々。淺井長政の長女。母はお谷の方(柴田勝家の妻、織田信長の妹)。天正十一年(一二四三)秀吉の側室となつた。中頃淀城にゐたから、淀殿・淀君・淀の方などいふ。同十七年、一男鶴松を生んだが、夭折した。秀頼の生れたのは文祿二年(一二五三)である。秀吉の薨後、大阪城に居り、石田三成等を股肱として將士を統御したが、慶長十九年(一二七四)終に德川氏と戰端を開いた。やがて媾和が成立したが、翌元和元年(一二七五)。再び戰を交へ、事成らずして秀頼と共に自殺した。年四十九(或は三十九ともいひ、又四十五ともいふ)

【嫌疑】　ケンギ。うたがひ。うたぐり。

禮記の曲禮に「夫禮者所下以定二親疏一決二嫌疑一別二同異一明中是非上也」

枕草子、三に「人見つけばあなづらはし、けんぎのものやあると、たはむれにも咎む。」

【出仕】　シュッシ。(一)出でて官に仕へること。仕官。(二)勤めに出ること。出勤。こゝは(二)の意。

【珍變】　チンペン。(一)めづらしい變事。(二)おもひがけない事變。こゝは(二)の意

【討手】　ウッテ。敵・賊軍又は罪人を追捕する者。

平家物語、十二、判官都落の條に「北條四郎時政に六萬餘騎を差し副へて、討手にのぼせらる。」

【お表】　おオモテ。こゝは、大阪城内の政廳。

【城内議論沸くが如く】　大阪城内には、さまざまの議論がおこつて、さながら、鼎の湯のわきたつやうにさわがしかつたことをいふ。

漢書の霍光傳に「群下鼎沸、社稷將レ傾。」

【織田入道殿】　オダニフダウドノ。織田信雄(ノブカツ)。

信長の第二子。北畠具教の嗣となり、北畠氏を冒した。信長の薨後、弟信孝と和せず、遂にこれを攻殺した。やがて秀吉が己を滅さうとすると聞いて、家康に投じ、その援を得て秀吉と小牧・長久手に戰ひ、大勝した。後秀吉と和し、小田原征伐に功を立てた。すでにして秀吉の命に忤うて下野の那須に放たれ、二萬石を給せられた。乃ち薙髮して常眞と號した。ついで秋田に移され、後赦されて伊勢に住んだ。秀吉が征韓を企てた時は接伴衆となつて傍に侍した。その後石田三成に投じて家康と戰つたが、亂が平いでから宥された。既にして淀君が己を害せんとする由を聞き、京都に逃れた。元和元年（一二一七五）七月伊豫の松山に封ぜられた。寛永七年（一二一九〇）四月薨。年七十二。

【日頃に似げなく】　つね日ごろのおだやかな態度に似もやらず。

「日頃」（ヒゴロ）は、幾日かの間。多くの日。(二)平生。ふだん。つね。(三)このごろ。近頃。數日來。こゝは(二)の意。

玉葉集、戀四に「よもさらば恨み果てなむと思ふまに日頃おぼえぬあはれさぞ添ふ」

「似げなく」は、似つかはしからず。似合はず。似もやらず。

宇津保物語、藏開、下に「似げなき事をし給へば、にくしとは思へど」

枕草子、三に「似げなきもの、…老いたる男の寢まどひたる。」

【激論の末】　ゲキロンのスエ。はげしく議論せられたあげく。

「激論」は、又、「劇論」とも書く。はげしく爭論すること。又、その爭論。

聞見錄に「行處毎客參劇論。」

【退座】　タイザ。その座席を退くこと。退席。

【亂脈】　ランミャク。みだれて筋のたゝぬこと。亂れて條理のないこと。亂雜。

【無法】　ムハフ。法則のないこと。亂暴なこと。

荀子の非十二子に「知而無法、勇而無憚。」

東鑑、三に「同道之仁、頗有無法氣。」

【評定】　ヒャウヂャウ。評議して定めること。評論して決定すること。

平治物語、院御所仁和寺御幸の條に「合戰の評定。」

【御母公の威を笠に被る大野・渡邊】　淀君の威勢を借つてゐばりちらす大野治長・渡邊糺（タヾス）の輩。

「御母公」は前に出てゐる。

「笠に被る」は、他人の威勢を借ることをいふ諺。「虎の威をかる狐」の類。

「大野」は大野治長。一に治良。豐臣氏の臣。秀吉及び秀頼に仕へて從五位下に敍せられ、修理大夫と稱した。慶長四年（一二二五九）事に坐して結城に流された。同五年征東の軍に從ひ、功を以て罪を償うた。關ヶ原の役、福島正則の軍に屬したが、後大阪城に入り、淀君の姪子となつて常にその側に侍し、寵遇せられた。慶長十九年（一二一七四）食邑五千石を加增せられ、政權を專にした。かくて意頗る驕り、遂に大阪の冬の陣を起した。十二月德川氏と和を結んだが、尋いで又首謀となつて再擧を圖つた。翌元和元年（一二一七五）大阪が敗るゝに及び、秀頼母子と共に自刃した。

治長は人となり、心識が廣く、細節に拘らず、居第をかざり、奇貨を愛翫した。又、色を好んで、遊俠燕飲度なしといふ風であつた。

「渡邊」は渡邊内藏介糺。正榮尼の子。淀君の寵臣。

【我意】　ガイ。我が心のまゝに事をなすこと。わがまゝ。

源平盛衰記、三、左右大將の條に「偏に太政大臣の我意の所行也。」

【暴慢】　バウマン。亂暴で氣まゝなること。

論語の泰伯篇に「動容貌、斯遠暴慢。」

太平記、十二、公家一統政道の條に「上無威儀、下必可有暴慢心。」

【是非に及ばず】　ゼヒにオヨばず。せんかたなく。已むを得ず。

【刀の柄】　カタナのツカ。刀の手で握るところ。その制によつて、瑠璃柄（ルリツカ）、沈柄（ヂンツカ）・赤木柄・花櫚木柄（クワリンボクヅカ）・梅花皮柄（カイラギツカ）・絲卷柄・革卷柄等の種類がある。

【日頃の教訓】　ヒゴロのケウクン。平素のをしへ。

「教訓」は、をしへさとすこと。訓戒を加へること。教戒。

禮記の曲禮に「教訓正レ俗、非レ禮不レ備。」

平家物語、一、妓王に「母とじこれを聞くに悲しくて、泣く泣く教訓しけるは」

【無念を忍び】 残念でたまらぬのを、じつとがまんして。「無念」（ムネン）は、口をしいこと。くやしいこと。残念。

平治物語、紀州馬早立の條に「これまで参つて参詣を遂げざらんも無念なり。」

【無實】 ムジツ。罪なきに罪ありとせられること。寃罪。

平家物語、二、座主の流刑に處せらるゝ條に「無實の罪によつて遠流の重科を蒙れば」

【悔む】 クヤむ。くやしくおもふこと。くやしがること。後悔すること。

爲忠集に「數々に過ぎにしことはくやまねど思ひぞいづる老のつれ〴〵」

【押宥め】 オシナダメ。「なだめ」に同じ。押は接頭語。きげんをとつて。なぐさめすかして。

續古事談、六に「二人の妻をならべて、しかもその心をなだむる、極めて難きことなるべし。」

【いしくも堪忍せられしぞや】 よくもまあ、がまんなされたことよ。

「いし」は、第二類の形容詞。「いしく」「いし」「いしき」「いしけれ」と活用する。(一)美し。好ましい。(二)味よし。(三)巧妙なり。(四)神妙なり。殊勝なり。けなげなり。こゝは(四)の意。

平治物語、信西南都落の條に「汝いしく参りたり。」

「堪忍」（カンニン）は、たへしのぶこと。がまんすること。

魏書の李洪傳に「洪之志性慷慨、多所堪忍。」

十訓抄、下に「可堪忍于諸事事。」

【豫ても】 カネても。前々からも。

「豫て」は、前々から。まへもつて。あらかじめ。さきに。

萬葉集、巻十七に「かゝらむとかねて知りせばこしの海のありその波も見せましものを」

【お家の大仇】 おイへのタイキウ。豐臣家に取つての大いなるあたかたき。

【彼等】 前文に見えた「御母公の威を笠に被る大野・渡邊輩をさしていふ。

【鼠輩】 ソハイ。鼠の如く取るに足らぬものども。いやしきものども。人をいやしめのゝしることば。

魏志の華陀傳に「太祖曰、不憂天下當無此鼠輩耶。」

唐書の李宗閔・楊嗣復傳に「捨彼鴻鵠狎致鼠輩。」

【所爲】 シヨヰ。なすところ。しわざ。おこなひ。所作。所行。

易經の繫辭に「知變化之道者、其知神之所爲乎。」

保元物語、白河殿義朝夜討の條に「八郎御曹司の矢御覽候へ、凡夫の所爲とも覺え候はず。」

【この度の一條】 今度の一件。方廣寺の鐘銘の事より徳川氏との間に大葛藤がおこり、大阪城内、和戰の評定に議論が沸騰したこと、及び淀君の寵臣大野・渡邊等が事を專らにし、遂に忠臣且元を疎外するに至つた一部始終をさしていふ。

「一條」（イチデウ）は、こゝでは、一事・一件などの意と見るべきである。

【遺恨骨に徹す】 ほねみにとほるほど残念におもふこと。

「遺恨」（ヰコン）は、(一)恨みを遺（ノコ）すこと。残念。遺憾。(二)忘れ難きうらみ。宿怨。鬱憤。こゝは(一)の意。

平家物語、一、鹿谷の條に「加階越えられ給ひぬるこそ遺恨の次第なれ。」

謠曲、正尊に「梶原が逆櫓の意見を承引し給はざりし遺恨により、我が君を讒奏申し」

【今更繰返すは愚痴の至】 今となつて事新しく、くだらぬ内輪の爭をくりかへすのは、ばからしいことだとの意。

「愚痴」（グチ）は、(一)おろかなること。事理を解せざること。ばか。(二)言ひても詮のないことを言つて歎くこと。こゝは(一)の意。

歐陽修の詩に「金紫包愚痴。」

謠曲、誓願寺に「四句の文とやらん、……愚痴の我等に示し給へ。」

【某退去の事關東に聞えなば】 拙者（且元）が茨木に退去したといふことが關東表の徳川方に聞えたならば。

【破綻生ぜんこと治定なるに】 事がぶちこはれて徳川方と再び不和になることは必定である上に。

「破綻」（ハタン）は、衣の破れ綻びる意よりして、事の圓滿を缺くに至ることをいふ。

「治定」（ヂヂャウ）は、(一)さだまること。きまること。(二)定まつてあること。必ず。決定（ケッヂ）。必定。

太平記、十五、三井寺合戰の條に「御方治定の勝軍とこそ存じ候へ。」

【去就】キョシウ。彼を去り此に就くこと。そむき去るとつきしたがふと。進退。向背。

戰國策、趙に「去就之變、智者不レ能レ一。」

【京表】キャウオモテ。京都地方。こゝの「表」は、ところ。もと。地方。長崎表・江戸表など、用例が多い。

【城内の秘密悉く漏れ】大阪城内の秘密が、のこらず外間にさらけ出されること。

「秘密」（ヒミツ）は、隱して人に知らせぬこと。又、そのことがら。

隋書の藝術志に「關二諸秘密一。」

井筒業平河内通、一に「秘密の法ぞ不思議なる。」

【年來の苦心皆泡沫】數年このかた、心をちゞに苦しめて豐臣氏の安泰をはかつたことが、皆水のあわのやうに空しく消えてしまつた。

「年來」（ネンライ・トシゴロ）は、數年このかた。久しきごろ。歲月より。多年。

源平盛衰記、十四、南都山門牒狀の條に「早忘二年來之遺恨一、必復二往山之往昔一。」

謠曲、小袖曾我に「富士野の御狩の折を得て、年來のかたき本望をとげん。」

「苦心」（クシン）は心を苦しめること。心づかひ。心痛。心配。

淮南子に「以二知慮一爲レ治者、苦心而無レ功。」

「泡沫」（ウタカタ）音でよめばハウマツ。(一)水上に浮ぶあわ。水のあわ。(二)はかなく消えやすいことにたとへていふ語。こゝは(二)の意。

後撰集、戀五に「ふりやめばあとだに見えぬうたかたの消えてはかなき世をたのむかな」

【籠城の計畫】ロウジャウのケイクヮク。大阪城に立てこもつて徳川勢の攻めて來るのを防ぐもくろみ。

「籠城」とは、城にたてこもること。城にこもつて、攻め來る敵を防ぎ守ること。

後愚昧記、貞治二年九月九日の條に「宇津宮引退、籠城了。」

「計畫」は、はかりごと。もくろみ。くはだて。はからひ。

戰國策、秦に「昭王新說二蔡澤計畫一、遂拜爲二秦相一。」

史記の朱建傳に「計畫所二以全一者、皆陸生・平原君之力也。」

【肝要】カンエウ。必要。大切。かなめ。緊要。

謠曲、夜討曾我に「いづくにても命を捨つるこそ肝要にて候へ。」

【兵糧】ヒャウラウ。「兵粮」に同じ。軍人に給する糧食。

主税寮式に「兵粮料四萬束。」

【まつた】「また」（又）の促音便。語氣を強めるときに用ひる。

【猛將】マウシャウ。強くたけき將。勇猛なる大將。

史記の留侯傳に「黥布天下猛將也。」

宇治拾遺物語、九に「美濃國に猛將ありけり。」

【勇卒】ユウソツ。いさましくたけき兵士。勇猛な兵卒。

【智謀の將】チボウのシャウ。智謀にたけた大將。

「智謀」とは、智のあるはかりごと。たくみなるはかりごと。

莊子に「智謀不レ用、必歸二其天一。此之謂二太平一。治之至也。」

史記の陳丞相世家に「平以二榮名一終、稱二賢相一、非二智謀一、孰能當レ之者乎。」

太平記、三、楠の條に「天下草創の功は武略と智謀との二つにて候。」

【萬一の備】マンイチのソナヘ。もしもの事のあつたときの用意。

「萬一」は、萬の中に一つ。絶無とはおもふが、若しもあつたらば。

後漢書の鄧騭傳に「本非二臣等所一能萬一。」

續日本紀、卷二十二、天平寶字三年三月庚寅の條に「萬一有レ變、何以應レ卒。」

【九度山】クドサン。紀伊國（和歌山縣）伊都郡九度山村。高野山の北谷。大字に九度山・慈尊院・古澤等がある。こゝの善名稱院は眞田昌幸並に幸村閑居の地。昌幸はこゝで卒した。幸村討死の後、土地の人々はここに石像を建てた。有名な眞田紐は、眞田氏が閑居のとき、ここで創製したものだといふ。

【信州上田】　シンシウウヘダ。信濃國（長野縣）上田市。長野市の東南十里五町。もと松平氏五萬三千名の舊城下。城は眞田氏の創築にかゝる。慶長五年（一二六〇）關ヶ原の役、眞田昌幸はこゝで秀忠の軍を支へた。今は高崎・直江津間の鐵道が通過し、養蠶業が盛で、絹織物を產する。上田縞は殊に名高い。

【眞田安房守】　サナダアハノカミ。名は昌幸。幸隆の子。始め武田信玄に從ひ、次いで勝頼に仕へたが、勝頼の死後織田信長に降つた。信長の薨後、上杉に通じ、北條に屬し、更に德川に從ひ、遂に秀吉に歸した。關ヶ原の役には上田城に據つて德川秀忠の軍を阻み、これをして關ヶ原に會する能はざらしめた。役後紀伊に放たれた。乃ち九度山に潛居し、慶長十三年（一二六八）その地に卒した。年六十五。

【左衞門佐幸村】　サヱモンノスケユキムラ。昌幸の次子。信之の弟。父と共に豐臣秀吉に仕へた。關ヶ原の役、西軍（大阪方）に應じて上田城に據り、德川秀忠の軍を阻止したが、やがて、西軍が敗るゝに及んで、父と共に紀伊に移され、九度山に潛居した。慶長十九年（一二七四）大阪の役、秀頼の招に應じて大阪城に入り、奇計を以て屢〻東軍（德川方）を破つた。翌元和元年夏の役、兵を率ゐて城外に出で、奮戰して伊達政宗の軍を破り、進んで家康の本營を衝かうとしたが、計齟齬して、軍機振はず、終に越人西尾久作に擊たれた。時に年四十六。

「左衞門佐」は左衞門府の次官。衞門府は六衞府の一、左右に分れてゐる。諸門の禁衞・出入・禮儀及び隼人・門籍・門牓などの事を掌る役所。督・佐・大少の尉・志等の職員がある。但し、こゝの場合は、たゞ官名を稱するばかりで、實際その官職に就いてゐたわけではない。

【故太閤】　今は故人となられた豐臣太閤秀吉。

「太閤」（タイカフ）は、上古は攝政又は太政大臣の尊稱。後には關白を辭してなほ內覽の宣旨を被つた人又は關白をその子に讓つた人の尊稱。但し、一般には殆ど秀吉一人の尊稱のやうになつてしまつた。

豐臣秀吉は戰國時代に起つて海內を平定した武將。尾張國（愛知縣）愛知郡中村の人。木下彌右衞門の子。幼にして松下嘉兵衞に仕へ、木下藤吉郎と名のつた。尋いで織田信長に仕へ、部將として屢〻戰功を樹て、羽柴秀吉と稱した。本能寺の變後明智光秀を破り、尋いで柴田勝家・瀧川一益を滅し、小牧・長久手を經て、勢力が愈〻盛となつた。かくて根來（ネゴロ）・西國・北國を征伐し、天正十五年（一二四七）遂に島津氏を降して九州を平定し、十八年小田原城を陷れて北條氏を降し、ついで伊達政宗を從へ、こゝに海內を統一した。これより先、關白に任ぜられ、從一位に進んでゐたが、こゝに至つて遂に太政大臣に昇り、姓豐臣を賜つた。海內統一後、海外に發展せんとして、文祿・慶長の二回にわたり朝鮮役を起したが、遂にその目的を達するに至らず、慶長三年（一二五八）八月十八日伏見城に薨じた。年六十三。遺骸を阿彌陀峯に葬り、廟所をその麓に營んだ。翌四年遷宮。詔して正一位豐國大明神の神號を賜はつた。德川時代宮號を停止し、社殿も全く廢滅したが、明治六年豐國神社と改稱し、別格官幣社に列せられた。同十三年社殿が完成した。その四脚唐門は桃山時代の遺構で、特別保護建造物に指定されてゐる。

大正四年十一月正一位を追贈せられた。

【智勇兼備】　チユウケンビ。才智と勇氣とを兼ね有すること。

史記の藺相如傳贊に「處二其智勇一可レ謂レ兼レ之矣。」

【良軍師】　リャウグンシ。良い軍師。良い參謀。

「軍師」とは、主將に附屬して軍職を掌り、謀計をめぐらす人をいふ。

後漢書の鄧禹傳に「以二韓歆一爲二軍師一。」

川中島合戰、三に「如何なる軍師が敵に與し、かゝる奇計をなしけるぞ。」

【關ヶ原の一戰】　慶長五年（一二六〇）美濃國（岐阜縣）關ヶ原に於ける石田三成對德川家康の戰。

豐臣秀吉の薨後、石田三成は德川家康を除かうとして諸將と結び、上杉景勝をして先づ會津に事を擧げしめ、家康をして東征の途に就かしめた。かくて三成は同盟の諸將と共に兵を擧げ、家康を挾擊しようとして東進し、關ヶ原に於て、軍を班して西上した家康の軍と會戰した。西軍に屬するものは毛利秀元・長曾我部盛親・島津豐久・小西行長・宇喜多秀家・小早川秀秋等、東軍に屬するものは福島正則・淺野長政・加藤嘉明・藤堂高虎等であつた。激戰六時間、會〻小早川秀秋が戈を倒にして東軍に應ずるに及び、西軍は遂に大敗した。時に慶長五年（一二六〇）九月十五日であつた。亂後三成・行長は斬られ、秀家・盛親は領地を沒收せられ、毛利氏・島津氏は領地を削られた。この一戰によつて、德川氏の覇業は決定的となつた。

「關ヶ原」は岐阜縣不破郡關ヶ原町。舊中仙道の一驛。今東海道線の一驛がある。山間の小盆地に位し、東西交通の要衝に當るので、古く不破の關が置かれた所。慶長五年德川家康と石田三成とが天下分けめの戰を開いた地として名高い。

【關東の跋扈】 クワントウのバッコ。關東なる德川氏のわがまゝなる振舞。

「跋扈」は、上をしのぎてかつてな振舞をすること。のさばること。放恣なること。「跋」は蹈みつけること。「扈」は魚を捕ふる竹籠。大魚の籠に入らずして跳ねあがる義。

後漢書の梁冀傳に「梁冀字伯卓。爲人蒼眉豺目、洞精瞑眄。拜二大將軍一、侈恣滋甚。沖帝崩、冀立二質帝一、少聰慧。知二冀驕横一、嘗朝二群臣一、目レ冀曰、此跋扈將軍也。冀聞忌レ之、遂鴆殺。」

同註に「扈は竹籠、水未だ至らざるに豫め竹籠を作り、以て魚を俟つ。魚入りて水退く。小魚獨り留まり、大いなる者は籠扈を跳跋して脫れ去る。故にいふ。」

【蟄して】 かくれひそんで。

「蟄」（チツ）とは、蟲が冬になつて地中にこもること。轉じて、かくれひそむこと。こゝはその意。

太平記、四、吳越軍の條に「潛龍は三冬に蟄して一陽來復の天を待つ。」

【世の態（サマ）を窺へるを】 時世の推移する狀態をうかゞつてゐるのを。

【上使】 ジャウシ。公方より大小名等につかはす使。上よりの使者。

平家女護島、二に「上使を切つたる科によつて」

【合戰の進退】 カッセンのシンタイ。合戰についてのかけひき。

【浪々】 ラウ〳〵「牢浪」に同じ。さまよひあるくさま。おちぶれるさま。流浪。

梅松論に「末葉等皆々牢浪仕り候うて」

【長曾我部盛親】 チャウソカベモリチカ。戰國時代の武將。元親の第三子。初の字は右衞門太郎。後、新井右衞門と改め、宮內少輔と稱した。父についで土佐を領してゐたが、關ヶ原の役、西軍に與して敗れ、爲に封を失ひ、剃髮して京都に浪居した。慶長十九年（一二七四）秀頼の招に應じて大阪城に入り、翌元和元年東軍の將藤堂高虎を破つたが、後破れて擒となり、六條磧で刑せられた。時に年四十一。

【黑田家】 宇多源氏。佐々木秀義の五代の孫京極滿信の二男宗清は近江國伊香郡黑田村に住んだので、終に黑田を氏とするに至つた。六世黑田高政は近江の守護佐々木高頼及びその子氏綱に屬した。その孫職隆は初めて小寺氏を稱した。その子孝高は初め織田行長に屬し、後に豐臣秀吉に從つた。天正十年（一二四二）明智光秀を討つて、功あり、十四年黑田氏に復した。十五年筑紫の陣に功あり、豐前國六郡を賜はつた。十七年その四男長政は封を襲ぎ、甲斐守に任ぜられた。秀吉の薨後德川家康に仕へ、關ヶ原の役に動功があつた。慶長五年（一二六〇）十月筑前國を賜ひ、五十二萬三千石餘を領し、福岡城に住み、子孫相繼いで明治に至つた。明治の朝侯爵を授けられた。本文當時の黑田家の主は長政である。

【浪人】 ラウニン。「牢人」とも書く。浮浪人の義。（一）平安朝時代から鎌倉時代にかけては、住地を離れて他國に漂ふものをいひ、（二）室町時代以後は、轉じて、秩祿を失ひ、主家を去つた士人をいふ。こゝは勿論（二）の意。

柳宗元の李赤傳に「李赤江湖間浪人也。」

源平盛衰記、二十七、信濃横田川原軍の條に「昔は信濃國の住人、今は牢人笠原平五頼直といふ者なり。」

【後藤又兵衞基次】 ゴトウマタベエモトツグ。豐臣時代の驍將。播磨の人。名は與三郎、後又兵衞尉と改めた。黑田孝高及びその子長政に仕へ、屢〻戰功をあらはした。關ヶ原の役、長政の筑前に封ぜらるゝや、土地が邊鄙で大業が成り難いとて、自ら浪人となり、各地に流浪した。慶長十九年（一二七四）秀頼の招に應じて大阪城に入り、豐臣氏のために奮戰したが、翌元和元年（一二七五）の夏の陣、銃丸に中つて斃れた。時に年四十六。

【因み】 チナみ。（一）ちなむこと。ゆかり。因緣。（二）關係。干渉。こゝは（二）の意。

若風俗、一に「今日より世のそしりをかまはず、御因みを申すべし。」

【手配り】 テクバり。事を行ふに、それ〴〵の備をなすこと。てはい。

島津本太平記、廢耶城合戰の條に「寄手皆侮つて山の案內も問はず、勢の手配りをもなさず、われ先にとぞ寄せたりける。」

【地利】 チり。地勢の便利。地勢が險阻、城池が堅固で、

要害のよいことをいふ。
孟子の公孫丑下に「孟子曰、天時不レ如二地利一、地利不レ如二人和一。」

【出丸】　デマル。「出城」に同じ。本城より張り出して築いた城。別壘。
俚言集覽に「出丸、出城をいふ。大阪の出城に眞田出丸あり。」
「丸」とは元來城郭の内部をいふ。故に城の字と同樣に用ひられ、本城を本丸、外城を二の丸、月城を三の丸等といふ。
松隣夜話、上に「謙信池の兩端に馬を控へ、辨當をとりよせ、茶を喫せらるゝところを、金澤といふもの、出丸より鐵砲十挺ばかり連ね……打ちけれども」

【紀州の山々】　紀伊の國の山々。
「紀伊」は南海道の一國。修して紀州といふ。近畿地方の南端にあつて、紀伊山脈の外邊を占め、北は和泉・河内・大和・伊勢に境し、南は太平洋に突出し、西は紀伊水道、東は熊野灘に臨む。一市（和歌山市）・九郡に分れ、七郡は和歌山縣に、餘の二郡は三重縣に屬する。樹木がよく繁茂するので、古は「木の國」といつた。

【紀州川】　キシウガハ。紀の川ともいひ、又紀伊川ともいふ。大和の吉野川の下流。大和國五條より西流して紀伊國伊都郡に入り、那賀・海草兩郡を西流して和歌山灣に注ぐ。流程三十三里。上流は吉野林業地として知られ、水面は多く木材の運搬路として利用される。河口より溯つて十三里間は舟楫の便がある。河口は卽ち和歌山港で、小汽船の碇泊に便利である。

【川上】　カハカミ。川のみなもとの方。みなかみ。上流。
神代紀、上に「かはかみに洗ふ若菜の流れ來て妹があたりの瀨にこそよらめ」

【浪華津】　ナニハヅ。難波津・浪花津とも書く。今の大阪地方の古名。浪華大津ともいふ。
神武紀に「戊午年春二月丁酉丁未、皇師遂東、舳艫相接。方レ到二難波之崎一、會有二奔潮一、大急。因以名爲二浪速國一、又、曰二浪華一。今謂二難波一訛。」とあるのは、文字によつて附會した說であらう。
神功皇后が新羅征伐の後、韓土との交通が頻繁を加ふるに及んで、船舶のこゝに輻湊するものが漸く多く、遂に一大要津となつた。後世遣唐使節の船も、常にこの津から發船した。

【船入り】　フナイリ。水邊に設けて船を納めおくところ。

ふなぐら。船藏。船庫。

【港口】　カウコウ。みなとぐち。こゝは大阪港の入口。

【糧米】　リャウマイ。又、粮米。兵粮となすべき米。
古今著聞集、卷二に「齎持の粮米・白米七升也。」

【出費】　イリメ。費す金錢のたか。いりよう。にふよう。費用。しゆつぴ。

【嵩む】　カサむ。かさだかになること。增し加はること。かさばること。こゝは、增し加はる意。

【若干】　ソコバク。數量を明らかにさし示さずにいふ語。いくらか。いくつか。そくばく。じやくかん。
伊勢物語に「そこばくの捧物を木の枝につけて」
永久百首、冬に「そこばくの佛の御名を皆聞けば殘れる罪もあらじとぞおもふ」

【餘財】　ヨザイ。あまりの財寶。餘裕の金錢。餘資。
史記の李廣傳に「家無二餘財一、終不レ言二家產事一。」

【甲冑】　カッチウ。よろひとかぶと。具足。
書經の說命に「惟口起レ羞、惟甲冑起レ戎。」
左傳の成公十三年に「文公躬擐二甲冑一、跣二履山川一。」

【兵具】　ヒャウグ。戰爭に用ひる刀・箭等の武器。兵器。
保元物語、官軍方々手分の條に「武士ども兵具をとゝのへて東西より都へ入り集る。」

【ときんば】　「時には」を促めていつた語。語中に强く念をおした氣分が含まれてゐる。

【關東の老奸雄】　クヮントウのラウカンユウ。こゝは德川家康を指す。
「奸雄」とは、奸智があつて權謀にたけた人。わる智慧のある英雄。
孔子家語に「少正卯、人之奸雄也。」
魏志、太祖紀に「治世之能臣、亂世之奸雄。」
「德川家康」は德川幕府初代の將軍。廣忠の長子。幼時今川氏の質となつたが、義元の死後三河に歸り、織田信長と相結んで漸く武名を揚げ、「海道一の弓取」と稱せられた。小牧山の戰後、名望が益〻高まつた。後、豐臣秀吉の小田原征伐に加はり、功を以て關東に封ぜられた。乃ち江戸城を修築してこれに據り、士民を愛撫し、恩を諸大名に施した。秀吉が薨じ、秀賴が幼にして嗣ぐや、前田利家は大阪に在つてこれを輔け、家康は伏見に在つて政を執つたが、利家の薨じた後は、家康の威望が獨り盛んとなり、關ヶ原の役以後、天下の大權が終に全くその手に

歸した。かくて慶長八年（一二六三）征夷大將軍に任ぜられ、幕府を江戸に開いた。間もなく職をその子秀忠に讓つて駿府に隱居し、大御所と稱して、なほ自ら大事を裁決した。元和元年（一二七五）豐臣氏を滅し、翌年太政大臣に任ぜられた。同年薨。年七十五。遺骸を久能山に葬り、後日光山に改葬した。朝廷ではこれに東照宮の神號を賜はつた。

【利を啗（クラ）はせ】利益を以て人を誘ふこと。

【六十餘州】ロクジフヨシフ。日本全國を意味する。當時の日本は東山・東海・北陸・山陽・山陰・南海・西海の七道六十餘國に分れてゐた。（北海道は當時まだ「道」の中に加はつてゐなかつた。）

【若年】ジャクネン。「弱年」に同じ。年のわかいこと。としわか。若齡。青年。當時重成はまだ二十一歳の若齡であつた。よつていふ。

宋書の劉湛傳に「弱年便有二宰レ世情一。」

【速水】ハヤミ。名は守久。秀吉の遺命によつて秀頼守護の七隊長の一人に推された。

【御宿】ミシュク。名は正倫。父友綱は元は武田家の臣であつたが、後、北條氏に仕へた。正倫は始め越前侯忠直に仕へてゐたが、大阪の役が起るに及び、出奔して秀頼に歸した。忠直は大いに怒り、その首を五千石で購はうとしたといふ。

【和久】ワク。名は宗是。もと豐臣秀吉の書佐（カキヤク）で、仙臺侯と親しかつた。後仙臺に寓するや、客禮を以て遇せられたが、大阪の役起るに及び、再び大阪に歸り、城中に入らうとして志を達せず、遂に東軍に躍り入り、奮戰して死んだ。時に年八十一。時人はこれを稱して齋藤實盛の遺風があるといつた。

【忠義を金鐵の堅きに比し】おのが忠義を金や鐵の堅きに比べて、主家に報いんとする概あることをいふ。

【命はもとより鴻毛の吹飜さん白旗】わが一命はもとより大切であるが、義のためには、鴻毛のやうに輕い、その鴻毛が輕々と風に吹かれて飛ぶやうに、ひら〳〵と飜るところの白い旗。

「鴻毛」（コウマウ）は、おほ鳥の毛。非常に輕い。よつて輕いもののたとへにいふ。

司馬遷の報二任少卿一書に「人固有二一死一、死或重二於泰山一、或輕二於鴻毛一。」

戰國策、楚に「國權輕二於鴻毛一、而積禍重二於丘山一。」

【祖先佐々木が四つ目結】「吹きひるがへす白旗に染めつけた紋章こそは（木村重成の）祖先なる佐々木一族に相傳してゐる四つ目結の紋章であるとの意。

四つ目結

この紋章は源三秀義の孫近江守信綱の時から子孫に相傳した。木村家は佐々木家の支齋である。よつて、やはりこの紋章を用ひたものと見える。

【千變萬化の手を盡くさば】千變萬化の手段方法をつくして戰つたならば。

「千變萬化」（センペンバンクヮ）は、いろ〳〵さま〴〵に變化すること。

列子の周穆王篇に「千變萬化不レ可二窮極一。」

吉野都女楠、一に「かけ破り、かけ惱まし、千變萬化の合戰に」

「手」は、こゝでは、手段・方法などの意。

【金石も亦透りぬべし】金や石のやうに堅いものでも、亦透るでせう。心をこめてすれば、如何なる事でも成就することにたとへていふ。

朱子の語に「陽氣發處金石亦透。精神一到何事至レ成。」

【利欲】リヨク。「利慾」とも書く。おのれの利益を貪る心。私利を營む心。

抱朴子に「不レ爲二利欲一動、不レ爲二屬託一屈。」

太平記、三十、將軍御兄弟和睦の條に「禍利欲より起つて、やむことを得ざれば」

【關東勢】クヮントウゼイ。關東なる德川家の軍勢。

【言上】ゴンジャウ。申し上げること。

晉書の周訪傳に「守宰有レ缺、輒補然後言上。」

源平盛衰記、三十二、四宮御位の條に「軍士等の申狀を以て言上するばかりなり。」

【上下の一致】上のものと下のものとが、一つ心になること。

「一致」（イッチ）は、おもむきを一つにする義。一つになること。合同すること。

易經の繫辭に「天下同レ歸而殊塗、一致而百慮。」

繪本大功記に「たとひ一致に防ぐとも、院内わづか三百餘

人」

【ほゝ】「ほゝう」ともいふ。おほやうな態度で聞き入る時などに發する聲。

曾我扇八景、上に「ほゝう、井原殿は鶴が岡に鶴を放し、鶴の紋を附けらるゝと聞きしが」

【賴しし賴しし】たいそうたのもしいことにいふ。正しくは「賴し〳〵」といふべきであるが、語調を整へるため、破格をも顧みず「賴しし賴しし」としたものとして說明されたい。

【忠勤】チュウキン。(一)忠實につとめること。(二)忠義の心をつくして勤めはげむこと。こゝは(二)の意。

聖書の石苞傳に「苞在レ位ニ、稱爲シテ忠勤ト」

平家物語、二、教訓の條に「君の御爲には彌〻奉公の忠勤をつくし」

【往時】インジ。「イニシ」の音便。いにし時の義。わうじ。既往。

【淀の御方】ヨドのオンカタ。前の「お母公の御嫌疑蒙り」の條なる「淀君」參照。

【御氣質】オンキシツ。御性情。御うまれつき。御氣性。「氣質」は生れついた人の性情。こゝろだて。氣性。

【鼠社】シャソ。君側に侍する奸物をいふ。

說苑の政理篇に「齊ノ桓公管仲ニ問ウテ曰ク、國何ヲカ患トスル。管仲對ヘテ曰ク、夫ノ社鼠ヲ患フト。桓公曰ク、何ノ謂ゾト。管仲對ヘテ曰ク、夫レ社ハ木ヲ束ネテ之ヲ塗ル。鼠因ツテ往イテ託ス。之ヲ燻ブレバ則チ其ノ木ヲ燒カンコトヲ恐ル。之ニ灌ゲバ則チ其ノ塗ヲ敗ランコトヲ恐ル。此ノ鼠ノ殺スヲ得ベカラザル所以ノ者ハ社ヲ以テノ故ナリ。夫レ國モ亦社鼠有リ。人主ノ左右是ナリ。內ハ則チ善惡ヲ君上ニ蔽ヒ、外ハ則チ權重ヲ百姓ニ賣ル。之ヲ誅セザレバ則チ亂ヲ爲シ、之ヲ誅スレバ則チ人主ニ察（案一に案に作る）セラル。腹ニ據リテ而シテ之ヲ有ス。此レ亦君ノ社鼠ナリ。」

この事は晏子春秋にも見え、又韓非子にも見えてゐる。晏子に見えてゐる文の一部は教科書の頭註に揭げてある。就いて參照せられたい。

【上】カミ。君上。こゝは、豐臣秀賴をさしていふ。

【發明】ハツメイ。こゝは、さかしいこと。かしこいこと。りこう。怜悧

櫻陰比事、一に「太鼓の中に發明なる小坊主を入れ置かれし事」

武家義理物語、一に「汝が發明らしき貌つきして」

【讒佞】ザンネイ。前の「佞臣讒者」に同じ。大野・渡邊等、いはゆる社鼠に等しき連中をさしていふ。

【地の利はあれども人の和なく】大阪城は地の利を占めてゐるけれども、城內の人々が、互に離れ〳〵になつて、協同一致、相和合して敵に當る氣概に缺けてゐることをいふ。

「地の利」のことは前に出てゐる。

「人の和」とは、衆人が互に相和合すること。人和。

孟子の公孫丑下に「孟子曰、天時不レ如ニ地利一、地利不レ如ニ人和一。」

【威武】キブ。いさましくたけきこと。又、そのいきほひ。

孟子の滕文公下に「富貴不レ能レ淫、貧賤不レ能レ移、威武不レ能レ屈、此之謂二大丈夫一。」

【打伏せし】中古文の語法によれば「打伏しし」とあるべきであることを、文法上より說明せられたい。

【民草】タミグサ。民に同じ。人民の生々發育するさまを草にたとへていつたのである。あをひとぐさ。蒼生。

四季物語に「この神、民草のえやみをつかさどらしめ、又いやし給はんの御誓しるければ」

續千載集、卷二十、賀歌、寶治の百首の歌奉りける時、秋田、前大納言基良「風わたる民の草葉も年あれば君にぞなびく千代の秋まで」

【天の時にや】この下に「あらん」の語が省かれてゐる。天のめぐりあはせであらうか。天運が循環したためであらうか。

「天の時」は(一)寒暑晝夜などが自然にめぐり來つて人事に關係ある時。(二)自然にめぐり來る時機。こゝは(二)の意。

易經の上經に「先レ天而天弗レ違、後レ天而奉二天時一、且弗レ違。」

孟子の公孫丑下に「孟子曰、天時不レ如ニ地利一、地利不レ如ニ人和一。」

【大御所】オホゴシ。將軍の父の住所。轉じてその人を指す。こゝは德川家康をさしていふ。

吾妻鏡、建仁三年九月六日の條に「江間殿折節被レ候二大御所一云々」

とあるのは、住居を指し、
難太平記に「其頃大御所は東寺の御陣也云々。」
明德記に「大御所尊氏將軍御代を被レ召て既に六十年云々。」
とあるのは、その人を指したのである。

【おのづからなる德風にいつしか靡く】 大御所家康公の自然にそなへていらつしやる德に、いつとはなしになびき伏すといふ意。

「德風」は、盛德の風化。仁德の感化。
書經の君陳に「爾維風、下民維草。」
論語の顏淵に「君子之德風、小人之德草、草上之風必偃。」
宋璟の詩に「德風邊草偃。」

【西天の有明の影薄れつゝ】 西軍（大阪軍）の勢の微々として振はぬことを、西天にかたむく有明の月影の次第に淡くなりゆくことに比していふ。
「西天」は西方の空。東方の空を「東天」といふに對する語。
李白の詩に「不レ知何處是西天。」

【東天紅】 トウテンコウ。「東天光」ともかく。（夜が明けようとして、東天の紅色を呈する旨を告げる義。）曉に鳴く雞の聲にいふ語。
同類節用に「東天光、俗傳云雞曉聲。」

【八面】 こゝはハチメンとよむ。八方の方面。あらゆる方面。やおも。やも。

【かしましく鳴く】 やかましく鳴く。さわがしく鳴く。
「かしまし」は、「かしがまし」ともいふ。やかましいこと。かまびすしいこと。
拾玉集、五に「あはれかないぼら松原風さびてましらも鳥もかしましきさへ」

【新日東天に昇る】 新しい太陽が東の空にのぼる。德川氏が新に天下を掌握することにたとへていふ。

【しばしは愚痴におちかた寺】 やゝ暫くの間は、互にいふことの兎角愚痴におちることをほのめかして、遠方寺の鐘聲にいひ續けたのである。「愚痴に落ちる」の「おち」と「遠方寺」の「をち」とは、假名はちがふけれども、發音は略。同じであるから、かやうにいひかけたのである。
「愚痴」（グチ）は、言つても甲斐のないことを言つてなげくこと。
「おちかた寺」は「彼方寺」の義。あちらの方にある寺。遠方の寺。
風雅集、十六、雜、百首の歌奉りしとき、徽安門院一條「をちかたの里は朝日にあらはれてけぶりぞうすき竹の一むら」

【ほの〴〵と】 ほんのりと。うす〳〵と。
宇津保物語、藏開、上に「ほの〴〵と明けはなるゝ程に」

【中略】 原文によつて、その部分を補つておく。
（この時鐘の音聞ゆ。夜明の心。尙處々に雞の聲）市「後事をそこもとに託せし上は、最早思ひ殘すこともなし。長「して貴殿には是よりして…」市「居城茨木へ、先づ立越え…」長「と仰せあるは受取り難し。もしもやこれが今生の…」市「あゝいや、いさぎよき最期をだに遂ぐべき機會を失ひし市正が命の拙さ。…いやなに、心ばかりはこの後とても君の御影に附添ひ參らせ、萬一にも杞憂的中なし、大事去りなんその時には…」長「某とても事破れて、御運の末となる時は、この世の思出、奉公納め、關東勢が眞中に、縱橫無盡の血戰なし、華々しく討死なさん。」市「おゝ勇ましゝ、いさぎよし、某ながらへ世にあらば、その目ざましき働をば、餘所ながら見物なさん。猶再會は黃泉にて。」長「さやうござらば市正どの」市「隨分堅固…」長「貴殿にも…」淨「をしきが中の生別離、まことやこれに比ぶれば黃蘗は蜜にや似たるらん。駒ひきよせて式退や、見返りがちに乘り移る、秋さび月毛乘る人の、心やいかに片手綱。」

【おぼろ〳〵】 前の「朧々」を見よ。

【面影】 オモカゲ。（一）かほかたち。かほつき。おもざし。（二）髣髴として目さきにのこる姿。樣子。
萬葉集、卷十九に「大船の　ゆらく〳〵に、おもかげに、もとな見えつゝ」
伊勢物語に「人はいざ思ひやすらむ玉かつらおもかげにのみいとど見えつゝ」

【また見ぬ影】 この世では、またと再び相見ない面影。且元と重成とが、いよ〳〵こゝに永訣して、この世で再び相見る機なきに至つたことをいふ。

8　挿圖

大阪城
釋義「大阪城」參照。

長柄堤に於ける片桐市正且元と木村長門守重成との訣別。
向つて右は且元、左は重成。

9　參考

1桐一葉創作の由來

「現代戯曲全集」第一卷には、作者によつて書かれた「桐一葉」創作の由來――といふ記事が載つてゐる。これは本課の參考としておもしろいものである。今そのうちから少し拔いておく。

人間の悲劇は種々である。例へば我が性の過失が因となつて、悲慘な業報を招くこともあれば、半以上は境遇の爲に悲運に陷ることもある。比較的單純な夫婦親子の間の關係に於てさへも、時とすればさういふことがある。まして、一國家の興亡、一大權勢の推移等を主題とした場合の個々人の運命は、半以上境遇に支配されるものではないか？　卽ち、かゝる場合には、主なる人物をして窮地に陷らしめる原因は、――幾分かはその性にも胚胎するであらうが、――寧ろその周圍の種々の事情や事件の合成力であると解すべきではあるまいか？

かういふ境遇本位の悲劇を寫すのが、この作を書く一の動機であつたといふ。（作者はその動機を、この他に二つ述べてゐる）又、「要旨」の項に引用した主題に關する文の續きには、

衰運に魅入られて、將に解體せんとしてゐる一政治的團結の內情！　白蟻の巢となつて將に覆らんとしてゐる一大伽藍！　それを支へようとしてギー〳〵と音を立てゝゐる只一本の角柱！せめてもう五六本もあればだが、その他の柱は、大概皆疑惑や猜忌や偏執や嫉妬や反間苦肉などいふ白蟻に喰ひ入られしまつてゐて、役に立たぬばかりでなく、ます〳〵白蟻の眷族を繁殖させて行くばかりである。それであつて、眞の柱ども自らはそれを知らず、皆伽藍を倒れさせまいと氣を揉んでゐるのである。で、一人も惡人はゐない。が、皆敵でもある。按ふに、かふいう境遇に立つては、恐らく、如何な英雄でも、天才でもどうすることも出來まい。いつそ直にがら〳〵と來てしまつたら、却つてサムソンなどのやうに目覺ましい最期を遂げられるのだが、彼の夏冬の大暴風が來るまでは、流石は大伽藍、少くとも外見にはその氣も見えぬのである。で、この理の解つてゐる者が、極めて少數であるといふことが、この劇の主人公の境遇悲劇たる所以である。

とある。いかにも面白い言葉である。又、

且元を自殺させないから悲劇にならぬといふ非難が、その當時にも後にもあつたが、それは單に歷史的事實が許容しない許りでなく、初めから作者の主旨とする所でなかつた。といふのは、私は、寧ろ死ぬことも生きることも出來ぬ境遇上の悲劇といふ點に興味を感じてゐたからである。

とは、特に傾聽すべき言である。

2桐一葉の梗概

序　幕

第一　大阪城內奥殿の場

幕があくと、五六人の腰元がお掃除をしながら、淀君の朝寢や大佛の鐘のことなど話し、淀君がこんなに苦しむのも、そのもとや次郎や北の方の怨靈ではあるまいか、又この頃ばかに蒸し暑いのは地震の兆ではあるまいかと、噂とり〳〵のところに、同じ腰元の椋鳥が入口の襖を搖ぶつて皆んなを驚かし、その仇討に銀之丞のことをいはうか、それともくすぐつて詫びさせようかと騷いでゐるところへ、奥女中小車・梶の葉、茶道珍柏が出てきて、奥むきのことや、今日大野一派の密談のことを話してゐる、そこへ渡邊銀之丞が出てきて、珍柏が蜻蛉に取りもたぬのでダダをこねる。そこへ片桐且元の娘蜻蛉がしよんぼりと出てくるので、奥女中も茶道も退場し、銀之丞が口說いたがきかない。そこへ椋鳥が出て、蜻蛉樣お召しといつて退場させ、銀之丞を責める。

第二　奥庭茶庭の場

さつきから石川伊豆・大野修理亮・渡邊內藏の三人は片桐且元の問題につき密談を遂げてゐたが、渡邊は一も二もなく片桐を二心の臣といひけなし、剩へ速見・木村なども惡口するので、短慮な石川が怒り、大野がとめるのもきかず、果は刀の柄に手をかけようとするところに、大野入道が入り來り、悴修理亮及び渡邊を退け、石川に說いて、片桐の二心は疑ひなしといつておだて、果ては城中で片桐を殺すやうにそゝのかす。

第二　幕

第一　吉野山櫻狩の場（夢幻）

まだ太閤が存命中で、朝鮮征伐の戰捷祝ひに吉野山に花見が催される。この日佐々成政が奴姿に化けて秀吉を狙つゐるので、淀君のはからひで石田三成を太閤に仕立ててゐるのを少しも知らぬ成政は、鑓をもつてつくところを押へられた。今日の災を免れたのも偏に淀君の智略とほめるが、淀君は少しも浮かぬ顏をしてゐるので、秀吉がすかして見ると、この頃の秀次の亂行といふのも、實子秀頼ができた爲めであるから、いつそ秀頼を殺してしまふといつて懷劍を振するのを太閤はとゞめ、思案にくれてゐると、又もや淀君は秀頼を殺さうとすると、舞臺がだんだん暗くなり、秀吉と思つたのは秀次にかはり、恨の數々をのべ、この恨はいつか思ひしらせるといふかと思へば、一團の鬼火がもえ、花と見えしは枯薄、そこに畜生塚があるのみ。

第二　畜生塚怨靈の場

淀君は秀次の亡靈を見てけたゝましいうめきをあげ、石田と呼べば、それも亡靈であり、小西と呼べば、亡靈であり、正榮尼も大藏局もみな亡靈である。淀君は狂氣の如く立ち騷ぎ、懷劍を拔いて切らうとするが、男女の亡靈はカラ〳〵と笑ふのみである。

第三　淀君寢所密訴の場

淀君は懷劍をふりかざしながらたけり狂つてゐるので、饗庭局が出て懷劍をとると、やつと正氣にかへる。咲き亂れた棟の花百合を見るにつけ、はかなく亡びた佐々成政のことや、我が身の榮華のことや、さては太閤歿後の衰運や、德川の横暴や、まし

て今見た秀次の亡靈などのことを思ひめぐらしてゐると、いつか神經が高ぶつてきて、やるせないところへ、正榮尼と大藏卿とがはひつてきて、片桐は德川三難題の内の淀君下向にきめ、しかもそれは家康のお手かけとなるのだとたきつけたので、淀君はいやが上にも癇をたかぶらせた。そこへ大野修理亮がきて、片桐は二條城の板倉伊賀と何かしめし合はせて、軍勢を率ゐてどこかへ進軍する由だと告げた。そして大藏卿・修理亮母子はひたむきに且元誅伐を申すが、流石淀君はあわてない。

第三　幕

第一　城内濠の間の場

茶道珍柏が諸士を相手に片桐復命の口上を話した後に片桐が出てくるのを織田入道常眞が呼びとめ、お家のためいろ〳〵心勞するのを慰め、さて本日淀君下向の點に就いて別に申聞をしなかつたのは何故であるか、差支がなくは聞かせてくれといふが、たゞ當座のがれにすぎないといつて眞意を打ちあけないので、歸城の途中を用心しなさいといつて別れる。そこへ、さつき襖の蔭にかくれて立聞してゐた石川伊豆がつか〳〵とあらはれ、片桐の二心をなじりながらも、眞意をきゝたがるが、片桐はどうしても打ちあけないので、いよ〳〵二心ある腰ぬけと罵り、介錯してやるから切腹せよといふが、濡衣を乾すまでは生きのびるといふので、伊豆はくやしくてたまらず、脚をあげてはたと蹴たふす。

第二　黒書院評議の場

織田常眞・大野入道道軒は秀頼のまへで片桐處罰のことを議してゐる。織田は單なる疑ひのみで罪することはできまいといふけれども、大野は逆臣〳〵といひたて、專斷的に七手組に命じて討取らせようとするところに、病中の木村重成が出仕して、第一、疑ひのものを罪してはいけない、第二、今片桐を殺しては關東に口實を與へることになる。疑はしきことあらば更めて片桐を呼んで糺明するがよからうと辯舌さわやかに申立てたので、秀頼もその氣になつてゐるところへ、淀君が出て、我が身を關東へ下すとは既に決したことで、片桐の不忠は明白なこと、それを今更詮議立てして片桐を庇ふとは、母を犧牲にしても身を安泰にしたいかとヒステリックにいひかゝる。木村が傍から人質の問題とは別事であるとすかしても、そんなに片桐が大切なら我が身を殺してくれと泣き號ぶ。大野一統は得たりかしこしと、又もや七手組を差し向けようといふのを、木村は制して、片桐糺明は私に一任されたい、もし逆心あらば、差違へるとも切腹を迫るとも解決してこようといふと、大野は木村を死地へ陷れるに都合よしと賛成する。重成は勇み立つて出てゆく。

第三　片桐邸上使の場

且元は出仕姿のまゝ燈下に坐り、方廣寺建築費用の計算をしてゐる。そこへ木村重成がきて、人質一條のことを聞く。且元は鐘の銘について下向したのに、一月たつても二月たつても應對がなく、やつと應對があると、銘のことはそつちのけで、浪人を抱へること、福島・加藤としげ〳〵交通あるは何故と、思は

ぬ方の詰問。且元はやつとのことで分疏をしたかと思ふと、次の三難題、その内人質をおうけしたのもわけあつてのこと。然るに正榮尾・大藏卿が下向したために家康の策略にのり、且元が板挟みになつたのだと答辯した。重成は更に人質をうけたわけがあるとは何かときくと、品川の地は卑濕だから、地ならしに一年、建築に一年、遲延を申して一年、三年もすれば狸爺が死ぬであらうとの考を逐一話すので、重成も滿足し、この旨と秀頼に申し上げてその手から淀君をさとさうといつてゐるところに、さつきから覆面で忍びこんでゐた石川伊豆は忠臣を見ぬくことができなかつた愚眼を恥ぢて、眼玉をくりぬき自害せんとするを押し止め、暫く命を生きて忠義をつくせと諭す。

第四　幕

第一　豐國神社鳥居前の場

且元の娘蜻蛉がしよんぼりくるのを認めた茶道珍柏はいろ〳〵と慰めた上、明日且元の出仕は命の瀬戸際ぢやと吃驚させ、その救ひをたのむは長門さまだといつて、紅筆で疊紙へたのみの一條をかゝせる。そこに銀之丞が出てその文を奪ひ、掠鳥が出てきて三人巴となる。

第二　隨身門前の場

三人は追ひつ追はれつ、こゝまでくると、淀君が梶の葉・小車を先に立て、腰元を隨へ、袿・袴にて出てくる。後から正榮尼・饗庭の局が出る。三人のものが神前で騒いだ事を責め、蜻蛉が重成に紅筆で疊紙に手紙をかいたことが問題となる。そこに始めから畏にかけた大藏卿と珍柏が出て、それは戀文であるといふ。結局蜻蛉は公平な饗庭の局に預けられる。

第五　幕

第一　渡邊内藏介邸の場

銀之丞は戀する蜻蛉が珍柏の惡計にかゝつて無實の罪をうけて苦んでゐると聞き、蜻蛉の仇珍柏を殺すといつて槍をさげ出すのを乳母が制すると、果ては蜻蛉と一緒になれぬなら、死ぬる死ぬるとダゝをこねる。そこへ母正榮尼が歸り、いとしい息子のためでも逆臣の娘は添はされぬといふ。又、内藏介が歸り、木村と數刻議論をして見ると、片桐は逆臣であるまいといふことがわかつたと告げると、うつかり當にはならぬが、大野父子も氣にくはぬといふ。

第二　饗庭の局部屋の場

蜻蛉はあらぬ濡衣をきせられたを苦にやみ、病床に伏つてゐる。朋輩の鈴木・花野などが慰めをいつて歸つた後に、正榮尼がきて、いろ〳〵廿口なことをいつた末、悴銀之丞の戀をかなへてくれとたのみ、返事に窮してゐると、いやなら父且元殿のとりなしもしないと魚心水心を示したので、蜻蛉もやむなく諾を答へる。尼は大いに喜び、且元を啻討にするなどは根も葉もないこと、よく安心がゆくやうに父且元に手紙をかいたらよからうといつて去る。蜻蛉は手紙をかいてゐると、饗庭の局が歸り、城中には如何なるたくみがあるかもしれないから、その手紙は出さぬがよいとすゝめる。やがて饗庭は梶の葉に呼ばれて行くが、

蜻蛉はつく〴〵と惡計がおそろしくなり、たとひ自分は手紙を出さなくても、珍柏が僞筆をつかつて父をおびき出しはせぬか、あゝ長門樣の濡衣といひ、今の約束といひ、身も世もあらぬ思ひに悲しみ歎く。

第三　奥殿廊下乳母自害の場

どこともなく迷ひ出た銀之丞の後を追つて、乳母のとらは御殿の長廊下まで尋ねてきたが、方角がわからぬので困つてゐるところへ、椋鳥がきた。それが銀之丞の乳母であるときいて親切にいたはるが、蜻蛉との緣談が整うたときいて、ツン〳〵歸る。乳母は再び途方に暮れてゐるところへ、銀之丞は腰元どもにはやされながらやつてくる。乳母がうつかり蜻蛉の自害のことをきかせたので狂氣のやうになり、乳母の背に馬乘りになつて、蜻蛉を生きかへせとダゝをこねる。そこに正榮尼がきて、蜻蛉自害のことを銀之丞にきかせたことを大いに怒る。正榮尼はそれをうそぢやとだましたけれども、銀之丞は既に發狂して、あれ蜻蛉が手招きするといつて幻のやうに走りゆくので、正榮尼はもう腹が立つてならず、正氣にしてかへせと乳母をせめる。そこへ身投ぢや〳〵といふ聲がすると思ふと、椋鳥が出てきて、銀之丞が泉水に陷つて死んだといふ。乳母はたまらなくなつて、銀之丞の殘して行つた脇差で自害する。

第四　淀君寢所珍柏横死の場――略

第六幕

第一　片桐邸奥書院の場

片桐の臣十河・今村は、今日主人が登城するのは險呑であるからどうしても止めたいといつてゐるところへ、奥方一葉がかへつてきて、なほもこの話をしてゐると、奥より且元は出仕の裝束にて出で來り、淀君並に右大臣からこれほどの御誓書を頂いた上は登場せねばならぬといつてゐるところへ、且元の弟主膳が暫くと止め、その起請は僞りである上に蜻蛉の自害を傳へるので、且元も決心をかへ、もう一度出仕して徽衷を陳じようといふのを主膳がとゞめてゐるところに、木村清藏が手負となつて注するには、大野父子が理不盡にも片桐の番所に攻めよせたといふ。そのところへ又もや石川伊豆が隻眼に薙刀を提げ、大童で出で來たり、大野父子の誅罰はこの時なり、いざ出陣〳〵とわめき立てる。且元はその無暴を誡め、いままで苦衷をつゞけてきたことがみんな水の泡となつたと歎息する。俄かに外面の騷々しさ。大野父子の押しよせたるか。かくと見てとつた石川は、おのが無分別がこの行きちがひを起したと深く恥ぢて自害する。今は百計悉く齟齬し、死すべき折をさへも失つた且元の思ひ入れ。風の音して梧葉がちる「我が名に因む庭前の梧桐こと〳〵く搖落なし、蕭々たる天地の秋……ア、有情は洩れぬ榮枯盛衰……是非もなき定めぢやのう」

大詰　長柄堤の別れの場――敎材

一七　大楠小楠

1　解題

太平記巻第三、主上御夢の事、附楠の事（笠置の靈夢）及び巻第二十六、正行吉野に參る事（最後の參内）の二篇を合はせて一課の教材とした。

太平記四十巻は、花園天皇の文保二年（皇紀一九七八年）から後村上天皇の正平二十二年（皇紀二〇二七）に至る、凡そ五十年間の治亂の顚末を敍したものである。

作者については諸說があつて詳かでない。その文章は、いはゆる和漢混淆文の上乘なもので、或は雄健、或は流麗、實に朗々として誦するに足る。加之、その內容には大義名分の精神が含まれてゐるので、古來多くの人の愛讀した點に於ては、軍記物のうち第一の書といつてよからう。

「太平記」について小中村淸矩の「國史學の栞」に

「作者は僧玄惠なりと云ふが普通の說なれど、太平記編撰由來書といふものによれば、卷によりて撰者を異にせり。鎌倉大草紙には太平記批判記の說によりて尊氏歿後凡そ五十年の後撰び集めたる記なりといへど、撰者のことをいはず。帝國大學史料編纂掛にて研究せし說には、洞院公定の日記に小島法師の作なりとあるを採れり。何れにせよ編者詳かならざる書といふべし。されど、事實を記して詳かなれば、古來衆人の愛讀せるものと見えて、足利の世よりして理盡抄・難太平記の抄書あり。德川氏の初代には上下一般に弄びたりしかば、太平記讀みといへるもの（今の講談師の始めなり）さへ出で來て生計の資としたれば、評判・無極抄・綱目・大全・高義・年表の類の末書も數種に及べり。普通の本は古板本・活字本・頭書本・枕本及び水戸の參考本等なり。」

とある。

尙、博文館の國文叢書本の「太平記」の上卷に、萩野博士の評論が載つてゐるが、甚だおもしろい。一讀されることを望む。

最近女子學習院敎授射手矢貞三氏の著に「少年太平記」がある。「少年」とはあるが、中學二三年の生徒の讀物としてふさはしいものである。

2　編纂の用意

今や我が國は謂はゆる非常時である。日本精神高揚の必要なる、今日の如きは古來未だ曾て見ないところである。この時に當り、この精神の權化ともいふべき大楠公並に小楠公の勤王事蹟を味讀せしめることは、誠に時宜を得たものといはねばならぬ。別して去る昭和十年は大楠公が湊川陣歿後六百年に當り、五月二十五日卽ち公が陣歿の當日は、河内の觀心寺なる境内で莊嚴な墓前祭、神戸の別格官幣社湊川神社で盛大な式祭が執行せられ、新聞に書きたてられ、ラヂオに報ぜられて、八千萬國民の視聽をあつめた。思ふに非常時を克服する唯一の道は、全國民が一致團結、大小兩楠公の精神を精神として君國にその力をいたすにある。本課の教育的價値はこの意味に於て特に高い。教授者各位は編者の意圖の存するところを諒とし、全心全靈を打ちこんで本課の徹底的教授に當られ、十二分の効果を收められたい。

3　要旨及び概說

笠置の靈夢　笠置の皇居は警固のものが無勢である。そこで主上の御夢によつて、楠木正成が召し出されることになる。本章の眼目は、その正成の勅答する言葉にある。殊に、「正成一人未だ生きてありと聞し召され候はば、聖運遂に開かるべしと思し召され候へ。」の結語に、いはゆる楠公精神の眞面目が窺はれる。勿論、そのお召しになるまでの說話も、當時の天下の形勢と、皇室に對する國民感情と、正成の出自とを知らしめるために大切な部分である。

最後の參內　先づ阿部野の合戰に、敵をいたはり助けたといふ話によつて、正行の情のほどを思はしめ、次に、最後の參內の節に至つては、やはり、正行の奏上する言葉の裡に、忠孝兩全を期する精神を中心として、美しくも亦勇ましく、かなしくも亦をゝしく決心した若々しいその心根の現れてゐることを味識せしめ、更に、その時の主上の御言葉の畏さを正行の身になつて考へしめると共に、彼が勅答にも及ばず、遂に如意輪堂の壁板に一首を書き添へるに至るあはれさを玩味せしむべきである。

4　取扱上の注意

▲忠君愛國の事實と精神とは、我が國體の精華として、今日ではあまりにも高調せられ、あまりにも當然普通になつてゐる。しかし、一般國民の間に、大義名分の念の薄らいだ時代に於ては、このあまりにも當然普通なことも、これを實現しこれを躬行することは、決して容易なことではなかつた。太平記の傳へる所によれば、名和長年でさへ、隱岐から遁れ給うた主上を迎へ奉ることに對して、初めは首を傾けたといふではないか。われ等は決して、長年を貶しようとするのではないが、今日、正成と共にその忠義を併稱せられてゐる長年でさへ、太平記の傳へる所が事實であるとするならば、當時大義名分の光が如何に薄らいで居たかは、これを察することが出來ると思ふのである。本課に於て、正成の出現するまでの部分を扱ふ時は、特に、國史と聯絡して、この時代の國情殊に一般國民の大義名分の念が如何なる有樣であつたかを知らしめるやうにしたいものである。

▲正成の勅答は、右の如き國情・民情を背景とするとき、一層その美しい光を發揮し、讀者を感動せしめることも、一入強くなるであらう。「正成、弓矢取る身の面目、何事かこれに過ぎじと思ひければ、是非の思案にも及ばず、云々」とあるところは、今日の軍人が「陛下」といふ一語を耳にするや直に姿勢を正すべく訓練されてゐる點から見ると、當然のことをわざとらしく敍べたとも感ぜられようが、當時の歷史觀からすれば決してさうではないのである。

▲正成の勅答に於ては、その智謀の勝れてゐたこと、戰の勝負といふものに就いての考の定つてゐたこと等を先づ看取せしむべきであるが、殊に「正成一人未だ生きてありと聞し召され候はば云々」の一語に、彼の忠誠と、責任感と、大膽不敵さとが非常なものであつたことを思はしむべきである。

▲楠木正行の情愛は、敵の兵どもを感奮せしめるほどに深く厚く、その忠節・義心は、主上を始め奉り、時の傳奏の心を動かして、感涙を催さしめた。のみならず、永く後世の國民を鼓舞して、如何に忠義の精神を奮ひ起さしめたことであらう。この章では、その正行の武功を知らしめると共に、その情愛に富み、忠誠の念の强かつた人

格を偲ばしめ、特に「かへらじと」の吟詠に於ては、その忠臣としての覺悟と、そのおくゆかしい雅懐とを考察するところあらしめたい。

◆「小楠公」といふ名は、如何なる生徒にも親しまれてゐる。殊に「かへらじと」の歌に關した話は櫻井驛の話と共に彼等の熟知して居ることと思ふ。それゆゑ、本章も「空ゆく雁」の課などとおなじく、形式から入り、或は形式を主として扱ひ、内容は生徒の自得に據らしめるやうに導かるべきであらう。その史實的内容については、國史科とも連絡を取つて習得せしむべきであらう。

◆正行が拜謁を願ひ出て、上奏する言葉は、言々句々肺肝から流れ出るやうで、讀者に強い感動を與へる。殊に「今生にて今一度君の龍顔を拜し奉らん爲に參内仕つて候」といつて、涙を鎧の袖にかけて、義心がその面に表れたのに對して、主上が「朕汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし。」と仰出される場面は、如何にも劇的な描寫であつて、莊嚴華麗な背景の裡に悲壯な情景が躍動して居る。この場の情景を想像させて、正行の人格と心事とを會得させたいと思ふ。

5 設問

1　次の語句を註釋して見よ。

イ、武威に恐れて

ロ、手勢百騎とも二百騎とも打たせたる大名

ハ、誰を設けんための座席やらん

ニ、文字につきて御料簡あるに

ホ、南面の德を治めて、天下の士を朝せしめん

ヘ、自ら御夢を合はせられて

ト、天下草創の功は、武略と智謀との二つにて候

2　正成の勅答する言葉の中で、最も人を感動せしめるところは何處であるか。

3　正行の奏上する言葉の裡には、どういふ精神が表現されてゐるか。その最も大事な點は何であるか。

4　次の語句を解釋して見よ。

イ、四五日皆勞はりて

ロ、色代してぞ送りける

ハ、京勢、催勢

ニ、危きを見て命を致す所、豫て思ひ定め給ひけるかによつて

ホ、我と手を碎き合戰を仕り候はずば

ヘ、有待の身思ふに任せぬ習

ト、遵修の爲と覺しくて

6 釋義

【大楠】ダイナン。大楠公。楠木正成。その子正行を小楠（小楠公）といふに對する語。建武中興の名將。吉野朝隨一の忠臣。河内の人。正康の子。世々金剛山の麓の七郷の領主であつた。

幼にして剛邁類悟、文武の道に達し、最も軍略に長じてゐた。父の後をうけて兵衞尉となり、威望が近郷に高かつた。元弘元年（一九九一）後醍醐天皇は討幕を企て給うて、事顯露し、潛かに難を避けて笠置の行宮におはした。そのとき畏くも藤原藤房を遣はして正成を召させ給うた。正成は大命をかしこみ、直に一族郎黨を率ゐて難に赴き、赤坂・千早等の諸城に據つて屢賊の大軍を惱まし、新田義貞をして虛に乘じて鎌倉なる北條氏の牙營を衝かしめ、遂によく建武中興の偉業を翼成した。功を以て檢非違使、左衞門尉に任じ、攝津・河内の兩國を賜はつた。延元元年（一九九五）足利尊氏が叛し、九州の兵を率ゐて東上するや、これを湊川に防いで奮鬪し、衆寡敵せず、弟正季と七生報國を誓ひ、湊川の北なる民舍に自刄した。時は五月二十五日。年四十三。

天皇震悼已み給はず、正三位左近衞中將を贈らせ給うた。明治元年四月二十一日、勅して祠を湊川に建てて湊川神社と號し、別格官幣社に列せられた。明治十三年七月、正一位を追贈せしめ給うた。

【小楠】セウナン。小楠公。楠木正行。正成の子。

延元元年（一九九五）湊川の役、年市めて十一、櫻井驛で父の遺訓をうけ、河内に歸つた。同十二月後醍醐天皇が賀名生へ行幸あらせられた際、家臣を率ゐて警衞しまゐらせた。同四年八月天皇崩御の際、行宮に宿衞した。爾來屢兵を紀伊・河内の間に出して敵を苦しめた。尊氏はこれを憂ひ、正平二年（二〇〇七）高師直及びその弟師泰に兵六萬を授けて正行を討たせた。そこで正行はその十二月二十七日吉野の行宮に參内して後村上天皇の龍顔を拜し、永訣の意を上聞に達し、又如意輪堂に詣でて後醍醐天皇の御廟を拜し、手兵三千を率ゐて進んで師直の軍を四條畷に迎へ擊つたが、戰利なく、身に數箭を被つた。乃ち弟正時と交刺して王事に斃れた。年二十三。一族二十三人、從兵百四十三人悉くこれに殉じた。時に正平三年正月五日であつた。

明治二十二年十二月、祠を戰死の地に建ててその靈を祀り、四條畷神社と號し、別格官幣社に列せられた。

明治九年十二月從三位を贈らせられ、同三十年四月更に從二位を贈らせられた。

【笠置の靈夢】　カサギのレイム。笠置寺におけるふしぎの御夢。くはしくは本文に見えてゐる。

「笠置寺」は新義眞言宗の名刹。京都府相樂（サガラ）郡笠置村笠置山上にある。正しくは鹿鹿山彌勒寺。天武天皇（一說に大津皇子）の御願により、白鳳十二年（一三四四）建立。元弘元年（一九九一）後醍醐天皇はこゝに臨幸して行在所と定めたまうたが、月餘にして賊軍の攻落するところとなつた。

「靈夢」は神佛の示現あるくすしきゆめ。ふしぎなゆめ。

山海經に「自以靈夢爲國祥慶。」

東鑑、一、治承四年八月二十四日の條に「令レ參二籠清水寺一……蒙靈夢之告一、忽然而得三一寸銀正觀音像一。」

【元弘元年】　ゲンコウグヮンネン。後醍醐天皇の御代。皇紀一九九一年。

【主上】　シュジャウ。天子。至尊。こゝは後醍醐天皇を申す。

保元物語、主上三條殿行幸の條に「主上は御引直衣にて腰輿に召さる。」

「後醍醐天皇」は第九十六代の天皇。御諱は尊治（タカハル）。大覺寺統の君として文保二年（一九七八）御卽位。深く皇威の衰へたるを歎かせられ、北條氏を滅して政權を恢復しようと企てさせられた。かくて元弘の亂を經て遂に北條氏を滅したまひ、建武中興の新政を行はせられたが、程なく足利尊氏が叛くに及んで、天下は再び亂れ、天皇は爲に吉野に遷幸したまうた。延元四年（一九九九）吉野に崩御。寶算五十二。吉野山の塔尾陵に葬り奉つた。

【笠置へ臨幸あつて】　後醍醐天皇の北條氏御討伐の御謀洩るゝや、北條氏は兵を出して內裏を圍まうとした。こゝに於て、天皇は元弘元年（一九九一）八月二十四日潛かに南都に幸し、次いで和泉の鷲峯山に移御、更に笠置山に臨幸、山上なる笠置寺に行在所を設けさせられた。北條氏の軍來り攻むるに及び、天皇は御姿をかへさせられて落ち延び給うたが、御不運にも遂に賊徒のために捕へられ給うた。「さしてゆく笠置の山を出でしより天が下にはかくれがもなし」とは、その際の御製で、まことにかしこき極みである。

「臨幸」（リンカウ）とは、天皇の行幸して、その場所に臨ませられること。

唐書の儒學傳の序に「數臨幸觀釋菜。」

宮衞令に「凡車駕有所臨幸。」

【本堂】　ホンダウ。本尊卽ち寺院の主たる佛像を安置する佛堂。こゝは、笠置寺の本堂である。

長秋記、長承三年五月十三日の條に「先令レ禮本堂一、次令レ禮二懺法堂一給。」

【皇居】　クヮウキョ。天皇の住ませたまふ宮殿。皇宮。

御所。宮城。禁裏。

孔融の薦禰衡表に「帝室皇居必蓄二非常之寶一。」

源平盛衰記、十六、遷都の條に「池大納言頼盛の家を皇居と定めて」

【武威に恐れて】　六波羅なる北條氏の武威に恐をなして。

「武威」（ブヰ）とは、たけき威力。武力の威勢。

源平盛衰記、十八、文覺、頼朝に謀叛を勸むる條に「彼の山は大衆多さところにて、武威にも恐れざりければ」

【參り仕ふる人】　笠置に參つて、御味方につく人。

【叡山東坂本の合戰】　元弘元年八月二十六日、官軍と北條方の六波羅勢との比叡山東坂本に於けるたゝかひ。太平記上卷からその顚末を左に轉載する。

師賢登山の事

附、唐崎濱合戰の事

尹大納言師賢卿は、主上の內裏を御出ありし夜、三條河原まで供奉せられたりしを、大塔宮より樣々仰せられつる子細あれば、臨幸のよしにて山門へ登り、衆徒の心をも伺ひ、又勢をもつけて合戰を致せと仰せられければ、師賢、法勝寺の前より袞龍の御衣を着して、瑤輿に乘替へて、山門の西塔院へ登り給ふ。四條中納言隆資・二條中將爲明・中院左中將貞平、皆衣冠正しうして供奉の體に相順ふ。事の儀式まことしくぞ見えたりける。西塔の釋迦堂を皇居となさる。

主上山門を御憑みありて臨幸なりたるよし披露ありければ、山上・坂本は申すに及ばず、大津・松本・戸津・比叡辻・仰木・絹河・和仁・堅田のものまでも、われさきにと馳せまゐる。その勢東西兩塔に充滿して、雲霞の如くにぞ見えたりける。かゝりければ、六波羅には未だ曾てこれを知らず。夜明けければ、東使兩人內裏へ參りて、先づ行幸を六波羅へ成し奉らんとて打立ちける處に、淨林房阿闍梨豪譽がもとより六波羅へ使者を立て、今夜の寅の刻に、主上山門を御憑みありて臨幸成りける間、三千の衆徒悉く馳參り候。近江・越前の御勢を待ちて、明日は六波羅へ寄せらるべきよし評定あり。事の大きになり候はぬ先に急ぎ東坂本へ御勢を向けられ候へ。豪譽後攻仕つて主上を取り奉るべしとぞ申しける。兩六波羅大いに驚きて、先づ內裏へ參りて

見けるに、主上は御座なくて、局町の女房たちこゝかしこにさしつどひて、泣く聲のみぞしたりける。さては山門へ落ちさせ給ひたる事子細なし。勢つかぬうちに山門を攻めよとて、四十八箇所の篝に畿内五箇國の勢をさしそへて五千餘騎、追手の寄手として、赤山の麓、下松の邊へさし向けらる。搦手へは佐々木三郎判官時信・海東左近將監・長井丹後守宗衡・筑後前司貞知・波多野上野前司宣道・常陸前司時朝、美濃・尾張・丹波・但馬の勢をさしそへて七千餘騎、大津・松本を經て唐崎の松のほとりまで寄せかけたり。

坂本にはかねてより相圖を指したる事なれば、妙法院・大塔宮兩門主、宵より八王子へ御上りあつて、御旗を揚げられたるに、御門徒の護正院の僧都祐全、妙光坊の阿闍梨玄尊を始めとして三百騎五百騎、こゝかしこより馳參りける程に、一夜の間に御勢六千餘騎になりにけり。天台座主を始めて、解脫同相の御衣を脫ぎたまひて、堅甲利兵の御貌にかはり、垂跡和光のみぎり忽ちに變じて、勇士守禦の場となりぬれば、神慮も如何あらんとはかり難くぞ覺えたる。

さるほどに、六波羅勢已に戸津の宿の邊まで寄せたりと坂本のうち騷動しければ、南岸の圓宗院、中坊の勝行房、はやりをの同宿ども、取るものも取りあへず唐崎の濱へ出合ひける。その勢皆かちだちにて、しかも三百人には過ぎざりけり。海東これを見て、「敵は小勢なりけるぞ、後陣の勢の重ならぬ前にかけ散らさでは叶ふまじ。つどけや者共。」といふまゝに、三尺四寸の太刀を拔いて、鎧の射向の袖をさしかざし、敵の渦まいて控へたる眞中へかけ入りて、敵三人切伏せ、波打際に控へて、續く御方をぞ待ちたりける。岡本坊の播磨の堅者快實、遙かにこれを見て、前につき雙べたる持楯一帖かつぱと踏倒し、二尺八寸の小長刀水車に廻して躍りかゝる。海東これを弓手に受け、冑の鉢を眞二つに打破らんと隻手打に打ちけるが、打外して、袖の冠板より菱縫の板まで、片筋かひにかけず切つて落す。この太刀を餘りに强く切らんとて、弓手の鐙を踏みをり、已に馬より落ちんとしけるが、乘り直りける處を、快實長刀の柄を取延べ、内甲へ鋒上りに二つ三つ透間もなく入れたりけるに、海東あやまたず喉笛をつかれて馬より眞倒に落ちにけり。快實やがて海東が上卷に乘つかゝり、鬢の髮をつかみて引さかけて首かき切つて長刀に貫き、武家の大將一人討ち取つたり、物始よしと悅びて、あざ笑ひてぞ立ちたりける。こゝに何者とも知らず、見物衆の中より、年十五六ばかりなる小兒の髮唐輪にあげたるが、麴塵の筒丸に大口のそば高くとり、金作の小太刀を拔きて快實に走りかゝり、甲の鉢をしたゝかに三打四打ぞ打ちたりける。快實きつと振返りてこれを見るに、齡二八ばかりなる小兒の、大眉に鐵漿黑なり。これほどの小兒を討留めたらんは、法師の身に取りては情なし。打たじとすれば走りかゝり〳〵、手繁く切廻りける間、よし〳〵さらば長刀の柄にて太刀を打落して組止めんとしけるところを、比叡辻の者どもが田の畔に立ちわたりて射ける横矢に、この兒胸板をつと射拔かれて、やにはに伏して死にけり。後に誰ぞと尋ぬれば、海東が嫡子幸若丸といひける小兒、父が留め置きけるに依りて軍の伴をばせざりけるが、猶も覺束なくや思ひけん、見物衆に紛れて、跡について來りけるなり。幸若稚しといへども、武士の家に生れたる故にや、父が討たれけるを見て、同じく戰場に討死して名を殘しけるこそ哀なれ。海東が郎等これを見て、二人の主を目の前に討たせ、剩へ首を敵に取らせ、生きて歸るものやあるべきとて、三十六騎の者ども轡を雙べてかけ入り、主の死骸を枕にして討死せんと相爭ふ。快實これを見てから〳〵と打笑ひて、「心得ぬものかな、御邊たちは敵の首をこそ取らんずるに、御方の首をほしがるは武家自滅の瑞相あらはれたり。ほしからば、すは取らせんといふまゝに、持ちたる海東が首を敵の中へがばと投げかけ、坂本樣の拜み切、八方を拂うて火を散らす。三十六騎の者ども、快實一人に切りたてられて、馬の足をぞ立ちかねたる。佐々木三郎判官信時後にひかへて、御方討たすなつどけやと下知しければ、伊庭・目賀多・木村・馬淵、三百餘騎をめいてかゝる。快實既に討たれぬと見えける處に、桂林房の惡讃岐・中房の小相模・勝行房の侍從堅者定快・金蓮房の伯耆直源、四人左右より渡り合ひて、鋒を差しあはせて切つて廻る。讃岐と直源と同じ處にて討たれにければ、後陣の衆徒五十餘人、連れて又討つてかゝる。唐崎の濱と申すは、東は湖にて、その汀崩れたり。西は深田にて馬の足も立たず、平沙渺々として道せまし。後へ取廻さんとするも叶はず、中に取籠めんとするも叶はず、されば衆徒も寄手も互に面に立ちたる者ばかり戰ひて、後陣の勢はいたづらに見物してぞ控へたる。已に唐崎に軍始まりたりと聞えければ、御門徒の勢三千餘騎、白井の前を今路へ向ふ。本院の衆徒七千餘人、三宮林をおり降る。和仁・堅田の者どもは小舟三百餘艘に打乘りて、敵の後を遮らんと、大津をさして漕ぎ廻す。六波羅勢これを見て、叶はじとや思ひけん、志賀の圓魔堂の前を横切に、今路にかけて引返す。衆徒は案内者なれば、こゝかしこのつまり〳〵に落合ひて散々に射る。武士は皆無案内なれば、堀がけともいはず、馬を馳せたふして引きかねける間、後陣にひける海東が若黨八騎、波多野が郎等十三騎、眞野入道父子二人、平井九郎主從二騎、谷底にて討たれにけり。佐々木判官も馬を射させて乘替を待つほどに、大敵左右より取りまいて、既に討たれぬと見えけるを、名を惜しみ命を輕んずる若黨ども、返し合はせ〳〵所々にて討死しけるその間に、萬死を出でて一生にあひ、白晝に京に引きかへす。この頃までは天下久しく靜かにして、軍といふことは敢へて耳にも觸れざりしに、俄なる不思議出で來ぬれば、人皆あわて騷いで、天地も只今打返すやうに沙汰せぬところもなかりけり。

○「叡山」(エイザン)は比叡山の略。京都府(山城)と滋賀縣(近江)との境にある名山。山體は概ね古生層より成り、京都市東面の諸山中最も人目をひく。山上には著名な延曆寺がある。近年京都方面からも、坂本方面からも鋼索鐵道が設けられ、登山が容易になつた。この山は小禽類の蕃殖地として名高く、天然記

念物に指定されてゐる。○「東坂本」は、坂本の東部。坂本は滋賀縣（近江國）滋賀郡坂本町。京阪鐵道の終點にあたり、これから叡山中堂まで延長二粁の鋼索鐵道が通じてゐる。延暦寺の門前町で、僧房が多く、又官幣大社日吉（ヒエ）神社がある。

【六波羅勢】　ロクハラゼイ。六波羅廳の南北兩探題卽ち北條時益及び仲時の配下に屬する軍勢。

「六波羅廳」は京都の六波羅（京都清水山の西麓、賀茂川の東に瀕し、五條松原通の末から南七條通の末に至る地の總稱）にあつた鎌倉幕府の政廳。問注所・侍所・引付衆・評定衆・奉行人等をおき、內裏を守護し、近畿西國の政務を掌つた。南北兩探題をおき、いづれも北條氏の一門を以てこれに任じ、大事は鎌倉の節度を受け、小事は專斷せしめた。承久の亂後、北條泰時が北六波羅に、弟時房が南六波羅に鎭してから、元弘三年（一九九三）官軍に破られて、時益・仲時の戰死に至るまで繼續した。

【當寺】　タウジ。こゝは笠置寺。前の「笠置」參照。

【衆徒】　シュウト。又シュト。多數の僧徒。

保元物語、新院御所各門々固の條に「南都の衆徒」

【手勢】　テゼイ。手下の軍勢。部下の兵卒。手のもの。

平家物語、十一、判官都落の條に「手勢六十餘騎」

【大名】　ダイミャウ。(一)平安朝の末、多くの名田を有したものの稱。(二)鎌倉時代に、將軍の家臣で、領地の大いなる守護・地頭に與へた稱號。(三)江戸時代に、知行一萬石以上の武家の稱。こゝは(二)の意。

源平盛衰記、三十四、東國兵馬法の條に「この馬をば大名・小名八箇國の者ども、內外につけて所望ありき。」

【この勢】　このゼイ。この軍勢。この手勢。

【警固】　ケイゴ。非常を警めて守り固めること。又、その人。又、その設備。警衛。警備。

源平盛衰記、四、山門御與振の條に「源平の軍兵、勅命に依つて四方の陣を警固す。」

太平記、二、俊基東下りの條に「轅を叩きて警固の武士を近づけ」

【思し召し煩はせ給ひて】　思案にくれさせられて。

【御まどろみ】　御假睡。

「まどろむ」とは、目蕩（とろ）むの義。しばしねむること。われ知らず眠ること。とろりとすること。

源氏物語、桐壺の巻に「夜の御殿に入らせ給ひても、まどろませたまふこと難し。」

【紫宸殿】　シシンデン。又ししいデン。內裏の正殿。前殿・南殿・正殿、などともいふ。朝賀・卽位の公事を行はせられた處。承明門內、仁壽殿の南にあつて南面し、南廂には十八級の階（キザハシ）がある。母舍（モヤ）の後面には支那賢聖の像を描いた「賢聖の障子」を立て、中央稍〻北に偏して玉座を設け、南面額の間には「紫宸殿」の額を揭げ、階前の左には櫻、右には橘が植ゑてある。現在の紫宸殿は安政二年（一二五一五）の御造營にかゝる。皇室典範によれば、御卽位の大禮は必ずこの紫宸殿で行はせられることになつてゐる。

【常磐木】　トキハギ。四時落葉しないで、綠色を保つ樹木。

枕草子、三に「椎の木は、ときはぎはいづれもあるを、それしも葉がへせぬ例にいはれたるもをかし。」

【三公】　サンコウ。太政大臣・左大臣・右大臣の總稱。後には左大臣・右大臣及び內大臣の總稱。

支那の周では太師・太傅・太保、前漢では大司馬・大司徒・大司空、後漢及び唐では大尉・司徒・司空の稱。

書經の周官に「立ニ太師・太傅・太保一、茲惟三公。」

【百官】　ヒャククヮン。もゝのつかさ。內外の官僚。多くの役人。

書經の說命に「天子惟君萬邦一、百官承レ式。」

【位に依つて列坐す】　位の高下に依つて、順々にならんですわつてゐる。

【夢心地】　夢を見てゐるうちの心地。夢見る如く恍惚たる心もち。夢うつゝの心地。

相模集に「嬉しさは身に餘るまで滿ちぬらむ夢心地にも思ひあはせよ」

【鬢】　ビンヅラ。「みづら」に同じ。上古の男子の髮の結び

方。頂の髪を左右に分けて雙角のやうに結んだもの。後には主として年少者の髪の結び方となり、耳の上で結んで耳の前に垂れた。

雅亮裝束抄、二、みづらをゆふことの條に、「先づ解櫛にて兒の髪を解き廻して、平笄にて分け目の筋より頂（うなじ）をわけ下して、先づ右の髪を紙捻して結びて、左の髪をよくけづりて、油綿つけ撫でなどして、もとどりを取るやうにけづりよせて……さきの絲を一筋取りて、そのみづらの所、上り下りのほど、目と眉とのあはひにあたるほど、前後の寄りのきは、兒の顔の廣さ、細さによりて結ぶべし。顔廣くば前に寄せ、細くば後に寄すべし。いかさまにも耳よりは前なり。」

狹衣物語、一上に「びんづら結ひていひしらずをかしげなるわらは」

【童子】ドウジ。こども。わらべ。兒童。

詩經の國風に「芄蘭之葉、童子佩レ觿ヲ」

【忽然】コツゼン。たちまち。にはかに。はからず。

宇治拾遺物語、十二に「一人は立てり、一人は居りと見るに、忽然として失せぬ。」

【跪き】ヒザマヅき。膝がしらを下につけて屈まること。臀をあげ、兩膝を座に衝きて屈まること。

宇津保物語、忠乞に「たゞ君のおり給ふ所に、五位・六位ひざまづきかしこまり。」

【一天下】イッテンカ。天下全體。

宇津保物語、俊蔭に「一天下の人皆いひあざみて」

【玉扆】ギョクイ。古昔天皇の御座の背後に立てまゐらせた屏風。斧の繪をゑがいたもの。

朗詠に「玉扆日臨文鳳見。」

太平記、二十四、山門の嗷訴に依り公卿會議の條に「天子自ら玉扆をおりさせ給ひて」

【朕】チン。帝王の自稱。

史記の始皇本紀に「天子自稱曰レ朕。」

【御料簡あるに】お考へなされたところが。

「料簡」（レウケン）は「了簡」とも「了見」とも書く。思慮すること。考へはかること。分別。思案。

太平記、七、千劍破城軍の事に「この水を以て、たとひ五六十日雨降らずともこらへつべし。その中に、又などか雨降る

ことなからんと了簡しける智慮の程こそ淺からね。」

【南面の德を治めて】天子の德を修めて。

「南面」は、君主の位に卽くこと。天子となつて國内を治めること。支那の古制、王者は下に對するとき南方に面したるよりいふ。

易經の說卦に「聖人南面而聽二天下一、嚮レ明而治。」

源平盛衰記、二、二代后に「周公旦の、成王に代りつゝ南面して一日萬機の政を行ひしに准へて」

【日光、月光】ニックッウ、グッックッウ。日光菩薩と月光菩薩。藥師如來の左右に立つ脇士。

【自ら御夢を合はせられて】御自身で、御夢をお判じあそばされて。

「夢を合はす」とは、夢を判じて、吉凶を卜ふこと。ゆめはんじ。ゆめとき。

傾城島原蛙合戰、一に「夢合はせ、夢判じなどとは、かんなぎ、陰陽師の渡世。」

【成就房の律師】ジャウジュバウのリッシ。笠置寺の住僧。傳未詳。

「律師」は、よく戒律を解するものの義。佛語。僧官の一。僧都に次ぐもの。正・權の別があつて、五位に准ずる。りし。

【名字】ミャウジ。（一）かばね（姓）。（二）うぢ（氏）。こゝは（二）の意。

保元物語、主上三條殿行幸の條に「武士の名字は註すに及ばず。」

【河内國】カハチノクニ。畿内五國の一。修して河州といふ。東は金剛山脈を以て大和に、南は和泉山脈を以て紀伊に境し、西は和泉・攝津、北は山城に隣接する。地形南北に長く、南部は山地であるが、北部は平坦で、大阪平野の一部をなしてゐる。大阪府に屬し、南河内・北河内・中河内の三郡に分れてゐる。

【金剛山】コンガウセン。大阪府と奈良縣との境に峙つ山。金剛山脈の一雄峯。後醍醐天皇の御代、楠木正成がこゝに千劍破

城を築き、賊軍を苦しめたので名高い。山頂に葛城神社、山腹に金峯山寺がある。標高一、一一二米。西麓千早村から登路三粁。

【敏達天皇】　ビタツテンワウ。第三十代の天皇。御諱は譯語田（ヲサダ）、また淳名倉（ヌナクラ）太玉敷尊。欽明天皇の第二皇子。宣化天皇の三年御降誕。欽明天皇の十五年（一二一四）立皇太子。天皇崩御の翌年（一二三二）御即位、大和の譯語田の幸玉宮を皇居としたまふ。在位十四年で崩御（一二四五）。寶算四十八。河内の磯長（シナガ）中尾陵に葬り奉る。

【井手左大臣橘諸兄公】　キデノサダイジンタチバナノモロエコウ。奈良朝末期の名臣。難波皇子の曾孫。治部卿美努王の子。初名葛城王。參議從三位に進んだ。天平八年（一三九六）上奏して臣籍に下り、橘宿禰（スクネ）の姓を賜はつた。尋いで累進して左大臣に至り、太宰帥を兼ねた。天平勝寶のはじめ正一位に進み。改めて姓朝臣を賜はつた。同八年致仕。天平寶字元年（一四一七）薨。年七十四。西院左大臣ともいひ、又山城の井手に住んでゐたので、井手左大臣ともいふ。

「井手」は京都府（山城國）綴喜（ツヽギ）郡にある山里。日本六玉川の一なる井手の玉川の所在地。山吹と蛙との名所として知られてゐる。

「左大臣」は太政官の長官。一上（イチノカミ）ともいひ、又左府ともいふ。太政大臣の次位。右大臣の上位に在つて太政官の政務を總裁するもの。定員は一人。正二位相當官。孝德天皇の大化元年（一四〇五）阿部倉梯麿をこれに任じたのに始まる。後には攝政家・大臣家の專有となつた。明治十八年廢官。

【後胤】　コウイン。幾代かの後の血統。子孫。後裔。

魏志の齊王紀に「祚及二後胤一」

平家物語、一、祇園精舍の條に「一品式部卿葛原親王九代の後胤、讃岐守正盛が孫」

【志貴】　シキ　志貴山。奈良縣生駒郡に峙つ山。山の中腹に朝護國孫子寺といふ眞言宗の名刹がある。當寺は關西に於ける著名の流行佛で、寺域廣大、頗る眺望に富み、その毘沙門堂は關西の日光とたゝへられてゐる。聖德太子の創建。今の建物は慶長年中豐臣秀賴の再興にかゝる。所藏の志貴山緣起は鳥羽僧正覺猷の作と傳へられ、國寶に指定されてゐる。

【毘沙門】　ビシャモン。こゝは毘沙門天を祀つてある毘沙門堂。

「毘沙門天」は四天王（東方、持國天・南方、增長天・西方、廣目天及び北方、毘沙門天又多聞天）の隨一。北方の守護神。異名俱吠囉（Kuvera）多聞天はその唐譯。須彌山の第四層級に位し、可畏・天敬・衆歸の三城を有し、北拘盧（ホククロ）洲を護り、餘の三洲をも兼ね護つてゐる。形像は右手に稲（ホコ）を執り、左手に佛塔を擎げてゐる。四天王の中、最も尊崇される。

【夢想】　ムサウ。（一）夢に思ひ見ること。夢の中に忘れず思ふこと。（二）夢の中に神佛の示現あること。神佛が夢の枕に立たせたまふこと。こゝは（二）の意。

平治物語、類朝遠流の條に「不思議の夢想を蒙り」

玉葉、治承四年四月十七日の條に「自二今日一三箇日奉二啓帛於大原野社一。依レ有夢想事一也。」

【稚名】　ヲサナナ。幼き時假に稱する名。元服以前の名。幼名。

甲陽軍鑑、九上に「勝千代殿と信玄公稚名をつけ申す。」

【多聞】　タモン。「多聞天」の略。四天王の一なる毘沙門天の唐譯。正成が幼名を「多聞」といつたことのわけは、本文にくはしく見えてゐる。

【夢の告】　ユメのツゲ。神佛などが夢の中になしたまふお告げ。夢のさとし。夢想。

續古事談、四に「夢のつげ空しからず。」

【藤房卿】　フヂフサキャウ。藤原藤房。建武中興の功臣。宣房の長子。家名は萬里小路（マデノコウヂ）。後醍醐天皇に仕へて正二位中納言に至り、天皇を輔佐し奉つて建武の中興を實現せしめたが、やがて天皇の御失政を諫めて納れられず、憂悶の餘遂に官を棄てて僧となつた。時に年四十。その後の行方は詳かでない。

「卿」は公卿の名の下につけて呼ぶ尊稱。「公卿」（クギャウ）とは、攝政・關白・大臣（以上公）、大中納言・參議及び

散一位並に三位以上(以上卿)の高官の稱。

【勅使】 チョクシ。勅命を傳へる使。天子の御使。天使。

晉書の何無忌傳に「稱勅使」

竹取物語に「司々に仰せて、勅使には少將高野のおほくにといふ人をさして」

【宣旨を帶して】 宣旨をたづさへ持つて。

「宣旨」(センジ)は、勅旨を宣べつたへること。又、天皇の口勅を宣べ傳へる公文書。內侍が勅旨を承つて藏人に傳へ、藏人がこれを上卿に告げ、上卿が外記に命じてその旨を記さしめ、然る後宣下するのを常とする。

源氏物語、桐壺の卷に「內侍宣旨をうけたまはり傳へて」

【楠木が館】 河內國金剛山の麓なる楠木正成の屋敷。

「館」(ヤカタ)は、屋形の義。身分ある人の宿所又は邸宅の稱。たち。

【事の子細】 くはしいことのわけ。

「子細」は又「仔細」とも書く。(一)こまかなこと。くはしいこと。綿密。(二)委細の事情。いはれ。ことがら。(三)彼是といひ立てる程の事情。さしつかへのことがら、こは(一)の意。

北史の源思禮傳に「爲レ政當レ舉二大綱一、何必太子細也。」(一)

保元物語、新院御謀反思召立の條に「武士二人召捕つて、子細を問はる。」(二)

平治物語、源氏勢汰の條に「平氏の一類を滅さんこと、何の仔細かあるべき」(三)

【演べられければ】 申し述べられたから。

「演べ」は「ノベ」とよむ。

【弓矢取る身の面目】 弓矢を取つて戰ふことをつとめとしてゐる武士のほまれ。

「面目」(メンボク)は、メイボクとも、メボクともいふ。人にあはせる面。世人に對する名譽。ほまれ。

枕草子、四に「かばかりのめんぼくあることなかりき。」

【是非の思案にも及ばず】 御召に應じまつることがよいのわるいのと思案するまでもなく。

「是非」(ゼヒ)は是と非。よいとわるいと。善惡。正邪。又、是を是とし非を非とすること。

禮記の曲禮に「夫禮者、所下以定二親疏一、決二嫌疑一、別二同異一、明中是非上也。」

孟子の公孫丑上に「無二是非之心一、非レ人也。」

「思案」(シアン)は「思按」とも書く。考をめぐらすこと。かんがへ。思考。分別。

陸士衡の文に「思二按之一愈〻深。」

保元物語、爲朝の鬼が島へ渡る條に「最期の矢を手淺く射たらんも無念なりと思案し給ふ。」

【忍びて】 そつとかくれて。內々で。ひそかに。

【萬里小路中納言藤房卿】 前の「藤原藤房卿」を見よ。

「萬里小路」(マデノコウヂ)は藤原藤房の家名。

「中納言」(チュウナゴン)は令外の官。太政官の職員の一。「なかのものまうすつかさ」ともよんだ。唐名黃門。大納言をたすけて上奏・下達の事を掌つた。定員三人。後漸次增加して十人にまで達し、攝政・關白の子息若しくは參議・大辨・近衞中將・檢非違使別當等がこれに任ぜられた。持統天皇の六年(一三五二)始めて置かれ、令制によつて一旦廢せられたが、慶雲二年(一三六五)再び置かれ、明治初年に及んだ。

【東夷征罰の事】 東のえびすを征伐して、これを罪なふこと。

「東夷」(トウイ)は、東方のえびす。こゝは勿論關東なる北條氏をいやしめていふ。

太平記、三、笠置軍の條に「南蠻、西戎は已に亂れぬ、東夷北狄もまた如何あらんずらん。」

「征罰」(セイバツ)は、罪あるものを攻めうつこと。征伐。征討。

太平記、四、呉越軍の條に「この理を辨へず、我れ征罰を止むべきや」

【叡感】 エイカン。天子の御感動。

李嶠の詩に「叡感通二三極一、天誠貫二六幽一。」

保元物語、宿所燒拂の條に「朝敵追討、早速にその功を致す由、叡感緇ろなり。」

【天下草創の事】 テンカサウサウのコト。こゝでは、亂れた天下を治めて、創業の功を全うすることをさしていふ。

「草創」は、事の起しはじめ。創業。創始。

漢書の恩澤侯表に「高帝撥レ亂誅レ暴、庶事草創。」

【勝つことを一時に決して云々】 「どういふ謀をめぐらしたらば、時を移さず敵に戰ひ勝つて、天下太平の御世に

することが出來るであらうか。」との御意。

「太平」は「泰平」に同じ。天下のよく治まること。世の中がおだやかに治まること。昇平。

史記の始皇本紀に「黔首脩潔、人樂二同則一嘉二保太平一。」

太平記、二、長崎新左衞門尉意見の條に「かくてぞ國家の泰平、武運の長久にて候はんと存ずるに」

【所存】ショゾン。心に存ずるところ。心中におもふところ。かんがへ。みこみ。存念。

平治物語、六渡羅合戰の條に「御曹司も定めて御所存あつてぞおはすらん。」

【勅諚】チョクヂャウ。「勅定」とも書く。天子のおほせ。勅命。

平家物語、六に「これまた勅諚なれば、人に車借つて嵯峨へ行き向ふ。」

太平記、一、中宮御產御祈の條に「南都・北嶺の衆徒少々、勅定に應じてけり」

【大逆】ダイギャク。人倫にもとる暴惡の行爲、卽ち君父を弑する類。

戰國策、楚に「外挾二强秦之威一、以內劫二其主一、以求レ割レ地。大逆不忠、無二過レ此者一。」

【天の譴】テンのセメ。天のとがめ。天のおしかり。天のつみ。天罰。

源平盛衰記、十三、高倉宮廻宜の條に「天譴已到、人望早背。」

【衰亂の弊に乘つて】北條方の衰亂の弊につけいつて。

「衰亂」(スキラン)とは、世が衰へて亂れること。

「弊」(ヘイ)は、つひえ。つかれ。やぶれ。

「乘つて」は、氣のりして。調子づいて。勢ひづいて。乘じて。つけいつて。

太平記、二十、義助朝臣病死の條に「司馬仲達が弊に乘つて蜀を亡せし謀」

【天誅を致されんに何の子細か候べき】天に代つて誅戮をお加へ遊ばされることに、何のさしつかへがございませうぞ。

「子細」は、又仔細とも書く。こゝでは、彼是といひたてる事情、差支のことがら、などの意。

平家物語、源氏勢汰の條に「平氏の一類を滅さんこと何の仔細かあるべき。」

【武略】ブリャク。戰爭上の謀略。武術の才略。戰略。

保元物語、新院御所各門々固の條に「義朝は武略の奧儀を究めたる者なれば」

【智謀】チボウ。智のあるはかりごと。巧みなはかりごと。

莊子に「智謀不レ用、必歸二其天一。此之謂二太平一。治之至也。」

史記の陳丞相世家に「平以二榮名一終稱二賢相一、非二智謀一孰能當レ此者乎。」

【武藏】ムサシ。東海道の一國。修して武州ともいふ。

關東地方の略。中央にあつて、南東の一部は東京灣に面し、他は下總・下野・上野・信濃・甲斐・相模の諸國に接する。西部は山地であるが、東半部は關東平野の一部を成して、土地が平坦である。東京府に屬するものは、もと東京・八王子の二市の外八郡あつたが、大東京の實現によつて郡部の大部分は市內に編入せられ、今はたゞ北多摩・南多摩・西多摩の三郡となつた。その他、神奈川縣の部分に橫濱・川崎兩市及び久良岐・橘樹(タチバナ)・都筑(ツヾキ)の三郡があり、埼玉縣の部分に浦和・川越・川口・熊谷の四市及び入間・比企(ヒキ)・秩父・兒玉・大里・北足立・北埼玉・南埼玉・北葛飾(カツシカ)の九郡がある。

【相模】サガミ。東海道の一國。修して相州といふ。

關東地方の南西隅にあつて、西は伊豆・駿河・甲斐と界し、北東は武藏に接して關東平野に連なり、南東の三浦半島は房總半島と相對して東京灣の口を扼してゐる。南部相模灣の沿岸は氣候が溫暖で保養に適する。神奈川縣に屬し、二市(橫須賀・平塚)八郡(三浦・鎌倉・高座・中・足柄上・足柄下・津久井・愛甲)に分れてゐる。

【利を摧き堅を破る】利兵・堅甲をくだきやぶること。

「利兵・堅甲」は、するどき兵器と、堅きよろひ。銳利なる兵器と堅牢なる甲冑。

孟子の梁惠王上に「可レ使二制レ梃以撻一二秦楚之堅甲利兵一矣」

太平記、二、唐崎濱合戰の條に「解脫同相の御衣を脫ぎ給ひ

て、堅甲利兵の御貌に替り」

【合戰の習】 合戰のとき、往々にしてある事がら。戰の常。

「習」(ナラヒ)は、こゝでは、世のつね。きまり。あたりまへ。

新勅撰集、雜三に「なげくなよこれはうき世のならひぞと慰めおきしことぞ悲しき」

狂言、飛越に「相撲といふものは勝つもならひ、負くるもならひぢや」

【一旦の勝負】 イッタンのショウブ。一時のかちまけ。

「一旦」は、ひとたび。ひとまづ。一時。ちよつと。

史記の淮陰侯傳に「一旦而失之」

保元物語、新院御謀反思召立の條に「手跡は一旦の興なり。賢臣必ずしもこれを好むべからず。」

【聖運】 セイウン。天子の御運勢。

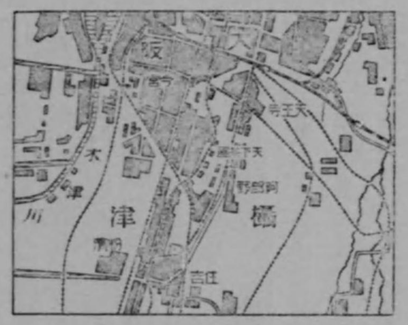
白居易の文に「啓三千年之聖運」

保元物語、朝敵宿所燒拂の條に「聖運は月と共にぞ開きける。」

最後の參内

【阿部野の合戰】 阿部野に於ける楠木正行と細川顯氏・山名時氏との戰。

「阿部野」は又安倍野とも書く。舊攝津國東成郡天王寺村天王寺から住吉に至る長さ一里、幅半里にわたる沙丘。今は大阪市住吉區の内。



楠木正行は金剛山にあつて兵威が日に盛になつた。足利尊氏はこれを憂へ、細川顯氏・山名時氏を將として來り攻めしめた。正平二年(二〇〇七)十一月、時氏は住吉に陣し、顯氏は天王寺にあつた。正行は先づ時氏を破れば顯氏は戰はずして自ら走るだらうと思つた。そこで兵二千を率ゐ、その二十六日進んで住吉に向ひ、奮戰して時氏の麾下を擊つた。時氏は創を被つて敗走し、顯氏の陣に入つた。顯氏の軍は果して亂れ、先を爭つて渡邊橋を渡らうとし、溺れたもの無數。辛うじて逃げのびたものも、親討たるれども子は知らず、主討死すれども郎從これを助けず、物具を脫ぎ、弓を杖について、夜中に京へ逃げのぼつたといふ。太平記卷二十五、「住吉合戰の事」の條に、左の如く記してある。

住吉合戰の事

去ぬる九月十七日、河内國藤井寺の合戰に、細川陸奥守顯氏、甲斐なく打負け引退きし後、楠帶刀左衞門正行勢機に乘つて、邊境常に侵し奪はるといへども、年内は寒氣甚だしくして、兵皆指をおとし、手かゞまることありぬべければ、暫しとてさしおかれけるが、さのみ延引せば敵に勢つきぬべしとて、十一月二十三日に評定あつて、同二十五日、山名伊豆守時氏・細川陸奥守顯氏を兩大將にて、六千餘騎を住吉・天王寺へ差下さる。顯氏は去ぬる九月の合戰に、楠帶刀左衞門正行に打負けて、天下の人口に落ちぬることを生涯の恥辱なりと思はれければ、四國の兵どもを召集めて、今度の合戰又先の如くして歸りなば、萬人の嘲弄たるべし。相構へて面々身命を輕んじて、以前の恥をすゝがるべしと、衆を勇め氣を勵まされければ、坂東・坂西・藤・橘・伴の者ども、五百騎づつ一揆を結んで、大旗・小旗・下濃の旗三旋立てて三手に分け、一足も引かず討死すべしと、神水を飲みて打立ちける。事の頗まことに思ひ切つたる體かなと、先づ凉しくぞ見えたりける。

大手の大將山名伊豆守時氏、千餘騎にて住吉に陣を取れば、搦手の大將細川陸奥守顯氏、八百餘騎にて天王寺に陣を取る。楠帶刀正行是を聞いて、敵に足をためさせて、住吉・天王寺兩所に城郭を構へられなば、神に向ひ佛に向ひ弓を引き矢を放つ恐ありぬべし。不日に押寄せて、先づ住吉の敵を追拂ひ、唯攻めに攻めたてて、急に追懸くる程ならば、天王寺の敵は戰はで引退きぬとおぼゆるぞとて、同二十六日の曉天に、五百餘騎を率し、先づ住吉の敵を追出さんと、石津の在家に火をかけて、瓜生野の北より押寄せたり。山名伊豆守これを見て、敵一方よりよも寄せじ、手を分けて相戰へとて、赤松筑前守範貞に攝津・播磨兩國の勢をさしそへて、八百餘騎濱の手を防がんと、住吉の浦の南に陣を取る。土岐周濟房・明智兵庫助・佐々木四郎左衞門、その勢三千餘騎にて、安部野の東西兩所に陣を張る。搦手の大將細川陸奥守は、手勢の外四國の兵五千餘騎を率して、わざと本陣を離れず、荒手に入りかはさんために天王寺に控へたり。大手の大將山名伊豆守、舍弟三河守、原四郎太郎、同四郎次郎同四郎三郎、千餘騎にて唯今馬煙を擧げて進みたる先がけの敵にかけあはせんと、瓜生野の東にかけ出でたり。

楠帶刀は敵の馬煙を見て、陣の在所四箇所にありと見てければ、多からぬ我が勢を數多にわかたば中々惡しかるべしとて、もと五手に分けたりける二千餘騎の勢を唯一手に集めて、瓜生野へ打つてかゝる。この陣、東西南北野遠くして、疋馬の蹄を勞せしかば、兩陣互に射手を進めて鬨の聲揚ぐる程こそあれ、敵御方六千餘騎一度にさつと懸けあつて、思ひ〳〵に相戰ふ。半時ばかり切合つて、互に勝鬨をあげ、四五町が程兩方に引分れ、敵御方を見わたせば、兩陣過半滅びて、死人戰場に充ち滿ちたり。又大將山名伊豆守切創・射疵七所まで負はれたれば、つはもの前に立隱して、疵をすひ血を拭ふほど、少し猶豫したるところへ、楠が勢の中より、年の程二十ばかりなる荒武者、

和田新發意源秀と名のつて、洗皮の鎧に大太刀・小太刀二振帯いて、六尺餘の長刀を小脇に挾み、しづ〳〵と馬を歩ませて、小歌うたひて進みたり。その次に一人、これも法師武者の長七尺餘もあらんと覺えたるが、阿間了願と名のつて、唐綾縅の鎧に小太刀帯いて、柄の長さ一丈ばかりに見えたる鎗を馬の平頸にひきそへて、少しも擬議せず懸け出でたり。その勢ひ、事がら、世のつねのものには非ずと見えながら、あとにつゞく勢なければ、あれやとばかりいひて、山名が大勢さしも驚かで控へたる中に唯二騎つと懸けいつて、前後左右を突いてまはるに、小手のはづれ、すねあてのあたり、手反のたゞ中、内冑、一分もあきたるところをはづさず、やにはに三十六騎突きおとして、大將に近づかんと目をくばる。三河守これを見て、一騎合ひの勝負は叶はじとや思はれけん、大勢を以てこれを取りこめよと、百四五十騎にて横合にかけられたり。楠又これを見て、和田討たすな、つゞけやとて、相がかりにかゝつて攻めたゝかふ。太刀のつばおと天に響き、汗馬の足音地を動かす。互に御方は恥ぢしめて、引くな、進めといふ聲に、退く兵なかりけり。されど大將山名伊豆守已に疵を被り、又入れかはる御方の勢はなし、叶ふべしとも覺えざりければ、歩立なるつはものども、伊豆守の馬の口を引きむけて、後陣の御方と一處にならんと、天王寺をさして引退く。楠、彌〻氣に乗つて、追懸け〳〵攻めける間、山名三河守、原四郎太郎、同四郎次郎兄弟二騎、犬飼六郎主從三騎、返しあはせて討たれにけり。二陣に控へたる土岐周濟房・佐々木六郎左衞門、三百餘騎にて安部野の南にかけいで、暫し支へて戦ひけるが、目賀田・馬淵の者ども、三十八騎一所に討たれにける間、この陣をも破られて共に天王寺へと引きしさる。一陣・二陣かくの如くなりしかば、濱の手も、天王寺の勢も、大河後にあり、兩陣前に破られぬ。敵に橋をひかれなば一人も生きて還るものあるべからず、先づ橋を警固せよとて、渡邊をさして引きけるが、大勢のなびき立ちたる習にて、一度も更に返し得ず、行先せばき橋の上を落つともいはずせき合ひたり。山名伊豆守は我が身深手を負ふのみならず、馬の頭を二太刀切られて馬は弱りぬ。敵は手しげく追懸くる。今は落ちのびじとや思ひけん、橋づめにて已に腹を切らんとせられけるを、河村山城守唯一騎返しあはせて、近づく敵二騎切つて落し、三騎に手を負はせて、暫し支へたりける間に、安田彈正走りよつて、如何なる事にて候ぞ、大將の腹切る所にては候はぬものをといひて、おのが六尺三寸の太刀を守木になし、鎧武者を鎧の上にかき負ひて橋の上を渡るに、守木の太刀にせきおとされて、水に溺るゝもの數を知らず。播磨の國の住人小松原刑部左衞門は、主の三河守討たれたる事をも知らず、天神の松原まで落ちのびたりけるが、三河守の乗りたまひける馬の、平頸二太刀切られて放たれたりけるを見て、さては三河守は討たれ給ひけり。落ちては誰が爲に命を惜しむべきとて、唯一騎天神の松原より引きかへし、向ふ敵に矢二筋射かけて、腹掻切つて死しにけり。その外のつはものども、親討たるれども子は知らず、主討たるれども郎從これを助けず、物具を脱ぎすて弓を杖について、夜中に京へ逃げのぼる。見苦しかりし有様なり。

【霜月】　シモツキ。陰暦の十一月。こゝは後村上天皇の正平二年(一三〇七)十一月。

【渡邊の橋】　今の大阪市の天滿・天神兩橋の間に架けてあつたといふ橋。

名所圖會に「一名大江橋、今の天滿・天神兩橋の間に架し、往時は河幅二百六十間に上れりとぞ。貞享年中、堂島を築きたる時、大江・渡邊の二橋を新架せるは、舊名を傳ふるのみにて、その遺址にあらず。」

【かひなき命】　生きがひのない命。はかなくて詮なきいのち。

「かひなし」は「甲斐なし」と書く。しるしなきこと。詮なきこと。

竹取物語に「あな、かひなのわざやとのたまひけるよりぞ、思ふにたがふ事をばかひなしとはいひける。」

土佐日記に「岸にもいふことあるべし、舟にも思ふことあれど、かひなし。」

【情ある者】　慈愛の情に富んでゐるもの。

「情」(ナサケ)は、物のあはれを知る心。人情をくみとる心。なさけごころ。あはれみ。思ひやり。人情。情愛。親切氣。

伊勢物語に「いかで心なさけあらむ男に逢ひ得てしがなと思へど」

謡曲、江口に「心なき草木、情ある人倫。」

【小袖】　コソデ、袿(ウチギ)の大袖なるに對し、袖を小さくして、袖下を丸く縫つた下著。單衣・袷・綿入いづれをもいつたが、後世は木綿の布子(ヌノコ)に對して、絹の綿入のみの稱となつた。

金葉集、雜上に「行蓮上人がもとへ小袖つかはすとてよめる、憐まんと思ふ心はひろけれどはぐくむ袖のせばくもあるかな」

【馬を牽き】　馬を引出物として與へること。

「引出物」(ヒキデモノ)とは、もと祝宴・饗應の終などに、馬をひき出して客に贈つたから起つた語。後には、諸物に通じて、主人から客への贈物をいふやうになつた。

【物具】　モノヽグ。(一)器具。調度。(二)戰陣に用ひる要具、特に鎧の稱。こゝは(二)の意。

保元物語、官軍方々手分の條に「直兜物にて具したる兵。」

【色代】　シキタイ。「色體」とも「式體」とも書く。(一)挨拶すること。會釋すること。(二)世辭をいふこと。追從（ツキシヨウ）をいふこと。こゝは(一)の意。

言海に「色代、顏色を改めて禮する意か。」

俚言集覽に「色代、俗に禮容を云、愚按、今挨拶するやうの事を云、因つて諛言にもいへり。云々」

和訓栞に「色代、禮を正し、人を先にし、我を後にする義。平治物語、光賴卿參内の條に「色代してしづ〳〵と歩み」(一)

(一)砂石集、七上に「色代にも、御年よりも遥か若く見え給ふといふは嬉しく」(二)

【四條縄手の合戰】「四條縄手」（シデウナハテ）は、大阪府中河内郡枚岡（ヒラヲカ）村附近から北方飯盛山麓にわたる一帶の原野の稱。その中心は北河内郡四條畷村のあたり。正平三年（二〇〇八）正月、楠木正行は三千餘騎を率ゐて高師直の大軍とこゝに合戰し、奮戰數十合、終に弟正時と刺しちがへて戰死した。正行の戰端を開いたのは南四條邊で、次第に賊を追うて進み、討死したのは北四條邊だといふ。今飯盛山の西麓に別格官幣社四條畷神社があつて、正行の靈を祀つてある。正行及び族人和田賢秀の墓も、またこの附近にある。

【今年兩度の合戰】　譽田林の戰と前記阿部野の戰。共に後村上天皇の延元二年（二〇〇七）の出來事である。同年八月、細川顯氏は楠木正行を討たうとして、三千餘騎を率ゐて河内國南河内郡の藤井寺（今の長野村の大字）に到着し、油斷してゐた折柄、楠木正行は七百餘騎を率ゐて譽田八幡宮の後から突然討つて出で、大いに敵軍を破つた。顯氏は這々の體で逃れて京都に入つた。時に八月十四日であつた。左に太平記の原文を掲げる。

藤井合戰の事

楠帶刀正行は、父正成が先年湊川へ下りし時、思ふやうあれば、今度の合戰に我は必ず討死すべし。汝は河内へ歸つて、君の如何にもならせ給はんずる御樣を見はてまゐらせよと申し含めしかば、その庭訓を忘れず、この十餘年我が身もひととなるを待ち、討死せし郎從どもの子孫を扶持して、如何にもして父の敵を亡し、君の御憤をやすめ奉らんと、明暮肺肝を苦しめてぞ思ひける。光陰過ぎやすければ、年積つて正行已に二十五、今年は殊更父が十三年の遠忌に當りしかば、供佛・施僧の作善所存の如く致して、今は命惜しとも思はざりければ、その勢五百餘騎を率し、時々住吉・天王寺邊へ打出で〳〵、中島の在家少。燒拂つて、京勢やかゝると待ちたりける。將軍これを聞き給ひて、楠が勢の分際、思ふにさこそあらめ。これに邊境を侵し奪はれて、洛中驚きさわぐこと、天下の嘲弄、武將の恥辱なり。急ぎ馳向つて退治せよとて、細川陸奥守顯氏を大將にて、宇都宮三河入道・佐々木六角判官・長左衞門・松田次郎左衞門・赤松信濃守範資・舍弟筑前守範貞・村田・奈良崎・坂東・坂西・菅家の一族共、都合三千餘騎、河内國へさし下さる。この勢八月十四日の午の尅に、藤井寺にぞ著いたりける。この陣より楠が館へは七里を隔てたれば、たとひ急々に寄するとも明日か明後日かの間に寄せんずらんと、京勢油斷して、或は物具を解きて休息し、或は馬の鞍をおろして休める處に、譽田八幡宮の後なる山陰に、菊水の旗一旒（ひとたなれ）の見えて、ひた冑の兵七百騎、しづしづと馬を歩ませて打寄せたり。すはや敵の寄せたるは、馬に鞍おけ、物具せよとひしめきいろめく處へ、正行まつさきにすゝんで、をめいてかゝる。大將細川陸奥守鎧をば肩に懸けたれども、未だ上帶をもしめず、太刀を帶くべき隙もなく見え給ひける間、村田の一族六騎、小具足ばかりにて、誰が馬ともなくひたひたと打乘つて、雲霞の如く群つて控へたる敵の中へかけ入つて、火を散らしてぞ戰ひたる。されどもつゞく御方なければ、大勢の中に取りこめられ、村田の一族六騎は一所にて討たれにけり。その間に大將も物具かため、馬に打乘つて、相從ふ兵百餘騎、しばし支へて戰うたり。敵は小勢なり、御方は大勢なり。たとひ進みて懸けあはするまではなくとも、引退くつはものだになかりせば、この軍に京勢すべて負くまじかりけるを、四國・中國より驅けあつめたる葉武者、前に支へて戰へば、後には捨鞭を打つて引きける間、力なく大將も猛卒も同じやうにぞ落行きける。勝に乘つて闘を作りかけ闘を作りかけ、近づける間、大將すでに天王寺・渡部の邊にては危く見えけるを、六角判官舍弟六郎左衞門、返しあはせて討たれにけり。また赤松信濃守範資、舍弟越前守三百餘騎、命を名に替へて討死せんと、取つては返し、取つては返し、七八度まで踏留つて戰ひけるに、奈良崎も主從三騎討たれぬ。粟生田（あふた）小太郎も馬を射られて討たれにけり。これらに度々支へられて敵さまで追はざりければ、大將も士卒も危き命を助りて、皆京へぞ歸り上りにける。

【京勢】　キヤウゼイ。京都方、即ち足利方の軍勢。前記山名時氏・細川顯氏等の率ゐた軍勢を指す。

【無下に打負けて】　さん〳〵に敗北して。

「無下に」は、これより下はないといふ義で、事の極めて甚だしいさま、又は、甚だ卑しいことなどにいふ。

【畿内】　キナイ。山城・大和・河内・和泉・攝津の五箇國の稱。五畿内又は略して五畿ともいひ、「うちつくに」とも訓んだ。「畿は」王畿の意で、支那周代の制に倣つたもの。大化改新の際、京都附近の地を特別の行政區とし

て、その四方の極限を定めたのに始まる。はじめ畿内は四箇國であつたが、後、河内から和泉を分離して五箇國とした。

【蜂起】　ホウキ。又「蠭起」とも書く。蜂の巣をつゝく時、多くの蜂が俄に飛び立つやうに、群り起ること。

史記の項羽本紀に「楚蜂起之將」

賈誼の過秦論に「豪傑蠭起。」

【將軍】　征夷大將軍足利尊氏。

「征夷大將軍」は、全國の兵馬の權を握り、後には天下の政權をも執るに至つた幕府の主宰者の職名。源頼朝がこの職に任ぜられてから、足利氏・德川氏累代この職に就いた。

「足利尊氏」は足利初代の將軍。源義家の裔。讃岐守貞氏の子。初名は高氏。後、後醍醐天皇の御諱尊治の一字を賜はつて尊氏と改めた。元弘元年（一九九一）北條氏の命を受けて官軍を擊つたが、やがて北條氏に背いて官軍に從ひ、六波羅を滅して勳功第一と稱せられた。後、勢を恃んで叛し、官軍と戰つたが、賊名を恐れて持明院統を奉じ、光明天皇を推戴して遂に足利幕府の基を開いた。正平十三年（二〇一八）卒。年五十四。

【左兵衛督】　サヒャウヱノカミ。左兵衛府の長官。從四位相當官であるが、場合によつては中納言で兼務し、二三位の人でも任ぜられた例もある。

兵衛府は閤門の内外を禁衛し、行幸のときは車駕に供奉する役。左右に分れてゐる。本文は足利直義を指す。

「足利直義」は尊氏の同母弟。常に尊氏を輔けて畫策する所があつた。尊氏が業を成したのは、主として直義の力である。殊に南北朝が分立し、尊氏が幕府を建てた後の機務は一切これを總攬した。隨つてその勢力も亦强大であつた。後、執事高師直の尊大な振舞を惡み、延いて尊氏と乖離し、一時吉野朝に降つたが、間もなく尊氏と相和して師直兄弟を殺した。後又尊氏と爭つて鎌倉に奔り、尊氏に攻められて降伏した。正平七年（二〇一二）卒。年四十七。一說には、尊氏に毒殺せられたともいふ。

【周章】　シウシャウ。あわてふためくこと。うろたへさわぐこと。狼狽。

文選の魯靈光殿賦に「俯仰顧盼、東西周章。」

註に「顧盼周章は、驚き見るをいふ。」

太平記、八、摩耶合戰に「京中六波羅の周章斜ならず。」

【末々の源氏】　源氏の末流のものどもをいふ。

【催勢】　モヨホシゼイ。當座の必要に應じて諸國から催し集めた軍勢。驅り催して集めた軍勢。

【執事】　シツジ。足利氏の幕府を開くや、將軍輔佐の職として執事を置いた。鎌倉幕府の執權職に當る。後管領と改めた。金穀の貸借、田圃の典賣、賣奴の訴訟を裁判し、兼ねて諸國の貢租・質物・酒造及び諸商賈の稅金を管する等、專ら財政に關する事を總理した。

【高武藏守師直】　カウムサシノカミモロナホ。本姓は高階氏。足利氏の世臣。武藏守に任ぜられ、執事に補せられた。元弘中、尊氏に從つて六波羅を滅し、延元中屢〻禁闕を犯した。同三年北畠顯家を阿部野に襲殺した。正平三年（二〇〇八）楠木正行を四條縄手に殪し、進んで吉野を犯し、行宮に火を放つて歸つた。功を恃んで驕侈を極めたので、諸將はこれを直義に訴へた。よつて直義は師直を討たうと圖つた。師直はこれを知り、尊氏に迫つて直義を除かせた。直義は大いに怒り、吉野朝に降つて尊氏を攻めたが、やがて尊氏と和睦した。師直は頗る窮し、弟師泰と共に僧となつて尊氏の許に走らうとした。途中、上杉顯能の爲に殺された。時に正平六年（二〇一一）であつた。

【越後守師泰】　エチゴノカミモロヤス。師直の弟。侍所を預つた。延元元年（一九九六）新田義貞を金崎城に改めてこれを陷れ、同三年北畠顯家を鎌倉に惱まし、興國四年（二〇〇三）宗良親王を遠江の井伊谷城に攻めてこれを拔いた。功を恃んで驕慢暴戾、諸將の怨を買ひ、遂に兄師直とその運命を共にした。

【京勢】　キャウゼイ。こゝは京都なる足利方の軍勢。

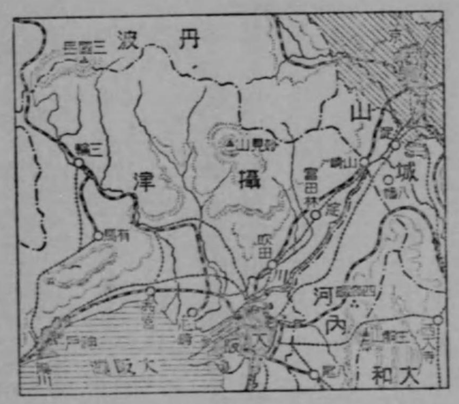
【雲霞の如く】　ウンカのゴトく。雲や霞のむらがるやうに。

「雲霞」は、くもやかすみ。轉じて、物の多く集り來るにいふ語。

宇治拾遺物語、三に「渡りせんとする者雲霞の如し。」

保元物語、官軍方々手分の條に「軍兵雲霞の如く召しぐして、高松殿に參じたり。」

【淀】　ヨド。京都府（山城國）久世郡淀町。淀川の北岸に位してゐる。永正年中細川氏の屬城となつた。後三好黨の岩成左通がこに據つた。徳川時代、稲葉氏の城地となり、明治維新に及んだ。その城址は町の西北にある。



【八幡】　ヤハタ。今の京都府（山城國）綴喜郡八幡町。郡の西北隅に位し、男山の東麓にある。石清水八幡宮の鳥居町として發達した市街。木津川に沿ひ、京阪電車の便がある。人口約九千。

【楠木帶刀正行】　クスノキタチハキマサツラ。前の「小楠」參照。

「帶刀」はまた「タテハキ」ともいふ。「帶刀舍人」の略。東宮に侍し、非常を警衛する官。正行は、後醍醐天皇の吉野に行幸あらせられたとき、弟正時と共に駕を迎へ、正四位下帶刀に拜せられた。

【舍弟】　シャテイ。實の弟。家弟。

杜甫の詩に「遙憐（カニ）舍弟（ムノ）存（スルヲ）」

源平盛衰記、二十、八牧夜討の條に「今夜則ち夜討を入るべし。舍弟等を相催し給へ。」

【正時】　楠木正時。正成の子、正行の弟。少より正行に從つて各地に戰つた。後村上天皇の正平三年（一三〇八）正月、足利尊氏がその臣高師直・師泰をして兵六萬を率ゐて來り攻めさせたとき、兄正行に伴はれ、和田賢秀等百四十餘人と吉野行宮に參内して後村上天皇に謁し、次いで後醍醐天皇の廟を拜し、死を決してこれを四條畷に邀へ戰ひ、直前して師直の營を衝き、奮鬪數次。殆ど部下の兵を失つた。のち殘兵五十餘人と再び師直を誘殺せんとして成らず、身亦數箭を負ひ、遂に正行と交刺して斃れた。

大正三年十一月正四位を追贈せられた。

【吉野の皇居】　南山巡狩録に「按ずるに、後醍醐天皇より後村上天皇の御宇のはじめまで、吉野内裏と稱せしは、今の實城院の所と思はる。」とある。一説には、はじめ吉水院に御し、後、實城院に移り給うたともいふ。

「實城院」は今はない。藏王堂の北西三町ばかりの所にその址がある。

「吉水院」はもと藏王堂の供僧坊であつたが、近年改めて吉水神社と稱し、後醍醐天皇の英靈を奉祀してゐる。

「吉野の皇居」は後醍醐天皇の延元元年（一九九六）から後龜山天皇の元中九年（二〇五二）まで五十七年間あつた。

【參じ】　サンじ。まゐること。參上すること。

保元物語、官軍方々手分の條に「軍兵雲霞の如く召しぐして高松殿に參じたり。」

【四條中納言隆資】　シデウチュウナゴンタカスケ。左近衛中將藤原隆實の子。幼にして父を喪ひ、祖父隆顯に育てられた。累進して檢非違使、權中納言に拜せられた。元弘の亂、華山院師賢に從つて比叡山に赴き、事破れて歸り、笠置に赴いた。笠置陷るや、僧となつて逃れたが、建武中興の後、結髮して官職を復せられた。延元の亂、高師直と戰つて敗れた。後醍醐天皇の吉野の行宮に幸し給ふや、忠誠を傾けて奉仕した。天皇の崩後、後村上天皇を輔けまゐらせて庶務を決した。四條縄手の戰、兵三千に將として飯盛山に陣したが、正行が戰死し、賊が行宮に火を放つに及び、天皇を奉じて賀名生に遷つた。後從一位、大納言に拜せられた。

正平七年（一三〇一二）男山の戰に奮鬪して斃れた。年六十。左大臣を追贈せられた。

【尭弱の身】　ワウジャクのミ。かよわいからだ。

伊勢貞丈曰く「尭はチヒサシとも、ヤマヒビトともよむ字なり。弱はヨワシとよむ字なり。病人などの如くよわきをいふなり。尭弱の官人、また尭弱の訴訟人などいふは、皆その人の威勢もなく弱しといふことなり。」

謝靈運の謝レ封二康樂侯一表に「豈臣尭弱（ノ）、所レ當（ナランヤ）レ承（ベキ）。」

【大敵の威を碎き】 正成が「正成一人未だ生きて有りと聞し召され候はば、聖運遂に開かるべしと思し召され候へ。」と頼もしげに申して、赤坂・千劍破で北條氏の大軍を破り、遂に北條氏を滅すに至つたことをいふ。

【先朝】 センテウ。先代の天子。こゝは後醍醐天皇を申し奉る。

前出「主上」の項參照。

【宸襟】 シンキン。天子の大御心。

卓氏藻林に「宸襟帝心也。故云宸襟洽薛蘿。」

楊巨源の詩に「景雲隨御輦、顯氣在宸襟。」

太平記、十三、龍馬進奏の條に「今度天下を定めて宸襟を休め奉りたる者は高氏・義貞・正成・圓心・長年なり。」

【逆臣】 ギャクシン。むほんの心をいだいてゐる臣。反臣。

太平記、六、天王寺未來記の條に「太子、守屋の逆臣を討つて」

こゝは足利尊氏及び直義をさしていふ。

【西國】 サイコク。(一)西方の國。(二)九州地方。

こゝは(二)の意。

【危きを見て命を致す】 君國の危難を見て、默止するに忍びず、おのが一命を捨てて力をつくすこと。

論語の憲問に「子曰、見レ利思レ義、見レ危授レ命。」

【豫て思ひ定め候ひけるかによつて】 「前々から覺悟をきめてゐましたかいたしまして」といふほどの意。

【攝州】 セッシウ。攝津國。近畿地方の一國。西は播磨、北は丹波、北東から南東にかけては山城・河内・和泉に接し、南は大阪に面し、大阪平野を展開する。四市・五郡に分れ、大阪市及び三島・豐能の二郡は大阪府に、神戸・西ノ宮・尼ケ崎の三市及び武庫・川邊・有馬の三郡は兵庫縣に屬する。古くは浪華(ナニハ)の國又は津の國といつた。津は卽ち難波津(浪華津)で、大阪地方の舊名。往古から無比の要津として知られ、國名も亦これから起つた。

【湊川】・ミナトガハ。攝津國武庫郡の丹生山田に發し、諸溪流を合し、神戸市の間を流れて海に注ぐ。平時は水が涸れ、砂磧を見るのみであるが、一旦豪雨があると、濁水が滔々として氾濫するので、明治三十五年起工して、

會下山の南端で水路を刈藻川に會せしめ、西南流して海に注がしめた。

楠公湊川戰死の事は、太平記卷十六、「正成兄弟討死の事」の條にくはしく見えてゐる。今左にこれを揭げる。

正成兄弟討死の事

楠判官正成、舍弟帶刀正季に向つて申しけるは、「敵前後を遮つて、御方は陣を隔てたり。今は遁れぬ處と覺ゆるぞ。いざや先づ前なる敵をひと散らし追ひまくつて、後なる敵に戰はん。」と申しければ、正季「然るべく覺え候。」と同じて、七百餘騎を前後に立てて、大勢の中にかけ入りける。左馬ノ頭(直義)の兵ども、菊水の旗を見て、よき敵なりと思ひければ、取りこめてこれを討たんとしけれども、正成・正季、東より西へ破つて通り、北より南へ追ひなびけ、よき敵と見るをば馳せならべて、組んで落ちては首をとり、合はぬ敵と思ふをば、一太刀打つてかけちらす。正成と正季と、七度合ひて七度わかる。その心、偏に左馬頭に近づき、組んで討たんと思ふにあり。遂に左馬頭の五十萬騎、楠が七百餘騎にかけなびけられて、又須磨の上野の方へぞ引返しける。直義朝臣の乘られたりける馬、矢尻を蹄に踏みたてて右の足をひきける間、楠が勢に追ひつ攻められて已に討たれ給ひぬと見えける處に、藥師寺十郎次郎唯一騎、蓮池の堤にて返しあはせて、馬より飛んでおり、二尺五寸の小長刀の石づきを取りのべて、かゝる勢の馬の平頸、むながひの引廻し、切つては刎ね倒し、切つては刎ね倒し、七八騎が程切つて落しけるその間に、直義は馬を乘りかへて、遙々落ちのび給ひけり。左馬頭楠に追ひ立てられて引き退くを將軍(尊氏)見給ひて、新手を入れかへて、「直義討たすな。」と下知せられければ、吉良・石堂・高・上杉の人々六十餘騎にて湊川の東へかけ出でて、跡を切らんとぞ取りまきける。正成、正季、又取つて返してこの勢にかゝり、懸けては打ちちがへて殺し、懸け入つては組んで落ち、三時が間に十六度まで闘ひけるに、その勢次第次第に減びて、後はわづかに七十三騎にぞなりにける。この勢にてもうち破つて落ちば落つべかりけるを、楠京を出でしより、世の中の事、今はこれまでと思ふ所存ありければ、一足も引かず戰つて、機已に疲れければ、湊川の北に當つて、在家の一村ありける中へ走り入つて、腹を切らんために鎧を脱いでその身を見るに、斬創十一箇所・三箇所の疵を被らぬ者はなかりけり。楠が一族十三人、手の者六十餘人、六間の客殿に二行並みゐて、念佛十返ばかり同音に唱へて、一度に腹をぞ切つたりける。正成座上にゐつゝ舍弟の正季に向つて、「抑〻最期の一念に依つて善惡の生を引くといへり。九界の間に何か御邊の願なる。」と問ひければ、正季から〳〵と打笑ひて、「七生まで唯同じ人間に生れて、朝敵を滅さばやとこそ存じ候へ。」と申しければ、正成よに嬉しげなる氣色にて、罪業深き惡念なれども、我もかやうに思ふなり。いざさらば同じく生を替へて、この本懷を遂せん。」と契つ

て、兄弟共に刺違へて、同じ枕に伏しにけり。橋本八郎正員、宇佐見河内守正安、神宮寺太郎兵衛正師、和田五郎正隆を始として宗徒の一族十六人、相隨ふ兵五十數人、思ひ〳〵に並みゐて、て一度に腹を切つたりける。菊池七郎武朝は、兄の肥前守が使にて須磨口より合戰の體を見に來りけるが、正成が腹を切る所へ行きあひて、をめ〳〵しく見捨ててはいかゞ歸るべきと思ひけるにや、同じく自害をして炎の中に伏しにけり。抑〻元弘より以來、忝くもこの君に憑まれまゐらせて、忠を致し功に誇る者幾十萬ぞや。然れどもこの亂また出できて後、仁を知らぬ者は朝恩を捨てて敵に屬し、勇なき者は苟も死を免れんとて刑戮にあひ、智なき者は時の變を辨ぜずして、道に違ふ事のみありしに、智仁勇の三德を兼ねて、死を善道に守るは、古より今に至るまで正成ほどの者は未だなかりつるに、兄弟共に自害しけるこそ、聖主再び國を失ひて、逆臣横に威を振ふべき、その前表の驗なれ。

【了んぬ】　ヲハんぬ。「をはりぬ」の撥音便。

【扶持】　フチ。(一)たすけもつこと。たすけること。(二)一人一日の食料を標準として、米を以て毎月給する祿。江戸幕府では、一人一箇月の分を玄米一斗五升とした。扶持米。俸米。こゝは(一)の意。

禮記に「出入則或先或後。而敬扶二持之一。」

孟子の滕文公上に「疾病相扶持。」

【朝敵】　テウテキ。朝廷に敵對する賊。天子に叛く賊。反賊。

太平記、十六、日本朝敵の條に「朝敵となつて叡慮を惱ましし賊。」

【壯年】　サウネン。人の一生中、最もさかんな年頃。又、その年頃の人。壯齡。

隋書の張奬傳に「雖レ云二致仕一、猶克二壯年一。」

太平記、二、三人僧徒關東下向の條に「壯年の比より醍醐寺に移住して」

【我と手を碎き】　われみづから種々の手段をめぐらすこと。

「我と」は、われみづから。我が心から。自身と。

古今著聞集、十二に「朝夕見聞けども、我と手をおろしてしたる事なければ」

「手を碎く」は、さま〴〵に工夫をこらすこと。種々に方法を講ずること。

【且は】　カツは。この事と彼の事と二つにわたつたときにいふ語。一方には。一方では。

紀貫之の古今集序に「且は人の耳におそり、且は歌の心に恥ぢ思へば」

【亡父の申しし遺言】　バウフのマウししキゲン。櫻井驛に於て正成が正行に言ひのこしたことば。

太平記、卷十六、「正成兵庫へ下向の事」の條に、

正成……五月（延元元年）十六日に都を立つて、五百餘騎にて兵庫へぞ下りける。正成これを最後の合戰と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ樣ありとて、櫻井の宿より河内へ返し遣はすとて、庭訓を殘しけるは、獅子子を產んで三日を經る時、數十丈の石壁よりこれをなぐ。その子獅子の機分あれば、敎へざるに中より跳ねかへりて、死する事を得ずといへり。況や汝已に十歳に餘りぬ。一言耳に留まらば、我が敎誡に違ふことなかれ。今度の合戰天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顏を見んこと、これを限りと思ふなり。正成已に討死すと聞きなば、天下は必ず將軍の代に成りぬと心得べし。然りといへども、一旦の身命を助らんために、多年の忠烈を失ひて降人に出づることあるべからず。一族若黨の一人も死殘つてあらん程は、金剛山のほとりに引籠つて、敵寄せ來らば、命を糞由が矢さきにかけて、義を紀信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずると、泣々申し含めて、各〻東西に別れにけり。

【有待の身】　ウダイのミ。凡夫無常の身。佛語。甲、乙、丙等、對峙するところの相對的事物、卽ち相對界を「有待」といふ。この相對・差別の現象は、その性質たるや無常で、生滅變化窮りなきものである。絕對常住の理に體達せぬ迷界の衆生は、生滅無常の理に支配されるものゆゑ、その身は垢穢不淨である。これを有待の身といふ。

太平記抄に「凡夫の身をいふなり。云々」

法華經の科註に「初心有待、若得二供養一、所レ修事成。」

平家物語、三、醫師問答の條に「たとへ四部の書を鑑みて百療に長ずといふとも、いかでか有待の穢身を救療せん。」

【傳奏】　デンソウ。禁裡で武家から申し出る事を傳達奏聞する役。もとは上皇の御所に置かれたが、後には禁裡でもおかれることとなつた。建武中興の御時は、傳奏二十四人を置き、これを四組に分ち、日々執奏せしめられたといふ。

故實拾要に「傳奏といふは、諸寺院等いづれにもあり。諸社は諸社の事を奏し、諸寺はその寺院、武家はその武門の諸事を奏するなり。又諸社・寺院の傳奏は、堂上代々その家あり。諸家中これを勤むるなり。」

本文では官名をいつたのではない。御取次の人といふ義で、四條中納言隆資を指したのである。

【直衣の袖をぞ濡されける】　隆資が、まだ事の趣を奏上せぬ

さきに、はふりおちる涙で直衣の袖をぬらしたといふ意。

「直衣」（ナホシ）は高貴の人の着用する略服。形は大盤袍に似て、稍〻短く狭い。地質はしゞら綾で、色は白、蝶の丸の模様がある。裏は紫の平絹。老幼などによつて、色に濃淡の別がある。夏は紗の類でつくり、裏をつけず、三重襷（ミヘダスキ）の模様がある。下には單・下袴・指貫をつける。略服だから、勅許を得ないものはこれを着けて參内することが出來ぬ。勅許を得ることを雜袍をゆるされるといふ。直衣を着て頭に烏帽子をかぶつた裝を烏帽子直衣といひ、冠をつけた裝を冠直衣といふ。

御村上天皇は第八十七代（吉野朝第二代）の天皇。御諱は義良（ノリナガ）。後醍醐天皇の第八皇子。御幼少から東北の地を鎮めたまひ、戰亂の間に吉野の行宮で位に卽かせられた。時に延元四年（一九九九）、御年十二。天皇の御代は足利尊氏離叛の後をうけて、御宇三十年、征戰に殆ど虛しき日はなかつた。正平二十三年（二〇二八）崩御。寶算四十一。河内の檜尾山陵に葬り奉つた。

【南殿】　ナンデン。又、ナデン。紫宸殿をいふ。紫宸殿は朝賀・御卽位・節會・朝旦以下の諸公事及び季御讀經・仁王會等一切を行はせたまふ大内裡の正殿。内裡の稍〻南にあつて、仁壽殿の南に位する。南殿と稱せられるのは蓋し中央諸殿の最南にあるからであらう。

尤もこゝは吉野の行宮の事だから、正式に舊例故格に則つた南殿のある筈はない。隨つて只南殿に擬せられた正殿といふほどの意であらう。

【照臨】　セウリン。明らかに照らしのぞむこと。又、神・佛・天子などの見そなはすこと。

書經の泰誓に「若二日月之照臨一光二于四方一。」

詩經の國風に「日居月諸照二臨下土一。」

太平記、十七、山門の牒南都に送る事の條に「主上龍顏麗しく群下を照臨あつて、今日の合戰、何時よりも忠を盡くすべし」

【叡慮】　エイリヨ。天皇・上皇の御思召。こゝは後村上天皇の御思召を申す。

保元物語、後白河院御卽位の條に「一宮重仁親王を位に卽け奉らんとや思し召しけん。叡慮はかり難し。」

【累代の武功】　代々のいくさのてがら。こゝは正成・正行父子一族の朝家に對してつくし奉つた軍事上の功績をおほせられたのである。

「累代」は、世をかさねること。代々。累世。

晉書の惠帝紀に「焚二累代之寶一。」

宇津保物語の忠乞に「るゐだいに傳はれる帶なり。」

【神妙】　シンベウ。又、ジンメウ。（一）くしくたへなること。ふしぎ。（二）けなげな所行をほめる語。殊勝。奇特。こゝは（二）の意。

左思の吳都賦に「斯實神妙之響象。」

平家物語、一、殿上の闇討の條に「木刀を帶しける用意の程こそ神妙なれ。」

平家物語、二、烽火の條に「日ごろの契約を違へず、皆かやうに參りたるこそ神妙なれ。」

【天下の安否たるべし】　天下の安否のわかれるところであらう。天下が安らかになるか、みだれるかの岐れるところであらう。

【進退度に當り】　一進一退に節度のあること。進むべくして進み、退くべくして退くこと。

「進退」は（一）進むと退くと。（二）かけひき、（三）たちゐふるまひ。（四）職務に就くと去ると。去就。こゝは（一）の意。

「度」は、こゝでは、ほど、かぎり、程度などの意。

【とかくの勅答に及ばず】　正行が恐懼感激、無言のまゝ勅諚を拜受して、とやかくと奉答をいたさなかつたことをいふ。「勅答」は、正しくは奉答とあるべき處。しばらく原文に隨つておいた。

【和田新發意】　ワダシボチ。名は賢秀。楠木氏の一族。幼にして剃髮して新發意と稱した。正平二年（二〇〇八）楠木正行に從つて細川顯氏と住吉に戰ひ、奮戰して敵數十人を斬つた。敵は爲に靡いた。高師直兄弟の來寇するや、弟正朝等と正行に從つて吉野の行宮に到り、拜辭して出で、四條畷に戰つた。賢秀は眉尖刀を用ひて奮鬪し、向ふところ敵なき有樣であつた。既にして味方が破れ、大將正行をはじめ一族從士皆戰死するや、獨り敵に混じて師直を狙ひ、相距る數歩に及んだが、楠木よりの降人湯淺某に見出されて殺された。

大正八年十一月、從四位を追贈せられた。

「新發意」(シンボチ、シボチ)とは、新に佛道に入つた人の稱。

但し、普通には三位以上を入道といひ、三位以下を新發意といふのが例である。

法華經、方便品、八十に「新發意菩薩、供養無數佛」

榮華物語、見果てぬ夢に「この二位の新發意、心をまどはして御祈りをし、いみじき事ども。」

源氏物語、若紫の巻に「かの國の前の守。しぼちが娘のかしづきたる家、いといたしかし。」

【新兵衞】　シンペエ。和田正朝。楠氏の一族。賢秀の弟。兵衞尉となり、新兵衞と稱した。四條畷の戰、正行に從つて健闘し、殆ど師直を獲ようとした。衆寡敵せず、一族悉く戰死するや、事の狀を行宮に奏し奉らうとして走り出たが、偶〻敵阿保忠實等に追跡せられ、志を果さずして討死した。

大正八年十一月、從四位を追贈された。

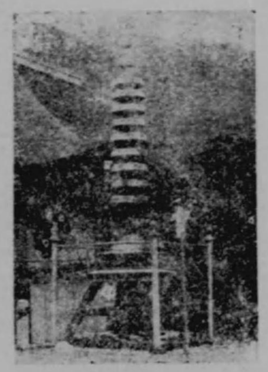
【先皇の御廟】　センクワウのゴベウ。後醍醐天皇の御陵。

山陵志に「在二吉野山藏王堂東北一今呼二塔尾陵一昔時以二陵前有二如意輪塔一名レ之也。」

「御廟」は、おんたまや。御靈屋。

古事談、五に「聖德太子御廟。」

【如意輪堂】　ニ・イリンダウ。吉野山中、勝手神社の西南の谷、藏王堂の東北にある淨土宗の古刹。俗に塔尾といふ。往昔如意輪塔のあつた地だといふ。本號は如意輪寺。本尊如意輪觀音は後醍醐天皇の御作と傳へられてゐる。本堂は後醍醐天皇の御影殿で、御影像を厨子に奉安し、扉に吉野金峯より、熊野・那智に至る行路の繪圖を寫し、その上に藏王權現の讃詩がある。この讃詩は後醍醐天皇の御宸筆と傳へられてゐる。開基は日義上人。正行の辭世の歌によつて名だかい。但し、今歌を彫りつけた扉のあるのは、後世の僞作である。



正平中兵火にかゝつて堂塔が烏有に歸した。元中年中後

龜山天皇の皇子世泰親王がこれを復興して小堂を營まれた。爾後漸次荒廢したが、近年維持金を募つて修理を加へたので、稍〻面目を改むるに至つた。

【過去帳】　クワコチャウ。寺院で死亡者の法名、年月日を記入し、忌日に讀經・回向などするために備へる帳。又鬼簿とも、靈簿とも、鬼籍とも書く。唐の戒禪師が勅を奉じ、一箇月に三十佛を配し、毎日禮拜して人天の福を修したのに起るといふ。

平家物語、一、妓王に「後白河法皇の長講堂の過去帳に、妓王・妓女・佛・とじ等が尊靈と、四人一所に入れられたり。」

本文は壁板を過去帳として書いたといふ意に見るべきであらう。傳によれば、楠正行は、その壁板に

楠木正行、同正時、同將監、和田新發意、同舍弟新兵衞、同紀六左衞門、子息二人、野田四郎、子息二人、西河子息、關地良

四

各留半蓮臺　待我閻浮同行人

先だてて後るゝ人を待ちやせん

ひとつ蓮の中を殘して

願以此功德　平等施一切

同發菩提心　往生安樂國

歸らじとかねて思へば梓弓

なき數にいる名をぞ留むる

と書きつけたといふ。

【歸らじとかねて思へば云々】　「既に生還を期しない身であるから、あらかじめ過去帳にその名を留めておく。」といふ意。

梓弓(アヅサユミ)は梓の木でこしらへた弓。こゝは「いる」の枕詞。「かへる」もまた弓の緣語。「入る」を「射る」にかけ、「歸らざる」に一たび射た矢のふたゝび反らないことをかけてよんだもの。

毛利本太平記には「あづさ弓ひきかへさじとおもふなり……」となつてゐる。

【逆修】　ギャクジュ。死なぬ前に、あらかじめ死後の供養を修すること。

隨願往生十方淨土經に「未レ終之時、逆修三七、然レ灯續レ明、懸二旛蓋一請二召衆僧一轉二誦尊經一修二諸福業一得レ福多。」

東鑑十八、建仁四年二月二十一日の條に「尼御臺所被レ始二行御逆修一」

佛祖統記第三十四には「預修」とある。

7　挿圖

笠置の靈夢　小堀鞆音筆

後醍醐天皇の笠置に於ける靈夢を描いたもの。（本文參照）

作者小堀鞆音は現代知名の日本畫家。元治元年（一八六四）栃木縣安蘇郡横川村に生れた。明治十六年上京、川崎千虎に就いて古土佐派の手法を學び、傍ら有職故實を研究した。同年東京美術學校教授に任ぜられたが、翌年これを辭し、岡倉覺三等と日本美術院を創立した。同四十二年再び同校教授に任ぜられた。現に帝室技藝員・古社寺保存會委員である。門下には安田靫彦・磯田長秋・尾竹竹坡・尾竹國觀等、俊才が多い。

藤房卿訪楠公　山名貫義筆

太平記の記事に基づいて、笠置の靈夢によつて、藤原藤房が天皇の御旨を奉じ、河内の國赤坂に楠公を訪ふところを畫題としたもの。國際寫眞情報所載の圖に據つた。

正成勅問に奉答す

太平記の原畫を採つた。

正行敵兵を救ふ　小堀鞆音筆

正行が渡邊の橋のたもとに敵の傷病兵をいたはるところ。本文參照。

筆者小堀鞆音の略傳は前に出てゐる。

四條畷神社　シデウナハテジンジャ。

別格官幣社。大阪府北河内郡四條畷村南野に鎮座。祭神は楠木正行。明治二十二年十二月別格官幣社に列せられた。例祭は二月十二日。

一八　誠

1　解題

「梅園叢書」の中から、「誠の說」といふを採錄して一課とした。「梅園叢書」（バイエンソウショ）は三卷。三浦梅園の著した諸論纂を叢書としたもの。「詩を說きて道に志す人に喩す」、「酒・食・欲の誡」、「生前死後の理」等より、「米に譬へて五倫の道を喩す」、「施をなし又施を受く」等に至る凡そ四十九篇より成る。卷頭に天明元年辛丑（一七八一）の自序がある。今、「百家說林」の第六卷に收められてゐる。

2　作者

三浦梅園　ミウラ　バイエン。

名は晉。字は安貞。梅園はその號。別に彝山・孔山・洞仙・季山などとも稱した。豐後杵築の人。祖父輸山以來醫を業としてゐた。梅園幼にして穎敏、綾部絅齋に就いて儒を學び、十七歲の頃中津に赴き、藤田敬所に師事して學業が日に進んだ。その志すところは天地造化の玄理を究むるにあつて、殆ど寢食を忘れた。年三十、頗る悟るところあり、遂に玄語十萬餘言を著し、陰陽消息の度、氣物融化の道を論じた。又、贅語を逸べてその餘蘊をつくし、敬語を著して先聖の道を啓發した。これを梅園三語といふ。平素節儉を行つて米穀を貯へ、歉時に貸出し、豐年に息を入れしめた。爲に鄕閭の民は皆饑寒を免れ、こぞつてその德行に感動した。夙に嘉遯を尙び、諸侯の招聘を辭して、獨りその道を樂しんだ。天明三年（一七八三）藩主松平親賢が新に立つに及び、待つに家老の禮を以てし、進見毎に政治の得失を諮詢して、眷遇が尤も厚かつた。乃ち殊恩に感激し、匡補到らざるはなかつた。著すところ、前記梅園三語の外、梅園日記、愉婉錄、詩輯、敎證、寓意、梅園詩集等がある。これらは多く梅園叢書の中に收められてゐる。寛政元年（一七八九）三月十日卒。年六十七。

明治四十五年二月、從四位を追贈せられた。

3　編纂の用意

徳川時代の思想家三浦梅園の「誠」に關する說を讀み且解せしめて、この種の文を草する場合の範例たらしむると同時に、誠の本義の極めて深奥なる所以を心解せしめ、

三浦梅園

兼ねて、生徒各自の日常の言行に省みて、深く警むるところあらしめたい。

4　要旨

誠とは如何なるものか。これを說いて一章を成してゐる。誠とは我にあるところのものを盡くすことで、その盡くした結果を必ずしも問ふ要はない。誠とは僞を言はないといふのみでは、纔に入門の程度である。僞を言はないのは、信といふもので、それは德目として小さい。僞がない、卽ち、積極的に言へばどうしても僞り得ない實が存するとき、それを誠といふので、信よりは遙かに大きいのである。本課には、いろ〳〵の例話があげてあるが、要旨は右の通りである。要するに、誠とは、おほふことの出來ない、また決して虛飾を容さない實である。

5　概說

第一節（一四頁五行――同頁八行）譬を一勺の水に借りて、我にあるものを盡くすが誠である旨を說いて序とした。

第二節（同頁九行――一一六頁一行）うそを言はないのみが誠であると考へるのは愚であるといひ、更に積極的に誠の實あるべきことを、草の實に譬へて述べた。

第三節（一一六頁二行――一一八頁）他人の知ると知らざるとに拘らず、盡くすべきことを盡くすが誠である旨を說くに、蘧伯玉の禮の躬行、一升の米の取捨、草木の成長、人の客を待つ態度などを例にし、最後に、人を欺くことは出來ても、我が心を欺くことは出來ないといふ結語を導き來つて、一首の歌をあげ、なほ、畠山重忠の至誠に就いて附言した。

6　取扱上の注意

▲この課は、冒頭の譬喩が解しにくいやうに思ふ。殊にその一節だけでこれを解釋しようとすると、生徒には十分に納得出來ないであらう。つまりは「我にあるところの誠を盡くす」のが君子の道であることを言ふ爲の客想である。なほ、後節の「一升の米」や「草木の色」などに就いて語る部分と比較して考へしむべきである。

▲信も誠も、ともに「まこと」であるが、人の言のみに關する信は、小である。言にも行にも、僞のない誠が大であるといふ第二節が、本課に於ける一重點であると思はれる。俗に言へば、「どうしようもない」「あらそはれない」眞實が、まこと（誠）であるといふのである。

▲誠か誠でないかはわが心がこれを知る。人は時に欺くべし、我は斷じて欺くべからずといふ、これも本課の一重點である。この結果は、わが心さへ誠にかなつてをればよいといふことにもなる。重忠の態度がそれである。

「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神や守らむ」といふ歌は、もとより結構な歌であるが、重忠の如き態度から、更に徹底的に言ふならば、心だに誠の道にかなつてゐる以上、神の守ると否とは問題にならないのである。誠とは、それほどに、嚴肅なものであり、强烈なものであることを、この誠によつて學ばせたいものである。

▲「人平生をたしなまずして云々」の條の如きは、學生々活の通弊である試驗勉强などを戒める上からも好個の材料とならう。

7　設問

1　第一節は、つまり、どういふことを說いたのであるか。

2　「僞を言はぬに對する信は小さし、僞なきに對する誠は大なり」とはどういふことか。

3　「我が心を欺く」とは、どういふことか。

4　重忠の言葉の中で、「僞なしと申し上ぐれば」以下は、如何に解釋すべきか。

5　今日商業上その他金錢の授受に於て、受取證の用ひられるのは、如何に觀察すべきか。

8　釋義

【一勺の水を海に入れて云々】こゝはちよつと解しにくい。大體次のやうな意味である。

「たつた一勺ばかりのわづかの水を大海の中に入れて、海の水が增したといふのは、ばかげきつたことである。さうかといつて、增しはしないといふのは、でたらめのうそである。（たとひ少量にしても、一勺だけの水は增してゐるのだから）この場合、水を加へることは自分のしたことで、水が增すと增さぬとは、自分のあづかり知つたことではない。そんなことに

かゝづらつて、水が増したの増さぬのと、つまらぬ議論を強ひてするには及ばぬ、自分としては、たゞ一勺の水を海に加へるやうに、人に知られると知られぬとにかゝはらず、聊かでも善いことをして、誠の道をつくしさへすればよい。これが君子の道といふものである」

「君子の道」とは、君子卽ち徳行の備はつた人、品格の高い人などの日常ふみ行ふ正しい道をいふ。

易經の上經に「君子終日乾々」。

書經の大禹謨に「君子在野小人在位」。

論曲、昭君に「君子に私の言葉なしとやおぼしけん。」

【ある人】　或人。こゝは宋の劉安世をさす。

安世、字は器之。大名府元城の人。嘗て司馬光に學び、心を盡くし己を行ふの要を問うた。光はこれに敎ふるに誠の一字を以てし、且、自ら妄語せざらしめた。神宗・哲宗及び徽宗の三朝に仕へて御史臺・諫議太夫等に任ぜられ、面折廷諫、剛直を以て稱せられた。儀容魁碩、音吐鐘の如く、家居の際も、未だ嘗て惰容を見せなかつたといふ。年七十六にして卒した。忠定と諡し、元城先生と號した。

【司馬溫公】　シバヲンコウ。司馬光。

支那宋代の名臣。字は君實。幼にして穎敏、嘗て水甕を割つてその中に陷つた小兒を救つたと傳へられてゐる。長じて博學賢明、仁宗・英宗に歷仕した。神宗の朝、王安石の新法に反對し、去つて洛陽にゐたが、哲宗が卽位して高太后が政を攝するに及び、召されて相となり、盡く新法を改めた。相位にあること八箇月にして光祐元年（一七四六）薨じた。年六十八。その薨ずるや、百姓は痛哭し、さながら父母を喪つたやうであつたといふ。太師・溫國公を贈り、文正を諡された。その著「資治通鑑」は、支那の編年史中最良の書と稱せられてゐる。

【妄語】　バウゴ。又、マウゴ。妄（ミダリ）に語ること。虛僞の言を吐くこと。うそをいふこと。

蘇轍の詩に「妄語自知當見棄。」

太平記、二十四、山門の嗷訴に依り公卿僉議の條に「國を保つべき太子たる人は、假にも妄語せず。」

【うそを言はぬを誠とはいふべからず】　うそを言はぬといふことは、たゞ誠の一部分で、誠の全部ではない。よつてかやうにいつたのである。

【僞を言はぬに對する信は小さし云々】　うそをいはぬに對する信は、小さなもので、僞なきに對する誠の大なるには及びもつかぬとの意。

【僞なきに對する誠は大なり】　毛頭微塵もいつはりのないといふことに對する誠は非常に大きなもので、うそをいはぬに對する小さな信とは、到底くらべものにならぬ。」との意。

【罌粟の子】　ケシノミ。罌粟の實。罌粟の種子。

「罌粟は芥子とも書く。罌粟科罌粟屬の二年生草本。莖の高さ四五尺。葉は長楕圓形或は長卵形で、淡綠色。缺刻又は鋸齒を有し、平滑にして葉柄がなく、葉脚が莖を抱く。五月頃深紅色又は紫色の四瓣大形の花を莖頭に開く。果實は殆ど球形の蒴である。各地の庭園に栽培して觀賞用とし、種子は食用に供し、或は搾つて油を採る。又未熟の果實からは阿片を採り、藥用に供する。

【煙草】　タバコ。茄科煙草屬の一年生草本。

莖は高さ四五尺に達する。葉は互生、卵形にして尖り、莖葉共に粘質に富む。夏日梢上に淡紅紫色、漏斗狀の花を開き、圓錐花序に排列する。南亞米利加の原產で、我が各地に栽培される。葉は乾かして喫煙の料とする。その含有するニコチンといふアルカロイドは甚だ有毒で、痲醉性がある。

【内に一つの誠といふものありて】　こゝは罌粟の子、煙草の實の中に宿つてゐる生命をさしていふ。

【苗瘁く】　ナヘカジく。苗が瘦せ衰へる。

「瘁く」は、(一)十分成長せぬこと。勢なきさまなること。見すぼらしいこと。瘦せ衰へること。(二)手足がこゞえて、自由を失ふこと。かじかむこと。こゝは(一)の意。

【衞】　ェイ。支那春秋戰國時代十二國の一。周の武王の弟康叔の封ぜられた所で、謂はゆる中原の地であつた。はじめ朝歌に都したが、後屢〻遷都した。春秋時代の末期まで盛んであつたが、四十二世、九百年で、西紀前二〇九年秦に滅された。

【靈公】　レイコウ。支那春秋時代の衞の君。名は元。襄公の子。立つて四十二年にして卒した。

【夫人】　フジン。(一)昔、支那で、天子の妃又は諸侯の妻の稱。(二)古昔我が國で、妃の次なる後宮の稱。(三)貴人の妻。奥方。こゝは(一)の意。

禮記の曲禮に「天子有后、有夫人。」

戰國策、楚に「爲君舍人而內與夫人相愛者、亦甚不義矣。」

【南子】 ナンシ。衛靈公の夫人。才色兼備の麗人であつたといふ。宋の人。人となり多淫、宋の子朝と通じた。太子蒯聵（カイクヮイ）は知つてこれを惡んだ。南子は大いに怒り、太子を靈公に讒した。太子は遂に宋に奔つた。靈公が薨じて蒯聵が立つに及んで、遂に害せられた。

【公門】 コウモン　宮廷の門。宮門。

論語の鄉黨篇に「入二公門一、鞠躬如也。」

【蘧伯玉】 キヨハクギヨク。支那春秋時代の衛の人。名は瑗。靈公に仕へて賢大夫の名が諸侯の間に高かつた。年五十にして四十九年の非を知つたといふ。

【禮】 レイ。禮記。こゝは禮記の曲禮篇。

「禮記」（ライキ）は書名。一名小戴禮。五經の一。支那の周末及び秦漢時代の諸學者の古禮に關する學說を輯錄したもの。前漢の世、戴聖（小戴）が大戴禮をけづつて四十六篇とし、これを小戴禮といつた。降つて、後漢の末馬融が小戴禮四十六篇に月令・明堂位・樂記の三篇を加へて四十九篇とした。これが今日に傳はる禮記である。

【公門に下り路馬に式す】 君の門前を過ぎるときは、馬車より下り、車中にて君の馬に遇ふときは、車の横木に頭を下げて敬禮する。

「路馬」（ロバ）は王者の乘る馬車の馬。「路」は「輅」に通じる。「式」（シヨク）は「軾」に同じ。車の前の横木。敬禮するときに伏してよりかゝるところ。こゝの「式す」は、これを動詞に活用せしめたもの。

【忠臣と孝子とは云々】 忠臣と孝子とは、常にその獨を愼んで、人が見てゐる表だつたところだからといつて、みさををのべて、その行をかざらうとはせず、又人の見てゐない、くらいところだからといつて、よからぬ行はせぬとの意。

「昭々」（セウ〳〵）は、明らかなさま。「冥々」（メイ〳〵）は、くらいさま。

列女傳に「忠臣與二孝子一、不下爲二昭々一信也節、不下爲二冥々一墮也行。」

【禮を廢（ス）てじ】 「禮を廢するやうな事はいたしますまい。」といふほどの意。

【四知】 シチ。後漢の楊震の故事にもとづく。二人のみでひそかに行ふことは他に知るものはないといふのはよろしくない。天も知り、地も知り、人（相手）も知り、自分も知つてゐるといふこと。

後漢書の楊震傳に「楊震、茂才ニ擧ゲラル。四タビ荆州ノ刺史ニ遷ル。東萊ノ太守トナリ郡ニ之クニ當リ、道昌邑ヲ經。故擧ゲシ所ノ荆州ノ茂才王密、昌邑ノ令トナリ、謁見ス。夜ニ至リ金十斤ヲ懷ニシテ以テ震ニ遺ル。震曰ク、『故人君ヲ知ル、君故人ヲ知ラザルハ何ゾヤ。』ト。密曰ク、『暮夜知ル者ナシ。』ト。震曰ク、『天知ル、神知ル、我知ル、子知ル、何ゾ知ルナシト謂ハンヤ。』ト。密愧ヂテ出ヅ。」

羅意經に「人所作善惡、有二四神知一之、一者地神、二者天神、三者旁人、四者自意。」

【さして】 これぞと指して。別段。格別。

源氏物語、榊の卷に「さして思ふことなきだに聞きすぐしがたげなるに……。」

【間斷】 カンダン。間のとぎれること。たえま。きれま。ひま。とぎれ。

韓愈の遊二青龍寺一詩に「赤氣冲融無二間斷一。」

【蘭】 フヂバカマ。藤袴。蘭草。菊科、蘭草科の多年生草本。高さ四尺に達し、全部に香氣を有する。下部の葉は二裂してゐるが、上部の葉は廣披針形を呈し、平滑にして鋸齒を有する。花は淡紫色の筒狀花冠を有し、頭狀花序に排列する。秋の七草の一。我が國到るところの山野に自生するが、又、觀賞用として多くの庭園に栽培せられる。しらん。ほそばのふぢばかま。らに。らにの花。らんさう。

萬葉集、卷八に「萩が花尾花葛花なでしこの花女郎花またふぢばかま朝顏の花」

【箸にあふ】 ハズにあふ。弦（ツル）が箸に合ふ義より、物事の調子のうまく合ふこと、よく適合することなどにいふ。

「箸」とは、弓の兩端、弦輪を受けるところ。弓を射るとき下になる方を本箸（モトハズ）といひ、上になる方を末箸（ウラハズ）といふ。（一）矢箸。（三）事の當然なること。す

ちみち。道理。すぢ。わけ。こゝは(三)の意。

【あるべからず】　こゝは「あるべくもあらず」の約語。「あつてはならぬ」といふ禁止の「べからず」と混同させぬやうにしたい。

【常々】　ツネ〳〵。「つね」を重ねた語。いつも〳〵。ふだん。平素。平生。

狂言、連歌毘沙門に「汝がつね〳〵信仰する多聞天、あらはれ出であるぞとよ。」

【帚灑】　ハキス、ギ。箒ではいたり、水ですゝいだりすること。はきさうぢ。掃除。灑掃(サイサウ)。

【蜘蛛のい】　クモのい。蜘蛛の巣。

「い」は、蜘蛛の巣。蛛網。

蜻蛉日記、巻下の中に「露にても命かけたるくものいに、荒き風をば誰れかふせがむ」

【その期に臨み】　そのときになつて。その場合にさしかゝつて。

「期」は「ゴ」とよむ。とき。をり。期限。

古今集、俳諧歌に「人戀ふることを重荷にになひもてあふこ

なきこそわびしかりけれ」

【俄掃除】　ニハカサウヂ。にはかに思ひたつて、はきさうぢをすること。

【其の肺肝を見るが如し】　ソのハイカンをミるがゴトし。

大學、傳之六章に「小人閒居爲二不善一無レ所レ不レ至。見二君子一而后厭然掩二其不善一而著二其善一。人之視レ己、如レ見二其肺肝一然。則何益矣。」とある。

句の意は、「小人は獨り居るときには、人目にふれぬからと油斷して、出來得る限りのわるい事をする。しかし、さすがに良心の苛責を受けて、よい心地はしない。それゆゑ、盛德の君子の前に出ると、きまりわるさうに、その善からぬ行をつゝみかくして、さも善い事をしてゐるやうに見せびらかす。さりながら、人はさほど目のきかぬものではない。それゆゑ、自分はうまくその善からぬ行をかくしおほせたとおもつてゐても、ちやうど腹の中の肺臓や肝臓を見ぬくやうに、雜作もなくそれを見ぬいてしまふ。して見れば、何程包みかくしたとて、何の甲斐があらうぞ。」

「肺肝」(ハイカン)は、(一)肺臓と肝臓。(二)心の奥底。

【人欺くべからず、我が心を欺くなり】　人といふものは欺くことの出來るものではない。人を欺くのは、つまりわれとわが心を欺くもので、まことによからぬ行である。

【いつはりと人に言ひてはやみなまし云々】　後撰集巻十一、戀に「親ある女に忍びて通ひけるを、男もしばしは人に知られじといひ侍りければ　讀人しらず」と詞書して、「無き名ぞと人にはいひてありぬべし心の問はばいかが答へむとある歌の上の句を少し改めたものらしい。

一首の意は『『あなたはこれ〳〵のわるい事をなさりはしませんか』と人が問うたとき、『そんな事はいたしません、それはまつかなうそです』と、人にいひわけして、それで、その場をごまかしおほせることは出來ませうが、さて、わが良心が同じやうな事を尋ねましたら、何と答へたらいゝでせう。まさかわが良心をごまかしおほせるわけにはいきますまい。」

【心に心を顧みて】　わが心に、わが心がけのよしあしをよくよく考へて見て。

【人をば欺くに云々】　人を欺くために、どうして、自分の心を自分で欺いたのであらうかと咎めたならば、おのづとはづかしうなつて、ひとりじつとしてゐても、額(ヒタヒ)から汗が出るであらう。

【畠山重忠】　ハタケヤマシゲタヾ。鎌倉初代に於ける幕府の武臣。重能の子。

始め頼朝の擧兵に應ぜず、三浦氏を衣笠城に攻めたが、後頼朝に降り、義經に從つて義仲及び平氏を討つた。又、奥州征伐のとき、頼朝の先鋒となつて功を樹てた。資性忠亮、深く頼朝に信任せられ、頼家を輔佐すべき遺言を受けた。然るにその子重保が平賀朝雅と相爭ひ、朝雅がこれを妻の母牧の方(北條時政の後妻)に訴へたために、遂に重保もろとも北條氏の毒手に斃れた。時に元久三年(一八六六)、齢四十二。

【鎌倉殿の不審を蒙りし時】　鎌倉殿源頼朝から嫌疑を受けたとき。その時の事情につき、大日本史には次のやうに見えてゐる。

範頼・義經の平氏を討つや、重忠、範頼の部下に在り。梶原景時範頼に屬するに及びて、重忠其の驕肆を惡み、指揮を受くるを愧ぢ、兄義經の勇武に服し、遂に之に屬す。義經喜びて曰く、重忠は武力儔なし。此を以て景時に代ふ、利甚だ大なりと。重忠、義經に從ひ、鵯越を踰え、平氏を一谷に攻めて功あり。文治三年伊勢の神人員部大領宗綱、重忠の目代神戸を鈔暴すと訴ふ。頼朝怒りて重忠の采邑を削り、千葉胤正の第に拘ふ。重忠食を絶つこと七日、口を杜ぢて言はず。胤正以て告ぐ。頼朝大いに驚き、釋して召見す、重忠拜謝し、乃ち等列に謂つて曰く、凡

そ邑土を受くる者は宜しく目代を擇ぶべし。われ常に清潔を以て身を律す。今不良の人に任じて自ら是の辱を招くと。頼朝命じてこの本領を復せしめ、たゞ伊勢沼田御厨を奪ひて吉見頼綱に賜ふ。重忠武藏に歸る。梶原景時間に乘じて語して曰く、重忠怨望して宗族を鳩集し、菅谷に據りて叛すと。頼朝、結城朝光・下河邊行平等を召して之を議す。朝光、其の異なきを保す。頼朝、行平を遣はして之を召さしむ。行平往きて其の狀を告ぐ。重忠大いに憤悲して曰く、我何の缺望有りてか舊勳を棄てて忽ち叛人と爲らん。赤心公に奉ずるは幕下の知る所なり。而して讒口の爲に陷れらる。自ら明らかにするに由なし、命を銜みて來るは我を誅せんと欲する者かと。刀を引いて將に自殺せんとす。行平遽に之を止めて慰諭す。重忠乃ち行平と俱に鎌倉に到り、景時に因りて陳謝す。景時曰く、子若し實に反謀なくんば宜しく誓書を上るべしと。重忠曰く。我心と言と二つなし。何ぞ誓書を煩さんと。景時入りて言ふ。頼朝默然たり。召して見るに及びて、唯寒暖を敍するのみ。一も紀問に及ぶことなし。事遂に釋く。云々。

「不審」(ブシン)は、(一)つまびかならぬこと。又、そのことがら。(二)うたがはしいこと。いぶかしいこと。(三)嫌疑を蒙ることは(三)の意。

義經記、六、靜が若宮八幡に參詣すに條に「御不審の身にて召し下され候ひしかば」

【起請】キシャウ。(一)物事を主君に請ひ奉ること。又、その文書。(二)神佛に誓を立てて、僞なき旨、又は約束に背かざる旨を記すこと。又、その文書。起請文。誓紙。こゝは(二)の意。

十訓抄、上に「起請を書きて三塔に披露せられける。」

【勝れていみじく聞え侍れ】「すぐれて立派に聞えることである。」といふほどの意。

「いみじ」は、甚だし、すぐれたり、いちじるし、などの意。善惡に通じていふ。

伊勢物語に「かみさへいといみじう鳴り」

源氏物語、桐壺の巻に「女もいといみじと見奉りて」

9 挿圖

三涌梅園像　筆者未詳。

「先哲像傳」より轉載した。

一九　戯作三昧

1 解題

芥川龍之介の小說「戯作三昧」の抄錄である。

「戯作三昧」は大正六年の作で、瀧澤馬琴の八犬傳執筆中の、いはゆる戯作三昧の心境を取扱つたものである。全篇十五章のうち最後の部分、卽ち十三章の大半と十四・十五の二章の全部とを採つたのであるが、本課の文は「現代小說全集」第一卷「芥川龍之介集」に收めてあるものに據つた。

現代小說全集は、全部十五卷、芥川龍之介・泉鏡花・菊池寛・久保田萬太郎・久米正雄・佐藤春夫・里見弴・志賀直哉・島崎藤村・谷崎潤一郎・田山花袋・近松秋江・德田秋聲・正宗白鳥・武者小路實篤の十五作家の選集で、大正十四年四月以降、新潮社から發行されたものである。

2 作者

芥川龍之介　アクタガハ　リユウノスケ。

大正文壇に於ける新現實主義の作家として最も好評を博した一人である。俳號を我鬼といひ、俳句・俳畫をも能くした。その博覽宏識であり、縱橫自在な才筆に惠まれてゐたことは次の評でも知られる。

芥川龍之介

——芥川龍之介は新技巧派をもつて呼ばれてゐる。氏の作品には無駄がない。あらゆる雜なものはすつかり刈り捨てられて、立派な渾成した藝術境をまとめ上げてゐる。上品で清純明朗、玉のやうに琢かれたのや、淡彩の山水畫のやうな瀟洒な感じのするもの、時には絢爛眼を眩ずる錦繡を織りなしたやうなものを見られる。氣の利いた機智のあらはれや、俳味のあるロマンチック期から、深刻な人生の現實を示し、人間の心理を解剖する現實的傾向に進んで來た。

氏の文の趣や味が一種の風をもつてゐることは氏の藝術觀から來てゐるが、直接に氏の技巧からも見得られる。聰明な氏の理智は文を行るに簡潔と周匝との適度を以てする。抑揚緩急縱橫の筆致で、和漢洋の文脈の種々相を渾融し、豐富な語彙を嚴選して、表現の整然たることによつて、文調と情調とを醸し出してゐる。

一體に氏の題材は古典から多く採られて、それに新しい生命を盛つたものが多い。（傑作鈔、明治より大正へ）
昭和二年自殺。年三十六。尙「參考」を參照せられよ。

3　編纂の用意

次課に馬琴作八犬傳の一節を置くので、それに聯關した文といふ意味に於て本課を定めたのである。併し單に八犬傳の著者馬琴を持出すだけの役目で一切であるといふやうなものではなく、むしろ、新技巧派の柱石ともいはれる芥川龍之介の作品の齎す好趣向と妙味とが、優秀なる現代文として生徒の心を養ひ、頭腦を喜ばしめ、更にこれに對する興味を鼓吹する點に於て、教材として千鈞の重みを有するものなのである。

4　要旨

南總里見八犬傳は馬琴が二十八年の心血を濺いだ一代の傑作である。本課ではこれが執筆中の刻苦とその喜悅の感激の一端とを藝術化した作者の筆の力を鑑賞せしめると共に、凡そ藝術家の傑作には、他の窺ひ知るべからざる辛苦と、これに伴なふ快味、いはゆる「戯作三昧」の心境に類するものが存することを感知せしむべきである。殊に作者自身が創作家たるだけあつて、その創作的感激の悲壯なる點、嚴肅なる點が、その他の心理描寫と相俟つて實に心ゆくまでに描かれてゐるところを十分に味ははしめたいものである。

5　概說

本課に至るまでの話は大路次のやうである。

天保二年九月の或午前、神田同朋町の錢湯で、馬琴は垢を流してゐる。同じ浴客の中に、小間物屋の近江屋平吉といふ者が馬琴を見つけて、頻りに八犬傳を褒め立てる。すると、又眇（すがめ）の某といふ者が、あべこべに彼に聞えよがしに八犬傳を惡評する。馬琴は不快になりながらも、やはり自信（日本の古今に比倫のない大傳奇として、八犬傳を完成しようといふ）を抱きながら家に歸る。歸宅すると、留守へ和泉屋市兵衞といふ書肆の主人が來て、原稿を頂きたいといふ。馬琴はこの男といろ〳〵戯作の話などするが、つひに自尊心を傷つけられたので、彼は腹を立てて和泉屋を逐返してしまふ。その後で、彼は佛參に行つてゐる家族の留守に、下女の調へてくれる晝食を獨りですまして、書齋に引取つて、またも道德家としての彼と、藝術家としての彼との間に纏綿してゐる疑問などを考へ込んでゐる。そこへ、渡邊崋山が尋ねて來る。崋山は彼に借りた本を返しに來たのである。彼は崋山を迎へて、崋山が彼に進じようとする繪の話などするが、果ては二人で次のやうな會話をする。

「八犬傳は不相變、捗（はか）がお行きですか。」
「いや、一向捗どらんで仕方がありません。これも古人に及ばないやうです。」
「御老人がそんな事をいつては、困りますな。」
「困るのなら、私の方が誰れよりも困つてゐます。併しどうしてもこれで行ける所まで行くより外はない。さう思つて、私はこの頃八犬傳と討死の覺悟をしました。」
「たかが戯作だと思つても、さうは行かない事が多いのでね。」
「それは私の繪でも同じ事です。どうせやり出したからには、私も行ける所までは行き切りたいと思つてゐます。」
「御互に討死ですかな。」

二人は聲を立てて笑つた。しかしその笑聲の中には、二人だけにしかわからない或寂しさが流れてゐる。と同時に、又主人と客とは、ひとしくこの寂しさから、一種の力强い興奮を感じた。

崋山が歸つた後で、馬琴はまだ殘つてゐる興奮を力に、八犬傳の稿をつゞべく、何時ものやうに机へ向つた。そして彼は、昨日書いたところ、その前のところ、もう一つ前のところと、逆に前の部分に眼を通した結果、

拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して來る。そこには何等の映像も與へない敍景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さうして又、何等の理路をも辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書き上げた何回分かの原稿は、今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に、心を刺されるやうな苦痛を感じた。

本課の文　は、上記の引用文に續いてゐるものである。

第一節（一二四頁―一二七頁一〇行）　馬琴が獨りで、失敗の原稿から釀された憂欝の氣分に鎖されてゐると、孫の太郎が急に室に入つて來て、彼の氣分を愉快にする。

第二節（一二七頁一一行―一三二頁八行）　太郎が觀音樣のお告げだといつて、祖父の馬琴に、「もつと辛抱强くして、もつとえらくなれ」との旨を話す。馬琴は折も折とて、この孫の言葉に感激して涙を流す。

第三節（一三二頁九行―一三五頁）　その夜の事、馬琴は神來の興に乘じて、いはゆる「戯作三昧」の快味に心身ともに浸り込んでしまふ。

第四節（一三六頁―一三七頁）　茶の間には、相變らず俗世間の會話が家族の者に取交はされてゐる。蟋蟀は書齋でもこゝでも秋を鳴きつくしてゐる。

6　取扱上の注意

▲八犬傳は、次の課の「芳流閣」で、その一節を直接に味ははすべきであるが、その世界的の大作であるといふやうな大體の文學史上の價値などについては、本課を取扱ふにあたつて、先づ説話されねばなるまい。

▲又、本課の話については、「概説」に示した梗概について語り聞かせる必要があらう。

▲夏目漱石は、最後の傑作「明暗」執筆中の心境を「苦痛、快樂、器械的、この三つをかねてゐます。」と告白してゐるが、この作に描かれた馬琴の戯作三昧の心境と比較して甚だおもしろい。漱石は更に、「それでも、毎日百回近くもあんな事を書いてゐると、大いに俗了された心持になりますので、三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。」と、その告白には續けてゐる。漱石はやはり小説の創作に俗了といふ感を有つてゐる。馬琴は二十八年がかりで、八犬傳を書いて更に倦むことを知らない。今、古今兩大家の價値を上下するわけではないが、その藝術家としての行き方には、甚だしい差があることを感じないわけには行かないのである。但し漱石の「快樂」は、やはり馬琴の「戯作三昧の快味」と相通ずるものでなければならぬ。

7　設　問

1　馬琴の氣持（心理）が、殊によく描かれてゐると思はれる點をあげよ。

2　こゝに描かれたところから想像して、馬琴はどんな性格な人であつたと思はれるか。

3　「光のやうなもの」（一三三頁）とは、どんなものを指してゐるであらうか。作者自身は、外に何と言つてゐるか。

4　「三昧」とは、何と説明されてゐるか。お路の言葉では何と言つてあるか。

5　作者は、どこに最も力をいれて書いてゐるか。

6　馬琴の家族の人たちの性格までもよく描いてあると思はれるが、作者が家族の者を形容してゐる言葉を吟味して見よ。

7　この作者が、この作を書いてゐる氣持はどんなであつたらうか。

8　釋　義

【戯作三昧】　ゲサクザンマイ。小説を書くのに夢中で全く餘念のないこと。

「戯作」は、娯樂を目的とする讀物、卽ち稗史・小説の類をいふ。當時は、小説家を「戯作者」、小説本を「戯作本」といつた。

「三昧」は梵語の Samadhi。正受・正定・平等などと譯す。心思を一事に集注して餘念のないこと。思想を靜めて散亂せしめないこと。

【馬琴】　バキン。瀧澤氏。名は解、字は瑣吉。その戯號「曲亭」は支那の地名から取り、「馬琴」は「才非ニ馬卿一、彈レ琴未レ能。」といふ小野篁の句から取つたといふ。

父與藏は松平侯（河越侯）の家臣であつたが、その主信成に用ひられず、明和中、江戸深川の高松通淨心寺門前に浪居し、そこで馬琴を生んだ。馬琴は幼少から讀書がすきで、十一二歳の頃には既に和漢古今の稗史・小説數百卷を讀了したといふ。寛政二年（一七九〇）京傳の家に寓し、同三年書肆蔦屋重三郎の家に移り、著作の傍ら和漢の書を耽讀した。同五年始めて草雙紙四種を綴り、曲亭馬琴の名を署したが、この雙紙は世に行はれて、馬琴の名はやゝ顯はれて來た。これより後、歳月を積むがまゝに著書も亦續々世に出で、何れも〳〵好評を以て迎へられ、洛陽の紙價も騰貴した位であつた。嘉永元年（一八四八）十一月歿、年八十二。著述に從事すること實に六十年、その著作は凡そ三百に上つたといふ。

昭和三年、從四位を追贈せられた。

【忌々し】　イマ〳〵し。いやらしく憎いこと。はらだたしいこと。

【片肘つく】　カタヒヂつく。片方の肘をつき、頭を支へてからだを横たへること。

【弓張月】　ユミハリヅキ。「椿説弓張月」といふ。三十冊。

馬琴が文化三年の著。鎭西八郎爲朝を主人公として、その武勇を描いたもの。爲朝は身の丈七尺の大兵で、弓術無類の達人。十二歳の小冠者にして、父爲義に伴なはれて崇德上皇の御所に參り、武勇の論爭に大いに面目を施したが、人の怨を避けんため、父はこれを筑紫に下した。筑紫に於ける爲朝は、豐後に下つて尾張權守季遠をたのんで三年の月日を送り、靈夢に感じて肥後に到り、更に琉球に渡り、八丈島に渡り、また琉球に歸り、こゝにこの物語中最大事件たる琉球の內亂に關係した顚末がかゝれてある。

馬琴の自序に、「この書保元の猛將八郎爲朝の事蹟を述ぶ。その談唐山の演義小說に倣ひ、多くは憑空結構の筆に成る。閱者、理外の幻境に遊ぶとして可なり。云々。」

【南柯夢】　ナンカノユメ。馬琴が文化四年の著。くはしくは、「三七全傳南柯夢」といふ。全六冊。永正年間、大和半國の領主續井順昭が茶亭に楠の一枚天井を用ひんとするに事起り、赤根半六がこれを立身の基となし、その子半七が主君の美人を刺さうとして我が許嫁の女なるに驚き、轉じ轉じて大阪に出で、千日寺に到つて三勝と心中せんとする時、父半六と三勝の母とが先づ自殺し、忠義貞節あらはれて、三勝半七は本地に歸參し、假に墓を千日寺に殘すといふ趣向で、淨瑠璃の三勝半七が事に假託した點が多い。

【八犬傳】　ハッケンデン。「南總里見八犬傳」といふ。瀧澤馬琴畢生の大著。文化十一年（一二四七四）馬琴四十八歳の正月に起稿、天保十二年（一二五〇一）馬琴七十五歳の八月に完結した。實に二十有八年の間具に辛酸を嘗めて成つたものである。晚年失明の後は、嫁に、口授して筆を執らせたといふ。

南總に新に起つた里見氏の愛孃伏姬の體中から出た八箇の明玉が八人の英雄に保持されて、仁義禮智忠信孝悌の八德を表し、各〻その行動を取つて離合聚散、悲絕壯絕はた快絕、波瀾萬重の事件に展開し、結局主家を起し、子孫の繁榮光明をもつて終つてゐる。

【端溪】　タンケイ。硯の上等のものを出す地で、支那の廣東省肇慶州にある。

唐書の地理志に「康州晉康郡、本南康州、武德六年析二端州之端溪一置。」

硯譜に「蘇公易簡云、柳公權論レ硯、青州爲二第一一、絳州者次レ之、殊不レ言二端石一。世傳、端溪中有レ草、蒙茸可レ愛。匠琢レ石成レ硯、用レ草裹レ之。故自贇表二迨二中夏一而無レ損。水中石其色青、山半石其色紫、山絕頂者尤潤如二豬肝色一者佳。其山號二斧柯一。」

【蹲螭】　ソンチ。みづちのわだかまりうづくまつた形。「蹲」は、うづくまる。「螭」は、みづち、卽ち角のない龍、或は黃色の龍。

【文鎭】　ブンチン。書物や紙などの翻り散らぬやうに重しとして用ひる具。「けいさん」ともいふ。

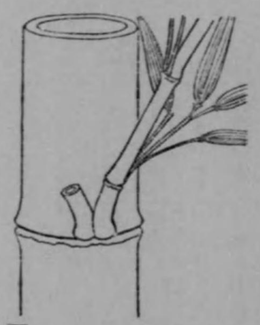
【青磁】　セイジ。淡綠色又は淡藍色のくすりを全體にかけた磁器。支那の越州で創めて造り出したものだといふ。

書言字考節用に「青磁、唐越州所レ出之磁器。源氏所レ謂、祕色是也。」

【硯屏】　ケンビャウ。硯の邊に置いて、塵埃などを防ぐ小さい衝立の如きもの。青磁製・陶製・銅製・唐木細工製等種々ある。

【蘭】　ラン。顯花植物、單子葉類の一科。非常に多くの種類があつて四百屬七千二百種に上り、我が國にあるもののみでも、八十屬二百種に達する。

【孟宗】　マウソウ。孟宗竹。禾本科苦竹屬の常綠多年生植物。地上莖の高さは三十尺に達し、中空で節がある。葉は披針形、平行脈を有する。地上莖は建築・器具の用材となる。



【勞作】　ラウサク。苦心して作りあげたもの。又、骨折つてはたらくこと。

【暗い影を投げる】　不安を生ぜしめる、不祥な事が生ずる、不運を來す、などの意に用ひる。

【本朝】　ホンテウ。「國朝」ともいふ。我が國の朝廷、轉じて、我が國をいふ、

【比倫】　ヒリン。同等のともがら。なかま。類。

宋の仁宗皇帝の文に「朕觀二無學人一無二物堪一比倫。」

【事によると人並に自惚の一つだつたもかも知れない】 或は若しかしたら、よく世間の人がするやうに、自分の望も、自己の力量を知らないでうぬぼれてゐたのであつたかも知れない。

「自惚」（ウヌボレ）は、たかぶること。自負すること。

傾城買二筋道に「うぬぼれをだしきつていやらしい事をいひなんすを」

【落寞たる孤獨の情】 どこにも頼みとするところをもたない、すつかり自信を失つたさびしさの感。

自ら天才と誇つてゐたものが、一朝自らその才分に疑を生じて來たがために、全く自信を失つてさびしさを覺えて來たのである。

「落寞」（ラクバク）。は、さびしいさまにいふ語。

王褒の文に「徑落莫以差錯。」

【屑々】 セツ〳〵。小事にあくせくとして、つまらなく働くこと。

後漢書の崔駰傳の註に「猶二區々一。」

左傳の昭公五年に「屑々焉習レ儀。」

【傲慢】 ガウマン。おごつて人をあなどること。たかぶつて禮を缺くこと。

晉書の周嵩傳に「恣豪傲慢、敢輕忽朝廷。」

【遼東の豕】 レウトウのシ。自分一己では、俺は珍しい天才だと思ひ許してゐたのが、案外にも普通一般、何等傑出した點もないのに喩へたのである。

出典は頭註にあげたやうに漢書等の朱浮傳であるが、前後を補つて假名交りに書いて見れば、次の如くである。

漁陽の太守彭寵、自ら功を負み、滿つることを能はず。幽州の牧朱浮、書を與へて曰く、伯通（彭寵の字）自ら伐りて以爲へらく、功天下に高しと。往時、遼東に豕あり、子を生む、白頭なり。異として之を獻せんとし　行きて河東に至る。群豕皆白きを見て、慙を懷きて還りぬ。若し子の功を以て朝廷に論ぜば、則ち遼東の豕ならん。」

これは朱浮が彭寵の自ら功に誇るを誡めたのであるが、自らは奇異に誇るも、他人より見れば凡庸たるを免れぬ喩となつたのである。

【強大な「我」は云々】 「我」は「ガ」と音讀する。一般哲學上の意味では「自我」といふに當り、佛教上では梵語アートマンといふに當る。金剛經に「我見・人見」とある「我」もこれである。天地萬物に對して存在する自己といふ一箇の人格の稱。

我こそは天才的作家よと自ら任じてゐる。これほど強大な我見は無い。それが、一朝にして、そのやうな偉大な作家ではなかつたよと、自ら覺り自らあきらめをつけて、それで以てこの失敗憤慨の情熱を一時避けるといふことは出來ないほど情熱に燃えてゐる。

【難破した船長の眼云々】 げに作物の失敗に落膽した馬琴の心は、かうでも喩へる外はあるまい。「絶望の威力」とは甚だしい絶望を意味するのである。

【若しこの時云々】 後に書くべき事實を、假設的に否定して數言を費したのは、文に幾何の價値を添へるか、生徒に聞いてみたい。これあるが爲に馬琴の心情もいよ〳〵深く汲まれ、且、後の事實が引立つてくるのではあるまいか。

因に、「若しこの時云々」の書きぶりはこの作者の屢用ひた筆法で、その得意としたところのものである。

【子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て】 この挿入句を試みに省いたらどうなるか。そこにこの句の價値をさとらせたい。

【甲高い】 カンダカい。調子が高いこと。かんばしつた聲にいふ。

【内氣】 ウチキ。遠慮深い性質。うちはでひかへめがちな氣質。

【悋】 セガレ。自分の子を謙遜していふ言葉。

三河物語、上に「せがれめこそ氣ちがひにて、君をば打ち奉りて」

【栗梅】 クリウメ。「栗梅色」の略。栗色のやゝ濃くして紫色を帶びた色。

【考へようとする努力と云々】 何を考へようとするのか、生徒に聞いて見たい。誰かに教はつて言ふべきことを考へてゐるに違ひない。考と笑との二努力、そこに子供の無邪氣な心理狀態が溢れて見える所を味はせたい。

【うん、よく毎日】 これは誰の言か、生徒に聞いて見た

い。無論、馬琴が、直ぐ前の孫の言「よく毎日」を受取つて、「うん」と返事して、それを鸚鵡返しに言つて、暗にその次の言葉を促す心を含んでゐる。

【御勉強なさい】　誰かに教はつた語を言つたのである。考へようとする努力がこれであつた。それを「よく毎日」と「御勉強なさい」と二度に切つて言つた所に、老いたる祖父と幼い孫との會話が活きてゐる。

以下、會話の妙味を、すべて感得せしめるやうに。

【それから】　馬琴の、次を促す語。

【それから――えゝと――癇癪を云々】　孫の語。ダッシュを用ひた所に幼童の言ひ淀んだ樣子をあらはしてゐる。

【おや〳〵、それきりかい】「おや〳〵」は前の思ひ切つた直言に驚いた語。

【だあれだ】　孫が馬琴に、「誰だかあててごらん」といふのである。

【淺草の觀音樣がさう言つたの】　意想外。こんな事が獨想で言へる筈はない、きつと教はつたに違ひない。併し、子供の無邪氣の口から出た所は、その觀音樣が言つたも同樣である。

【うれしさうに……恐れるやうに】　うれしいのに、なぜ恐れるか、恐れるのに、なぜうれしいか、生徒に言はせて見たい。うれしいのは全部言ひ切つたため、恐れるのはあまりひどいことを言つたからであらう。

【かついだ面白さ】「かつぐ」とは、のせる、だます、欺くなどの意。

【嚴肅】　ゲンシュク。おごそかにしてつゝしみぶかいこと。嚴格にして靜肅なこと。

蔡邕の胡公夫人哀讃に「敎誨嚴肅、昭示好惡」

【幸福の微笑が……涙が一ぱいに】　微笑と涙と、正反對のものがなぜ同時に起つたか。あるヒントを與へられた嬉しさの微笑、それがやがて嬉し涙となつたのであらう。老人は元來涙もろいものである。

【涙の中に笑ひながら】　前と同じ。

【燈心の油を吸ふ音】「燈心」（トウシン）とは、藺の心（白くて細いもの）である。それを、油を入れた土器に二筋ばかり横たへ、一端に火を點すと、燃えるに從つて油の吸收される音がかすかにジイ〳〵と聞える。

【蟋蟀】　コホロギ。昆蟲類中、直翅類の一種。全身は黑褐色で、腹部に二箇の尾狀突起を具へてゐる。人家に近く鳴く。

【圓行燈】　マルアンドン。圓形の行燈。「行燈」は携帶して移行することの出來る燭臺。

「アンドン」の語は「行燈」の字の宋音によるといふ。

【かすかな光】　これから書かうとすることについての意匠の閃き、卽ち神來の興。

【神來の興】　シンライのキョウ。「天來の妙想」といつたやうなもの。卽ち今自分のしてゐる仕事に關して、我から考へ出したものでなく、恰も神から與へられた如くに、思ひもかけずに湧き上つてくるすぐれた感興。

【あせるな。さうして出來るだけ深く考へろ】　この妙想の閃きは、その初のかすかなことはマッチの火よりも小さいやうなものだから、あせると見失つてしまふ。よつて自らよく注意して、それを段々と優勢なものにして胸に燃え立たせるのである。火打石から纖に得た火口（ほくち）の火を起してゆくやうに。

この氣分は作者の創作上の經驗から書いてゐるもので、その體驗のないものには理解は困難であらう。しかし生徒は作文自作の際にこれに似た經驗を多少ながら持つてゐることだらう。

【星を碎いたやうなものが云々】　星を碎いたやうなかすかな光であつたものが、段々大きくなり、勢づいて來て、今はそれが川よりも早く頭の中を流れる程になつた。卽ち天來の妙想が優勢なものになつて、作者の體內にたぎり流れて來たのである。

【否（いや）應なしに云々】　こちらの態度や心持の如何にかゝはらず、その川のやうな流れの中へ引きずりこんで、どし〳〵と流してしまふ。

卽ち、その奇想はいよ〳〵旺盛になつて、全く他の何物をも忘れて、全心これに沒頭するやうになつて行つたことをいふのである。

【神人】　シンジン。こゝは神の如き能力を有する人、神通力を得た人などの意。

戰國策、中山に「不レ知ル者、特以テ爲ス神人ト。」

【相搏つ】　アヒウつ。力くらべをする。力をもつて鬪ふ。

【銀河】　ギンガ。星河・天漢などともいふ。あまの川。秋の頃の夜、天に白色の帶狀に亙るもの。無數の恆星の集合であるといふ。

和漢朗詠集、白樂天の詩に、「銀河沙漲ル三千里。梅嶺花ヒラク排一萬株。」

【滾々】　コン〳〵。水の盛に湧き出て流れるさまにいふ語。

杜甫の詩に「不盡ノ長江滾々トシテ來ル。」

【目まぐるしい飛躍のなかに云々】　こゝの「飛躍」といふ語は、一見すると、創作に關係ある「論理の飛躍」の意に用ひられたかに見えるが、さうではなくて、その流の勢よく湧き立ち、渦卷き流れるさまをいつた語である。その奇想の流は目もくらむ程にはげしく盛に飛躍して、その途中に、邪魔物、分別とか考慮とか、條件だとか、事情だとかいふやうな物があらうとも、それらを一切その流の中に捲きこんで、卽ちそれらを悉く無視して、彼の身に盛に流れ、押寄せてくる。卽ち、その盛なる妙想の活躍の前に、彼は他の一切のことを顧みる事も出來なかつたことをいふ。

【澎湃】　ハウハイ。水の漲り逆卷くさま。又、その聲をいふ。

司馬相如の上林賦に「沸乎トシテ暴怒シ、洶涌澎湃ス。」

【筆を驅る】　筆を走らす。

【毀譽】　キヨ。そしることと、ほめること。褒貶。

莊子の德充符に「毀譽・儀渴・寒暑是レ事之變ニシテ、命之行ヘル也。」

【恍惚】　クヮウコツ。物事に心を奪はれたさまにいふ語。うつとりとすること。

禮記の祭義に「諭シテ其ノ志意ヲ、以テ其ノ恍惚ニ、以テ與ヘテ神明ト交ル。」

【心境】　シンキャウ。心の狀態。心もち。

【味到】　ミタウ。十分にそこに達すること。完全にゆきとどくこと、よく〳〵知りつくすこと。

【殘滓】　ザンシ。水の底に殘つたかす。不純不潔な物。「滓」は說文に「澱也」とある。

【姑】　シウトメ。

【尪弱】　ヒヨワ。かよわいこと。體質のよわ〳〵しいこと。音は「ワウジャク」

兵部省式に「凡軍毅、其身尪弱ニシテ不レ堪ヘ武藝ニ者、國司解任ス。」

【丸藥】　グヮンヤク。馬琴の家は藥種商を營んでゐた。そこで悴は丸藥の製造をしてゐるのである。

【針へ髮の油をつけながら】　縫針がよく布を潜るやうに、よく滑るやうに、頭髮にこすつて、髮につけてある油を附着させるのである。

9　挿圖

瀧澤馬琴

書齋に於ける馬琴の肖像

筆者歌川國貞は一雄齋と號した。浮世繪師で、二代目歌川豐國の門人である。初め一壽齋國政と呼び、後師の家を繼ぐに當り、三代國貞と稱し、後更に二代豐國と稱したが、實は三代目である。明治十三年(一八五四)七月歿。年五十八。

南總里見八犬傳

帝國圖書館藏、八犬傳初版の第一葉である。かつて瀧澤馬琴の所有に係るものだとある。

「手澤本」とは、「手澤」卽ち、手垢のついてゐる本の義。常用した本をいふ。

10　參考

作者芥川龍之介の年譜が、現代小說全集第一卷の末に載つてゐる。今、これを左に抄錄しておく。

明治二十五年三月一日　東京市京橋區入船町に生る。新原敏三の長男なり。辰年辰月辰刻の出生なるを以て龍之介と命名す。生後、本所區小泉町十五番地の芥川家に入る。養父道章は母の實兄なり。

三十五年　實母を失ふ。この頃より英語と漢學とを學ぶ。英語はナショナル・リーダーより始め、漢學は日本外史より始む。

三十八年　東京府立第三中學校に入學。上級に實藤末雄、久保田萬太郎あり。文藝の書を多讀す。成績善し。

四十三年　第三中學を卒業。無試驗にて第一高等學校一部乙(英文科)に入學。同級に久米正雄・菊池寬・山本有三・松岡讓・成瀨正一・土屋文明あり。一級上に豐島與志雄・山宮允あり。特に作家たらん望なり。

大正二年　第一高等學校を卒業。東京帝國大學英文科に入學。

三年　二月久米・松岡・成瀨・山本・土屋・豐島・山宮等と共に第三次「新思潮」を發刊す。同誌上に處女作の短篇「老年」を發表す。その他アナトル・フランスの「バルタザアル」イエエツの「春の心臟」等の飜譯をも發表す。十月「新思潮」廢刊。

四年　短篇「ひよつとこ」を「帝國文學」四月號に、「羅生門」を同誌十月號に發表す。世評未だ一言をも加へず。十二月久米と共に夏目漱石の門に入る。林原耕三の紹介に據る。

五年　二月久米・菊池・松岡・成瀨と第四次「新思潮」を發刊す。短篇「鼻」を同誌創刊號に發表す。夏目漱石の賞讃を蒙る。

五月　雜誌「希望」に「虱」を發表す。原稿料を得たる始なり。一枚金參拾錢と記憶す。七月英文科を卒業。卒業論文は「ウイルヤム・モリス研究」なり。十月短篇「手巾」を中央公論に發表す。十二月海軍機關學校囑託となり、英語を教授す。

六年　五月短篇集「羅生門」を上梓す。

八年　一月短篇集「傀儡師」を上梓す。三月海軍機關學校囑託を辭し、大阪毎日新聞社に入る。

九年　一月短篇「影燈籠」を上梓す。

十年　三月短篇集「夜來の花」を上梓す。同月支那に遊び、朝鮮を經て歸れるは八月なり。

十一年　三月隨筆集「點心」を上梓す。八月選集「沙羅の花」

十一月　「邪宗門」を上梓す。

十二年　五月短篇集「春服」を上梓す。

十三年　七月短篇集「黃雀風」、九月隨筆集「百艸」を上梓す。

二〇　芳流閣

1　解題

南總里見八犬傳の第四輯卷之一第三十一回の節錄で、原題には（水閣の扁舟兩雄を貪く）（江村の釣翁雙狗を認む）と記してある。八犬士の犬塚信乃・犬飼信道の二人が、足利成氏の古河城内にある三層樓芳流閣の屋上で奮鬪する有樣を敍したものである。

「八犬傳」は里見義實の女伏姫が犬の精に感じて懷胎し、剖腹して死するに及び、その所持してゐた數珠の玉が八方に散亂して生じたといふ八犬士の活動を根據として仕組んだ傳奇小說である。國文學史上では、一般にこの種のものを讀本（よみほん）といひ、更に馬琴の讀本のうちではこれを英雄外傳と稱し、椿說弓張月・俊寛僧都物語・朝比奈巡島記などと同一種のものと數へてゐる。八犬傳全部で百六卷、文化十一年甲戌（一二四七四）、馬琴が四十八歳の時に初輯を出し、天保十二年辛丑（一二五〇一）、最後の第九輯を出すまで百八十四回、凡そ二十八年の經營で完成した大傑作である。

2　作者

瀧澤馬琴　タキザハ　バキン。

曲亭馬琴ともいふ。初の名は興邦。後、解と改めた。字は項吉。「曲亭」は支那の山の名に取り、「馬琴」は小野篁が「才非（ズ）馬卿彈（ニシテ）琴未（ダ）能（クセ）。」の句に取つたといはれてゐる。體格の偉大で强健な彼は、幼時は甚だ腕白で父母を惱ましたものである。或は醫者の書生となり、或は僧の弟子となり、或は渡り徒士（かち）ともなつたが、何れも長續きせず、しかも何になつた時でも文字の嗜好を捨てず。二十一歳の時、俳諧古文庫」を著した。二十四歳の時に京傳の門に入らうとしたが、京傳は「戯作に門人などあるべきでない、相談相手とならう。」といつたとか。初め黃表紙類を作つたが評判にならず、寛政八年（一二四五六）三十歳の時に、「高尾船字文」といふ五册物を書いたのが彼が讀本創作の始めである。寛政十二年、豆相地方を、その翌年京阪地方を旅行して、大いに詩囊を肥やし、他日の讀本の材料をも豐かにして歸つた。それから後、京傳と張り合ふやうになり、遂に京傳を壓倒するに至り、八犬傳・巡島記・美少年錄・俠客傳などの長篇を物するやうになつた。生來、意志が頗る强くて、その刻苦勉强實に驚くべきものがあつた。又名譽心が强

く、博學を誇り、同時代の作者など眼中になかつたほどである。唯京傳のみは師友の關係があるのでやゝ憚つたが、後に自分の名が揚ると共に京傳をも重んじなかつた。晩年、過勞の爲に明を失し、且、妻子をも亡つたが、猶亡兒の遺妻みち女に代筆させて戯作をつゞけた。嘉永元年(一八四八)十一月卒、年八十二。筆を執ること實に六十年、著作二百五十餘種に及ぶ。

昭和三年、從四位を追贈せられた。

馬琴の最も得意としたのは、英雄外傳に屬する讀本である。しかし彼の寫す人物は善惡ともに極端なるもの多く、偉人はどこまでも偉人、惡人は徹頭徹尾惡魔のやうで、善とも惡ともつかぬ中間人物を描かず、隨つて吾人をして實際の人間らしく感ぜしめることが少ない。唯その結構が雄大で變化に富み、しかもよく統一して、整然として一絲紊れず、理路明晰にして恰も白晝大道を行くが如き趣のあるのは彼の長所である。彼の小說が水滸傳・三國志・西遊記・金瓶梅などの支那小說に負ふ所が多いことは今更いふまでもない。文章は最も太平記に私淑したやうである。一體に感情を主とすべき小說を知識道德を本位として物し、ともすれば衒學的となり、寫生を難れて實際らしくないことは彼の短所である。又晩年家庭の不幸がつゞいた處から、迷信に陷つて、怪異談の多いことなども口惜しいことである。(以上この「作者」の項に記すところは、大體藤井乙男博士の說に據る)

3　編纂の用意

瀧澤馬琴は前課に示したやうに、戯作三昧に耽つた結果、神來の興に乘じて、遂に浩瀚なる「南總里見八犬傳」を大成した。本課はこの八犬傳の中でも最も神來の靈筆として知られてゐる一篇で、芳流閣上に於ける犬塚信乃と犬飼見八との兩虎相搏つ活劇を敍したくだりである。本課をこゝに採錄した所以は、文豪馬琴の椽大なる靈筆に觸れしめて大いなる感興を覺えしめると同時に、その精妙なる筆致をよく〳〵檢討せしめ、且江戸時代に於ける謂はゆる讀本(よみほん)の一臠を喫せしめて、その滋味を心ゆくまで感得せしめんが爲に外ならぬ。

4　要旨

人間の禍福は糾ふ繩の如しと說き起して、二勇士を出現させる脚色の巧妙なる點、その行動を敍する措辭の飽くまで用意周密なる點、その活劇の舞臺を芳流閣の屋上に選んだ點、さては掛詞の自由自在な驅使によつて、語句の含蓄を深くし、文章の流動を滑かにした點、これらの諸點を玩味せしめて、八犬傳の一代の傑作たる所以の一斑を感得させるのが主眼である。殊に兩勇士の張り切つた意氣と、水もたまらぬ電光石火の奮戰格鬪の光景を寫して遺憾ないところは、さながら作者たる馬琴自身の强盛な意志と、その執拗な性格とを物語つてゐるやうで、作品は到底作者の表現であることをも思はせるものがあつて甚だおもしろい。かういふ點にも生徒の鑑賞の眼を開かしめるやうに導かれたい。

5　概說

本課の前　卽ち原文第三十回の後半では、犬飼信乃が村雨の名刀を成氏に奉らうとするに當つて、そのすりかへられてゐた事に心づき、いろ〳〵辯疏するが、横堀在村の爲に却つて敵の間諜と疑はれ、遂に生捕られようとして、この芳流閣上に見八と奮鬪することになる次第が述べてある。

本課　では(原文にはこの節を設けてゐない)

第一節　(一三七頁——一三八頁三行)　に、犬塚信乃の同情すべき羽目に陷つたこと、その苦しい心中を述べ、

第二節　(一三八頁四行——一三九頁四行)　に、犬飼見八が、屋上の信乃に相近づいて行く光景、

第三節　(一三九頁五行——一四〇頁四行)　に、廣庭で屋上の當人を見物する成氏主從、閣の東西に構へてゐる士卒の有樣を敍し、信乃の退引ならぬ舞臺に立つてゐる處を描き、

第四節　(一四〇頁五行——一四二頁五行)

第五節　(一四二頁六行——一四四頁三行)　の兩節に、いよいよ兩人が切り結ぶ勝負の十手と太刀先との閃々たるところ、見八が信乃に組みつくところ、遂に相組んだ兩人が覆車の俵ところがつて、水上の舟中に落ち込み、行方知れずなるところまで寫してゐる。

——尙、本課の前後については「參考」參照。

6　取扱上の注意

▲馬琴の人物、並にその作物については、好きだといふ人も嫌ひだといふ人もあらう。或は嫌ひだといふ人の方が多いかも知れぬ。けれども、とにかく藝術家として「えらいものだ」といふには、け嫌ひする人も異論はあるまい。そして、さういふことは、本課の文章についても謂ひ得ると思ふ。

▲「要旨」の項では、大まかに感心される點を述べたが、子細に部分的にいへば、編者の好惡の情がうけがはないところもないではない。「墨氏の飛鳶」「魯般が雲梯」「膳臣巴提便」「富田三郎」など甚だ恐縮する次第である。二勇士の太刀風のすさまじいところを寫した靈筆には驚嘆の外はないが、その間に「春ならば峯の霞か……」などやつたところは少々のん氣過ぎはしまいかとも感ぜられる。大體にしつこい點を、いやがる人はいやがるであらうが、しかしそこにはまた、馬琴の馬琴たる特色が表れてゐる點を味はふべきであらう。或人は「馬琴は文章はうまくない、脚色がうまいのだ。」といふ。この言にも確かに一理がある。

▲要するに、以上區々たる論はあるにしても、本課を通讀して、その筆力の緊張味と、一分の間隙もない修辭の周密さの裡に、二勇士の眞面目を躍如たらしめたところに、彼の藝術から來る感激を覺えないものはないであらう。

7　設問

1　この文章を通讀して、大體どういふことを感ずるか。殊に各語句の連絡について、どう思ふか。

2　掛詞・緣語などの巧みな點をあげて見よ。

3　景色（舞臺）のよく描いてある點をあげよ。

4　人物の活動のよく敍してある點をあげよ。

5　義理・人情などの尤もらしく敍べてある點をあげよ。

6　次の語句の意味を說明せよ。

イ、人間萬事往くとして寒翁が馬ならぬはなし。

ロ、惹に擇み出されつ。

ハ、こゝ生死の海に入る流は名に負ふ坂東太郎。

ニ、さもあらばあれ。

ホ、よき敵ごさんなれ。

ヘ、御諚ざふ。

7　「……べくもあらず」といふ用例をあげて、その意義及び文法上の說明を試みよ。

8　釋義

【芳流閣】　ハウリウカク。足利成氏の居城たる古河城内にある三層樓で、利根川に臨んでゐる。成氏が遠見のために建てたものとしてある。

正傳に見える足利成氏は、第五代の關東管領。持氏の子。持氏が鎌倉の執事上杉憲實に攻められ、終に自刄したとき、亂を地方に避けてゐたが、後、鎌倉に迎へられてその主となつた。寶德三年（一一一一）上杉憲實の子憲忠を殺したため、その族人等怒つて叛き、將軍足利義政の弟政知の來援を請ひ、協力して成氏に抗した。成氏は奔つて下總の古河（コガ）に據つた。實に初代の古河公方である。明應六年（一一五七）卒。年六十四。

「古河」は茨城縣（下總國）猿島（サシマ）郡にある。室町時代に古河公方のゐたところ。縣の西端に位し、鐵道東北本線の一驛がある。奥州街道の要衝。南西には土井氏の居城であつた古河城址がある。猿島茶の産地。人口一萬。

【古の人】　漢の賈誼をさす。

「賈誼」（カギ）は、支那漢代洛陽の人。年少にしてよく詩を誦し、文を屬した。二十三歳にして博士となり、孝文帝の知遇を受けて治安策を奉つた。後、帝の少子梁王の大傅となつた。卒する年三十三。その作にかゝる「過秦論」は、「治安策」と共に漢代稀有の大文章といはれてゐる。

【禍福は糾ふ纆の如し】　クヮフクはアザナふナハのゴトし。禍と福とが、互にまつはりあつて、相表裏することは、ちやうど、なひあはせた繩のやうである。

「糾ふ」とは、繩をあはせること。「纆」は繩索。卽ちなは。

漢書の賈誼傳に「夫禍之與福兮、何異糾纆命不可說、孰知其極。」

註に「應劭曰、禍福相爲表裏、如糾纆索相附會也。臣瓚曰、糾絞也、纆索也。師古曰、纆音墨。」

【人間萬事往くとして寒翁が馬ならぬはなし】　人世に於ける萬事は、恰も塞翁が馬の故事のやうに、禍がいつしか福と轉じ、福がいつしか禍とかはつて、禍福の變轉きはまりないものであるとの意。

「塞翁が馬」（サイヲウがウマ）は、福も禍となり、禍も福となつて、人間の萬事に定めなきたとへ。

淮南子（エナンジ）の人間訓に「塞上之人、有善術者。馬無故亡而入胡。人皆弔之。其父曰、此何不遽爲福乎。居數月、其馬將胡駿馬而歸。人皆賀之。其父曰、此何不遽爲禍乎。家富良馬。其子好騎、墮而折其髀。人皆弔之。

其父曰、此何不二遽爲レ福乎。居一年、胡人大入レ塞。丁壯者引レ弦而戰、近レ塞之人、死者十九。此獨以二跛之故一父子相保。故福之爲レ禍、禍之爲レ福、化不レ可レ極、深不レ可レ測也。」

元の僧熙晦機の詩に「人間萬事塞翁馬、推枕軒中聴雨眠。」

「推枕軒」は晦機の住持であつた仰山の方丈の寢室の名である。

【福の倚る所、はた禍の伏す所、彼にあれば此にあり】　禍福の存するところの明らかでないことをいふ。たとへば、今甲に禍があつて乙にはないと思つてゐるのが、時を經て見れば、却つて甲には禍がなくて、乙に禍があり、又時を經て見れば、甲には禍があつて、乙にはなくなるやうなもの。要するに、前の塞翁が馬と同義で、信乃と見八との身の上に於ける福禍の變轉たゞならぬさまを先づ抽象的にほのめかし、次の文を引き出すくさはひとしたのである。

老子の道德經に「禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏。」

漢書の賈誼傳に「禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏、憂喜聚レ門、吉凶同レ域。」

【豫てより誰かよくその極みを知らん】　禍福の窮極するところは、何人でもあらかじめ知りがたいといふ意。

これ亦賈誼傳の語、卽ち前出の「夫禍之與福、何異二糾纆一。命不レ可レ說、孰知二其極一。」といふを採り來つたものである。

【犬塚信乃】　イヌヅカシノ。里見八犬士の隨一。孝字玉の所有者。名は戌孝。武藏國豐島郡大塚村（今の小石川區大塚町附近）の人。他の犬士と共に安房の國守里見義成に仕へ、戰功によつて國守の第五女濱路姫に離し、同國東條の城主となり、采邑一萬貫を食んだ。

なほ、信乃が古河に來て搦め捕られようとする本文記載の次第については、參考の爲、左にその梗概を述べよう。

信乃の父は大塚番作一戌といふ。その父匠作三戌は鎌倉管領足利持氏の近習で、持氏の兩公子春王・安王の守役を勤めてゐたが、永享十一年（一四〇九九）持氏が亡滅した時、匠作は春王・安王の兩公子を保護し、鎌倉を脫れて、下野國に赴き、結城氏朝に迎へられて、主從城に立てこもり、京都の武命に抗し　寄手の大軍を引きうけて防戰年を重ねた。然るに、嘉吉元年（一一〇四）四月十六日、城は遂に陷つて、大將氏朝始め味方の諸將は討死し、兩公子も遂に生擒の身となられた。そこで匠作は兩公子の先途を見屆け申さうとて、今年十六歳になつた一子番作に、年

來春王君より預つておいた主家重代の寶刀村雨丸といふを渡し、父は忠義の爲に命を捨てるけれども、汝はまだ仕へない身であるから、これよりもとの采地なる武州大塚に赴いて、彼處に潛んでゐる汝の母と姉とを養ひ、若し又兩公子が幸に命をたすかつて世に出たまふことがあつたならば、一さんに馳せまゐつてこの御刀を返し奉れと言ひ含め、己ひとり兩公子の跡を慕つていつたところが、兩公子は美濃の垂井で斬られたまふこととなつた。匠作は何とかしてこれを刑場から奪ひ取らうとしたが、警戒が嚴しくて力及ばず、警固の武士と格鬪して討死した。然るに、彼の番作は先に父の遺言により、一先づ武州にかへるべき筈であつたが、これも亦君父の先途が見屆けたさに、父に知らさないでこゝまで來てゐたが、今やこの有樣を見て、悲憤の情やる方なく、猛然矢來を踰えて刑場に入り、警固の武士を斫倒し、手早く兩公子及び父の首級を奪ひ取つてその場を脫れ奔り、途でその首級を埋葬し、且つ圖らずもその許嫁の妻手束（井丹三直秀の女）に邂逅したので、直に大塚に赴かうとしたが、やがてこれを思ひとゞまり、受けた手傷を癒すために信濃なる筑摩溫泉に湯治することとした。とかくして痍は癒えたけれども、膕の筋が縮まつた爲であらうか、これより歩行は不自由になつた。よつてそのまゝに筑摩に留まつて、心ならずも母の許を訪はなかつた。

ところが、彼の大塚に母と共に潛んでゐた匠作の女兒龜篠といふものは、番作に取つて異母の姉であるが、生來非常な淫婦で早くも同鄕なる禰々山蟇六といふ破落戸と人目を忍んで契をかはし、親同胞の籠城を思ひやる氣色もなく、遊蕩三昧にその日を送つてゐた。かくて、結城の城は陷り、父の匠作は美濃の垂井で討死し、弟番作の行方が分らなくなつたといふことが大塚にも聞えたので、年來多病の母は、歎き悲しんで、その時より枕が上らず、やがて、はかなくなつた。龜篠は今や人目の關もないので、公然彼の蟇六と夫婦になり、一兩年を送る程に、持氏朝臣の季子永壽王（後に成氏）が室町將軍の許可を得て鎌倉の主となり、結城で討死した家臣の子孫を召出されるといふことが聞えた。かの蟇六は、時を得たりとばかり、俄に鎌倉へ參上し、大塚匠作の女婿たる由を訴へて恩賞を乞うた。けれど、蟇六は人となり下賤で、武士となるべき資格のないものであつたから、僅かに八町四反の莊園をあてがはれて村長を命じ、帶刀を許されただけであつた。番作も信濃にあつて、永壽王が鎌倉の主となられ、舊臣を召し出されるといふことを聞いたので、身は既に擬人となつたけれども、ともかくもして武藏に赴いて母と姉とに對面し、直に鎌倉に推參して、父より預つた村雨丸の寶刀を返し奉り、身の進退を君に任せ奉らうと、杖にすがつて大塚に來たが、この時母は既に死し、かの蟇六は大塚の姓を冒して村長となつた後であつた。

さて番作は姉の不孝、蟇六の不義を忌むこと甚だしく、今この由を訴へれば、村雨の寶刀が我が手にある以上、勝利は疑ないと思つたけれども、榮利の爲に姉と爭ふのは好ましくないので

蓑六方をば音づれず、只故老の里人を訪うて事のよしを告げた。里人等は蓑六が村長を鼻にかけて村人を虐げるのを憎いと思つてゐる折であつたから、殊の外番作夫婦の不幸をあはれみ、早速番作をば村中で引きうけて養ふこととし、蓑六の宅地の前面なる空房を購つて番作夫婦を住ませ、又錢を醵出して少許の田圃を購求し、番作田と稱して番作が衣食の資に充てさせた。番作はさきに世を忍ぶ爲に大塚の大に一點を加へて犬塚と稱してゐたが、今は世に憚るところもないので、もとの大塚にすべき筈であつたが、大塚の姓は蓑六に汚されたからとて、なほ犬塚と稱へつゝ、村人等が舊主を思ふ志を多として、これより里の青年等に讀書などを教授し、又、ひまにまかせては、村人のためにとて農業の書などを著はし、こゝに幾多の年月を送つた。

とかくするうち、番作は一男兒を設けて名を信乃と命じたが、信乃は大の孝行者で、幼より善く父母に仕へ、且智力が衆にすぐれ、騎射をよくした。九歳の時その母手束は病死し、十一歳の時父番作は事によつて自殺した。父は自殺するに當つて、年頃身に代へて守護した村雨の寶刀を手づから信乃に授けて、その刀の來歴を說き聞かせ、おまへは成人の後これを携へて古河殿に參り、成氏朝臣に見參して（その時成氏はその執事上杉氏と隙があつて鎌倉を追はれ、この古河殿にゐた。）乃祖の忠と乃父との志とを具陳して返し奉れと言ひ含めた。信乃は父の死後伯母（龜篠）の家に寓居することになつたが、かの伯母婿の蓑六は、かねてから、村雨の寶刀が信乃の家にあるのを寢覺めわるく思つて、番作の存命中にも幾度かこれを竊み取らうと企てた程であるから、このたび信乃がこれを身につけて我が家に來たのを幸ひに、一度は奪ひ取らうと思つたが、一つには村民一同が信乃を助けて己に反抗しようかと恐れ、一つには信乃が我が家にゐるうちは決してこれを證據として所領を爭ふやうなことはないと思つたので、そのまゝにして打過ぎた。かゝる間に月日はたつて、信乃は早くも十九歳の春を迎へ、儼然たる一個の大丈夫となつたので、今こそこの寶刀を古河殿に持參して父の遺言を果さうと思ひ、伯母夫婦の許を得て、遠からぬうちに出立することに定めた。かやうな始末になつたので、かの蓑六は今彼の刀を奪ひ取らなければ今後我が手に入る時は永久にないと思つたので、こゝに苦肉の一計を案出し、網乾左母次郎といふ無賴漢を語らつてその謀を示し、信乃を神宮川の川獵にさそひ出し、そこで故らに水中に陷り、信乃の驚いて水に入つてこれを救ひあげる間に、左母次郎をしてかの村雨の中身を巧に他のものとすりかへさせた。（この時左母次郎は蓑六の謀によつて更に謀を行ひ、その眞刀が左母次郎の手に入つたことは、蓑六も知らなかつた。）神ならぬ身の信乃は、かゝることとは夢にも知らず、殊にその外裝にちつとも異なるところが無いので、中をも改めないで、これを古河に持參した。これが本課記載の一大活劇の起つた所以である、

【親の遺言】　オヤのユヰゴン。主君足利持氏の公子春王・

安王の世に出でたまふことがあつたならば、お預り申してある寶刀村雨丸を返し奉れとの父番作の遺言をいふ。前項「犬塚信乃」參照。

【記念の名刀】　カタミのメイタウ。村雨丸の太刀をいふ。この刀を村雨と名づけたことについては、大塚匠作がその子番作（犬塚）にいつた言葉に、「これはこれ主君重代のおん佩刀、村雨と名づけらる。このおん佩刀の上について、さま〴〵の奇特多かる中に、殺氣を含みて、拔きはなせば、刀の中心に露したゝる。況してや人を斬るときは、露ます〳〵流すが如く、鮮血を洗うて血を染めず、譬へば村雨の葉末を洗ふに異ならずとて、村雨と名づけらる。」とある。

【心にしめつ身につけつ】　親の遺言を深くその心にきざみつけ、記念の名刀（村雨丸）をかたくその身につけて。

【艱苦の中に年を經て】　信乃が父番作の死後伯母龜篠の家に引きとられ、慳貪なる伯父（蓑六）と伯母とに事へて多くの歳月さま〴〵のなんぎをなめたことをいふ。「艱苦」（カンク）は、艱難と苦勞。なんぎ。辛苦。

太平記、五、大塔宮熊野落の條に「この艱苦の中につき纏ひ奉りたる人は、一人といへども、上の御爲には股肱耳目よりも捨て難く思し召さるべし。」

【得難き時を得てしかば】　父の遺言を實行して村雨の名刀を古河殿に返し奉るに絶好の機會を得たので。

【遙々古河へ齎して】　信乃が、武藏の大塚から遙々下總の古河まで、村雨の名刀を持參したことをいふ。この事については、本文の前篇に、

「信乃は執權横堀史在村が弟にいゆきて、名簿を投し、由緒を述べ、亡父犬塚番作が遺訓に從ひ、昔御所（成氏をいふ）の兄君春王殿より預り奉りたる村雨の寶刀を得て推參せし事の趣、執次の若黨によりて愁訴しけり。」

とある。なほ、前項「犬塚信乃」參照。

「古河」の事は、前の「芳流閣」の條に解してある。

【名を揚げ家を興す】　わが名を天下にあげ、わが犬塚家を興し榮えしめることをいふ。

【その禍は禍とふりかはりたる村雨の刀は舊のものならで】　「ふりかはりたる」は福と禍とがふりかはつた意を、次の村雨に緣を持たせて巧に言ひまはしたのである。「村雨の

刀」は前項「犬塚信乃」の條でいつたとほり、大塚墓六にその中身をすりかへられてしまつた。それゆゑ、「刀は舊のものならで」といつたのである。

【わが身を劈く讐とぞなりし】 わが身を破滅せしめる讐となつた。

「劈く」(ツンザく)は、「ツキサく」の音便。

「刀」の縁語。

【憾をこゝに釋く由もなく】 遺憾をときはらさうとしても、ときはらすすべのないことをいふ。

「憾」(ウラミ)とは、のこりをしさ。ざんねんさ。遺憾。

【事急にして意外にあり】 思ひもよらぬ事がにはかに起つて、その身が危急に瀕したことをいふ。

「意外」(イグヮイ)は、おもひのほか。案外。

【當座の辱を避けばや】 「せめて、さしあたつてのはづかしめだけでも、どうかして避けたいものである。」との意。

【あまたの圍を切開き】 多くの兵士たちがぐるりととりまいてゐるのを切り開いて、一方の血路をつくつたことをいふ。

【そこに必死を窮めたる心の中は云々】 そこ(芳流閣)で、死ぬ覺悟をきめた信乃の心の中は、まあどんなであつたらう。おもひやるさへも、まことにいたましい心地がある。

【犬飼見八信道】 イヌカヒゲンパチノブミチ。安房國の土民糠助の子。信字玉を有し、八犬士の一人である。

二歳のとき父糠助は貧に迫り、見八を抱いて共に水に投じようとしたところが、たま〳〵下總古河の家臣、犬飼見兵衛に救はれ、見八はその養子となつた。長じて二階松山城守の門に遊び、允可の高弟として、捕物拳法は當藩第一と稱せられた。養父の死後獄吏に取り立てられたが、思ふ子細あつて身の暇を乞うた。ところが、權臣横堀史在村はこれを以て上を侮蔑するものとなし、獄舍に投じた。をりから、古河で、犬塚信乃を搦め捕る事件が勃發したが、信乃は剛勇無雙の若者で、捕吏の手に餘つた。そこで在村は急に君命を傳へて見八の罪を赦し、信乃を搦め捕らせた。かくて見八は信乃と芳流閣上で格闘し、相擁して閣上よりその下を流れる利根河畔の快舟中に轉落した。それと同時に纜がきれて、舟と共に押流されたが、幸に下流で養父の知人であつた行德(ギヤウトク)の市民古那屋文吾兵衛に救はれて、信乃と共に蘇生し、相伴なはれて文吾兵衛の家に赴き、その一

子小文吾と兄弟の約を結び、且その家で安房の里見侯の家臣蜑崎五郎及び名僧〻大(チュダイ)法師にめぐりあひ、兩人より信乃・見八・小文吾は共に前世に於て安房の國守里見義實君の息女伏姫の御子で、伏姫君が犬の精に感じて孕み、割腹して死するに及び、その所持せる珠數の玉が八方に散亂し、遂に八犬士となつた、その八人のうちの三人であることを聞いた。よつて見八等は、この八人の全く集るのを期して里見氏に仕へようと誓ひ、これより或は別れ、或は合して諸國を遍歴し、數年の後その八人が皆集つたので、相携へて里見侯の召に應じた。後、戰功によつて見八は國守義成君の第六女栞姫に醮し、安房國神餘城主となり、他の七犬士と同じく采邑一萬貫を食んだ。

【犯せる罪のあらずして】 前項「犬飼見八」參照。

【月來】 ツキゴロ。「月頃」の義。數月このかた。

枕草子、三に「月ごろある藥玉とりかへて捨つめる。」

【獄舍】 ヒトヤ。「人屋」の義。罪人を捕へておしこめおく家。牢屋。獄。囚獄。囹圄。

宇治拾遺物語、四に「いみじき惡人にて、ひとやに七度ぞ入りける。」

【恩赦】 オンシャ。恩惠を以て罪を赦し、又は刑を免ずること。

韓愈の詩に「前日遇恩赦、私心喜還憂。」

年中行事歌合に「恩赦。みことのりくだしもあへず赦すなり罪あるをだにすてぬ惠みに」

【我が縛の索とけて云々】 自分がしばられてゐた縄がとけて、信乃を召しとるべき役目を仰せつかつたことをいふ。前項「犬飼見八」參照。

「縛の索」(イマシメのナハ)は、しばられてゐた縄。

「捕手」(トリテ)は、罪人を召し捕る人、又、その役。捕方。

太平記、十一、五大院右衛門宗繁相模太郎を謙す事の條に「こゝかしこに隱れゐたる平氏の一族共、數多搜し出されて、捕手は所領を預り、隱せる者は忽ちに誅せらるゝ事多し。」

「役義」(ヤクギ)は、やくめ。つとめ。任務。職掌。

傾城島原蛙合戰、一に「役義に不念もあるまじ。」

【搦めよ】 カラめよ。めしとれよ。

「搦む」とは、めしとること。しばりとること。捕縛。

伊勢物語に「盜人なりければ、國の守にからめられにけり。」

【慙に】 ナマジヒに、なまなかに。心にそはぬに強ひて。

源氏物語、若菜の卷、下に「數ならぬ身にて、及びがたき御中らひに、なまじひにゆるされ奉りてさぶらふしるしには」

源平盛衰記、六、入道院參を企てる條に「重盛懋にその職にゐながら、甲冑を着せんこと、はなはだ然るべからず。」

【他の憂】　ヒトのウレヘ。他人（犬塚信乃）のしんぱいごと。

【身の面目】　ミのメンボク。おのれ（犬飼見八）一身のほまれ。

「面目」は、人にあはせるかほ。世人に對する名譽。めいぼく。めぼく。

枕草子、四に「かばかりのめんぼくあることなかりき。」

【辭みて】　イナみて、いやといつて。辭退して。

【君命重く彌高き彼の樓閣は三層なり】　「彌高き」（イヤタカき）は君命のいよ〳〵高いことに、芳流閣のいよ〳〵高いことをかけていふ。「樓閣」（ロウカク）は二階建・三階建などになつてゐるたかどの。こゝは芳流閣をいふ。

「三層」は、本文にサンヂュウと振假名がついてゐる。三重の義。

西原雜記に「樓閣臺榭、轉相連注。」

太平記、二十六、廉頗、藺相如の條に「藺相如この玉を取つて樓閣の柱におしあて」

【檐】　ノキ。「軒」に同じ。屋根の裾の垂れて、四方にさし出でた部分の稱。

【身を霞ませて】　「霞む」とは、ものに立ち掩はれて明らかに見えぬさま。

古今集、秋上に「春霞かすみていにしかりがねは今ぞ鳴くなる秋霧の上に

風雅集、雜上に「夕づく日雲ひとむらにかげろひて時雨にかすむ岡の松原。」

【六月】　ミナヅキ。陰曆六月の異稱。「水無月」の義か。

萬葉集、卷三に「富士のねに降りおける雪はみなづきの望にけぬればその夜降りけり」

【乾蒸の餘熱】　カラムシのホテリ。乾燥器にかけて蒸されるやうな熱のほてり。今の石炭の乾餾の如きも、カラムシである。

「餘熱」は、火照の義。熱氣の發すること。

【敷瓦】　シキガハラ。屋根にしきならべてある瓦。葺瓦。

【凸凹隙なく波に似て】　敷瓦の、すきまなく、一面に廣く

葺かれてある狀を波に見たてていふ。

「凸凹」（ウネリ）とは、蜿蜒として、或は上下に、或は左右に曲り廻ること。轉じて、徐々としてうねり起つ大浪。

源氏十二段長生島臺、長生殿四季に「萩も桔梗も刈萱も、萩の上風吹き添ひて、同じうねりに置く露を」

【大河滔々として】　こゝは利根川の水の盛んに流れるさまにいふ。

「滔々」（タウ〳〵）とは、(一)水の廣く盛んに流れるさま、(二)辯舌のよどみなきさま。(三)おしなべて一樣なるさま。こゝは(一)の意。

詩經の國風に「汝水滔々、行人儦々。」

曾我物語、十二、井出館の跡を見る條に「南は蒼海漫々として、田子の浦波滔々たり。」

謠曲、天鼓に、「水滔々として、波悠々たり。」

【生死の海に入る】　大河の流れて海に入るといふに、信乃と見八とが、今や生きるか死ぬかの勝負を決しようとしてゐる意をふくめていふ。

「生死の海」（イキシニのウミ）は、又シャウジのウミともいふ。もと佛語。生死流轉の苦しみの深きを海にたとへていふ語。

萬葉集、卷十六に「いきしにの二つの海をいとはしみしほひの山をしぬびつるかも」

謠曲、八島に「なほ西海の浪にたゞよひ、しやうじの海に沈淪せり。」

謠曲、門出八島に「生死の海の厚氷、解くれば味方、結べば敵。」

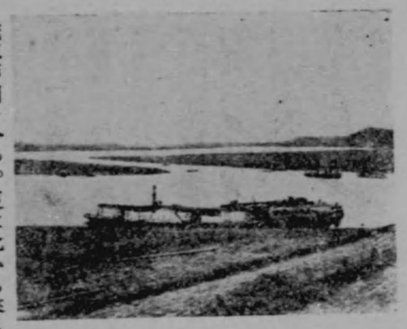
【名に負ふ】　ナにオふ。名として負ひ持つこと。名のること。(一)名高いこと。有名。著名。高名。こゝは(一)の意。

古今集、雜下に「かんな月しぐれ降りおける楢の葉の名に負ふ宮のふることぞこれ」

謠曲、誓願寺に「所は名に負ふ洛陽の」

【坂東太郎】　バンドウタラウ。利根川の別名。坂東第一の大河だから起つた名。筑紫の筑後川を筑紫次郎といふに對する。

「利根川」は關東地方の中央を貫流して太平洋にそゝぐ大河。上野の北東部、越後の國境なる利根岳に發して南流し、沼田盆地



で片品川、澁川町附近で吾妻（アガツマ）川を合はせて關東平野に入り、前橋市の南で烏川と神流川との合流を入れる。これより川は急に水量を增して大沖積平野を形成し、上野・武藏の境を東南東に流れ、栗橋町附近で足尾山中から來る渡良瀨川を合はせ、本流は南東に向ひ、他方南に向つて分流江戸川を分つ。更に北から來る一大支流鬼怒（キヌ）川を合はせてから、流は益〻大且緩となり、遂に銚子港に至つて太平洋にそゝぐ。可航距離、幹川二七五粁、幹支川八五二粁。關宿以下は小汽船を通ずる。

【水際の小舟楫を絶え云々】「ちやうど水際の小舟の楫につけて力とする緒がきれて、小舟が進退の自由を失つたやうに、進みも退きもならぬはめに陷つた敵であるから。」といふほどの意。

「水際」（ミギハ）は、地の水に接するところ。みづぎは。汀。

土佐日記に「行く人もとまるも袖の涙川みぎはのみこそ濡れまさりけれ」

「楫を」は楫緒。舟の床から艪（ロ）の上端に繫いだ繩。

「艪なは」とも、「はやを」ともいふ。

新古今集、戀一に「ゆらのとを渡る船人かぢをたえゆくへも知らぬ戀の道かな」

夫木抄、三十三に「契りこそゆくへも知らぬ由良のとや渡るかぢをのまたも結ばで」

「進退既に谷（キハマ）る」とは、進むことも退くことも出來ないで、途方にくれること。「谷」は山谷。谷に墮ちれば、窮困する。よつて、「キハマル」の義となる。

詩經の大雅、桑柔篇に「人亦有レ言、進退維谷」

董仲舒の不遇賦に「雖二日三省於吾身一兮、猶惟進退之維谷一」

【いかでわれつなぎとめんと】どうにかして、わが手で、あの信乃めを捕縛しようものと。

【鶴】ムサヽビ。古名モミ。轉訛してモヽガ、モヽング。齧齒類中栗鼠科に屬する獸。深山に棲む。形は栗鼠に似て大形。前後の肢間に膜があつて、これを開けばや

や鳥の翼の如き形となる。これを用ひて樹間を飛行することが甚だ敏捷である。晝は樹洞に隱れ、夜は出て果實を食する。聲は子供の泣聲に似てゐる。

【樹傳ふ】コヅタふ。「木傳ふ」とも書く。木の枝から木の枝へと移り傳はること。

萬葉集、卷十に「鶯の木傳ふ梅のうつろへば櫻の花の時片まけぬ」

古今集、春下に「こづたへばおのが羽風に散る花をたれにおほせてこゝら鳴くらむ」

【まぶしさす由もなく】まぶしにその身をかくすことも出來ず。

「まぶし」（目柴）は又「射翳」とも書く。鳥獸を射るときなどに柴などを折つて地に立て、身をかくすもの。

和名抄、四、射藝具に「射翳、末布之、所二以隱一射者一也。」

曾丹集に「まぶしさし鳩吹く秋の山人はおのがありかを知らせやはする」

【かたみに】互に。相共に。各自。

宇津保物語、初秋に「深き心言ひ契らせ、かたみにあはれなることを、心とゞめて打ち言はせ」

【睨まへあうて】互に睨みあつて。

「睨（ニラ）まへ」は、「睨み」の延音。

平家物語、十一、大阪越の條に「沖の方を睨まへて」

【浮圖】フト。（一）佛陀。（二）偖。（三）塔。こゝは（三）の意。

祖庭事苑に「梵語佛陀、或云二浮圖一、或云三部多、或母馱、或沒陀、皆天竺語。今竝譯爲レ覺。」

續日本紀、四十、延曆十年四月戊申の條に「山背國郡內諸寺浮圖、經レ年稍久、破壞處多。」

【鶴の巢】コフのス。鶴の鳥の巢。

「鶴」は涉禽類に屬する鳥。全身は鶴に似、嘴は角質で長い。眼の周圍、特にその前後は裸出してゐるから、鶴のやうに愛らしくはない。後趾はよく發達して地に接する。胸には長い毛があつて、垂れ下つてゐる。この鳥には聲帶がない。隨つて發聲することは出來ない。それゆ

ゑ、嘴を擊つてこれに代用する。こふのとり。こふづる。

【巨蛇の狙ふに似たりけり】　大きな蛇のねらつてゐるさまによく似てゐる。

「巨蛇」(ヲロチ)は、大きなへび。うはばみ。

古事記、上に「高志之八俣遠呂智、毎年來喫。」

「狙ふ」(ネラふ)とは、或物に目をつけてうかゞひ見ること。目指すこと。

【廣庭】　ヒロニハ。玄關先の廣い庭。

太平記、一、賴員回忠の條に「敵を廣庭におびき出し」

若風俗、三に「廣庭に夜ふけて引きいだし」

【成氏朝臣】　ナリウヂアソン。成氏、正しくはシゲウヂであるが、小說に用ひたから、故らにナリウヂと振假名がつけてある。以て作者馬琴の細密な心づかひを知るべきである。

「成氏」の小傳は、前項「芳流閣」の條下に見えてゐる。

「朝臣」(アソン)は「アソミ」の音便。略して「アソ」ともいふ。(一)尸(カバネ)の名。天武天皇の十三年に定められた八色の姓の第二。(二)四位以上の爵位ある人の敬稱。こゝは(二)の意。

【横堀史在村】　ヨコボリノフビトアリムラ。他の所には横堀在村ともある。成氏の老臣で、成氏の信任が厚く、その言がよく用ひられ、威福を擅にしたものとしてある。

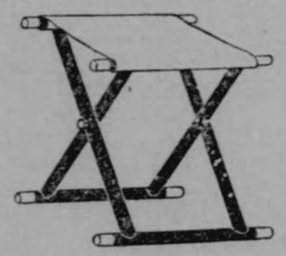
【老黨若黨】　ラウタウワカタウ。年が既に老いて功勞を積んでゐる郎黨や、年のまだ若い郎黨。

「郎黨」(ラウダウ)は、又郎等とも書く。けらい。從者。郎從。

【圍繞】　キゼウ。又、キネウ。ぐるりとまはりをとりまくこと。

吳志の孫堅傳に「卓騎、圍繞數重。」

枕草子、六に「さぶらひの者どもあまた、かしこまりゐねうしたるもをかし。」



【床几】　シャウギ。又「床机」とも、「將机」とも、「牀机」とも書く。昔、陣屋で用ひた一種の腰掛。尻の當るところに革を張り、脚を打違に組んで、携帶に便利なやうに作つたもの。胡床。

【閣】　カク。芳流閣。

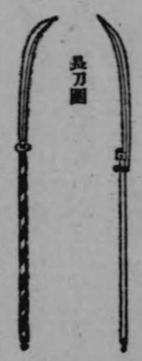
【腹卷】　ハラマキ。鎧の一種。腹に卷いて背で合はせ、その背の空隙を背板でふさぐやうにしたもの。せわりぐそく。

保元物語、白河殿攻落の條に「木蘭地の直垂に、紫革の腹卷着」

長門本平家物語、十五に「絲縅の腹卷に、重目結の直垂を着られたりけるが」

【鎗】　ヤリ。槍とも書き、又、鎲とも書く。手もとよりしごき出し遣つて、突き刺すに用ひる武器。劍の如く三稜形に尖つた身に、長い柄をつけてつくる。鎌倉時代の末より專ら戰場に用ひ、單に道具と稱して、最もこれを重んじた。身などの形によつて、素鎗・鎌鎗・十文字鎗・鈎鎗・管鎗・手鎗等の種類がある。又、その代用のものに、竹槍や木槍がある。

【長刀】　ナギナタ。薙刀とも書く。鎗のやうに長い柄があつて、刄の長く廣くて反つたもの。敵を薙ぎ拂ふに用ひる。



大長刀・小長刀・兩刄長刀・小反刄長刀・鉈長刀（筑紫長刀）・無爪鉈長刀等の種類がある。後世は專ら僧侶・婦人の用となつた。

【晃かし】　キラメかし。きら〳〵と光らせて。

【項を反らして】　えりくびを反るやうにして。

「項」(ウナジ)は、頸(クビ)の後方の下部。えりくび。くびすぢ。ぼんのくぼ。

和名抄、三に「項、宇奈之、頸後也。」

【綿連として杳かなる河水めぐりて】　はるかに長くうちつづいてゐる利根川の水がぐる〳〵とめぐり流れて。

「綿連」(メンレン)は、長くつゞくさま。「連綿」に同じ。

謝靈運の詩に「巖嶂鎮稠疊、洲縈渚連綿。」

莊子の大宗師の註に「連綿長貌。」

「杳」は音エウ。「はるか」と訓する。距離の遥くへだたるさ

ま。

【砌を浸せば】 芳流閣の砌をひた〳〵とぬらすから。

「砌」(ミギリ)とは、軒下又は階下などの石畳。雨滴をうける敷石。

【武事長け】 ブジタケ。武事に長じ。武術にすぐれ。

「武事」は、戰爭に對する事柄又は技術。

左傳の莊公四年に「臨二武事一將レ發二大命一而蕩二王心一。」

史記の平津侯傳に「務二戰勝一窮二武事一者未有不レ悔者一也。」

【膂力】 音はリョリク、但しこゝには、チカラと振假名がつけてある。筋肉の力。うでの力。腕力。身體の力。身體力。

詩經の小雅に「膂力方剛、經二營四方一。」

【墨氏が飛鳶】 ボクシがヒエン。墨氏が作つたといふたこ。

列子に「班輸之雲梯、墨翟之飛鳶、自謂能之極也。」

韓非子に「墨氏爲二木鳶一三年成、飛一日而敗。弟子曰、先生之巧、至レ能使二木鳶飛一。墨子曰、吾不レ如レ爲二車轅一者巧也。惠子聞レ之曰、墨子大巧、巧レ爲レ轅拙レ爲レ鳶。」

「墨子」、名は翟。支那春秋の末、戰國の始の人。墨家の祖。宋に仕へて大夫となつた。その說くところ、禹を祖とし、人を愛すること己の如くならば、盜賊もなく、爭亂もなく、天下がよく治まるであらうと論じ、大いに博愛・勤儉主義を唱へ、その結果、薄葬・非樂・非命・尙賢を主張した。この學說は當時頗る流行し、儒と竝び稱せられたが、その無差別の愛と節用とを說いた點で儒家の反對を受けた。その著に墨子十五卷、六十三篇がある。

【虛空を翔るべくもあらず】 そらをかけられさうにもない。

「虛空」(コクウ)は、天と地との間の空なところ。そら。空間。

太平記、十二、廣有怪鳥を射る條に「八月十七夜の月殊に晴れ渡つて、虛空清明たるに」

【魯般が雲の梯】 ロハンがクモのカケハシ。古、魯の人公輸般がつくつたといふ高いかけはし。

「魯般」は前記の班輸と同じ人。又、公輸とも、公輸班とも、公輸般ともいふ。

淮南子に「楚欲レ攻レ宋。墨子聞而悼レ之、見二楚王一曰、臣見二大王之必傷レ義而不レ得レ宋。王曰、公輸天下巧士、作二爲雲梯之械一設以攻レ宋、曷爲弗レ取。墨子曰、令二公輸般設攻一臣請守レ之。於是公輸般設二攻レ宋之械一、墨子設二守レ宋之備一。九攻而墨子九却レ之、弗能レ入。乃偃兵不レ攻。公輸魯般也。」

墨子に「公輸般爲二雲梯一、將二以攻レ宋。墨子聞レ之、見レ般、以帶爲レ城、以レ臁爲レ械。般九設レ機變一。墨九距レ之。般之械盡、墨之守有レ餘。」

「雲の梯」は高いかけはし、長い梯子の類。城を攻めるとき、掛けて乘り入るに用ひる具。

戰國策、宋に「公輸般爲レ楚設レ機、將二以攻レ宋。……墨子曰、聞公爲二雲梯一、將二以攻レ宋。宋何罪之有。」

【渠鳥ならねど羅に入りぬ云々】 信乃の身が、最早羅の中の鳥、狩場の中の獸と同樣、逃れいづべき寸分のすきもないやうな破目に陷つたことをいふ。

「狩場」(カリバ)は、狩をする場所。かりくら。かりには。獵場。

古今著聞集、十に「狩場にて馬の疲れたるをりには」

【初層二層】 シ・ソウニソウ。第一階と第二階。

【兵等】 ツハモノドモ。兵士ども。軍兵たち。

【よに覺ある力士ならん】 ことのほか、うでにおぼえのある力士であらう。

「よに」は、世の中にとりわけて。世になく。ことのほかに。いみじく。

伊勢集に「この帝につかへまつりて子生みたりし人は、よに幸ひなきものなりければ」

枕草子、三に「よにいみじうをかし。」

「覺」(オボエ)は、技術について自信のあること。「腕におぼえあり。」などと用ひる。

宇治拾遺物語、二に「この尻蹴よといはるゝ相撲は、おぼえある力、こと人よりはすぐれ」

【しやつ】「汝奴」の義。又、其奴(ソヤツ)の轉かともいふ。罵つていふ三人稱の代名詞。きやつ。そいつ。

平家物語、八、法住寺合戰の條に「鎌倉殿、しやつに目な懸けそ、あひしらひなせそ。」

【膳臣巴提便】 カシハデノオミハテビ。(巴提便といふは誤。)欽明天皇の朝の人。百濟に使し、雪の夜虎のために

兒を喰はれた。巴提便は大いに怒つて虎の跡をたづね、虎穴に入り、左手に虎舌を把り、右手に刀を拔いてこれを殺し、その皮を剝ぎ取つて歸つたといふ。

【虎を暴にす】 トラをテウチにす。手づから虎をうちころすこと。

詩經の小雅に「不二敢暴虎一、不二敢馮河一。」

論語の述而篇に「暴虎馮河、死而無レ悔者、吾不レ與焉。」

【富田三郎】 トミタノサブラウ。和田左衞門尉義盛の士。強力を以て聞えてゐた。建保元年（一八七三）五月和田義盛の事を以て將軍實朝を攻めてその御所を燒いた。程なく義盛は敗死し、三郎は生擒せられた。

東鑑、第二十一に「建保元年七月十一日庚戌、天晴。相州（北條時房）參二御所一（廣元朝臣第）給。被レ獻二盃酒一。其間相州被レ申云、去五月所レ與二于義盛一之富田三郎、强力勝二千人一。杠レ鼎碎レ石云々。將軍家（實朝）爲レ御二覽其藝一、召二富田一。伊藤七郎具參。候二寢殿西面簀子一。自二御門一被レ出二大鹿角一二。（長サ三尺方七寸）依レ仰相州令レ尋二進之一給。二角一度折レ之。滿座莫レ不二感歎一。又御感之餘、可レ被レ免二囚人一之旨、被二仰出一云々。相州卽令レ下二知趣於金窪左衞門尉行親一給云々。」

【さもあらばあれ】 約して、さまらばれ、さばれ、ともいふ。「然もあらば有れ」の義。この上はどうあらうともかまはぬ。まゝよ。

【よき敵ごさんなれ】 「よき敵にこそあるなれ」の略。

【目にもの見せん】 ひどい目にあはせてやらう。

【血刀】 チガタナ。血のついてゐる刀。

薩摩歌、源五兵衞おまん夢分船に「夫源五が手にかゝり、消えて散つたる血刀の、のりの誓もあさましや。」

【袴の稜】 ハカマのソバ。袴のもゝだち。袴の左右、股の側面にあたつて明いてゐる、その縫止のところ。

源平盛衰記、四十三、二位の禪尼海に入る條に「練色の二衣引き纏ひ、白袴のそば高く挾みて」

【高瀨】 タカセ。高瀨舟の意か。高瀨舟は川船の一種。底の平らかなもの。されど、古くは却つて底の深い小舟をいつた。

和名抄、三に「艇、釋名云、艇小而深者曰レ艇。…今按、太加世、俗用二高瀨舟一。」

新井白石は高背船の義だといつてゐる。

源氏物語、橋姫の巻に「はし姫の心をくみてたかせさすさをのしづくに袖ぞぬれける」

【方桁】 ハコムネ。又、「箱棟」とも書く。屋根の棟の上に更に小さい棟を造り、板又は瓦で葺いたもの。日本建築辭彙には「箱組みたる大棟をいふ。」とある。

續山井、上に「風を入る箱棟もかな家櫻」

【寄するを俟てば】 見八がおしよせてくる（信乃にむかつて）のを（信乃が）待ちかまへてゐると。

【武藝】 ブゲイ。弓・馬・槍・劍・銃砲など、武道に關する技術。武技。武術。

蜀志の劉封傳に「有二武藝一、氣力過レ人。」

保元物語、官軍勢汰の事の條に「詩歌管絃…それなほ暗し、況や武藝の道に於てをや。」

【萬夫不當の敵なり】 萬人がかりでおしよせても、當りがたいほどの强敵である。

「萬夫」（バンプ）は、多くのをとこ。萬人。

易經の繫辭に「知レ柔知レ剛萬夫之望。」

李白の詩に「高談百戰術、轟爲二萬夫雄一。」

【ちつとも擬議せず】 すこしもためらはず。

「擬議」（ギギ）は、(一)よく思ひはかること。(二)ためらふこと。躊躇すること。こゝは(二)の意。

太平記、二十五、住吉合戰の條に「少しも擬議せず、懸け出でたり。」

【御諚さふ】 「御諚に候ふ」の約。昔、警吏が罪人を捕縛するときに用ひた普通語。今の「御用」などいふやうなもの。

「御諚」（ゴヂャウ）は「御定」とも書く。貴人のおほせ。おことば。御命令。尊命。

東鑑、六、文治二年三月十六日の條に「稱御定(シテ)令(トメ)下(サ)宣旨(ヲ)候。」
源平盛衰記、四十八、法皇大原入御の條に「一院の御諚とて大勢にて寄すると申ししかば」

【持つたる十手をひらめかし】　手に持つてゐる十手をひらひらとふりまはして。

「十手」(ジッテ)は、昔警吏が賊などを捕へるに用ひた具。短い鐵棒の中程に鉤のあるもの。教科書鼠頭の挿圖參照。

「ひらめかす」とは、ひらめくやうにすること。ひらめくやうにふりまはすこと。
謠曲、景清に「打物ひらめかいて斬つてかゝれば」

【鋭き太刀風】　はげしく太刀をうちふるいきほひ。

「太刀風」(タチカゼ)は太刀をふるときおこる風。(一)たゝかひぶりのいさましいこと。武威。こゝは(一)の意。
大友興廢記に「國光の刀すらりと拔き、二三人の耳に太刀風をあてられければ」(一)
蜂須賀文書、秀吉小早川左衞門佐に書狀を贈る條に「筑前守太刀風に驚き、草木も靡き從ひ」(二)

【はつしと】　發止と。堅い物と堅い物との打ちあたる音にいふ語。こゝは信乃が打ちこんで來る鋭い太刀を、見八が十手でうけとめた音にいふ。
謠曲、熊坂に「鐵壁も徹れとつく長刀をはつしと打つて弓手へ越せば」
傾城島原蛙合戰、三に「鐵と鐵が直中にて發止とあたり」

【刀尖】　キッサキ。切先の義。刀の穗先。刄物の最上端。
平家物語、十一、能登殿最期の條に「太刀のきつさきをとゝのへて、一面に打つてかゝる。」

【一上一下】　イチジャウイチゲ。刀の刀尖が、上になり下になり、兩々互に鎬(シノギ)をけづるさまをいふ。

【祕術】　ヒジュツ。祕(ヒ)めて他に公開せぬ術。祕密の術。おくぎ。おくので。
晉書の王豹傳に「霸王之神寶、安危之祕術。」
謠曲、熊坂に「祕術を振ふならば、如何なる天魔・鬼神なりとも、中につかんで微塵になし」

【手練】　シュレン。てぎはのねりきたへられてあること。熟練した手なみ。てだれ。巧手。

八笑人、二の上に「かねて手練の扇が山だ。」

【嵩より落す太刀筋】　上にのりかゝるやうにして、はげしくうちおろす太刀のつかひざま。
「嵩」(カサ)は、相手を壓迫するいきほひ。又、その位置。
「太刀筋」(タチスヂ)は、太刀のつかひかた。
室町殿物語、兵法奇妙の條に「御太刀筋をも一覽仕りたく存じ候。」

【虛々實々】　キ・〳〵ジツ〳〵。敵の虛をうち、實を避け、互に計略又は技倆をつくして戰ふさまにいふ語。

【勝負を判かされば】　勝敗の見きはめがつかぬから。

【主從】　シュジュウ。又、シュウジュウ。主人と從者。成氏朝臣と横堀史在村とをいふ。

【手に汗握らざるもなく】　「息をこらしてあやぶみ、はらはらせぬものもなかつた」といふ意。
「手に汗握る」とは、危險な物事を傍觀して、非常に氣づかふ場合にいふ。
北條九代記、二に「宿老たちは、皆ともに汗を握りて周章せり。」

【またゝきもせず氣を籠めて】　またゝき一つもしないで、氣をはつて。非常に緊張するさまにいふ。
「またゝき」は、「瞬」の字をあてる。まぶたをしばし開合すること。まばたき。めばたき。
炭俵、冬に「凧やまたゝきしげき猫の面」
「氣を籠む」とは、氣を強く張ること。心を強く持つこと。

【侮り難き見八が云々】　侮り難い見八の武藝を見て取つて、これはよい相手を得たはいと思つたので。

【兩虎深山に挑むとき云々】　二匹の虎が深山で互に戰をしかけあつて相爭ふとき。この語出典未詳。

【錚然】　サウゼン。金石などの相打つ聲。こゝは、虎の吼えたける聲の形容。
正字通に「凡物戛擊有レ聲、皆曰錚。」
孟郊の詩に「前溪忽調レ瑟。隔レ林寒琮琤。」

【青潭】　セイタン。たきつぼの水の深くて青く見えるところ。青い淵。

「潭」は、たきつぼ。字典に「潭は深也。」
揚雄の解嘲に「或横二江潭一而漁。」

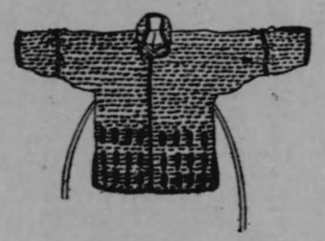
【沛然】　ハイゼン。「霈然」に同じ。大雨の降る貌。
玉篇に「霈大雨也。」正韻に「霈、水流貌。」說文に「霈作レ沛。」

【いと高き閣の棟にして云々】　たいそう高い芳流閣の棟の上で、信乃と見八とが互に死を争つたやうす。
「棟」(ムネ)とは、屋根の最も高いところ。
方丈記に「棟を並べ、甍を争へる高きいやしき人のすまひ」
「爲體」(テイタラク)は「テイタル」の延音。やうす。ありさま。
源平盛衰記、三十五、範頼・義經の京に入る條に「この山の體たらく」
太平記、十、鎌倉合戰の條に「唐の玄宗傾廢せし爲體も、かくこそはありつらめ。」

【よに未曾有の晴業なれば】　まことに、これまでまだ有つたことがないほどの晴のわざであつたから。
「よに」は前に見えてゐる。

「未曾有」(ミゾウ)は未だかつて無いほどに珍らしいこと。稀有。
法華經の序品に「得二未曾有一歡喜合掌。」
「晴業」(ハレワザ)は、晴れのしごと。公衆の面前でする大切なしわざ。
「晴れ」は、おほやけ、人中、表向などの意。
源平盛衰記、四十二、與一扇を射る條に「ゆゝしきはれわざなり。」
用明天皇職人鑑に「今日禁庭の晴業、佛道・外道の爭に」

【被籠の鎖】　キゴミのクサリ。衣の下に籠めて着る鎖帷子。



「鎖帷子」(クサリカタビラ)とは、小さい鎖をあみつらねて作つた帷子。古、戰爭又は斬りあひなどするとき、上着の下に著用したもの。

【肱當の端】　コテのハヅレ。肱當のはし。

「肱當」は鎧の附屬具。指先から肘のあたりまでを覆ふもの。籠手。小手。

【裏かく】　「裏缺く」の義。矢が中つて、鎧の裏につきとほること。こゝは、刀の鋒が鎖帷子などを切り裂いて、中につきとほるほどになつたといふ意。

【淺疵】　アサデ。「淺手」とも書く。淺いきず。微傷。輕傷。うすで。
太平記、二十六、補正行最期の條に「深手・淺手負はぬものも無かりければ」

【疼み】　イタみ。いたみうづくこと。疼痛。

【足場】　アシバ。足をふみかけるところ。あししろ。足がかり。

【撓まず】　タユまず。くじけよわらず。ひるまず。

【疊みかけて擊つ太刀】　つゞけざまに擊ちこむ太刀。
「疊みかく」とは、つゞけざまになすこと。
槍權三、上に「帶ぐるゝとひきほどき、疊みかけてなぐり捨て」

【右手】　メテ。(一)右の手。「馬手」の義。馬の手綱を持つ方の手だからいふ。左手卽ち弓を持つ方の手を弓手(ユンデ)といふに對する。
保元物語、新院御所各門々固の條に「ゆんでのひぢ、めてに四すのび」
(二)轉じて、右方。こゝは(一)の意。
保元物語、親治等生捕の條に「伊藤・齋藤、弓手・馬手より馳せ寄つて」

【受流す】　ウケナガす。敵の打ちこむ太刀を受けて身をかはして避けること。

【眉間】　ミケン。額の中央、兩眉の間。眉心。
太平記、十六、日本朝敵の條に「天より白羽の矢一筋降つて將門が眉間に立ちたれば」

【礑と】　ハタと。(一)物の相當つて發する音。又、にはかに發する音。(二)事のさしあたるさまにいふ語。突然。(三)その方をにらむさまにいふ語。「はつたと」ともいふ。こゝは(一)の意。
落窪物語、二に「かうぶりをばはたと打ちおとしつ。」

【丁と】　チャウと。(一)物と物との打ちあふ音にいふ語。(二)き